

大飯発電所3号炉審査資料	
資料番号	KON3-PLM30-疲労 改1
提出年月日	令和3年3月15日

大飯発電所3号炉 高経年化技術評価  
(低サイクル疲労)

補足説明資料

令和3年3月15日  
関西電力株式会社

本資料のうち、枠囲みの内容は機密に係る  
事項ですので公開することはできません。

# 目次

1. 概要	1
2. 基本方針	1
3. 評価対象と評価手法	3
3.1 評価対象	3
3.2 評価手法	4
4. 代表機器の技術評価	5
4.1 健全性評価	5
4.2 現状保全	17
4.3 総合評価	18
4.4 高経年化への対応	18
5. 代表機器以外の技術評価	19
5.1 健全性評価	19
5.2 現状保全	21
5.3 総合評価	22
5.4 高経年化への対応	22
6. まとめ	23
6.1 審査ガイド適合性	23
6.2 長期施設管理に関する方針として策定する事項	24

## 別紙

別紙 1. 過渡回数推定値の算出方針について	1-1
別紙 2. 建設時に考慮されていない低サイクル応力変動の抽出プロセスについて	2-1
別紙 3. 原子炉容器の疲労累積係数の算出根拠について	3-1
別紙 4. クラッドにより環境疲労評価不要とする部位のクラッド確認について	4-1
別紙 5. 環境疲労評価で考慮している溶存酸素濃度について	5-1
別紙 6. 環境疲労評価手法における環境効果補正係数の算出方法について	6-1
別紙 7. 代表機器以外の疲労累積係数の算出根拠について	7-1
<u>別紙 8. 詳細評価法による環境効果補正係数の算出手順について</u>	<u>8-1</u>
<u>別紙 9. 有限要素法解析における応力分類について</u>	<u>9-1</u>

## 1. 概要

本資料は、「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」第 82 条第 1 項の規定に基づき実施した、運転を断続的に行うことを前提とした高経年化技術評価のうち、低サイクル疲労の評価結果について、補足説明するものである。

低サイクル疲労とは、プラントの起動・停止時等に受ける温度・圧力変化により、機器の構造不連続部等に局所的に大きな応力変動が生じ、それが供用期間中に繰り返された場合に、疲労割れの発生に至る可能性がある劣化事象である。

このような応力変動による影響について、これまでの運転実績をもとに疲労割れの発生の有無について評価を実施した。

ここでは、原子炉容器を代表とし、具体的な評価を「4. 代表機器の技術評価」に、その他の評価対象については、「5. 代表機器以外の技術評価」にて評価を実施する。

## 2. 基本方針

低サイクル疲労に対する評価の基本方針は、対象機器について低サイクル疲労に対する技術評価を行い、運転開始後 60 年時点までの期間において「実用発電用原子炉施設における高経年化対策審査ガイド」及び「実用発電用原子炉施設における高経年化対策実施ガイド」の要求事項を満たすことを確認することである。

低サイクル疲労についての要求事項を表 1 に整理する。

表 1 低サイクル疲労についての要求事項

ガイド	要求事項
<p>実用発電用原子炉施設における高経年化対策審査ガイド</p>	<p>3. 高経年化技術評価等の審査の視点・着眼点</p> <p>(1) 高経年化技術評価の審査</p> <p>⑫健全性の評価 実施ガイド3. 1 ⑤に規定する期間の満了日までの期間について、高経年化対策上着目すべき経年劣化事象の発生又は進展に係る健全性を評価していることを審査する。</p> <p>⑬現状保全の評価 健全性評価結果から現状の保全策の妥当性が評価されていることを審査する。</p> <p>⑭追加保全策の抽出 現状保全の評価結果から、現状保全に追加する必要がある新たな保全策が抽出されていることを審査する。</p> <p>(2) 長期施設管理方針の審査</p> <p>①長期施設管理方針の策定 すべての追加保全策について長期保守管理方針として策定されているかを審査する。</p>
<p>実用発電用原子炉施設における高経年化対策実施ガイド</p>	<p>3. 1 高経年化技術評価の実施及び見直し 高経年化技術評価の実施及び見直しに当たっては、以下の要求事項を満たすこと。</p> <p>⑤抽出された高経年化対策上着目すべき経年劣化事象について、以下に規定する期間の満了日までの期間について機器・構造物の健全性評価を行うとともに、必要に応じ現状の施設管理に追加すべき保全策（以下「追加保全策」という。）を抽出すること。</p> <p>イ 実用炉規則第82条第1項の規定に基づく高経年化技術評価プラントの運転を開始した日から60年間（ただし、⑧ただし書の規定に該当する場合にはプラントの運転を開始した日から40年間とする。）</p> <p>3. 2 長期施設管理方針の策定及び変更 長期施設管理方針の策定及び変更にあたっては、以下の要求事項を満たすこと。</p> <p>①高経年化技術評価の結果抽出された全ての追加保全策（発電用原子炉の運転を断続的に行うことを前提として抽出されたもの及び冷温停止状態が維持されることを前提として抽出されたものの全て。）について、発電用原子炉ごとに、施設管理の項目及び当該項目ごとの実施時期を規定した長期施設管理方針を策定すること。</p> <p>なお、高経年化技術評価の結果抽出された追加保全策について、発電用原子炉の運転を断続的に行うことを前提とした評価から抽出されたものと冷温停止状態が維持されることを前提とした評価から抽出されたもの間で、その対象の経年劣化事象及び機器・構造物の部位が重複するものについては、双方の追加保全策を踏まえた保守的な長期施設管理方針を策定すること。</p>

### 3. 評価対象と評価手法

#### 3.1 評価対象

低サイクル疲労が想定される機器は多数存在するが、高経年化技術評価では評価対象となる機器の中から代表機器を選定して評価を行う。評価対象機器、代表機器は以下の条件に該当する機器を抽出する。

① 低サイクル疲労に係る評価対象設備

プラントの起動・停止時等に温度・圧力変化の影響を受ける機器を評価対象として抽出している。

② 対象設備のグループ化及び代表機器の選定

高経年化技術評価では、評価対象機器を構造（型式等）、使用環境（内部流体等）、材料に応じてグループ化を行っており、設備の重要度（高い）、使用条件（温度、圧力が高い）等を考慮してグループ内代表機器を選定している。

以降の説明では、②で選ばれた低サイクル疲労が想定されるグループ内代表機器のうち、1機器を代表機器として評価の詳細を説明する。

ここでは、プラント安全上最も重要と考える「原子炉容器」を代表機器として選定し、具体的な評価結果を「4. 代表機器の技術評価」に示す。

なお、原子炉容器以外の機器の評価結果については「5. 代表機器以外の技術評価」に示す。

### 3.2 評価手法

#### (1) 低サイクル疲労評価のフロー

低サイクル疲労の技術評価のフローを図1に示す。

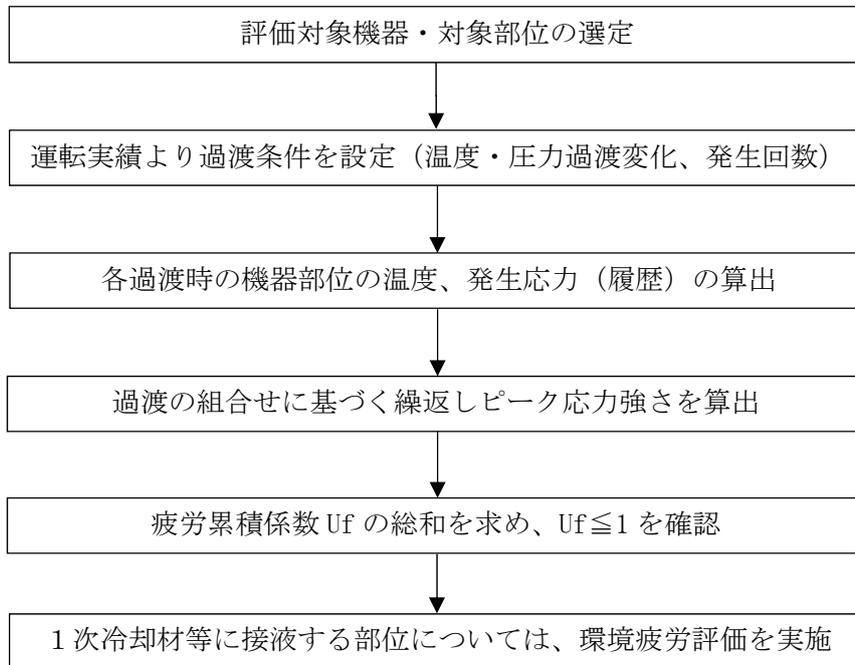


図1 低サイクル疲労の技術評価フロー

#### (2) 適用規格

低サイクル疲労の評価に用いた規格及び評価手法を以下に示す。

- ① 「日本原子力学会 原子力発電所の高経年化対策実施基準：2008（AESJ-SC-P005：2008）」（以下、「実施基準」という。）
- ② 「日本機械学会 設計・建設規格（JSME S NC1-2005/2007）」（以下、「設計・建設規格」という。）
- ③ 「日本機械学会 環境疲労評価手法（JSME S NF1-2009）」（以下、「環境疲労評価手法」という。）



表2 対象部位の選定理由

対象機器・部位		選定理由
原子 炉 容 器	冷却材入口管台	建設時工認評価部位
	冷却材出口管台	建設時工認評価部位
	蓋管台	建設時工認評価部位
	空気抜管台	原子炉容器上部蓋取替工事工認評価部位
	炉内計装筒	建設時工認評価部位
	上部蓋及び上部胴フランジ	建設時工認評価部位
	下部胴・下部鏡板接続部	建設時工認評価部位
	炉心支持金物	建設時工認評価部位
	スタッドボルト	建設時工認評価部位

(b) 過渡条件の設定

各過渡条件の繰返し回数は「実施基準」に基づき、運転実績に基づく2014年度末までの過渡回数を用い、運転開始後60年時点の過渡回数を推定する。

過渡回数策定方針特記事項を表3に、評価用過渡回数の略式図を図3に、実績過渡回数及び年平均過渡回数の算出における評価上の取り扱いを図4に、疲労評価に用いた過渡回数を表4に示す。

具体的には以下に示す計算方法に基づき未取替機器（上部蓋、蓋管台、空気抜管台以外）、取替機器（上部蓋、蓋管台、空気抜管台）、スタッドボルトの3種の過渡回数を設定する。

なお、設定する過渡は運転状態Ⅰ（通常運転時の運転状態）、運転状態Ⅱ（供用期間中に予想される機器の単一故障等による通常運転状態からの逸脱状態）とした。

① 未取替機器

$$\begin{aligned} 60 \text{ 年時点過渡回数} &= \text{実績過渡回数} + \text{推定過渡回数} \\ &\geq \text{実績過渡回数} + (\text{実績過渡回数に基づく1年間当たりの平均過渡回数}) \\ &\quad \times \underline{\text{余裕}} \times \text{残年数} \end{aligned}$$

② 取替機器（上部蓋、蓋管台、空気抜管台）

$$\begin{aligned} 60 \text{ 年時点過渡回数} &= \text{実績過渡回数} + \text{推定過渡回数} \\ &\geq \text{取替後実績過渡回数} + (\text{未取替機器の1年間当たり平均過渡回数}) \\ &\quad \times \underline{\text{余裕}} \times \text{残年数} \end{aligned}$$

また、過渡回数推定値の算出方針について別紙1に、建設時に考慮されていない低サイクル応力変動の抽出プロセスについて別紙2示す。

表3 過渡回数策定方針特記事項

項目		内容
1	定常負荷運転時の変動	有意な変動は生じていないことから、カウントしない。
2	未経験過渡回数	電力共通研究「応力解析手法の高度化」のデータを使用する。
3	5%/min 負荷上昇、減少の平均過渡回数	稼働率向上を考慮すると、ステムフリー試験回数が増加するため、負荷上昇、減少の平均回数は <input type="text"/> とする。
4	起動・停止 (温度上昇・下降 55.6°C/h)	起動・停止回数が異なる場合は、保守側に回数が多いほうに設定した。 なお、過渡変化率は、評価上最も厳しい設計過渡条件としており、十分保守的な値を設定した。
5	燃料交換	計算上は0.79回/年であるが、 <input type="text"/> とする。
6	タービン回転試験	プラント建設時の機能試験に係る過渡のため、今後は発生しない。
7	取替機器の実績過渡	原子炉容器上部蓋は第12回定検(2006年度)の取替後、2014年度末までの実績過渡で評価。
8	スタッドボルト及び取替機器の平均過渡回数について	平均過渡回数は未取替機器と同様(スタッドボルトの起動・停止及び1次系漏洩試験を除く)とする。
9	試運転の実績過渡回数	実績過渡回数に含めるが、試運転過渡事象は試運転時特有のものであり、年平均過渡回数の算定には含めない。
10	2011年3月以降に発生した過渡の扱い	実績過渡回数に含めるが、福島第一原子力発電所事故発生以降に最初にプラント停止した時点(2011年3月)以降の過渡は特有のものであり、年平均過渡回数の算定には含めない。
11	推定過渡回数の算出に用いる残年数	評価上、実績過渡回数調査時点(2014年度末)から2016年12月末までは冷温停止状態として扱い、2017年1月1日から運転開始後60年時点までの期間を残年数とする。
12	評価用過渡回数の余裕	評価用過渡回数は、年平均過渡回数に残年数を掛けた値に十分な余裕 <u>(1を超える値)</u> を考慮し設定する。

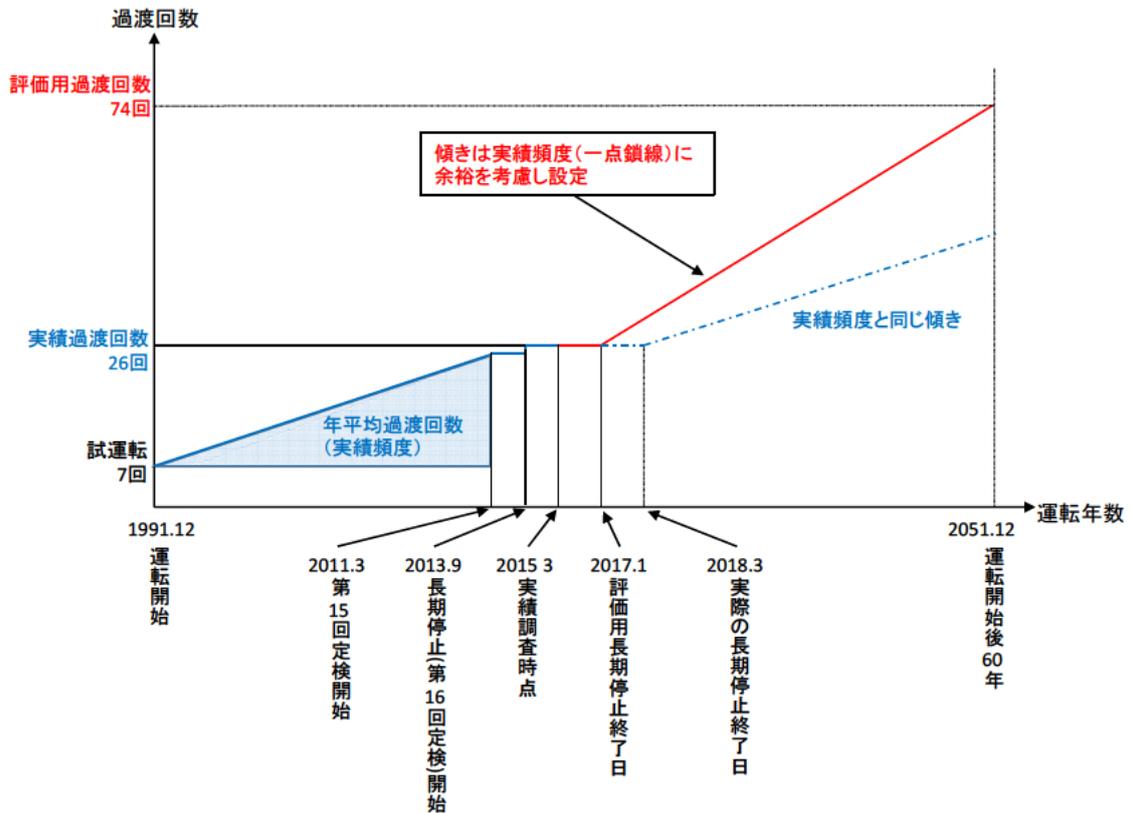


図3 評価用過渡回数の略式図(「停止」の例)

	営業運転開始時点 1991.12.18	福島第一原子力発電所事故後、最初のプラント停止月末時点 2011.3.31	現時点(実績調査時点) 2015.3.31	評価上の断続運転開始時点 2017.1.1	運転開始後60年時点 2051.12.17
実際の運転状況		2011.3.18	2012.7	2013.9	2018.3
	通常の断続運転	15回定検	運転	16回定検	通常の断続運転
評価上の取扱い	① (19.2年)	② (4年)	③ (1.8年)	④ (35年)	

① 通常の断続運転状態の期間であるため、この期間に発生した過渡の回数を実績値としてカウントするとともに、年平均過渡回数の算出に考慮している。

② 福島第一原子力発電所事故後に一度再稼働しているが、通常と異なる特有の期間であるため、この期間に発生した過渡の回数を実績値としてはカウントするが、年平均過渡回数の算出には考慮しない。

③ 評価上、冷温停止状態が継続している期間として取り扱い、過渡の発生回数は0回とする。

④ 評価上、通常の断続運転状態が継続している期間として取り扱い、①の期間における年平均過渡回数に余裕を考慮した頻度で過渡が発生するものと想定する。

図4 実績過渡回数及び年平均過渡回数の算出における評価上の取り扱い

表 4(1/3) 未取替機器（上部蓋、蓋管台、空気抜管台、及びスタッドボルトを除く）の  
疲労評価に用いた過渡回数

運転状態 I

過渡項目	過渡回数 特記事項	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値
起動（温度上昇率55.6℃/h）	4、9	26	74
停止（温度下降率55.6℃/h）	4、9	26	74
負荷上昇（負荷上昇率5%/min）	3、9	220	903
負荷減少（負荷減少率5%/min）	3、9	211	894
90%から100%へのステップ状負荷上昇	2、9	2	4
100%から90%へのステップ状負荷減少	2、9	2	4
100%からの大きいステップ状負荷減少	9	3	9
定常負荷運転時の変動*1	1	-	-
燃料交換	5、9	17	70
0%から15%への負荷上昇	9	29	79
15%から0%への負荷減少	9	21	68
1 ループ停止 / 1 ループ起動			
I) 停止	2	0	2
II) 起動	2	0	2

運転状態 II

過渡項目	過渡回数 特記事項	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値
負荷の喪失	2、9	4	7
外部電源喪失	2、9	1	5
1次冷却材流量の部分喪失	2	0	2
100%からの原子炉トリップ			
Ⅰ) 不注意な冷却を伴わないトリップ	2、9	1	8
Ⅱ) 不注意な冷却を伴うトリップ	2	0	2
Ⅲ) 不注意な冷却と安全注入を伴うトリップ	2	0	2
1次冷却系の異常な減圧	2	0	2
制御棒クラスタの落下	2	0	3
出力運転中の非常用炉心冷却系の誤起動	2	0	2
1次冷却系停止ループの誤起動	2	0	2
タービン回転試験	6、9	5	5
1次系漏えい試験	9	22	63

\*1：設計評価においては、1次冷却材温度は高温側±1.4℃、低温側±2.4℃、1次冷却材圧力+0.39MPa、-0.29MPa（+4.0kg/cm<sup>2</sup>、-3.0kg/cm<sup>2</sup>）の変動があるものとしているが、この過渡項目の疲労累積係数への寄与は小さく、また、実際には通常運転中のゆらぎとして、このような変動は生じていない。

\*2：過渡回数特記事項10、11、12は記載省略。

表 4(2/3) 取替機器（上部蓋、蓋管台、空気抜管台）の疲労評価に用いた過渡回数

運転状態 I

過渡項目	過渡回数 特記事項*2	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値*3
起動（温度上昇率55.6℃/h）	4	6	54
停止（温度下降率55.6℃/h）	4	6	54
負荷上昇（負荷上昇率5%/min）	3	55	738
負荷減少（負荷減少率5%/min）	3	55	738
90%から100%へのステップ状負荷上昇	2	0	2
100%から90%へのステップ状負荷減少	2	0	2
100%からの大きいステップ状負荷減少	—	0	6
定常負荷運転時の変動*1	1	—	—
燃料交換	5	4	57
0%から15%への負荷上昇	—	6	56
15%から0%への負荷減少	—	6	53
1 ループ停止 / 1 ループ起動			
I) 停止	2	0	2
II) 起動	2	0	2

運転状態 II

過渡項目	過渡回数 特記事項	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値*3
負荷の喪失	2	0	3
外部電源喪失	2	0	4
1次冷却材流量の部分喪失	2	0	2
100%からの原子炉トリップ			
I) 不注意な冷却を伴わないトリップ	2	0	7
II) 不注意な冷却を伴うトリップ	2	0	2
III) 不注意な冷却と安全注入を伴うトリップ	2	0	2
1次冷却系の異常な減圧	2	0	2
制御棒クラスタの落下	2	0	3
出力運転中の非常用炉心冷却系の誤起動	2	0	2
1次冷却系停止ループの誤起動	2	0	2
タービン回転試験	6	0	0
1次系漏えい試験	—	6	47

\*1：設計評価においては、1次冷却材温度は高温側±1.4℃、低温側±2.4℃、1次冷却材圧力＋0.39MPa、－0.29MPa（＋4.0kg/cm<sup>2</sup>、－3.0kg/cm<sup>2</sup>）の変動があるものとしているが、この過渡項目の疲労累積係数への寄与は小さく、また、実際には通常運転中のゆらぎとして、このような変動は生じていない。

\*2：過渡回数特記事項7、8、10、11、12は記載省略。

\*3：運転開始後15年時点での上部蓋取替に伴い、プラント運転開始後60年時点の過渡回数としては、上部蓋取替からプラント運転開始後60年時点までの年数である45年間の過渡回数とした。

表 4(3/3) スタッドボルトの疲労評価に用いた過渡回数

運転状態 I

過渡項目	過渡回数 特記事項*2	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値
起動 (温度上昇率55.6°C/h)	4、9	26	75
停止 (温度下降率55.6°C/h)	4、9	26	75
負荷上昇 (負荷上昇率5%/min)	3、9	220	903
負荷減少 (負荷減少率5%/min)	3、9	211	894
90%から100%へのステップ状負荷上昇	2、9	2	4
100%から90%へのステップ状負荷減少	2、9	2	4
100%からの大きいステップ状負荷減少	9	3	9
定常負荷運転時の変動*1	1	-	-
燃料交換	5、9	17	70
0%から15%への負荷上昇	9	29	79
15%から0%への負荷減少	9	21	68
1 ループ停止 / 1 ループ起動			
I) 停止	2	0	2
II) 起動	2	0	2

運転状態 II

過渡項目	過渡回数 特記事項	運転実績に基づく過渡回数	
		2014年度末時点	運転開始後60年 時点の推定値
負荷の喪失	2、9	4	7
外部電源喪失	2、9	1	5
1次冷却材流量の部分喪失	2	0	2
100%からの原子炉トリップ			
I) 不注意な冷却を伴わないトリップ	2、9	1	8
II) 不注意な冷却を伴うトリップ	2	0	2
III) 不注意な冷却と安全注入を伴うトリップ	2	0	2
1次冷却系の異常な減圧	2	0	2
制御棒クラスタの落下	2	0	3
出力運転中の非常用炉心冷却系の誤起動	2	0	2
1次冷却系停止ループの誤起動	2	0	2
タービン回転試験	6、9	5	5
1次系漏えい試験	9	24	69

\*1：設計評価においては、1次冷却材温度は高温側±1.4°C、低温側±2.4°C、1次冷却材圧力+0.39MPa、-0.29MPa (+4.0kg/cm<sup>2</sup>、-3.0kg/cm<sup>2</sup>)の変動があるものとしているが、この過渡項目の疲労累積係数への寄与は小さく、また、実際には通常運転中のゆらぎとして、このような変動は生じていない。

\*2：過渡回数特記事項8、10、11、12は記載省略。

(c) 応力解析、疲労累積係数算出

原子炉容器各部位（スタッドボルトを除く）の健全性評価は、設計・建設規格の規定に従い、大気環境中の疲労評価を行う。

供用状態A、B（運転状態Ⅰ、Ⅱ）の過渡条件に対し、P（圧力）、O（熱過渡）、M（機械的荷重）、D（自重）、T（熱膨張荷重）の各荷重を考慮して、応力解析を行い、過渡条件の組合せを考慮して疲労累積係数（ $U_f$ ）を算出する。

接液部に対しては、環境疲労評価手法に従い、環境効果補正係数（ $F_{en}$ ）を算出し、環境効果を考慮した疲労累積係数（ $U_{en}$ ）を算出する。

スタッドボルトの健全性評価については、設計・建設規格の規定に従い、疲労評価を行う。

供用状態A、B（運転状態Ⅰ、Ⅱ）の過渡条件に対して、P（圧力）、O（熱過渡）、M（機械的荷重）の各荷重を考慮して、応力解析を行い、過渡条件の組合せを考慮して疲労累積係数（ $U_f$ ）を算出する。

それぞれの疲労評価の解析フローを図5に示す。

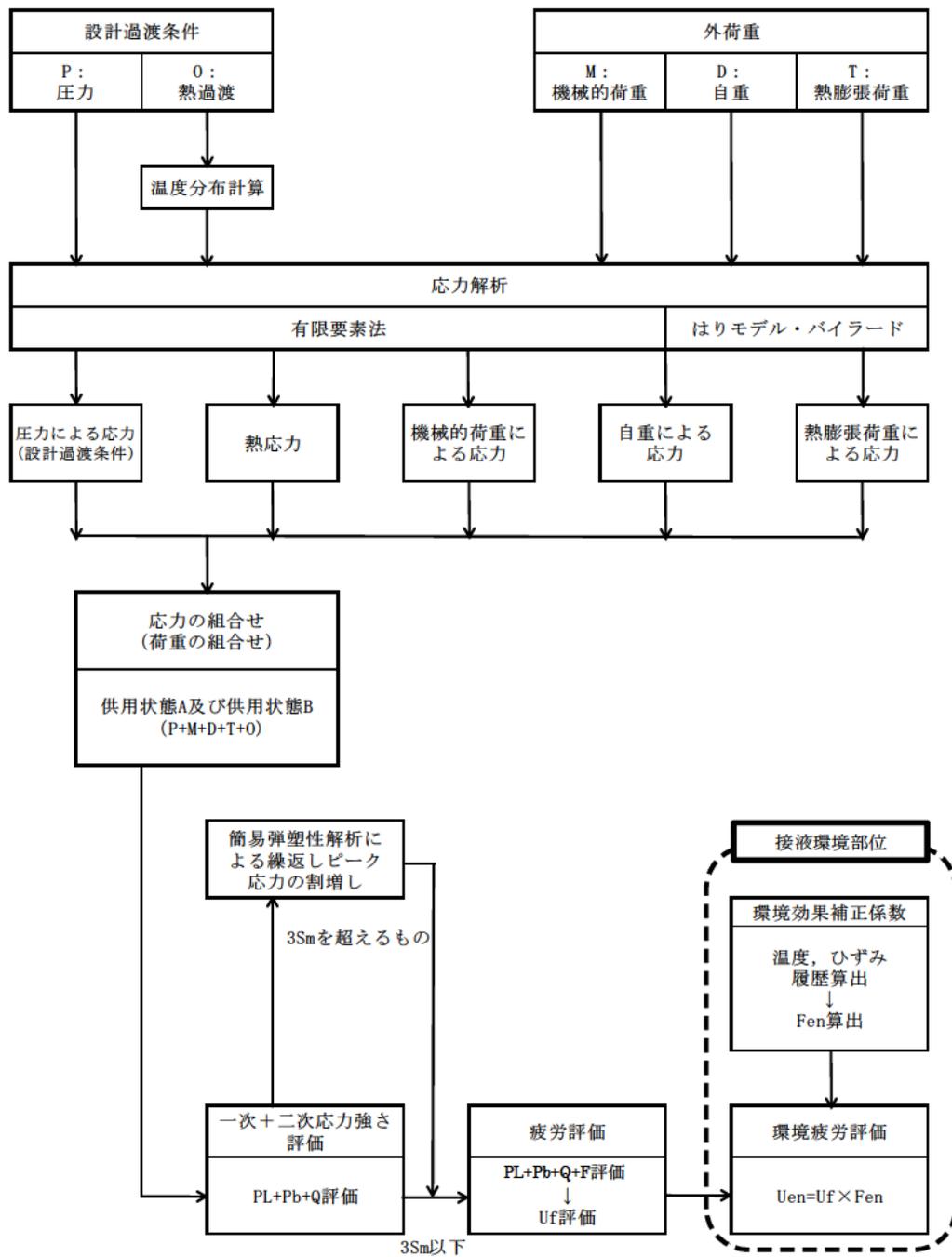


図 5(1/2) 疲労評価の解析フロー (スタッドボルトを除く部位)

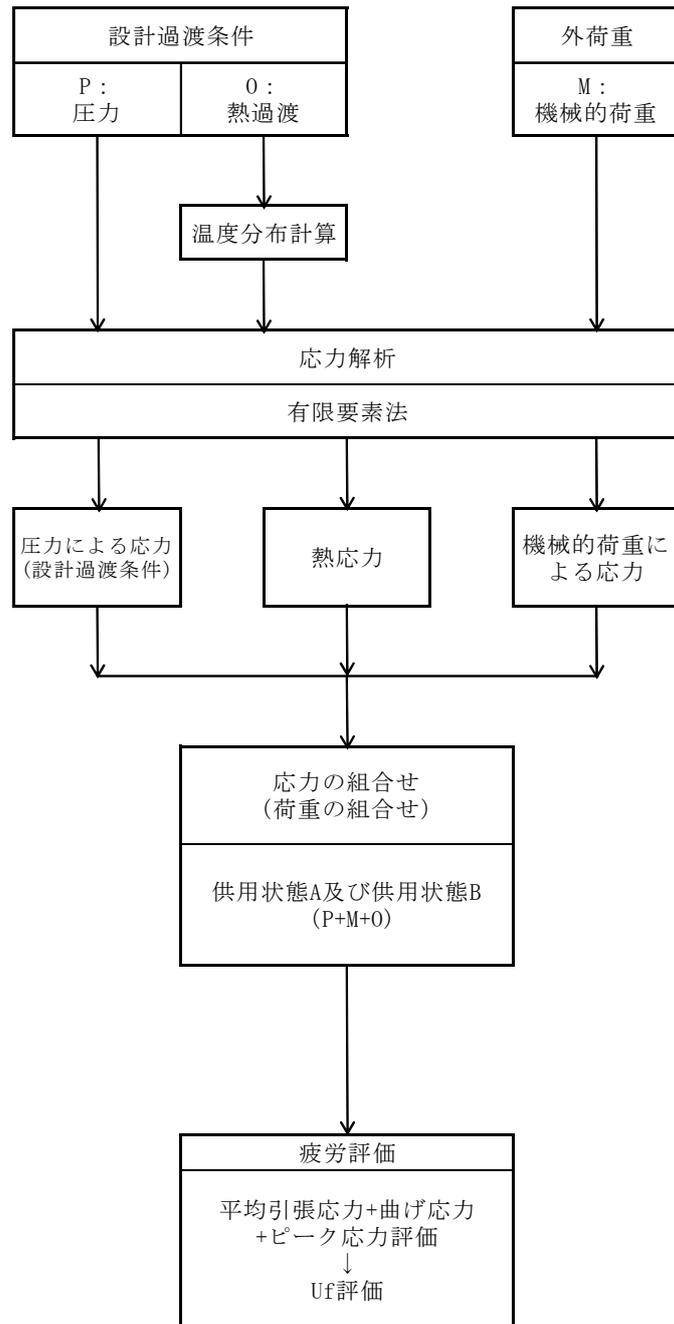


図 5(2/2) 疲労評価の解析フロー (スタッドボルト)

(d) 評価結果

設計・建設規格に基づき、大気環境中での疲労評価を行った結果、疲労累積係数(Uf)が1を下回ることを確認した。

さらに、接液環境にある評価点について環境疲労評価手法に基づき、接液環境を考慮した疲労評価を行った結果、疲労累積係数(Uen)が1を下回ることを確認した。

原子炉容器の疲労評価結果を表5に示す。

また、原子炉容器の疲労累積係数の算出根拠について別紙3、クラッドにより環境疲労評価不要とする部位のクラッド確認について別紙4に示す。

表5 原子炉容器の疲労評価結果

評価対象部位	疲労累積係数 (許容値：1以下)	
	設計・建設規格 による解析	環境疲労評価手法 による解析
冷却材入口管台	0.040	0.001*2
冷却材出口管台 (A冷却材出口管台)	0.050	0.001*2
冷却材出口管台 (A冷却材出口管台以外)	0.069	0.001*2
蓋管台*1	0.115	0.001*2
空気抜管台*1	0.017	0.001*2
炉内計装筒	0.235	0.005*2
上部蓋*1及び上部胴フランジ	0.008	—*3
下部胴・下部鏡板接続部	0.005	—*3
炉心支持金物	0.005	0.001*2
スタッドボルト	0.390	—*3

\*1：第12回定期検査時（2006年度）に原子炉容器上部蓋を取替えているため、45年間の過渡回数を基に算出した。

\*2：炉水環境にあり、かつ疲労評価上最も厳しい箇所について評価を実施しており、疲労評価対象箇所と異なる。

\*3：非接液部。

## 4.2 現状保全

原子炉容器の評価対象部位における疲労割れに対する保全は、原子力規制委員会文書「実用発電用原子炉及びその付属施設における破壊を引き起こす亀裂その他の欠陥の解釈の制定について」(平成26年8月6日付け原規技発第1408063号)及び「日本機械学会 発電用原子力設備規格 維持規格」に従った検査プログラム、試験方法及び試験範囲で供用期間中検査として超音波探傷検査、浸透探傷検査、目視確認(VT-1、VT-2、VT-3)を実施し、健全性を確認している。

原子炉容器内面の内張りに対しては、定期的に目視確認を実施し、内張りの損傷などの異常の有無を確認しており、これまでの点検の結果、問題のないことを確認できている。

なお、低サイクル疲労の予防保全の観点から行っている工事はない。

原子炉容器の供用期間中検査の内容を表6に示す。

表6 原子炉容器の供用期間中検査の内容

部位	検査部位	検査内容	検査範囲 / 頻度	至近の検査実績	検査結果
冷却材入口管台	内面コーナー、セーフエンドとの溶接部、胴との溶接部	①超音波探傷検査 ②浸透探傷検査	100%/10年	①第15回定期検査 ②第18回定期検査	良
冷却材出口管台	内面コーナー、セーフエンドとの溶接部、胴との溶接部	超音波探傷検査 浸透探傷検査	100%/10年	第18回定期検査	良
蓋管台	制御棒駆動装置ハウジングとの溶接部	浸透探傷検査	25%/10年	第18回定期検査	良
空気抜管台	上部蓋の貫通部	漏えい検査による目視確認(VT-2)	毎定検	第18回定期検査	良
炉内計装筒	下部鏡板の貫通部	ベアメタル検査*	100%/5年	第17回定期検査	良
上部蓋及び上部胴フランジ	溶接部	超音波探傷検査	100%/10年	第15回定期検査	良
下部胴・下部鏡板接続部	溶接部	超音波探傷検査	100%/10年	第15回定期検査	良
炉心支持金物	胴との溶接部	目視確認(VT-3)	100%/10年	第15回定期検査	良
スタッドボルト	ボルト本体	超音波探傷検査	100%/10年	第18回定期検査	良
	ナット	目視確認(VT-1)	100%/10年	第18回定期検査	良

\*ベアメタル検査：加圧水型軽水炉の一次冷却材圧力バウンダリにおけるNi基合金使用部位に係る検査で、保温材をはがして地金にホウ酸の付着がないかを目視により確認する。

#### 4.3 総合評価

劣化が進展すると仮定した場合における運転開始後 60 年間の供用を想定した原子炉容器の疲労評価結果は、疲労累積係数が 1 を下回り、疲労割れの発生が問題となる可能性はないと考える。ただし、疲労評価は実過渡回数に依存するため、今後も実過渡回数を把握し評価する必要がある。

また、疲労割れは超音波探傷検査等により、原子炉容器内面の内張りの欠陥については、有意な異常のないことを目視確認により検知可能であり、点検手法として適切である。

#### 4.4 高経年化への対応

低サイクル疲労については、実績過渡回数の確認を継続的に実施し、運転開始後 60 年時点の推定過渡回数を上回らないことを確認する。

## 5. 代表機器以外の技術評価

### 5.1 健全性評価

代表機器以外の機器についての評価結果一覧を表7に示す。

また、クラッドにより環境疲労評価不要とする部位のクラッド確認について別紙4、環境疲労評価で考慮している溶存酸素濃度について別紙5、環境疲労評価手法における環境効果補正係数の算出方法について別紙6、代表機器以外の疲労累積係数の算出根拠について別紙7および別紙8に示す。

表7(1/2) 代表機器以外の機器についての評価結果一覧

評価対象機器、部位			疲労累積係数 (許容値：1以下)	
			設計・建設規格 による解析	環境疲労評価手法 による解析
ポンプ	余熱除去ポンプ	ケーシング	0.035	0.176
	1次冷却材ポンプ	ケーシング吸込ノズル	0.001	0.001
		ケーシング吐出ノズル	0.108	0.649 <sup>*1</sup>
		ケーシング脚部	0.111	0.639 <sup>*1</sup>
熱交換器	再生熱交換器	管板部	0.076	0.100
	余熱除去冷却器	管板部	0.184	0.244
	蒸気発生器	管板まわり	0.165	0.173 <sup>*1</sup>
		給水入口管台	0.195	0.503 <sup>*2</sup>
容器	加圧器	スプレイライン用管台	0.051	0.060 <sup>*2</sup>
		サージ用管台	0.019	0.021 <sup>*1</sup>
	機械ペネトレーション	余熱除去冷却器出口配管貫通部端板	0.001	— <sup>*3</sup>
配管	ステンレス鋼配管	余熱除去系統出口配管「1次冷却材管高温側出口管台～1次冷却材管高温側出口隔離弁」	0.003	0.060
		余熱除去系統出口配管「1次冷却材管高温側出口隔離弁～原子炉格納容器貫通部」	0.004	0.026

\*1：接液部のうち疲労評価上最も厳しい箇所について評価を実施しており、設計・建設規格の疲労評価対象箇所と異なる。

\*2：熱成層による発生応力を含めた解析であり、3次元有限要素法を用いた評価である。また、熱成層を考慮した応力評価の結果最も厳しい箇所について評価しており、設計・建設規格の疲労評価対象箇所と異なる。

\*3：非接液部。

表7(2/2) 代表機器以外の機器についての評価結果一覧

評価対象機器、部位			疲労累積係数 (許容値：1以下)	
			設計・建設規格 による解析	環境疲労評価手法 による解析
配管	ステンレス鋼配管	加圧器サージ配管	0.004	0.005*2
		加圧器スプレイ配管	0.017	0.219*2
	炭素鋼配管	主給水系統配管 「原子炉格納容器貫通部～ 蒸気発生器給水管台」	0.002	0.010
		1次冷却材管	ホットレグ	0.001
	クロスオーバレグ		0.002	0.009
	コールドレグ		0.001	0.006
	加圧器サージ管台		0.011	0.055
蓄圧タンク注入管台	0.009		0.036	
充てん管台	0.003	0.029		
弁	仕切弁	余熱除去ポンプループ高温 側入口止め弁弁箱	0.005	0.125
	玉形弁	抽出ライン止め弁弁箱	0.034	0.485
	スイング逆止弁	蓄圧タンク注入ライン第1 逆止弁弁箱	0.109	0.758
	リフト逆止弁	加圧器補助スプレイライン 逆止弁弁箱	0.009	0.052
炉内 構造 物	炉心支持構造物	上部炉心支持板	0.004	0.031
		上部炉心支持柱	0.001	0.001
		下部炉心支持板	0.001	0.008
		下部炉心支持柱	0.003	0.032
重 機 器 サ ポ ー ト	加圧器	加圧器スカート溶接部	0.201	—*3

\*2：熱成層による発生応力を含めた解析であり、3次元有限要素法を用いた評価である。また、熱成層を考慮した応力評価の結果最も厳しい箇所について評価しており、設計・建設規格の疲労評価対象箇所と異なる。

\*3：非接液部。

## 5.2 現状保全

代表機器以外の現状保全を表8に示す。なお、低サイクル疲労の予防保全の観点から行っている工事はない。

表8(1/2) 代表機器以外の現状保全

評価対象機器、部位		現状保全内容	検査範囲 / 頻度	至近の検査実績	検査結果	
ポンプ	余熱除去ポンプ	ケーシング	ケーシング内面全体の目視確認	1回/6定検	第15回定期検査	良
	1次冷却材ポンプ	ケーシング	①ケーシング内面の目視確認(VT-3) ②漏えい検査(VT-2)	①100%/10年(1台) ②毎定検	①第17回定期検査 ②第17回定期検査	良
熱交換器	再生熱交換器	管板	漏えい検査(VT-2)	100%/10年	第17回定期検査	良
	余熱除去冷却器	管板	目視確認	1回/10定検	第18回定期検査	良
	蒸気発生器	管板	①溶接部の超音波探傷検査 ②漏えい試験(VT-2)	①25%/10年 ②毎定検	①第17回定期検査 ②第17回定期検査	良
給水入口管台		漏えい試験(VT-2)	100%/10年	第13回定期検査		
容器	加圧器	スプレイライン用管台	①溶接部の超音波探傷検査 ②溶接部の浸透探傷検査 ③漏えい検査(VT-2)	①②25%/10年 ③毎定検	①②第17回定期検査 ③第17回定期検査	良
		サージ用管台	①第18回定期検査 ②第12回定期検査 ③第17回定期検査			
	機械 ペネトレーション	余熱除去冷却器出口配管貫通部	①目視確認 ②原子炉格納容器漏えい率試験	①②1回/3定検	①②第16回定期検査	良
配管	ステンレス鋼配管	余熱除去系統出口配管「1次冷却材管高温側出口管台～1次冷却材管高温側出口隔離弁」	①溶接部の超音波探傷検査 ②溶接部の浸透探傷検査 ③漏えい検査(VT-2)	①25%/10年 ②25%/10年 ③毎定検	①第18回定期検査 ②第16回定期検査 ③第17回定期検査	良
		余熱除去系統出口配管「1次冷却材管高温側出口隔離弁～原子炉格納容器貫通部」	①溶接部の浸透探傷検査 ②漏えい検査(VT-2)	①7.5%/10年 ②100%/10年	①第17回定期検査 ②第17回定期検査	良
		加圧器サージ配管	①溶接部の超音波探傷検査	①25%/10年 ②毎定検	①第17回定期検査 ②第17回定期検査	良
		加圧器スプレイ配管	②漏えい検査(VT-2)		①第18回定期検査中 ②第17回定期検査	※
	炭素鋼配管	主給水系統配管	漏えい検査(VT-2)	100%/10年	第15回定期検査	良
1次冷却材管	ホットレグ、クロスバレグ、コールドレグ、加圧器サージ管台、蓄圧タンク注入管台、充てん管台	①超音波探傷検査 ②浸透探傷検査 ③漏えい検査(VT-2)	①②25%/10年 ③毎定検	①第18回定期検査 ②第18回定期検査 ③第17回定期検査	良	

※有意な指示箇所については取替予定である。

表 8(2/2) 代表機器以外の現状保全

評価対象機器、部位		現状保全内容	検査範囲 / 頻度	至近の検査実績	検査結果	
弁	仕切弁	余熱除去ポンプルー プ高温側入口止め弁 弁箱	①目視確認 ②漏えい確認	①1回/10定検 ②毎定検	①第18回定期検査 ②第17回定期検査	良
	玉形弁	抽出ライン止め弁 弁箱	①目視確認 ②漏えい確認	①1回/4定検 ②毎定検	①第17回定期検査 ②第17回定期検査	良
	スイング逆止弁	蓄圧タンク注入ライ ン第1逆止弁弁箱	①目視確認 ②漏えい確認	①1回/10定検 ②毎定検	①第16回定期検査 ②第17回定期検査	良
	リフト逆止弁	加圧器補助スプレ イライン逆止弁弁箱	①目視確認 ②漏えい確認	①1回/20定検 ②毎定検	①第19回実施予定 ②第17回定期検査	良
炉内構造物		上部炉心支持板 上部炉心支持柱	水中テレビカメラに よる目視確認(VT-3)	7.5%/10年	第16回定期検査	良
		下部炉心支持板		第15回定期検査	良	
重 機 器 サ ポ ー ト	加圧器	加圧器スカート 溶接部	溶接部の超音波探傷 検査	7.5%/10年	第13回定期検査	良

### 5.3 総合評価

劣化が進展すると仮定した場合における運転開始後 60 年間の供用を想定した各機器の疲労評価結果は、疲労累積係数が 1 を下回り疲労割れ発生が問題となる可能性はないと考える。ただし、疲労評価は実過渡回数に依存するため、今後も実過渡回数を把握し評価する必要がある。

また、疲労割れは現状保全で有意な異常のないことを確認している。

### 5.4 高経年化への対応

低サイクル疲労については、実績過渡回数の確認を継続的に実施し、運転開始後 60 年時点の推定過渡回数を上回らないことを確認する。

6. まとめ

6.1 審査ガイド適合性

「2. 基本方針」で示した要求事項について技術評価を行った結果、すべての要求事項を満足していることを確認した。低サイクル疲労についての要求事項との対比を表9に示す。

表9 低サイクル疲労についての要求事項との対比

ガイド	要求事項	技術評価結果
<p>実用発電用原子炉施設における高経年化対策審査ガイド</p>	<p>3. 高経年化技術評価等の審査の視点・着眼点            (1) 高経年化技術評価の審査            ⑫健全性の評価            実施ガイド3. 1⑤に規定する期間の満了日までの期間について、高経年化対策上着目すべき経年劣化事象の発生又は進展に係る健全性を評価していることを審査する。            ⑬現状保全の評価            健全性評価結果から現状の保全策の妥当性が評価されていることを審査する。            ⑭追加保全策の抽出            現状保全の評価結果から、現状保全に追加する必要がある新たな保全策が抽出されていることを審査する。            (2) 長期施設管理方針の審査            ①長期施設管理方針の策定            すべての追加保全策について長期保守管理方針として策定されているかを審査する。</p>	<p>4.1及び5.1の「健全性評価」に示すとおり、運転開始後60年時点の推定過渡回数を用いて健全性評価を実施した。            4.2及び5.2に示すとおり、現状保全の評価結果から、現状の保全策が妥当であることを確認した。            4.4及び5.4に示すとおり、実績過渡回数の確認を継続的に実施し、運転開始後60年時点の推定過渡回数を上回らないことを確認する。</p>
<p>実用発電用原子炉施設における高経年化対策実施ガイド</p>	<p>3.1 高経年化技術評価の実施及び見直し            高経年化技術評価の実施及び見直しに当たっては、以下の要求事項を満たすこと。            ⑤抽出された高経年化対策上着目すべき経年劣化事象について、以下に規定する期間の満了日までの期間について機器・構造物の健全性評価を行うとともに、必要に応じ現状の施設管理に追加すべき保全策（以下「追加保全策」という。）を抽出すること。            イ 実用炉規則第82条第1項の規定に基づく高経年化技術評価プラントの運転を開始した日から60年間（ただし、⑧ただし書の規定に該当する場合にはプラントの運転を開始した日から40年間とする。）            3.2 長期施設管理方針の策定及び変更            長期施設管理方針の策定及び変更に当たっては、以下の要求事項を満たすこと。            ① 高経年化技術評価の結果抽出された全ての追加保全策（発電用原子炉の運転を断続的に行うことを前提として抽出されたもの及び冷温停止状態が維持されることを前提として抽出されたものの全て。）について、発電用原子炉ごとに、施設管理の項目及び当該項目ごとの実施時期を規定した長期施設管理方針を策定すること。            なお、高経年化技術評価の結果抽出された追加保全策について、発電用原子炉の運転を断続的に行うことを前提とした評価から抽出されたものと冷温停止状態が維持されることを前提とした評価から抽出されたもの間で、その対象の経年劣化事象及び機器・構造物の部位が重複するものについては、双方の追加保全策を踏まえた保守的な長期施設管理方針を策定すること。</p>	<p>4.4及び5.4に示すとおり、実績過渡回数の確認を継続的に実施し、運転開始後60年時点の推定過渡回数を上回らないことを確認する。</p>

## 6.2 長期施設管理方針として策定する事項

疲労評価結果は実績過渡回数に依存するため、継続的に実績過渡回数を把握する必要があることから、長期施設管理方針を表 10 のとおり定め、大飯発電所原子炉施設保安規定に記載し、確実に実施していく。

表 10 大飯発電所 3 号炉 長期施設管理方針（抜粋）

機器名	長期施設管理方針	実施時期
原子炉容器等※	原子炉容器等の疲労割れについては、実績過渡回数の確認を継続的に実施し、運転開始後 60 年時点の推定過渡回数を上回らないことを確認する。	中長期

※：疲労累積係数による低サイクル疲労の評価を実施した全ての機器

短期：2021年12月18日からの5年間、中長期：2021年12月18日からの10年間

# 別紙

- 別紙 1. 過渡回数推定値の算出方針について
- 別紙 2. 建設時に考慮されていない低サイクル応力変動の抽出プロセスについて
- 別紙 3. 原子炉容器の疲労累積係数の算出根拠について
- 別紙 4. クラッドにより環境疲労評価不要とする部位のクラッド確認について
- 別紙 5. 環境疲労評価で考慮している溶存酸素濃度について
- 別紙 6. 環境疲労評価手法における環境効果補正係数の算出方法について
- 別紙 7. 代表機器以外の疲労累積係数の算出根拠について
- 別紙 8. 詳細評価法による環境効果補正係数の算出手順について
- 別紙 9. 有限要素法解析における応力分類について

タイトル	過渡回数推定値の算出方針について
説明	<p>運転開始後 60 年時点での過渡回数は、これまでの運転実績をベースに残りの年数を考慮して、次のとおり設定している。</p> <p>①未取替機器 60 年時点過渡回数<math>\geq</math>実績過渡回数+(実績過渡回数に基づく 1 年間当たりの平均過渡回数)<math>\times</math>余裕(1.5)<math>\times</math>残年数</p> <p>②取替機器 60 年時点過渡回数<math>\geq</math>取替後実績過渡回数+(未取替機器の 1 年間当たり平均過渡回数)<math>\times</math>余裕(1.5)<math>\times</math>残年数</p> <p>未取替機器における「起動」、「負荷上昇」、「負荷の喪失」の過渡事象を例に、60 年時点での過渡回数の算出方法の詳細について添付-1 に示す。</p> <p>なお、評価に用いる過渡項目に該当しない微小過渡については、「起動」、「停止」、「1 次系漏えい試験」のいずれかの項目に分類し実績に算定している。微小過渡の一覧及び分類内訳を添付-2 に示す。</p> <p>また、大飯 3 号炉で未経験の過渡項目の年平均過渡回数については、電力共通研究の研究結果より添付-3 のとおり設定している。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

○「起動」の運転開始後60年時点の過渡回数算出

$$26 \text{ 回}^{\text{注1)}} + 0.85 \text{ 回/年}^{\text{注2)}} \times 1.5 \times 35.0 \text{ 年 (残りの年数)} \doteq 71 \text{ 回} < 74 \text{ 回 (評価用)}^{\text{注3)}})$$

注1) 試運転：8回（うち、微小過渡0回）

2015年3月末までの実績（試運転除く）：17.180回→18回（うち微小過渡0.180回→1回）

（試運転の過渡回数は下表の①、2015年3月末までの実績（試運転除く）は②参照）

注2) 2011年3月末までの実績（試運転除く）÷2011年3月末までの年数

$$16.154 \text{ 回} \div 19.2 \text{ 年} \doteq 0.841 \text{ 回/年} \rightarrow 0.85 \text{ 回/年}$$

（試運転時及び2011年3月末以降の過渡は特有であるため、年平均過渡回数の算出には用いない。）

注3) 「停止」に合わせた回数

過渡回数説明リスト（1/9）

過渡項目	試運転	2015年3月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状～60年までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状～60年までの増加分	評価用過渡回数
1 起動	8	17 (このうち 2011年3月 末までの実 績 16)	26 (8+17+0.180 =25.180 →26)	0.85 (16+0.154 =16.154 16.154 19.2 →0.841 →0.85)	45 (35×0.85× 1.5 =44.625 →45)	71 (=26+45)	74
微小過渡	0	0.180 (このうち 2011年3月 末までの実 績 0.154)					
(実績+微小過渡)	(8+0)	(17+1)	(25+1*)				

\*1：総微小過渡回数

○「負荷上昇」の運転開始後 60 年時点の過渡回数算出

$$220 \text{ 回}^{\text{注1)}} + \boxed{\phantom{000}}^{\text{注2)}} \times 1.5 \times 35.0 \text{ 年 (残りの年数)} \div 903 \text{ 回} = 903 \text{ 回 (評価用)}$$

注 1) 試運転 : 12 回

2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く) : 193+15 回

(試運転の過渡回数は下表の③、2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く) は④参照)

注 2) 2011 年 3 月末までの実績 (試運転除く) ÷ 2011 年 3 月末までの年数

$$193 \text{ 回} \div 19.2 \text{ 年} \div 10.05 \text{ 回/年} \rightarrow 10.1 \text{ 回/年}$$

(試運転時及び 2011 年 3 月末以降の過渡は特有であるため、年平均過渡回数の算出には用いない)

上記より 10.1 回/年となるが、稼働率が高くなった場合のステムフリーテスト回数増加を考慮し、 $\boxed{\phantom{000}}$ と設定する。

過渡回数説明リスト (2 / 9)

過渡項目	試運転	2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2 年	現状~60 年までの増加分 (35.0 年)	現状までの回数+ 現状~60 年までの増加分	評価用過渡回数
3 負荷上昇	$\boxed{12}$ ③	$\boxed{208}$ ④ (このうち 2011 年 3 月 末までの実績 193)	220 (=12+208)	$\boxed{\phantom{000}}$ 注 1) ( $\frac{193}{19.2} \approx 10.1$ )	$\boxed{683}$ ( $35 \times \boxed{\phantom{000}} \times 1.5$ +683)	903 (=220+683)	903

注1) 稼働率が高くなった場合のステムフリーテスト回数増加を考慮し、 $\boxed{\phantom{000}}$ とする。

○「負荷の喪失」の運転開始後 60 年時点の過渡回数算出

$$4 \text{ 回}^{\text{注1)}} + \boxed{\phantom{000}}^{\text{注2)}} \times 1.5 \times 35.0 \text{ 年 (残りの年数)} \div 7 \text{ 回} = 7 \text{ 回 (評価用)}$$

注 1) 試運転 : 4 回

2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く) : 0 回

(試運転の過渡回数は下表の⑤、2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く) は⑥参照)

注 2) 大飯 3 号炉では経験はないが、電共研「応力解析手法の高度化」より  $\boxed{\phantom{000}}$ を用いる。

過渡回数説明リスト (3 / 9)

過渡項目	試運転	2015 年 3 月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2 年	現状~60 年までの増加分 (35.0 年)	現状までの回数+ 現状~60 年までの増加分	評価用過渡回数
31 負荷の喪失	$\boxed{4}$ ⑤	$\boxed{0}$ ⑥	4	$\boxed{\phantom{000}}$ 注 1)	$\boxed{3}$ ( $35 \times \boxed{\phantom{000}} \times 1.5$ +3)	7 (=4+3)	7

注1) 電共研「応力解析手法の高度化」にて設定した値を用いる。

過渡回数説明リスト (4/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状~60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状~60年までの 増加分	評価用過渡回数
2 停止	7	18 (このうち2011 年3月末まで の実績 17)	26 (7+18 +0.131 =25.131 →26)	0.90 (17+0.114 =17.114 $\frac{17.114}{19.2} \approx 0.90$ )	48 ( $35 \times 0.9 \times 1.5$ =47.25→48)	74 (=26+48)	74
微小過渡	0	0.131 (このうち2011 年3月末まで の実績 0.114)					
(実績+微小過渡)	(7+0)	(18+1)	(25+1*)				

\*1: 総微小過渡回数

過渡回数説明リスト (5/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状~60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状~60年までの 増加分	評価用過渡回数
4 負荷減少	4	207 (このうち2011 年3月末まで の実績 192)	211 (=4+207)	<input type="text"/> 注2) ( $\frac{192}{19.2} \approx 10.0$ )	683 ( $35 \times \text{} \times 1.5$ →683)	894 (=211+683)	894
5 90%から100%へのステップ状 負荷上昇	2	0	2	<input type="text"/> 注1)	2 ( $35 \times \text{} \times 1.5$ →2)	4 (=2+2)	4
6 100%から90%へのステップ状 負荷減少	2	0	2	<input type="text"/> 注1)	2 ( $35 \times \text{} \times 1.5$ →1→2)	4 (=2+2)	4
7 100%負荷からの大きい ステップ状負荷減少	1	2	3 (=1+2)	<input type="text"/> 注1) ( $\frac{2}{19.2} \approx 0.11$ )	6 ( $35 \times \text{} \times 1.5$ →6)	9 (=3+6)	9
8 定常負荷運転時の変動	-	-	-	-	-	-	-
9 燃料交換	1	16 (このうち2011 年3月末まで の実績 15)	17 (=1+16)	<input type="text"/> 注3) ( $\frac{15}{19.2} \approx 0.79$ )	53 ( $35 \times \text{} \times 1.5$ →53)	70 (=17+53)	70

注1) 電共研「応力解析手法の高度化」にて設定した値を用いる。

注2) 稼働率が高くなった場合のステムフリーテスト回数増加を考慮し、とする。

注3) 現状平均は、0.79回/年であるが、とする。

## 過渡回数説明リスト (6/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末 までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状～60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状～60年までの 増加分	評価用過渡回数
10 0%から15%への負荷上昇	9	20 (このうち2011 年3月末まで の実績 18)	29 (=9+20)	0.94 $\left(\frac{18}{19.2} \approx 0.94\right)$	50 $\left(35 \times 0.94 \times 1.5\right)$ =49.35→50	79 (=29+50)	79
11 15%から0%への負荷減少	2	19 (このうち2011 年3月末まで の実績 17)	21 (=2+19)	0.89 $\left(\frac{17}{19.2} \approx 0.89\right)$	47 $\left(35 \times 0.89 \times 1.5\right)$ =46.725→47	68 (=21+47)	68
12 I) 1ループ起動/停止 I) 1ループ停止	0	0	0	<input type="checkbox"/> 注1)	2 $\left(35 \times \frac{2}{19.2} \times 1.5\right)$ =5.25→2	2	2
II) 1ループ起動	0	0	0	<input type="checkbox"/> 注1)	2 $\left(35 \times \frac{2}{19.2} \times 1.5\right)$ =5.25→2	2	2

注1) 電共研「応力解析手法の高度化」にて設定した値を用いる。

## 過渡回数説明リスト (7/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末 までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状～60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状～60年までの 増加分	評価用過渡回数
32 外部電源喪失	1	0	1	<input type="checkbox"/> 注1)	4 $\left(35 \times \frac{4}{19.2} \times 1.5\right)$ =10.5→4	5 (=1+4)	5
33 1次冷却材流量の部分喪失	0	0	0	<input type="checkbox"/> 注1)	2 $\left(35 \times \frac{2}{19.2} \times 1.5\right)$ =5.25→2	2	2

注1) 電共研「応力解析手法の高度化」にて設定した値を用いる。

過渡回数説明リスト (8/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状~60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状~60年までの 増加分	評価用過渡回数
34 100%からの原子炉トリップ I)不注意な冷却を伴わない トリップ	1	0	1	注1)	$\left( \begin{array}{c} 7 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 7 \end{array} \right)$	8 (=1+7)	8
II)不注意な冷却を伴う トリップ	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 2 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 2 \end{array} \right)$	2	2
III)不注意な冷却と安全注入 を伴うトリップ	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 2 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 1 \rightarrow 2 \end{array} \right)$	2	2
35 1次冷却系の異常な減圧	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 2 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 2 \end{array} \right)$	2	2
36 制御棒クラスタの落下	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 3 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 3 \end{array} \right)$	3	3
37 出力運転中の非常用炉心冷却 系の誤起動	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 2 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 2 \end{array} \right)$	2	2
38 1次冷却系停止ループの誤起動	0	0	0	注1)	$\left( \begin{array}{c} 2 \\ 35 \times \frac{\square}{\square} \times 1.5 \\ \rightarrow 2 \end{array} \right)$	2	2

注1) 電共研「応力解析手法の高度化」にて設定した値を用いる。

過渡回数説明リスト (9/9)

過渡項目	試運転	2015年3月末までの実績 (試運転除く)	現状までの回数	年平均過渡回数 回数 19.2年	現状~60年 までの増加分 (35.0年)	現状までの回数+ 現状~60年までの 増加分	評価用過渡回数
39 1次系漏えい試験	3	16 (このうち2011 年3月末までの 実績 14)	22 ( $\begin{array}{c} 3+2+16 \\ +0.710 \\ =21.710 \rightarrow 22 \end{array}$ )	0.77 ( $\begin{array}{c} 14+0.688 \\ =14.688 \\ \frac{14.688}{19.2} \approx 0.77 \end{array}$ )	41 ( $\begin{array}{c} 35 \times 0.77 \times 1.5 \\ =40.425 \rightarrow 41 \end{array}$ )	63 (=22+41)	63
微小過渡	1.076	0.710 (このうち2011 年3月末までの 実績 0.688)	(19+3*)				
(実績+微小過渡)	(3+2)	(16+1)					
40 タービン回転試験	5	0	5	0	-	5	5

\*1: 総微小過渡回数

表1 微小過渡 (起動の微小過渡)

	$\frac{\Delta T}{\Delta t}$ (°C/H)	$\Delta T$ (°C)	$\Delta P$ (MPa)		$\alpha$ ※1	等価回数 ( $1/\alpha$ ) ※1
1	6.5	14.7	-		302 (36)	0.004 (0.028)
2	15.6	45.4	-		20 (6)	0.050 (0.167)
3	-	-	2.35		137 (22)	0.008 (0.046)
4	-	-	2.37		137 (22)	0.008 (0.046)
5	-	-	2.69		83 (16)	0.012 (0.063)
6	16.9	43.4	-		20 (6)	0.050 (0.167)
7	-	-	2.52		137 (22)	0.008 (0.046)
8	0.4	13.4	-		559 (53)	0.002 (0.019)
9	-	-	2.39		137 (22)	0.008 (0.046)
10	-	-	2.30		137 (22)	0.008 (0.046)
11	-	-	2.27		137 (22)	0.008 (0.046)
12	10.7	34.7	-		83 (16)	0.012 (0.063)
13	-	-	2.56		137 (22)	0.008 (0.046)

※1 : ( ) 内はスタッドボルトに適用する

表 2 微小過渡 (停止の微小過渡)

	$\frac{\Delta T}{\Delta t}$ (°C/H)	$\Delta T$ (°C)	$\Delta P$ (MPa)		$\alpha$ ※1	等価回数 ( $1/\alpha$ ) ※1
1	4.0	14.6			559 (53)	0.002 (0.019)
2	-	-	2.41		137 (22)	0.008 (0.046)
3	8.1	32.8	-		137 (22)	0.008 (0.046)
4	-	-	2.68		83 (16)	0.012 (0.063)
5	15.6	47.8	-		20 (6)	0.050 (0.167)
6	-	-	2.37		137 (22)	0.008 (0.046)
7	-	-	2.46		137 (22)	0.008 (0.046)
8	7.9	15.0	-		209 (29)	0.005 (0.035)
9	4.4	13.1	-		559 (53)	0.002 (0.019)
10	-	-	2.33		137 (22)	0.008 (0.046)
11	-	-	2.27		137 (22)	0.008 (0.046)
12	-	-	2.24		137 (22)	0.008 (0.046)
13	-	-	2.24		137 (22)	0.008 (0.046)
14	4.2	25.2	-		559 (53)	0.002 (0.019)

※1 : ( ) 内はスタッドボルトに適用する

表 3 微小過渡 (漏えい試験の微小過渡)

	$\frac{\Delta T}{\Delta t}$ (°C/H)	$\Delta T$ (°C)	$\Delta P$ (MPa)		$\alpha$ ※1	等価回数 ( $1/\alpha$ )※1
1	-	-	5.4		20 (6)	0.050 (0.167)
2	2.8	16.8	-		18 (44)	0.003 (0.023)
3	3.3	16.5	-		59 (53)	0.002 (0.019)
4	28.9	59.9	-		1 (1)	1.000 (1.000)
5			3.5		45 (11)	0.023 (0.091)
6	23.6	36.0			6 (3)	0.167 (0.334)
7			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
8	17.4	27.3			20 (6)	0.050 (0.167)
9	4.2	23.1			209 (29)	0.005 (0.035)
10			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
11			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
12			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
13			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
14	19.0	31.2			6 (3)	0.167 (0.334)
15			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
16			4.1		45 (11)	0.023 (0.091)
17	-	-	4.18		45 (11)	0.023 (0.091)
18	-	-	4.21		45 (11)	0.023 (0.091)
19	-	-	4.34		20 (6)	0.050 (0.167)
20	-	-	4.37		20 (6)	0.050 (0.167)
21	-	-	4.16		45 (11)	0.023 (0.091)

※1 : ( ) 内はスタッドボルトに適用する

表 4 微小過渡の内訳 (非取替機器)

過渡項目	試運転	実績
起動 微小過渡	—	0.180 内訳 1/302×1 (表 1 No. 1) 1/20×2 (表 1 No. 2, 6) 1/137×5 (表 1 No. 3, 4, 7, 9, 10) 1/83×1 (表 1 No. 5) 1/559×1 (表 1 No. 8) 1/83×1 (表 1 No. 12) ※1 1/137×2 (表 1 No. 11, 13) ※1
停止 微小過渡	—	0.131 内訳 1/559×2 (表 2 No. 1, 9) 1/137×6 (表 2 No. 2, 3, 6, 7, 10, 11) 1/83×1 (表 2 No. 4) 1/20×1 (表 2 No. 5) 1/209×1 (表 2 No. 8) 1/137×2 (表 2 No. 12, 13) ※1 1/559×1 (表 2 No. 14) ※1
漏えい試験 微小過渡	1.076 内訳 1/20×1 (表 3 No. 1) 1/418×1 (表 3 No. 2) 1/559×1 (表 3 No. 3) 1×1 (表 3 No. 4) 1/45×1 (表 3 No. 5)	0.710 内訳 1/6×2 (表 3 No. 6, 14) 1/20×3 (表 3 No. 8, 19, 20) 1/45×9 (表 3 No. 7, 10, 11, 12, 13, 15, 16, 17, 18) 1/209×1 (表 3 No. 9) 1/45×1 (表 3 No. 21) ※1

※1 : 2011年3月末以降の過渡

## 電力共通研究「応力解析手法の高度化」にて設定した値について

大飯3号炉で未経験の過渡項目については、電力共通研究「応力解析手法の高度化」に基づき年平均過渡回数を定めて、60年時点の過渡回数を決めている。国内PWRプラントで経験のある過渡項目は、研究当時における国内全PWRプラントの実績回数を総運転年数で割ることで算出している。(下記(1))

国内PWRプラントで未経験の過渡項目は確率評価によって求める。(下記(2))

## (1) 他プラントで経験のある過渡項目

過渡項目	年平均過渡回数 (実績回数/炉・年)
100%から90%へのステップ状負荷減少	
負荷の喪失	
外部電源喪失	
1次冷却材流量の部分喪失	
原子炉トリップ (不注意な冷却を伴わないトリップ)	
原子炉トリップ (不注意な冷却とSIを伴うトリップ)	
制御棒クラスタの落下	

## (2) 他プラントでも未経験の過渡項目

国内全PWRプラントで未経験の過渡項目については、確率評価によって故障率(年平均過渡回数)を求める。

発生確率の低い事象が一定時間内に発生する回数はポアソン分布で近似する。(参考文献：機械工学便覧)

ポアソン分布では、一定時間内に発生する平均回数(=期待値)を $\lambda$ 、一定時間内に発生する回数を $x$ ( $x=0, 1, 2, \dots$ )としたとき、一定時間内に $x$ 回発生する確率 $p(x)$ は、

$$p(x) = e^{-\lambda} \frac{\lambda^x}{x!} \quad \text{と表される。}$$

ここで、 $\lambda'$ を1年間あたりの平均発生回数、 $T$ を調査対象年数とすると、 $T$ 年の間に発生する平均回数は $\lambda = \lambda' T$ となるので、

$$p(x) = e^{-\lambda' T} \frac{(\lambda' T)^x}{x!} \quad \text{と表される。}$$

故障率（年平均故障回数） $\lambda'$ の事象が、本共同研究をまとめた時点における国内全PWRプラントの運転開始後経過時間T [ ] で1回も発生していないという実績から、信頼水準 [ ] で検定を行い、故障率 $\lambda'$ を求める。

$x=0$   $p(x)=[ ]$   $T=[ ]$  を代入する。

$$[ ] = e^{-[ ]\lambda'} \times \frac{([ ]\lambda')^0}{0!}$$

$$\rightarrow \lambda' = -\ln \frac{[ ]}{[ ]} = [ ]$$

したがって、未経験過渡の年平均過渡回数は [ ] 回となる。

過渡項目	年平均過渡回数
90%から100%へのステップ状負荷上昇	[ ]
1ループ停止 / 1ループ起動	
原子炉トリップ（不注意な冷却を伴うトリップ）	
1次冷却系の異常な減圧	
出力運転中の非常用炉心冷却系の誤起動	
1次冷却系停止ループの誤起動	

タイトル	建設時に考慮されていない低サイクル応力変動の抽出プロセスについて
説明	<p>高経年化技術評価書で想定している経年劣化事象については、評価対象機器の使用条件（形式、材料、環境条件等）を考慮し、これまでの高経年化技術評価で想定されている部位と経年劣化事象の組み合わせを取り纏めた日本原子力学会標準「原子力発電所の高経年化対策実施基準」附属書A（規定）「経年劣化メカニズムまとめ表」を参考に抽出している。</p> <p>このうち、例えば運転経験により建設時考慮されていない有意な応力変動（熱成層）が想定される部位については、「経年劣化メカニズムまとめ表」で疲労想定部位として記載され、附属書E「経年劣化事象一覧表」にて熱成層が生じる場所において想定要となっているため、この部位について抽出した。</p> <p>なお、熱成層が生じる場所は、日本機械学会「配管の高サイクル熱疲労に関する評価指針」で損傷事例が記載されているため、これを参考とした。</p> <p>「配管の高サイクル熱疲労に関する評価指針」に記載されている熱成層による損傷事例としては、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）キャビティフロー型熱成層</li> <li>（2）弁シートリーク型熱成層</li> <li>（3）弁グランドリーク型熱成層</li> <li>（4）運転操作型熱成層</li> </ol> <p>であり、これらについて評価した結果は以下の通り、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●キャビティフロー型熱成層については、発生の可能性のある箇所を「配管の高サイクル熱疲労に関する評価指針」に基づいて評価し、構造上有意となる温度変動の発生を回避できることを確認している。</li> <li>●弁シートリーク型熱成層については、対象となる止め弁の定期的な分解点検によって弁のシートリークを防止している。</li> <li>●弁グランドリーク型熱成層については、対象となる隔離弁の定期的な分解点検時に弁ディスク位置を調整して、弁シート部の隙間を適正に管理していくことで弁ディスクの熱膨張による閉止が生じないようにしており、熱成層の発生、消滅の繰返しを防止している。</li> <li>●運転操作型熱成層については、今後熱成層が発生しない運転操作をすることが困難であるため、熱成層の発生を想定した評価を行い、許容値を満足していることを確認した。</li> </ul> <p>なお、運転操作型熱成層を考慮している部位としては「蒸気発生器給水入口管台」、「加圧器サージ配管」、「加圧器スプレイ配管」、「加圧器スプレイライン用管台」の4箇所である。</p> <p>また、前述の「経年劣化メカニズムまとめ表」作成以降の知見については、それ以降に認可された先行評価プラントの高経年化技術評価書を参考にするとともに、以下の通り国内外の新たな運転経験及び最新知見についても抽出し、技術評価への反映要否を検討した結果、新たに有意な低サイクル応力変動（熱成層等）が把握された部位はないことを確認した。</p>

●運転経験

国内運転経験として、原子力安全推進協会が運営している原子力発電情報公開ライブラリーにおいて公開されている「トラブル情報」、「保全品質情報」を、海外運転経験としてNRC（米国原子力規制委員会：Nuclear Regulatory commission）のBulletin（通達）、Generic Letter及びInformation Notice等を対象としてスクリーニングを実施。期間中の情報において、新たに高経年化技術評価書に反映すべき運転経験を抽出している。

●最新知見

原子力規制委員会指示文書及び原子力規制委員会設置以前については、旧：原子力安全・保安院指示文書等、日本機械学会、日本電気協会、日本原子力学会の規格・基準類、並びに原子力規制委員会のホームページに公開されている試験研究の情報等を検討し、高経年化技術評価を実施する上で、新たに反映が必要な知見を抽出している。

以上

<p>タイトル</p>	<p>原子炉容器の疲労累積係数の算出根拠について</p>							
<p>説明</p>	<p>原子炉容器の疲労累積係数の算出根拠は以下のとおりである。</p> <p>1. 解析モデル          疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="435 551 1329 1854"> <tr> <td data-bbox="435 551 662 600"> <p>解析プログラム</p> </td> <td data-bbox="662 551 1329 600"> <p>ABAQUS Ver. 2018</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="435 600 662 792"> <p>要素種類</p> </td> <td data-bbox="662 600 1329 1854" rowspan="4"> <!-- Empty cell for data --> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="435 792 662 842"> <p>要素次数</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="435 842 662 1323"> <p>要素数</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="435 1323 662 1854"> <p>節点数</p> </td> </tr> </table>	<p>解析プログラム</p>	<p>ABAQUS Ver. 2018</p>	<p>要素種類</p>	Empty cell for data	<p>要素次数</p>	<p>要素数</p>	<p>節点数</p>
<p>解析プログラム</p>	<p>ABAQUS Ver. 2018</p>							
<p>要素種類</p>	Empty cell for data							
<p>要素次数</p>								
<p>要素数</p>								
<p>節点数</p>								

2. 材料物性値

各部位の設計応力強さを以下に示す。

(単位：MPa)

使用箇所	材料	温 度	
		289.2℃	324.9℃
冷却材入口管台, 冷却材出口管台, 上部蓋, 上部胴, 上部胴フランジ, トランジションリング	SFVQ1A	184	184
冷却材入口管台セーフエンド, 冷却材出口管台セーフエンド, 炉内計装筒セーフエンド	SUSF316	120	117
炉内計装筒, 炉心支持金物	NCF600	164	—
蓋管台	GNCF690H	—	137
空気抜管台	GNCF690C	—	164
スタッドボルト	SNB24-3	—	245

### 3. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。

状態	荷重の組み合わせ	
供用状態 A, B	ボルト以外	圧力+機械的荷重+自重 +熱膨張荷重+熱過渡
	ボルト	圧力+機械的荷重+熱過渡

### 4. 最大評価点の選定

解析モデル上の評価点は、強度評価上厳しくなる材料及び構造上の不連続部を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。

解析モデル上の評価点および最大評価点の選定結果を添付-1に示す。

### 5. 割り増し係数 $K_e$

評価に用いた割り増し係数を添付-1に示す。

なお、添付-1における「通常疲労評価」は設計・建設規格による疲労評価を表す。

### 6. 環境評価パラメータ

JSME S NF1-2009 による詳細評価手法を適用している。

#### 【冷却材入口管台, 冷却材出口管台, 炉内計装筒】

PWR プラント環境

$$\ln(F_{en}) = (3.910 - \varepsilon^*) \times T^*$$

[記号の説明]

$\varepsilon^*$  : ひずみ速度依存パラメータ

$T^*$  : 温度依存パラメータ

#### 【蓋管台, 空気抜管台, 炉内計装筒, 炉心支持金物】

PWR プラント環境

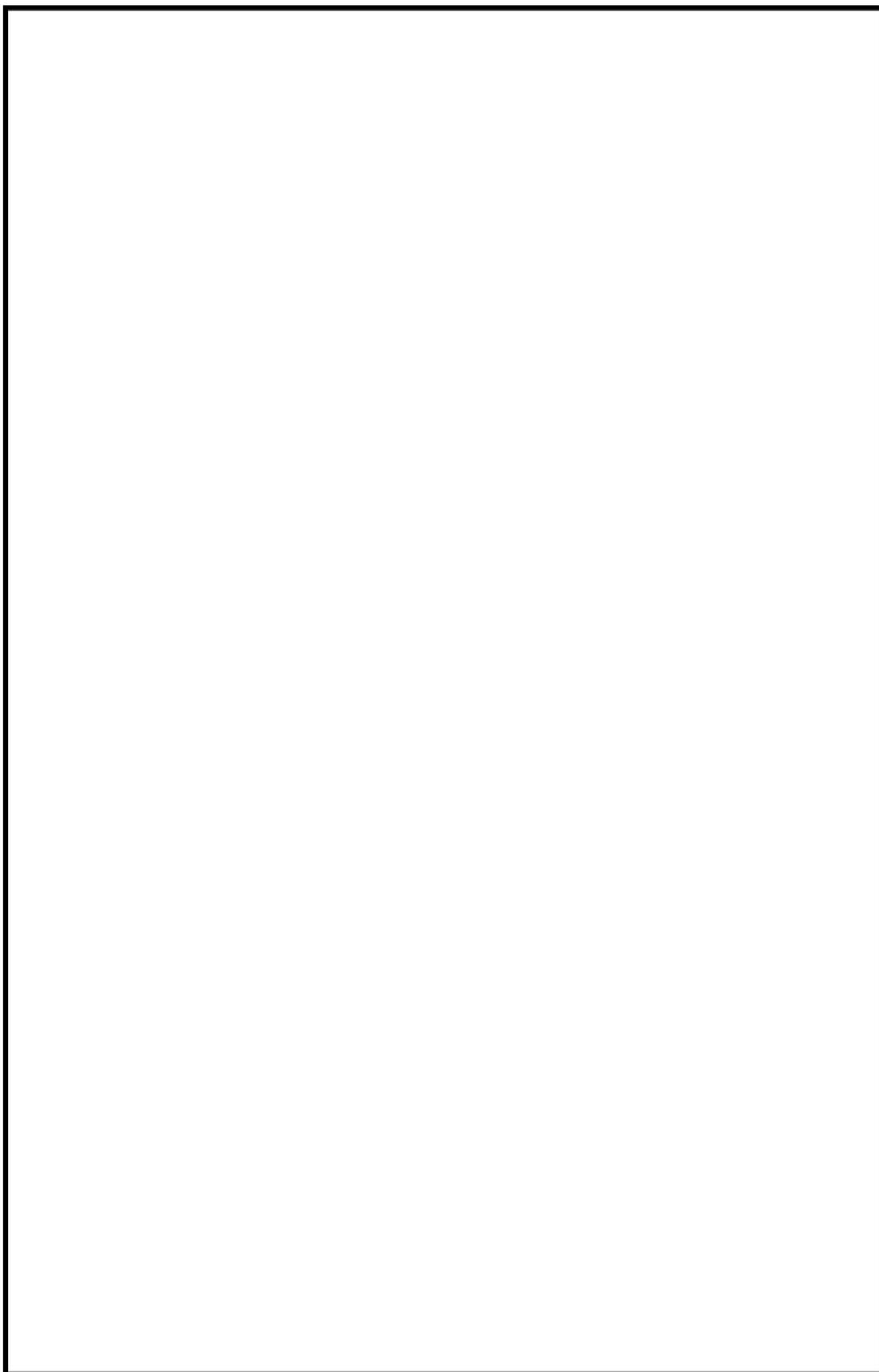
$$\ln(F_{en}) = (2.94 - \varepsilon^*) \times T^*$$

[記号の説明]

$\varepsilon^*$  : ひずみ速度依存パラメータ

$T^*$  : 温度依存パラメータ

評価に用いた環境評価パラメータ（環境効果補正係数  $F_{en}$ ）を添付-1に示す。



冷却材入口管台形状寸法, 評価点及び解析モデル

冷却材入口管台 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00000	0.00000
2	0.0	0.0	0.0
3	0.00000	0.0	0.0
4	0.00001	0.0	0.00020
5	0.00490	0.0	0.00398
6	0.00170	0.0	0.00052
7	0.00041	0.00069	0.00004
8	0.00072	0.00019	0.00027
9L	0.03421	0.03957	0.00204
10L	0.0	0.00292	0.00150
9C	0.00124	0.00263	0.00233
10C	0.0	0.02433	0.01325
11L	0.02814	0.03954	0.00010
12L	0.0	0.00306	0.00195
11C	0.00391	0.00158	0.00119
12C	0.0	0.02464	0.01467
13L	0.03764	0.03874	0.00323
14L	0.0	0.00351	0.00286
13C	0.00067	0.00213	0.00289
14C	0.0	0.02608	0.01674

許容値  $U_t = 1.0$

0.03957 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

冷却材入口管台 疲労解析結果 (評価点 : 9L)

評価点 - 9L  
( S23 )

応力強さ (単位 : MPa)		Ke	(単位 : MPa)		繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値		ALT	ALT'	N	N*	
503.9	-46.1	1.0	275.0	323.4	2	5350	0.00037
486.6	-46.1	1.0	266.4	313.3	2	5880	0.00034
479.7	-46.1	1.0	262.9	309.2	7	6110	0.00115
469.6	-46.1	1.0	257.8	303.2	52	6480	0.00802
469.6	-43.5	1.0	256.6	301.8	11	6570	0.00167
468.5	-43.5	1.0	256.0	301.1	2	6610	0.00030
464.7	-43.5	1.0	254.1	298.9	5	6760	0.00074
463.0	-43.5	1.0	253.2	297.9	5	6830	0.00073
440.0	-43.5	1.0	241.8	284.4	51	7840	0.00651
440.0	0.0	1.0	220.0	258.8	137	10400	0.01317
440.0	4.6	1.0	217.7	256.1	70	10700	0.00654
440.0	213.6	1.0	113.2	133.1	2	113000	0.00002
440.0	321.6	1.0	59.2	69.7	7		0.0

疲労累積係数 = 0.03957

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

冷却材入口管台 環境疲労評価結果（評価点：1）

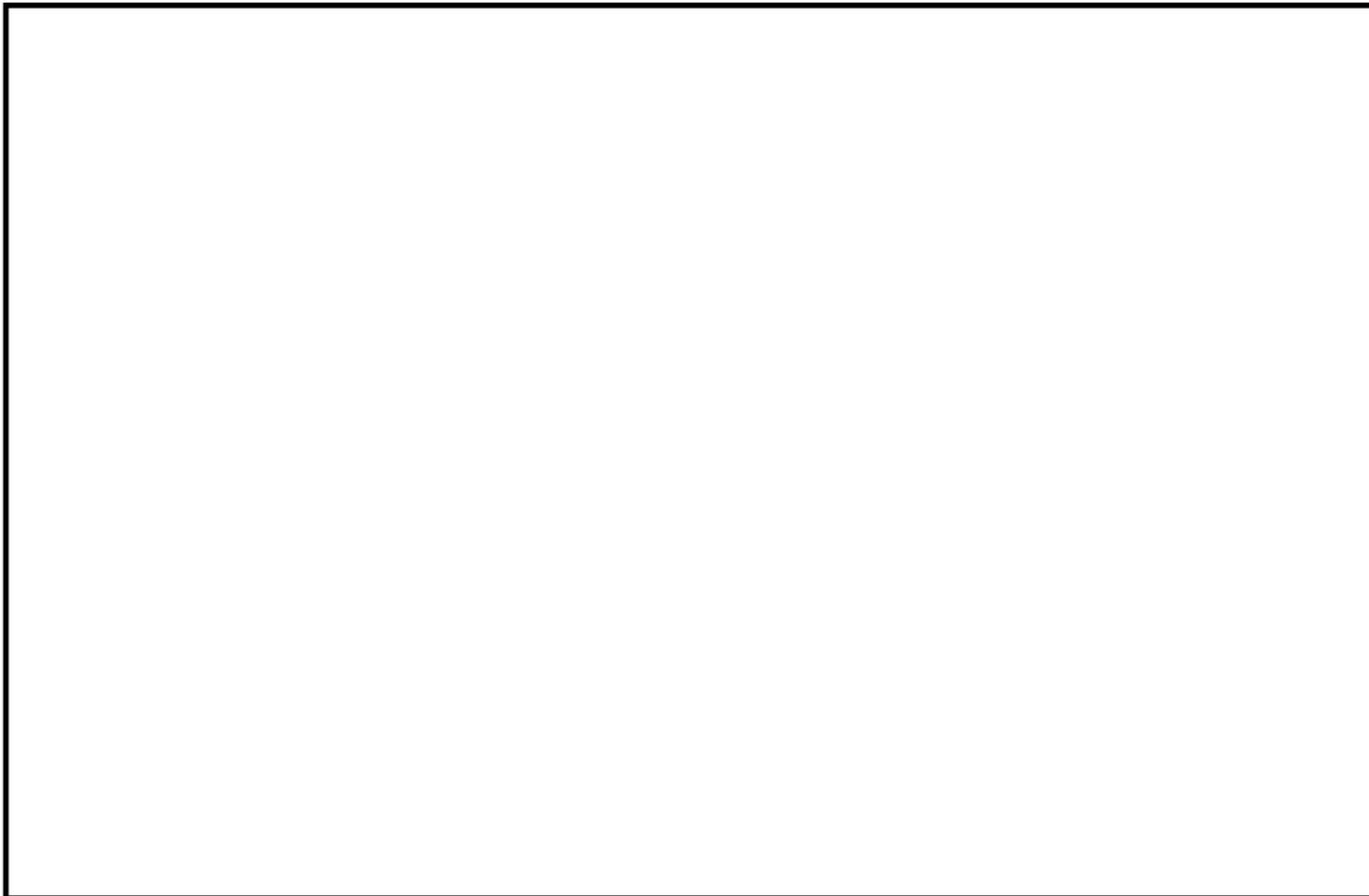
過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2D4	2J1	239.5	-25.5	1.00	132.5	146.8	2	2670000	0.00000	1.000	0.00000
2G1	2J1	176.4	-25.5	1.00	100.9	111.8	2	1100000	0.00000	1.000	0.00000
2H1	2J1	139.4	-25.5	1.00	82.5	91.4	2	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00000

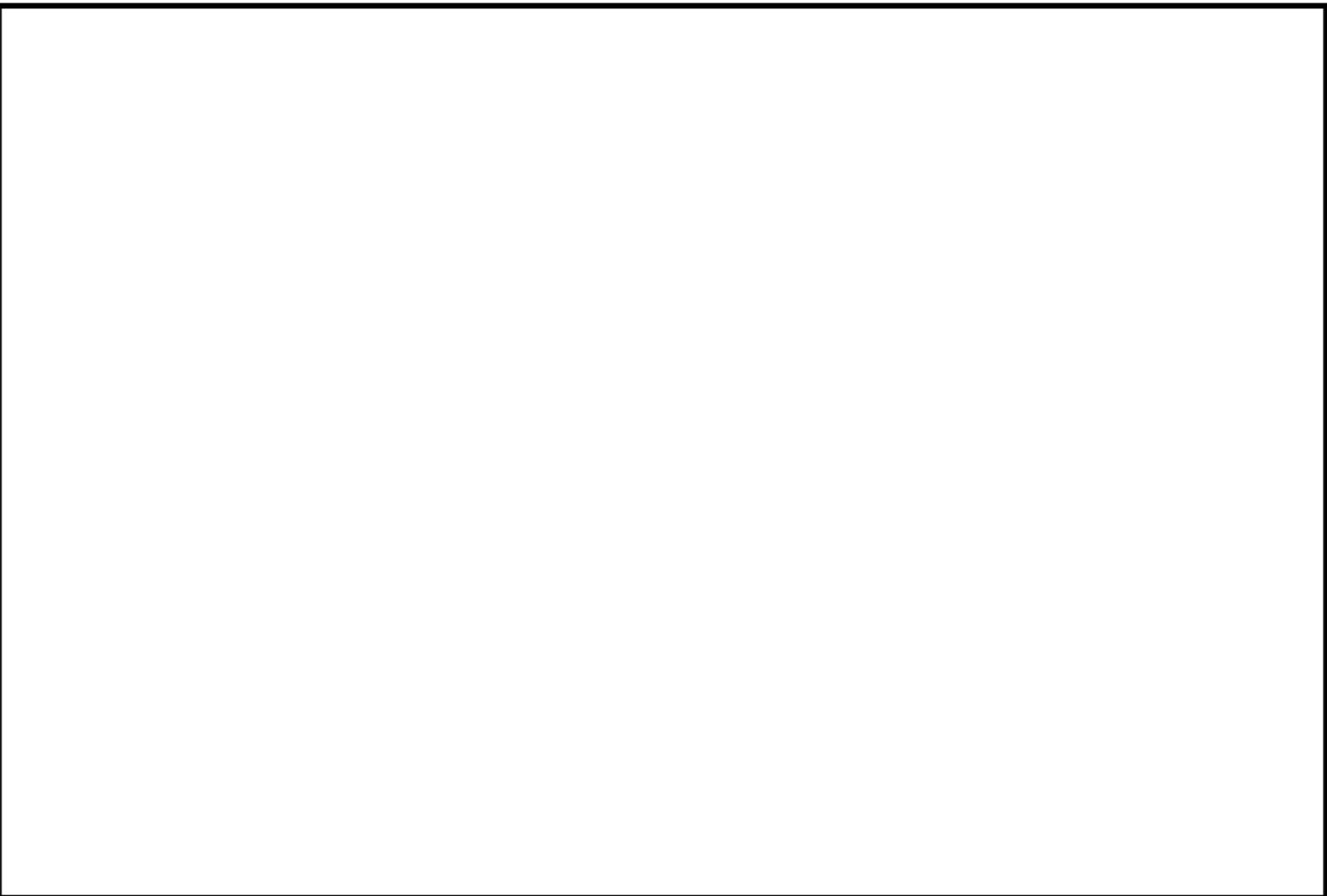
(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

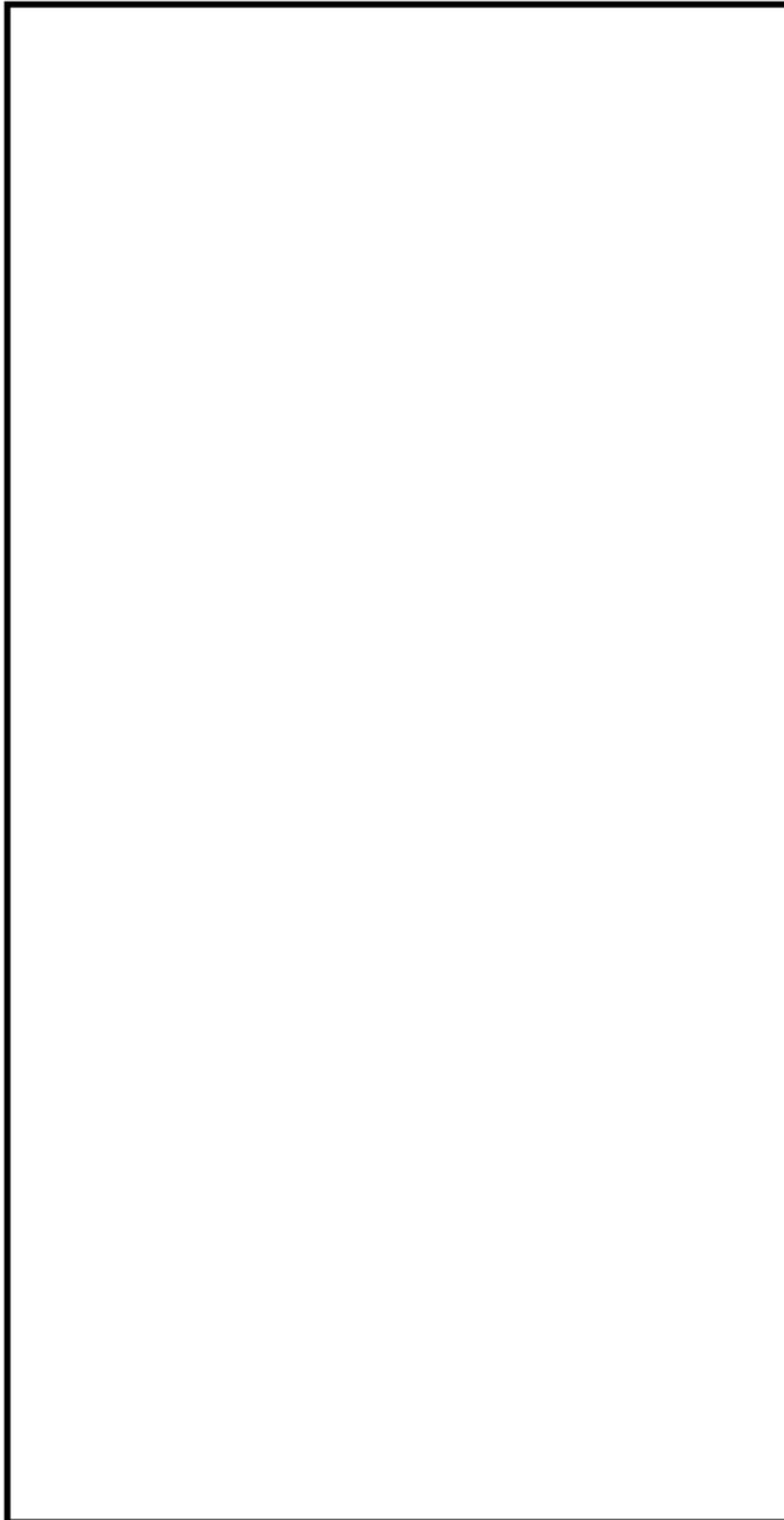
     : 割り増し係数 KE, 環境効果補正係数 fen を示す

環境効果補正係数 (Fen) の算出根拠

各過渡の温度，ひずみ履歴より値を読み取り，環境疲労評価手法に従って算出している。







冷却材出口管台（A冷却材出口管台）形状寸法，評価点及び解析モデル

冷却材出口管台（A冷却材出口管台） 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.00002	0.00001	0.00014
2	0.0	0.0	0.00001
3	0.0	0.0	0.00000
4	0.00000	0.00000	0.00003
5	0.00000	0.0	0.00001
6	0.00018	0.00000	0.00024
7	0.00001	0.00004	0.00060
8	0.00023	0.0	0.00398
9	0.00533	0.0	0.00921
10	0.01635	0.00001	0.01587
11	0.00000	0.00093	0.00311
12	0.00964	0.00009	0.00649
13	0.0	0.00118	0.00367
14	0.00542	0.0	0.00365
15L	0.03059	0.04914	0.00051
16L	0.0	0.00249	0.00109
15C	0.00208	0.00115	0.00251
16C	0.0	0.02508	0.01067
17L	0.04266	0.02469	0.0
18L	0.0	0.00456	0.00205
17C	0.00603	0.00084	0.00016
18C	0.0	0.02875	0.01521
19L	0.03280	0.04836	0.00083
20L	0.0	0.00520	0.00401
19C	0.00145	0.00062	0.00483
20C	0.0	0.03072	0.01875

許容値  $U_r=1.0$

0.04914 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

冷却材出口管台（A冷却材出口管台） 疲労解析結果（評価点：15L）

評価点 - 15L  
(S23)

応力強さ (単位: MPa)		Ke	繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)		
極大値	極小値		ALT	ALT'			
508.3	-49.0	1.0	278.7	333.4	2	4880	0.00041
506.3	-49.0	1.0	277.7	332.3	2	4930	0.00041
480.8	-49.0	1.0	264.9	317.0	2	5680	0.00035
447.5	-49.0	1.0	248.3	297.1	57	6890	0.00827
447.5	-41.4	1.0	244.4	292.5	6	7210	0.00083
439.1	-41.4	1.0	240.3	287.5	68	7590	0.00896
439.1	-26.1	1.0	232.6	278.3	70	8350	0.00838
439.1	-4.4	1.0	221.8	265.4	74	9620	0.00769
439.1	0.0	1.0	219.6	262.7	137	9910	0.01382
439.1	238.5	1.0	100.3	120.1	2	165000	0.00001
439.1	305.0	1.0	67.0	80.2	3	-----	0.0
					疲労累積係数 =		0.04914

Ke : 割り増し係数  
 ALT : 繰返しヒック応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

冷却材出口管台（A冷却材出口管台） 環境疲労評価結果（評価点：1）

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
NSS	2D4	0.0	-440.2	1.00	220.1	246.7	2	206000	0.00001	11.545	0.00011
NSS	2F1	0.0	-427.8	1.00	213.9	239.7	3	246000	0.00001	9.778	0.00012
NSS	2D2	0.0	-410.9	1.00	205.4	230.2	2	317000	0.00001	9.952	0.00006
NSS	2E1	0.0	-387.3	1.00	193.7	217.0	2	458000	0.00000	10.518	0.00005
NSS	2C2	0.0	-382.1	1.00	191.1	214.1	2	498000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1L1	0.0	-382.1	1.00	191.1	214.1	2	488000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2G1	0.0	-380.8	1.00	190.4	213.4	2	510000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2D1	0.0	-377.6	1.00	188.9	211.7	8	539000	0.00001	1.000	0.00001
NSS	2H2	0.0	-357.0	1.00	178.5	200.1	2	804000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2A1	0.0	-330.7	1.00	165.4	185.3	7	1160000	0.00001	1.000	0.00001
NSS	1I1	0.0	-313.9	1.00	156.9	175.9	70	1370000	0.00005	1.000	0.00005
NSS	1G1	0.0	-284.2	1.00	142.1	159.2	9	1900000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2I1	0.0	-282.0	1.00	141.0	158.0	5	1950000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1D1	0.0	-281.2	1.00	140.6	157.8	21	1970000	0.00001	1.000	0.00001
2H1	1D1	-70.7	-281.2	1.00	105.3	118.0	2	7740000	0.00000	1.000	0.00000
1C1	1D1	-188.2	-281.2	1.00	46.5	52.2	871	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00044

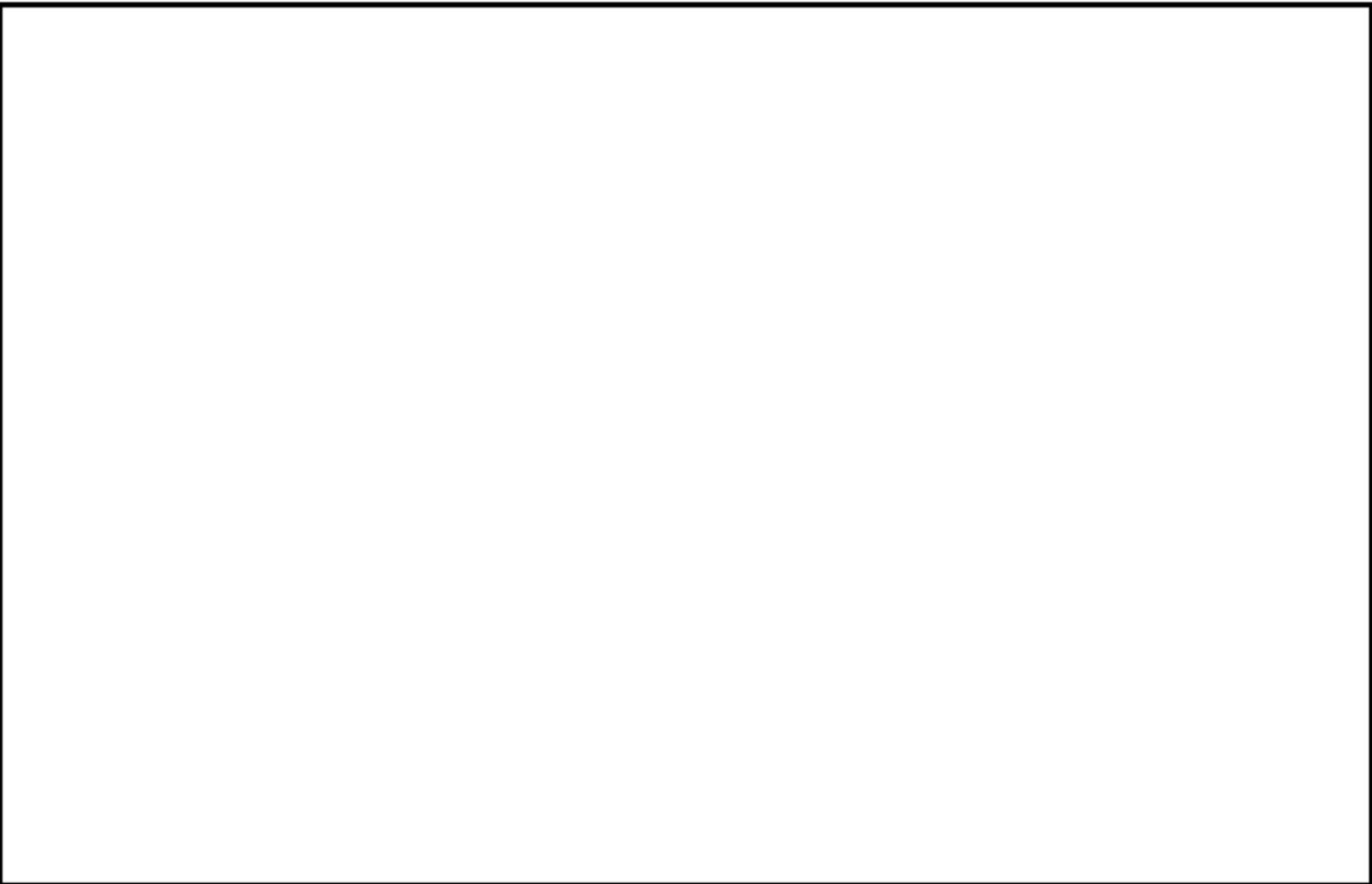
(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

: 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

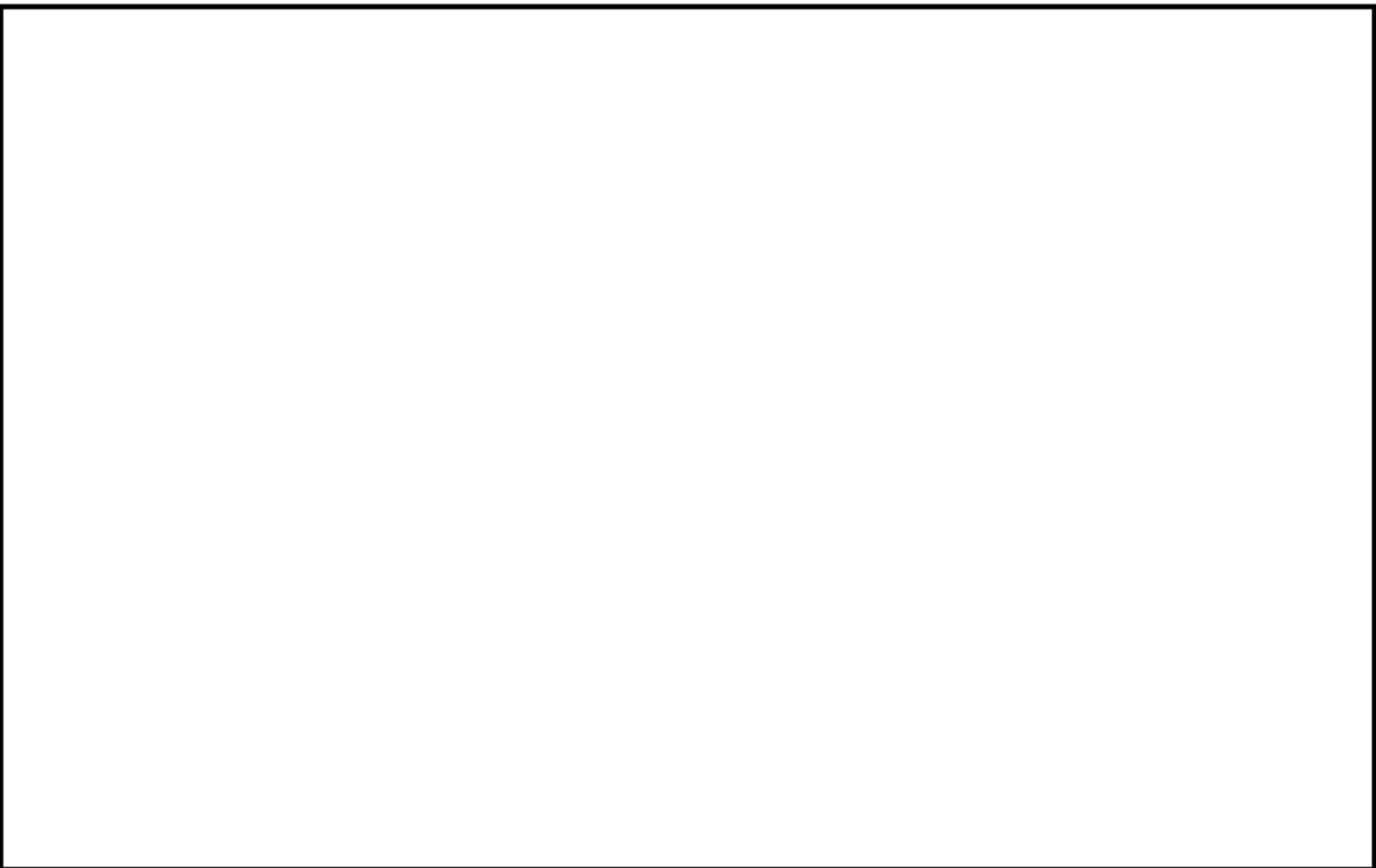
環境効果補正係数（Fen）の算出根拠

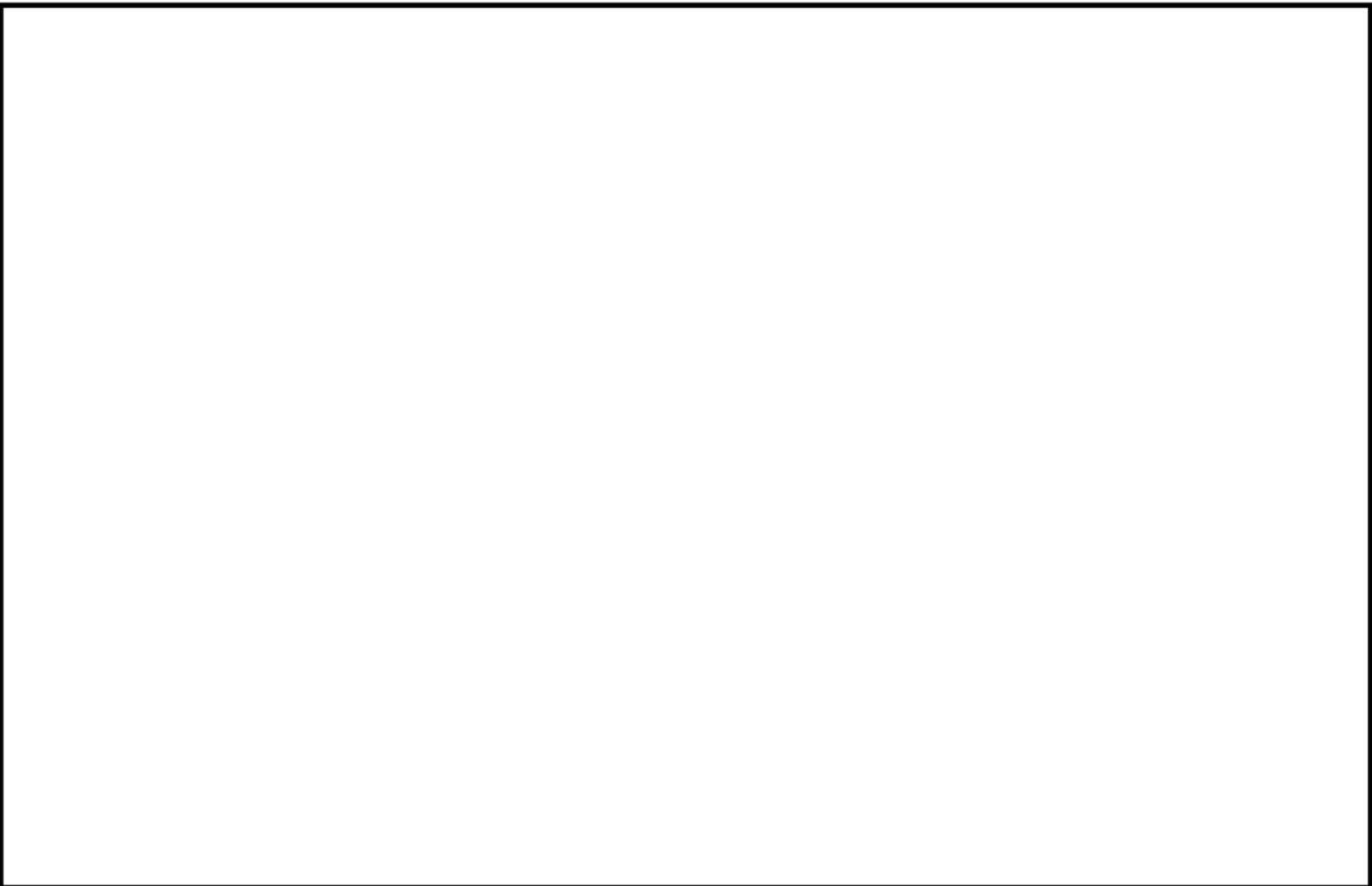
各過渡の温度，ひずみ履歴より値を読み取り，環境疲労評価手法に従って算出している。

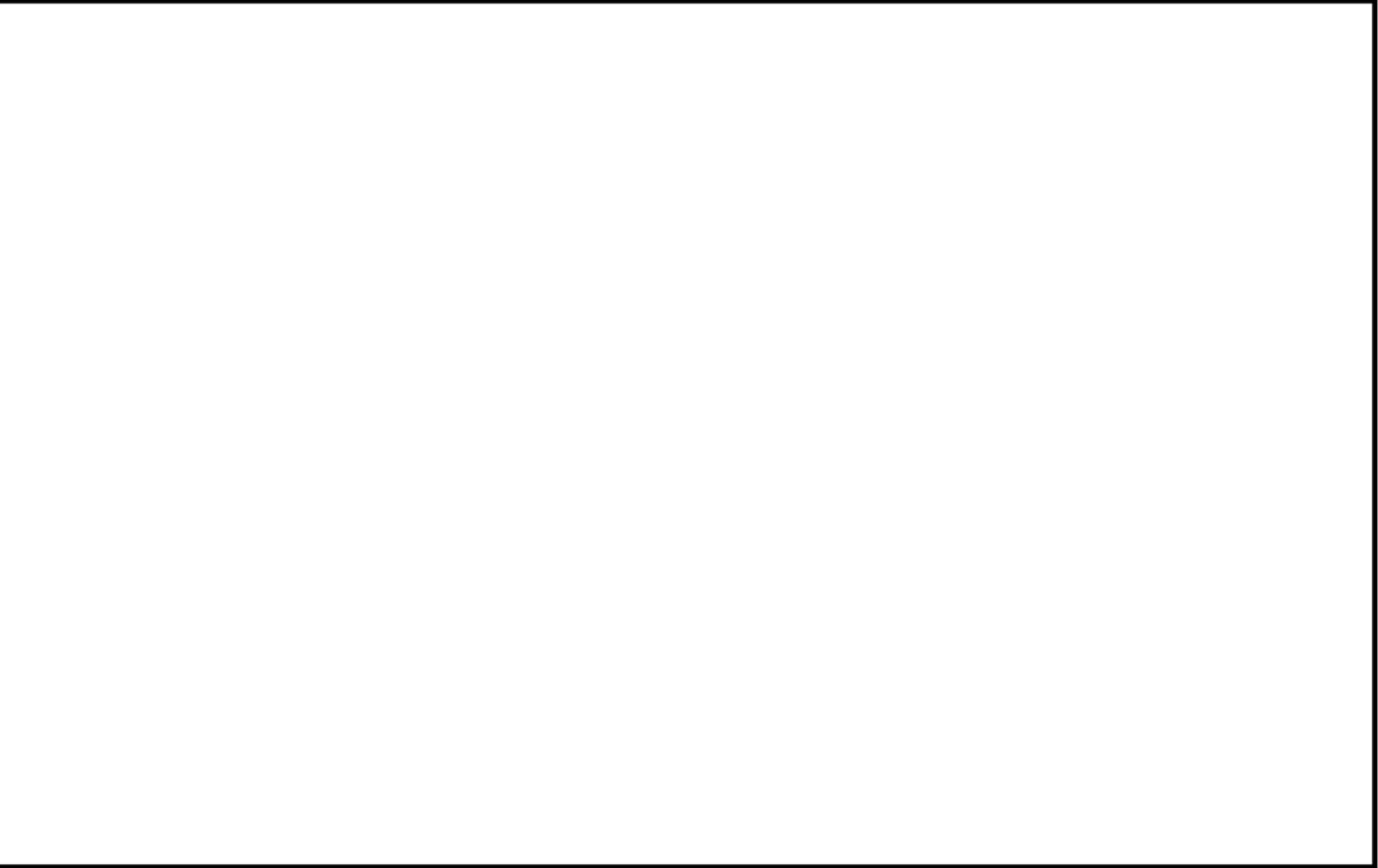


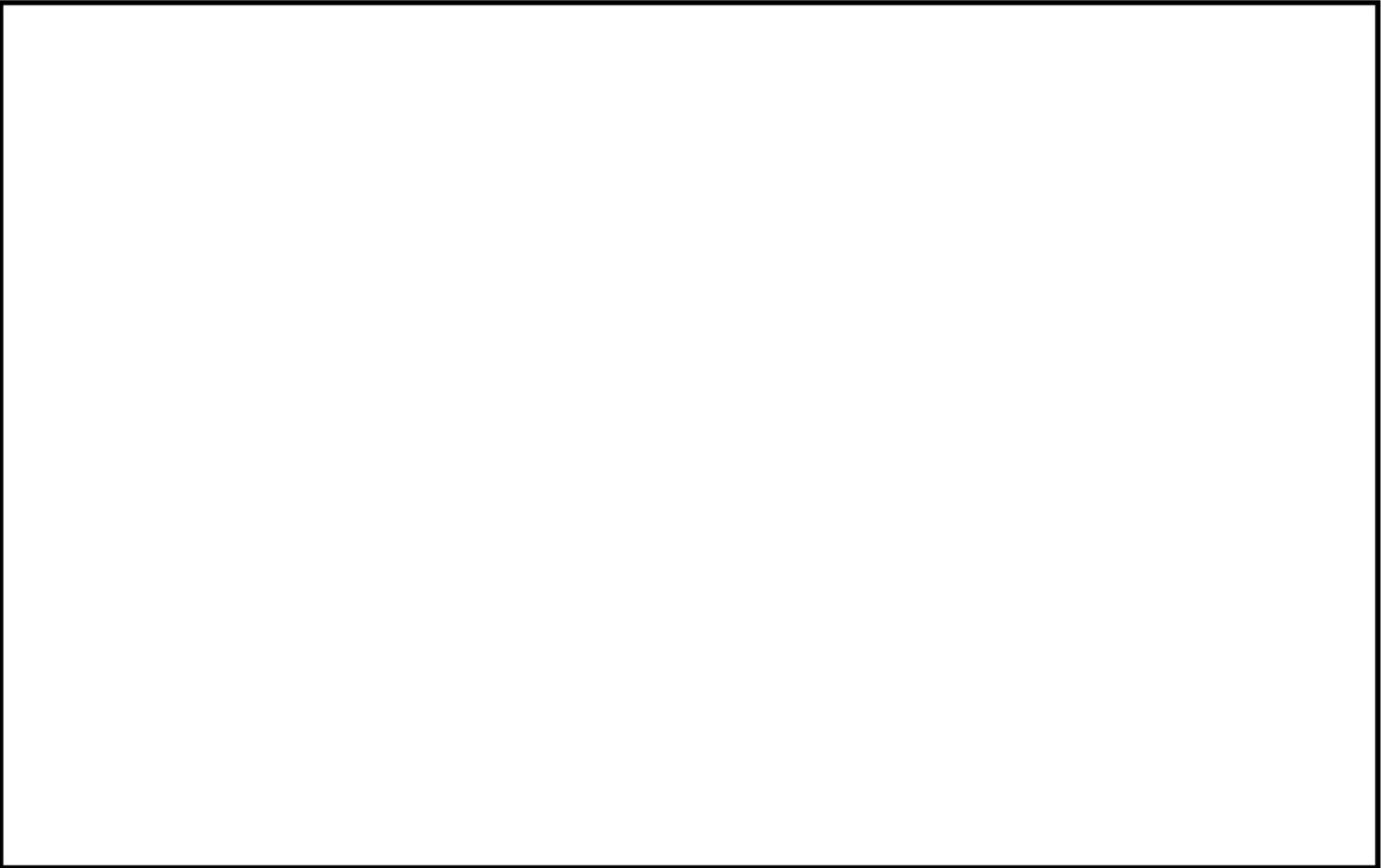


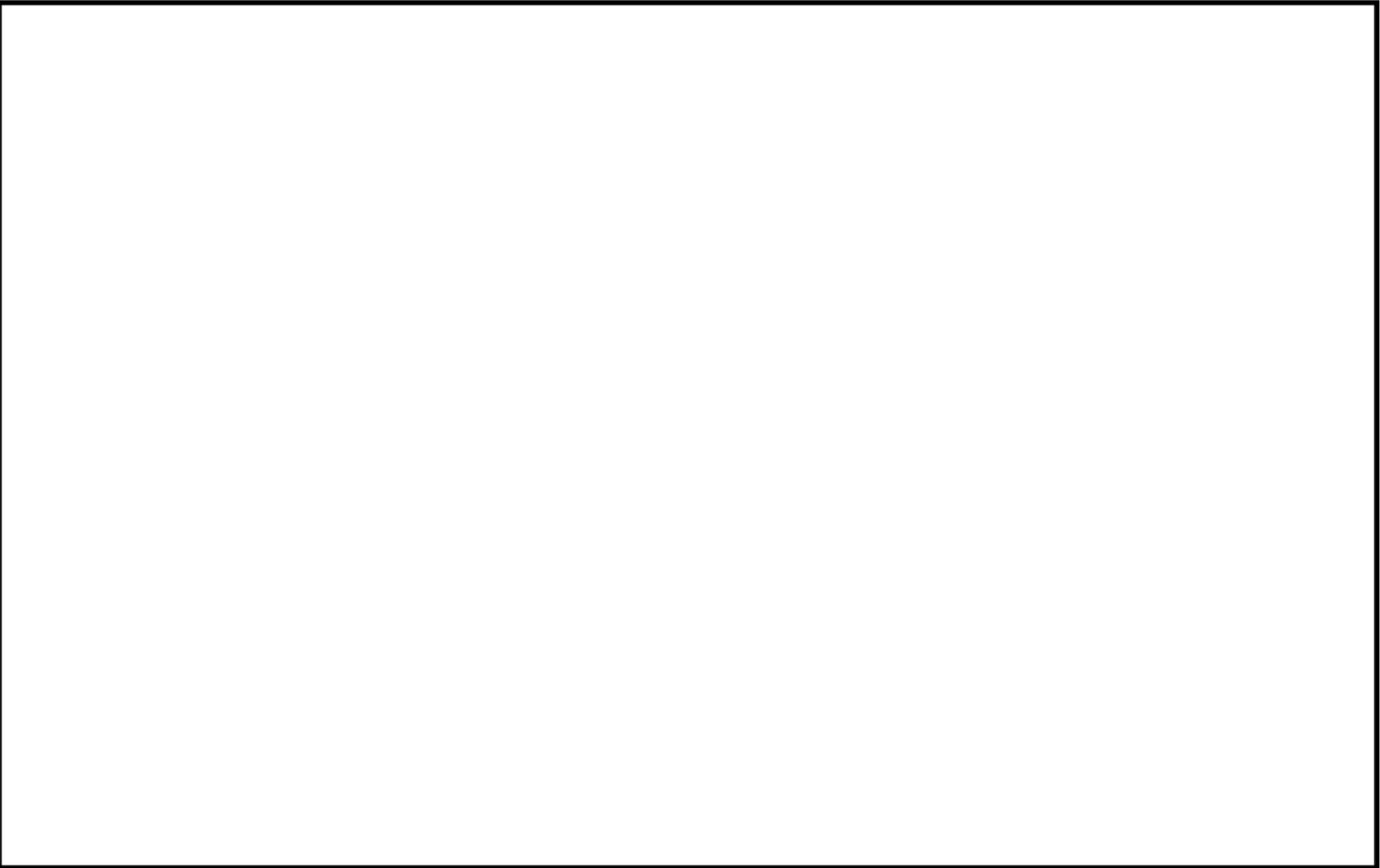


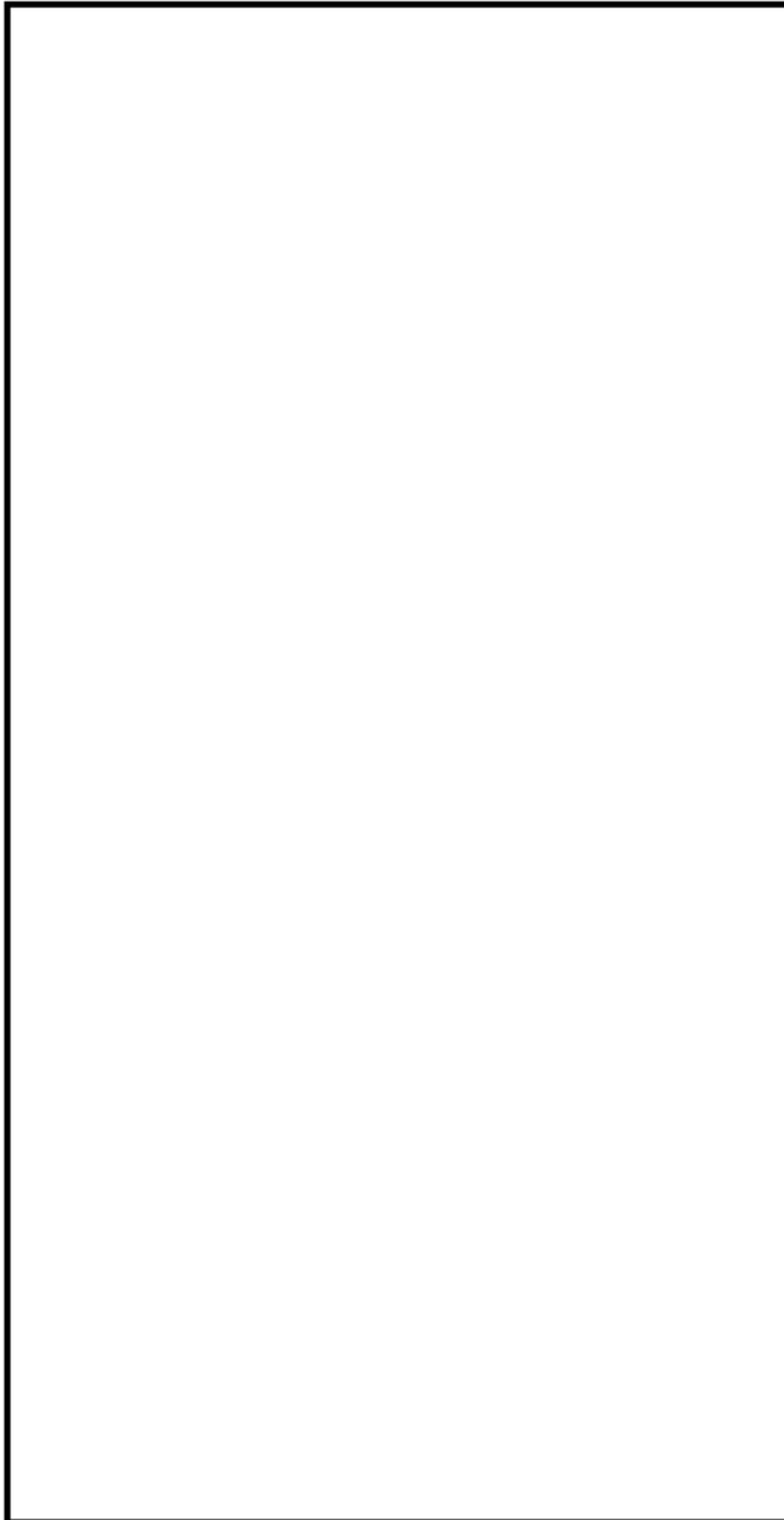












冷却材出口管台（A冷却材出口管台以外）形状寸法，評価点及び解析モデル

冷却材出口管台（A冷却材出口管台以外） 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.00002	0.00001	0.00011
2	0.0	0.0	0.00001
3	0.00001	0.00000	0.00000
4	0.00007	0.0	0.00064
5	0.00517	0.0	0.00351
6	0.00563	0.00000	0.00476
7	0.00292	0.00100	0.00054
8	0.00955	0.00025	0.00551
9L	0.03075	0.04729	0.00072
10L	0.0	0.00233	0.00110
9C	0.00238	0.00169	0.00204
10C	0.0	0.02424	0.01065
11L	0.04427	0.02711	0.0
12L	0.0	0.00364	0.00182
11C	0.00645	0.00079	0.00039
12C	0.0	0.02759	0.01417
13L	0.06830	0.04460	0.01339
14L	0.0	0.00465	0.00343
13C	0.00188	0.00247	0.00776
14C	0.0	0.02909	0.01721

許容値  $U_c=1.0$

0.06830 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

冷却材出口管台（A冷却材出口管台以外） 疲労解析結果（評価点：13L）

評価点 - 13L  
(S12)

応力強さ (単位: MPa)		繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)			
極大値	極小値	Ke	ALT		N	N*	
26.7	-587.8	1.0	307.2	367.6	7	3570	0.00196
26.7	-569.0	1.0	297.8	356.4	5	3940	0.00127
26.7	-549.4	1.0	288.0	344.6	2	4390	0.00046
26.7	-548.6	1.0	287.6	344.2	56	4410	0.01270
21.6	-548.6	1.0	285.1	341.1	7	4540	0.00154
21.6	-544.4	1.0	283.0	338.6	67	4640	0.01444
18.9	-544.4	1.0	281.6	337.0	7	4720	0.00148
18.9	-536.1	1.0	277.5	332.0	9	4950	0.00182
18.9	-528.3	1.0	273.6	327.4	0	5160	0.00000
18.9	-524.6	1.0	271.8	325.2	4	5270	0.00076
18.9	-524.6	1.0	271.7	325.1	43	5270	0.00816
0.0	-524.6	1.0	262.3	313.8	137	5850	0.02342
-68.5	-524.6	1.0	228.0	272.8	2	8860	0.00023
-261.4	-524.6	1.0	131.6	157.5	2	52400	0.00004
-343.7	-524.6	1.0	90.4	108.2	5	253000	0.00002
-353.9	-524.6	1.0	85.3	102.1	2	328000	0.00001
-372.2	-524.6	1.0	76.2	91.2	3	595000	0.00001
-394.8	-524.6	1.0	64.9	77.6	2	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.06830

Ke : 割り増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT : ALT (207000) (材料の使用温度における縦弾性係数) を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

冷却材出口管台（A冷却材出口管台以外） 環境疲労評価結果（評価点：1）

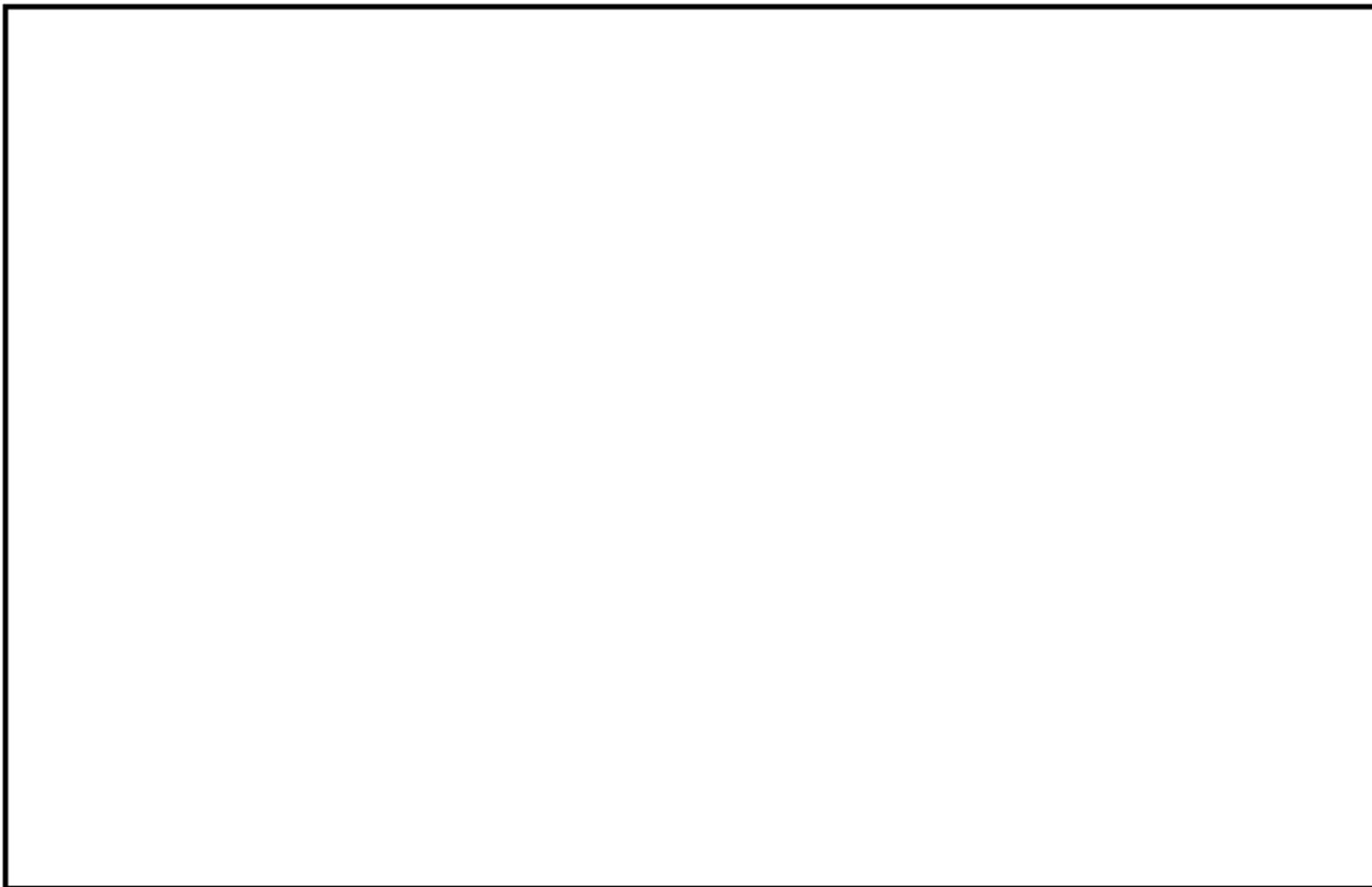
運搬条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実繰返 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
NSS	2D4	0.0	-421.1	1.00	210.5	235.9	2	272000	0.00001	11.501	0.00008
NSS	2F1	0.0	-408.8	1.00	204.3	228.9	3	328000	0.00001	9.787	0.00009
NSS	2D3	0.0	-391.8	1.00	195.8	219.5	2	427000	0.00000	9.942	0.00005
NSS	2E1	0.0	-387.3	1.00	183.7	205.8	2	658000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1L1	0.0	-383.9	1.00	181.9	203.9	2	703000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2C2	0.0	-362.9	1.00	181.4	203.3	2	717000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2G1	0.0	-361.4	1.00	180.7	202.5	2	737000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2D1	0.0	-358.8	1.00	179.3	200.9	3	730000	0.00001	1.000	0.00001
NSS	2H2	0.0	-338.3	1.00	169.2	189.6	2	1070000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2A1	0.0	-311.2	1.00	155.6	174.4	7	1410000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1H1	0.0	-310.1	1.00	155.0	173.7	70	1430000	0.00005	1.000	0.00005
NSS	2H1	0.0	-266.1	1.00	133.1	148.1	5	2490000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1G1	0.0	-264.8	1.00	132.4	148.4	3	2550000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1D1	0.0	-262.2	1.00	131.1	146.9	21	2880000	0.00001	1.000	0.00001
2H1	1D1	-54.9	-262.2	1.00	103.7	116.2	2	8480000	0.00000	1.000	0.00000
1C1	1D1	-170.1	-262.2	1.00	46.1	51.6	871	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00031

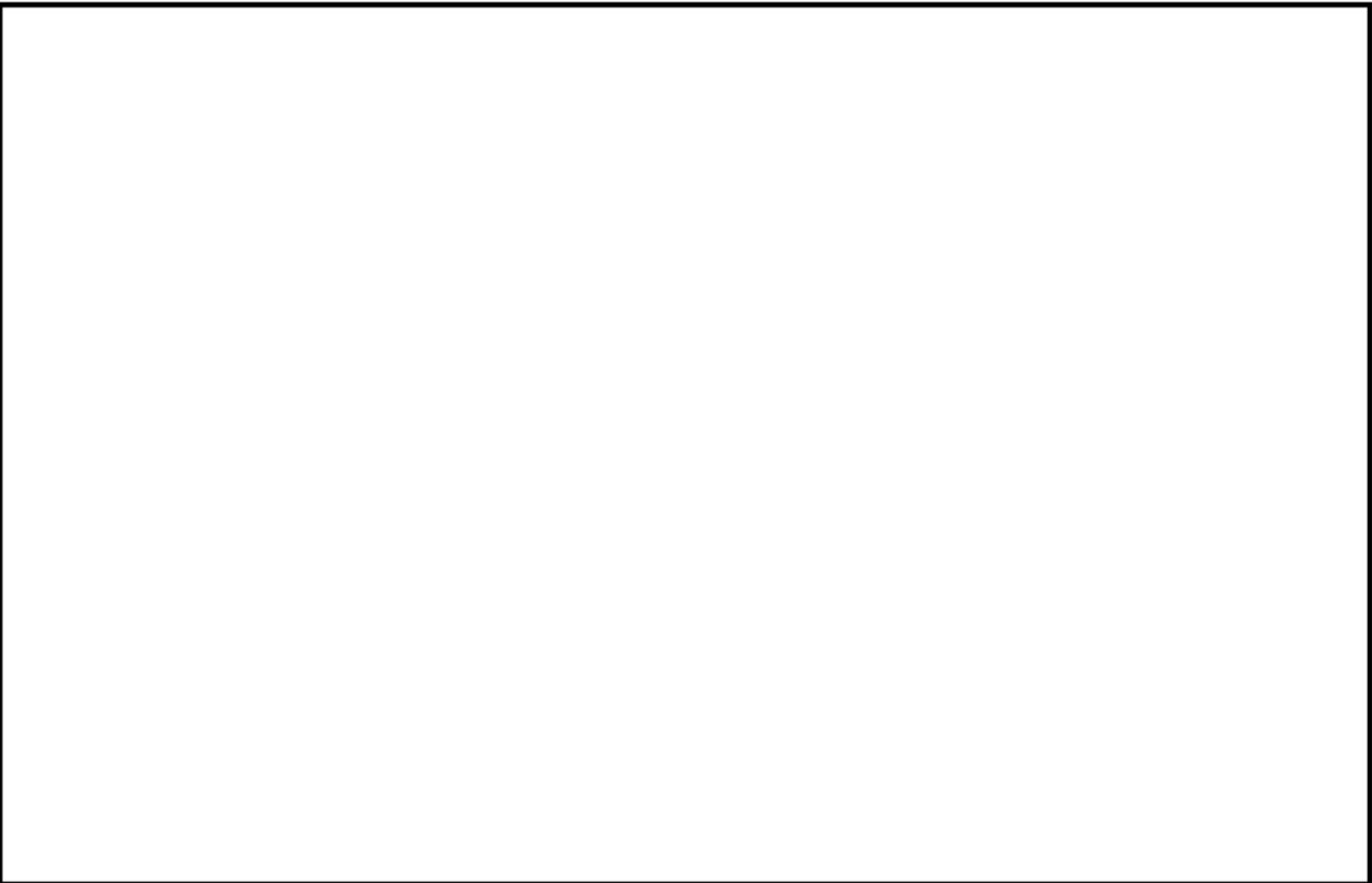
(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

     : 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

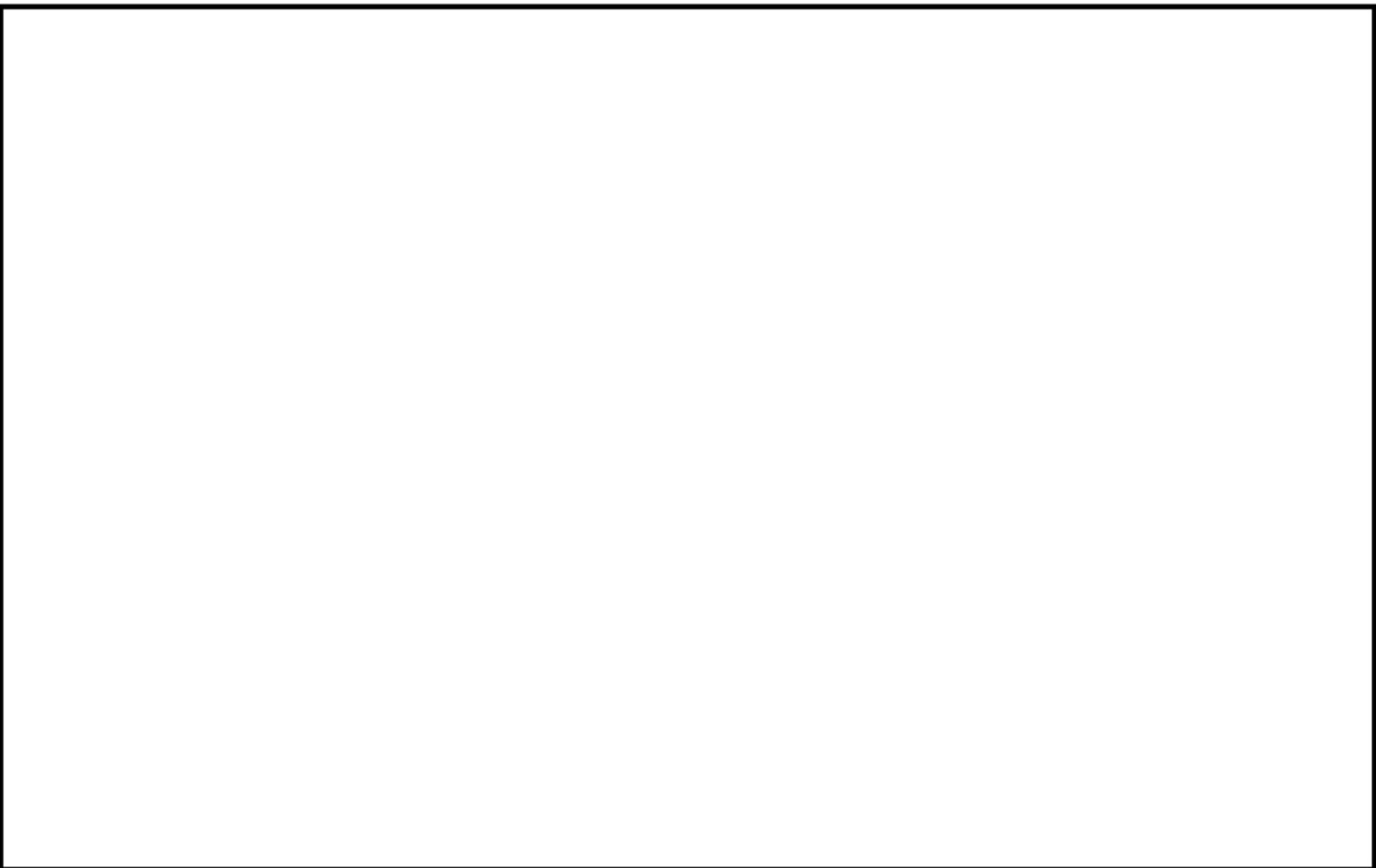
環境効果補正係数（Fen）の算出根拠

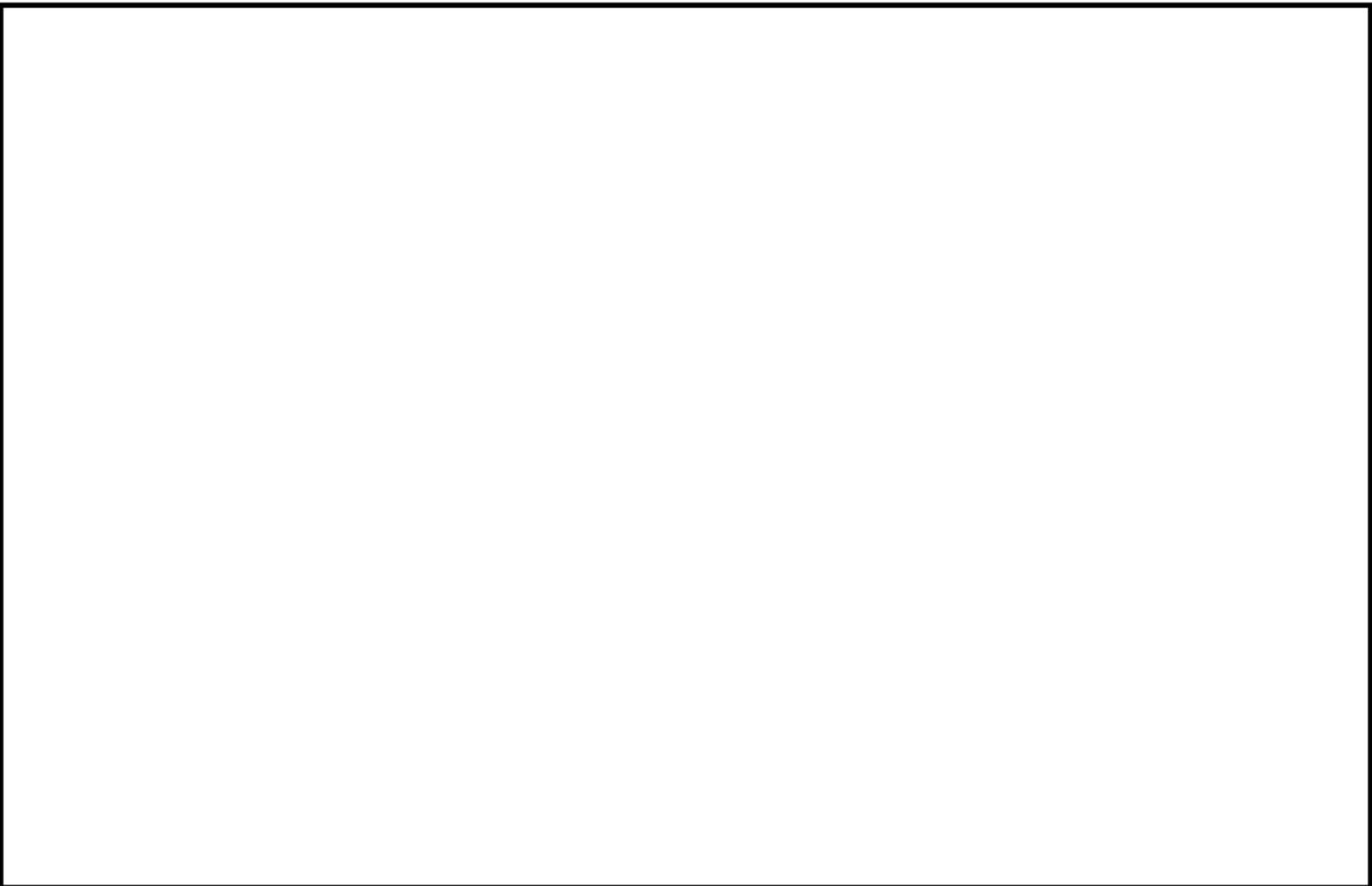
各過渡の温度，ひずみ履歴より値を読み取り，環境疲労評価手法に従って算出している。

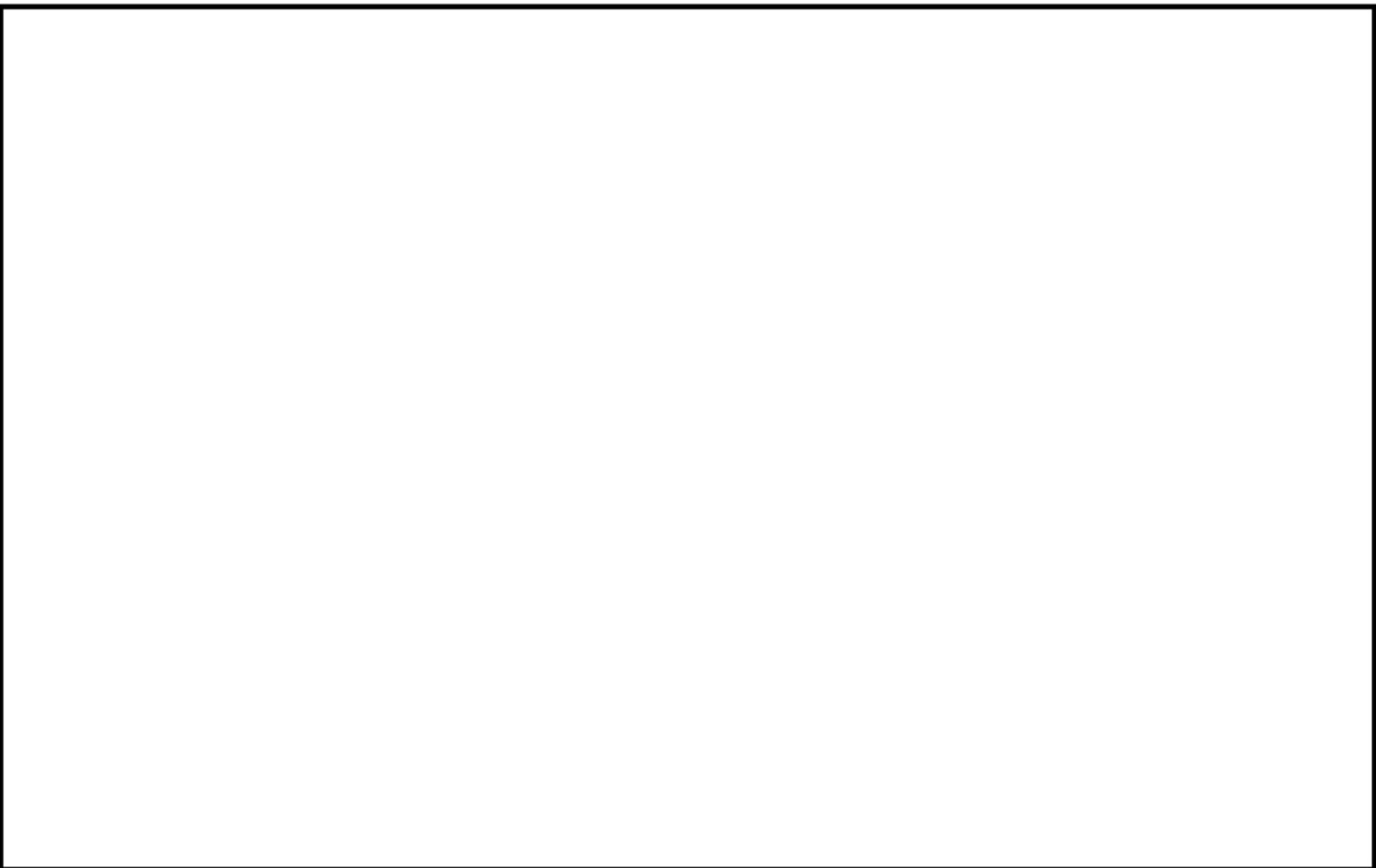


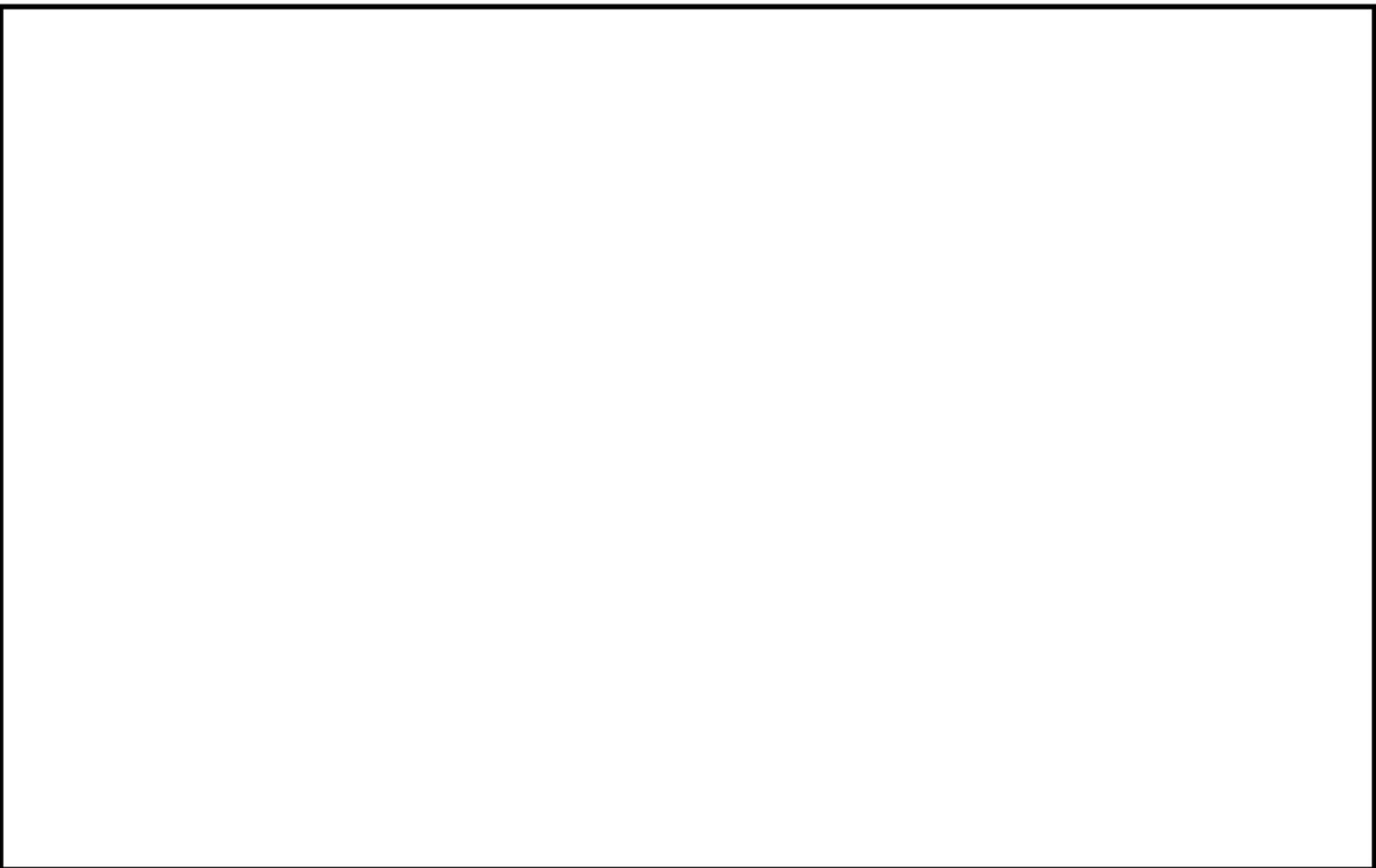


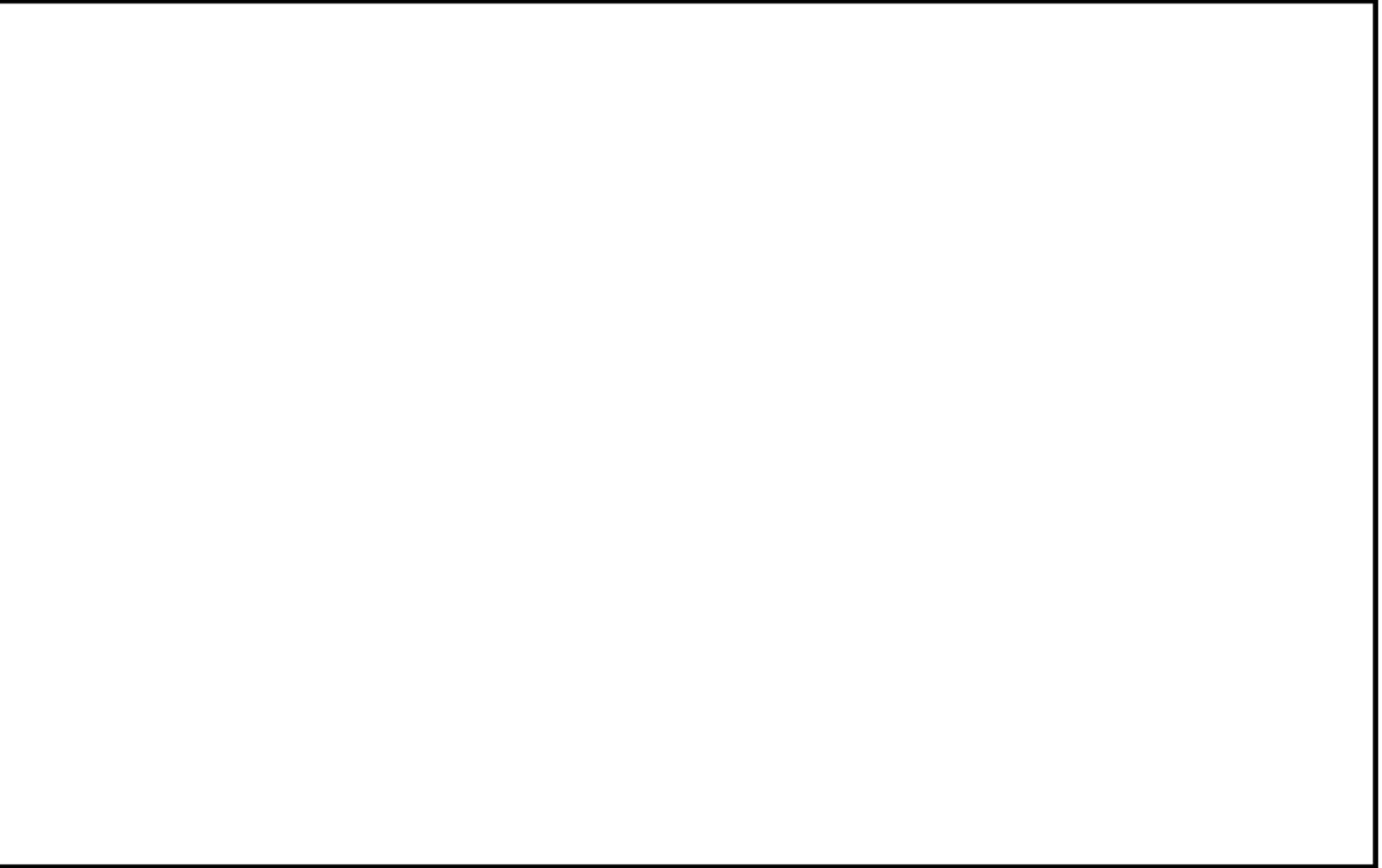


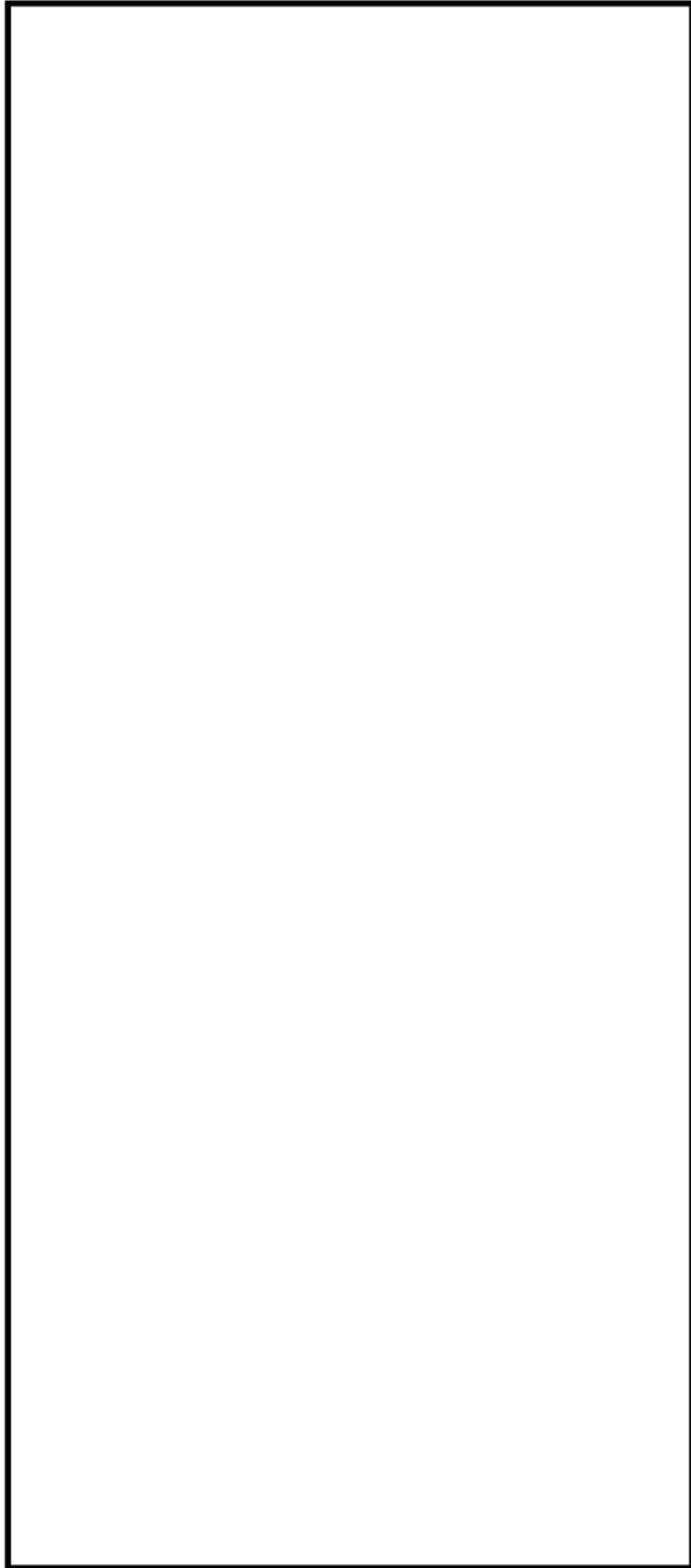












蓋管台形状寸法，評価点及び解析モデル

### 蓋管台 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.0	0.0
2	0.0	0.0	0.0
3	0.0	0.0	0.0
4	0.0	0.0	0.0
5	0.00029	0.00004	0.0
6	0.09248	0.00000	0.11483

許容値  $U_r = 1.0$

0.11483 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

### 蓋管台 疲労解析結果 (評価点 : 6)

評価点 - 6  
(S31)

応力強さ		(単位 : MPa)			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
1275.5	-393.5	1.0	834.5	861.0	2	856	0.00234
1221.8	-393.5	1.0	807.6	833.3	2	950	0.00211
1145.4	-393.5	1.0	769.4	793.8	2	1110	0.00180
1087.0	-393.5	1.0	740.2	763.7	48	1270	0.03780
1087.0	-361.2	1.0	724.1	747.1	47	1370	0.03431
1087.0	0.0	1.0	543.5	560.8	101	3870	0.02610
1087.0	480.8	1.0	303.1	312.7	542	55700	0.00973
1080.5	480.8	1.0	299.9	309.4	2	59000	0.00003
1053.8	480.8	1.0	286.5	295.6	6	75700	0.00008
1052.5	480.8	1.0	285.9	294.9	7	76700	0.00009
1051.5	480.8	1.0	285.4	294.4	0	77400	0.00000
1024.5	480.8	1.0	271.9	280.5	3	100000	0.00003
978.9	480.8	1.0	249.1	257.0	47	164000	0.00029
975.3	480.8	1.0	247.3	255.1	3	171000	0.00002
956.5	480.8	1.0	237.9	245.4	2	213000	0.00001
948.4	480.8	1.0	233.8	241.2	4	237000	0.00002
916.4	480.8	1.0	217.8	224.7	2	368000	0.00001
854.3	480.8	1.0	186.7	192.7	2	1020000	0.00000
844.4	480.8	1.0	181.8	187.6	53	1110000	0.00005
835.0	480.8	1.0	177.1	182.8	2	1210000	0.00000
821.7	480.8	1.0	170.5	175.9	0	1370000	0.00000
805.4	480.8	1.0	162.3	167.5	2	1610000	0.00000
798.9	480.8	1.0	159.0	164.1	2	1730000	0.00000
792.7	480.8	1.0	156.0	160.9	0	1840000	0.00000
792.4	480.8	1.0	155.8	160.8	54	1850000	0.00003
792.4	480.8	1.0	155.8	160.8	5	1850000	0.00000
792.4	488.2	1.0	152.1	156.9	2	2000000	0.00000
792.4	540.8	1.0	125.8	129.8	2	4550000	0.00000
792.4	636.9	1.0	77.8	80.2	3	-----	0.0

疲労累積係数 = 0.11483

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(195000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割増し係数 Ke を示す

蓋管台 環境疲労評価結果 (評価点 : 5)

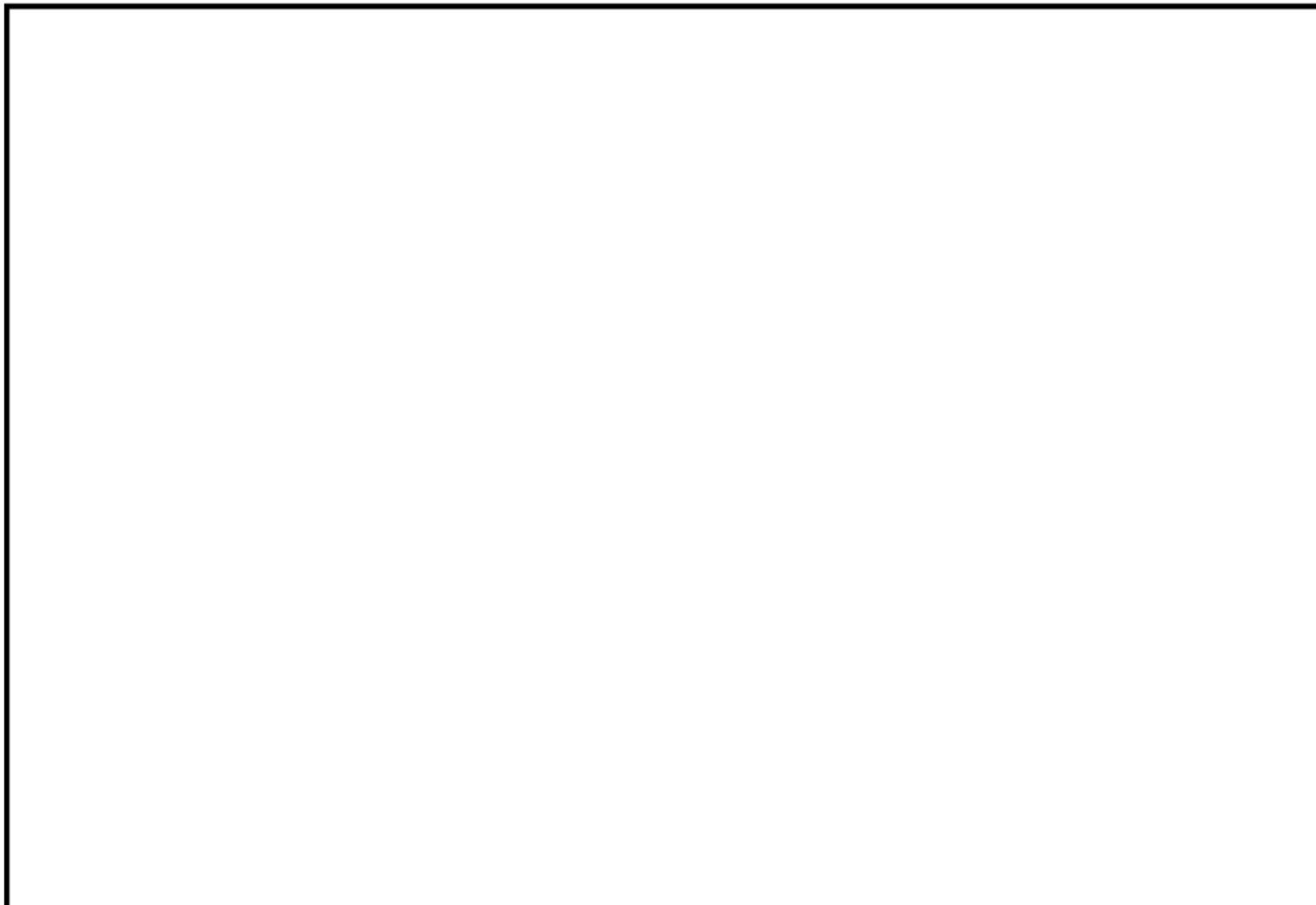
過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 Ke	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
1A1	1L1	96.8	-375.1	1.09	257.5	285.7	2	136000	0.00001	3.188	0.00005
1A1	1D1	96.8	-328.5	1.00	211.7	218.4	52	440000	0.00012	3.200	0.00038
2J1	1D1	89.7	-328.5	1.00	208.1	214.7	47	489000	0.00010	2.607	0.00025
NSS	1D1	0.0	-328.5	1.00	183.8	188.5	101	1580000	0.00008	1.000	0.00008
2E1	1D1	-150.2	-328.5	1.00	86.2	91.0	2	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.00074

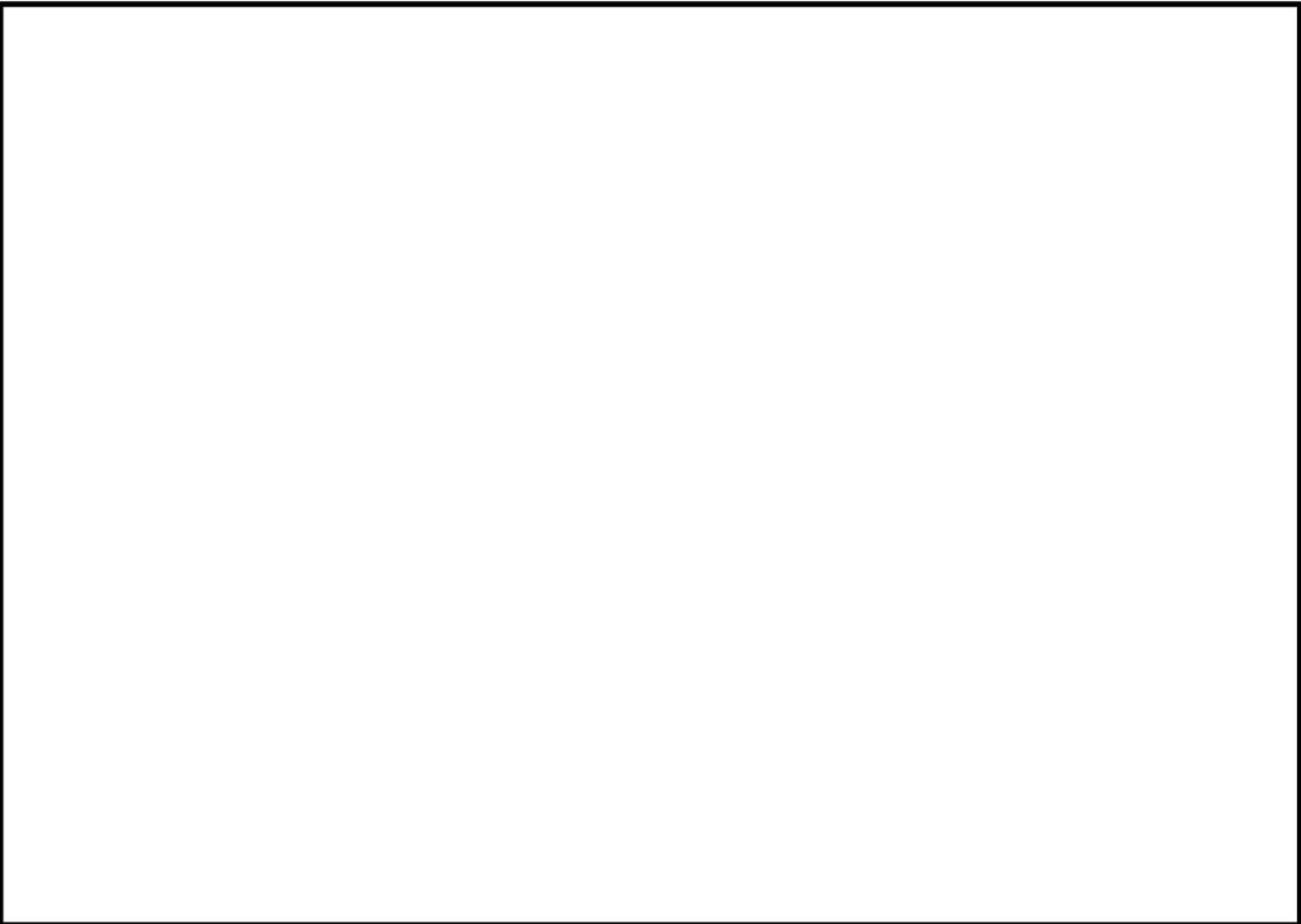
(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

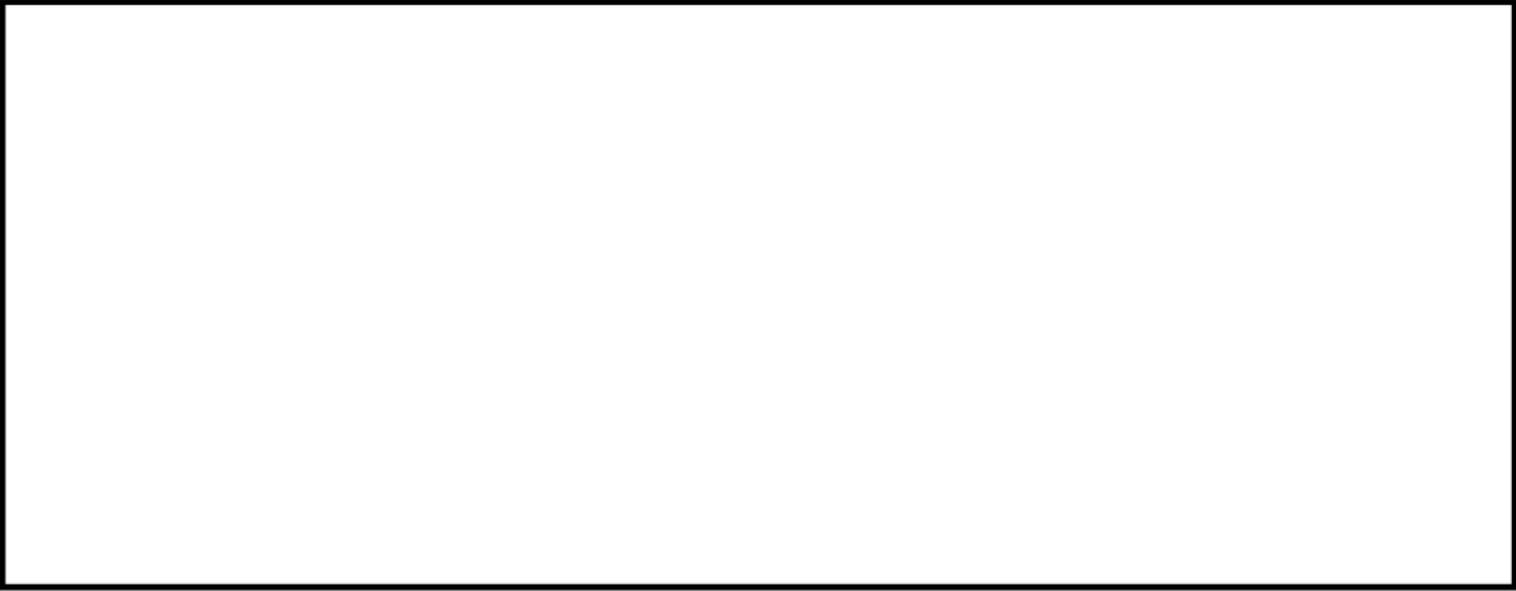
     : 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

環境効果補正係数 (Fen) の算出根拠

各過渡の温度，ひずみ履歴より値を読み取り，環境疲労評価手法に従って算出している。









空気抜管台形状寸法，評価点及び解析モデル

空気抜管台 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.0	0.0
2	0.0	0.0	0.0
3	0.00032	0.00004	0.0
4	0.01666	0.00000	0.01540

許容値  $U_f = 1.0$

     : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

空気抜管台 疲労解析結果 (評価点 : 4)

評価点 - 4  
(S12)

応力強さ (単位: MPa)		Ke	(単位: MPa)		繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値		ALT	ALT*	N	N*	
169.8	-857.1	1.0	513.5	529.8	2	4790	0.00042
169.8	-826.9	1.0	498.4	514.2	2	5390	0.00037
169.8	-800.0	1.0	484.9	500.3	3	6020	0.00050
169.8	-790.2	1.0	480.0	495.2	2	6270	0.00032
169.8	-767.5	1.0	468.7	483.5	2	6900	0.00029
169.8	-766.6	1.0	468.2	483.1	7	6930	0.00101
169.8	-759.9	1.0	464.9	479.6	2	7130	0.00028
169.8	-723.7	1.0	446.8	461.0	0	8360	0.00000
169.8	-710.4	1.0	440.1	454.1	34	8880	0.00383
154.5	-710.4	1.0	432.4	446.2	47	9540	0.00493
0.0	-710.4	1.0	355.2	366.5	101	24900	0.00406
-328.1	-710.4	1.0	191.2	197.2	556	889000	0.00063
-328.1	-707.9	1.0	189.9	196.0	2	931000	0.00000
-328.1	-705.8	1.0	188.8	194.8	6	969000	0.00001
-328.1	-687.2	1.0	179.5	185.2	2	1160000	0.00000
-328.1	-621.8	1.0	146.8	151.5	3	2330000	0.00000
-328.1	-615.5	1.0	143.7	148.2	47	2560000	0.00002
-328.1	-604.7	1.0	138.3	142.7	4	3020000	0.00000
-328.1	-558.8	1.0	115.4	119.0	53	7340000	0.00001
-328.1	-552.4	1.0	112.1	115.7	2	8690000	0.00000
-328.1	-537.9	1.0	104.9	108.2	0	15000000	0.00000
-328.1	-529.1	1.0	100.5	103.7	2	24300000	0.00000
-328.1	-523.1	1.0	97.5	100.6	0	39000000	0.00000
-328.1	-522.9	1.0	97.4	100.5	54	39700000	0.00000
-328.1	-522.9	1.0	97.4	100.5	7	39700000	0.00000
-328.3	-522.9	1.0	97.3	100.4	2	40100000	0.00000
-381.7	-522.9	1.0	70.6	72.8	2		0.0
疲労累積係数 =							0.01666

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT\* : ALTに(195000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

     : 割り増し係数 Ke を示す

空気抜管台 環境疲労評価結果（評価点：3）

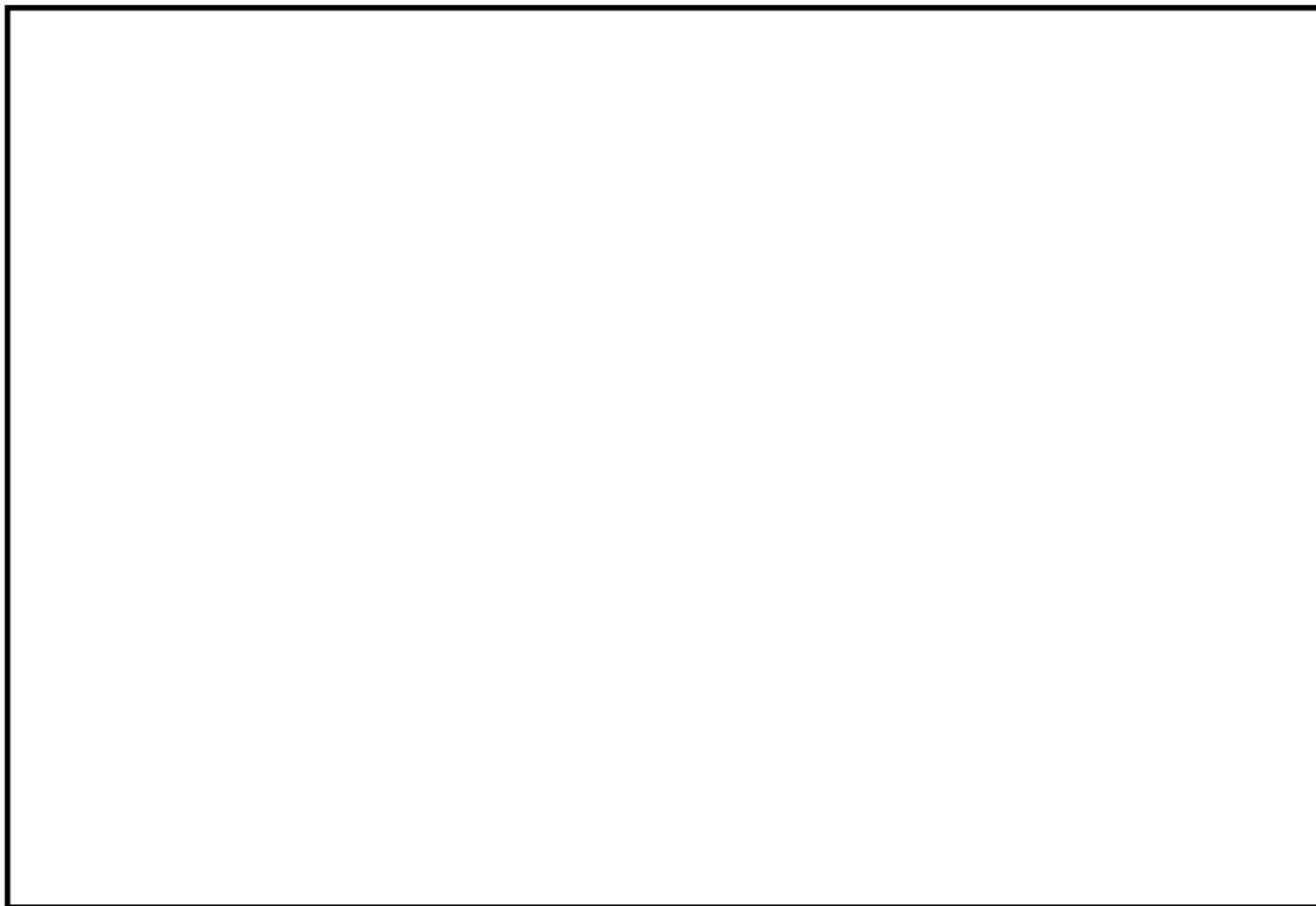
過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		修正前 salt	修正後 salt'					
1A1	1L1	111.3	-388.2	1.00	249.7	257.6	2	161000	0.00001	3.151	0.00004
1A1	2F1	111.3	-380.9	1.00	236.1	243.6	3	223000	0.00001	3.134	0.00004
1A1	2D2	111.3	-355.8	1.00	233.4	240.8	2	240000	0.00001	3.149	0.00003
1A1	2D1	111.3	-343.1	1.00	227.2	234.4	7	283000	0.00002	3.189	0.00008
1A1	2C2	111.3	-342.8	1.00	227.1	234.3	2	284000	0.00001	3.152	0.00002
1A1	2E1	111.3	-332.4	1.00	221.9	228.9	2	329000	0.00001	3.159	0.00002
1A1	2I1	111.3	-320.5	1.00	215.9	222.7	0	389000	0.00000	3.132	0.00000
1A1	2H2	111.3	-318.0	1.00	213.6	220.4	2	416000	0.00000	3.181	0.00002
1A1	1D1	111.3	-311.7	1.00	211.5	218.2	34	442000	0.00008	3.314	0.00025
2J1	1D1	102.4	-311.7	1.00	207.1	213.6	47	506000	0.00009	1.000	0.00009
NSS	1D1	0.0	-311.7	1.00	155.9	160.8	101	1840000	0.00005	1.000	0.00005
2H1	1D1	-108.8	-311.7	1.00	101.5	104.7	2	20900000	0.00000	1.000	0.00000
1C1	1D1	-112.8	-311.7	1.00	99.5	102.6	554	28500000	0.00002	1.000	0.00002
1C1	1G1	-112.8	-310.2	1.00	98.7	101.9	6	32000000	0.00000	1.000	0.00000
1C1	2A1	-112.8	-272.2	1.00	79.7	82.2	3	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00088

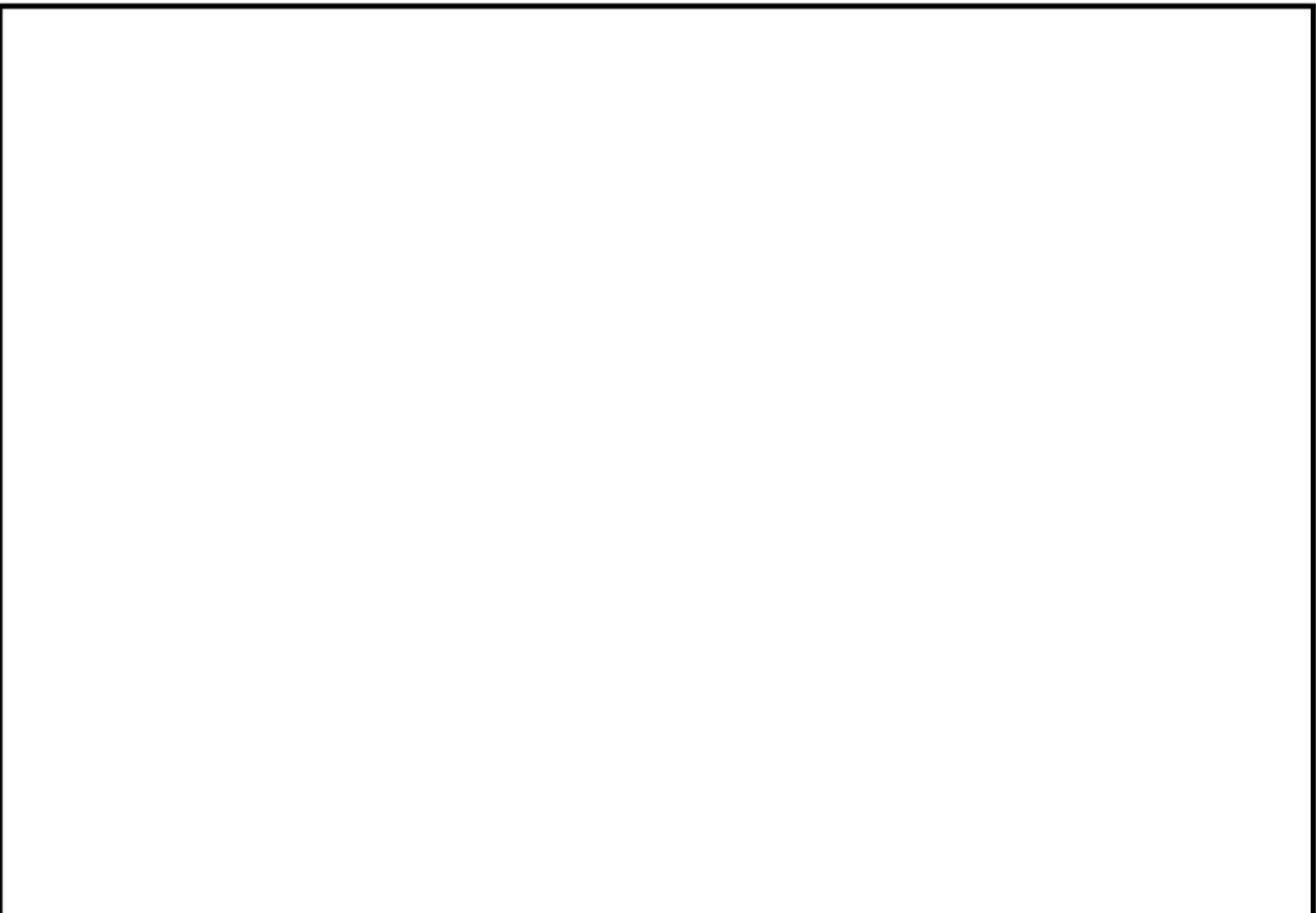
(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

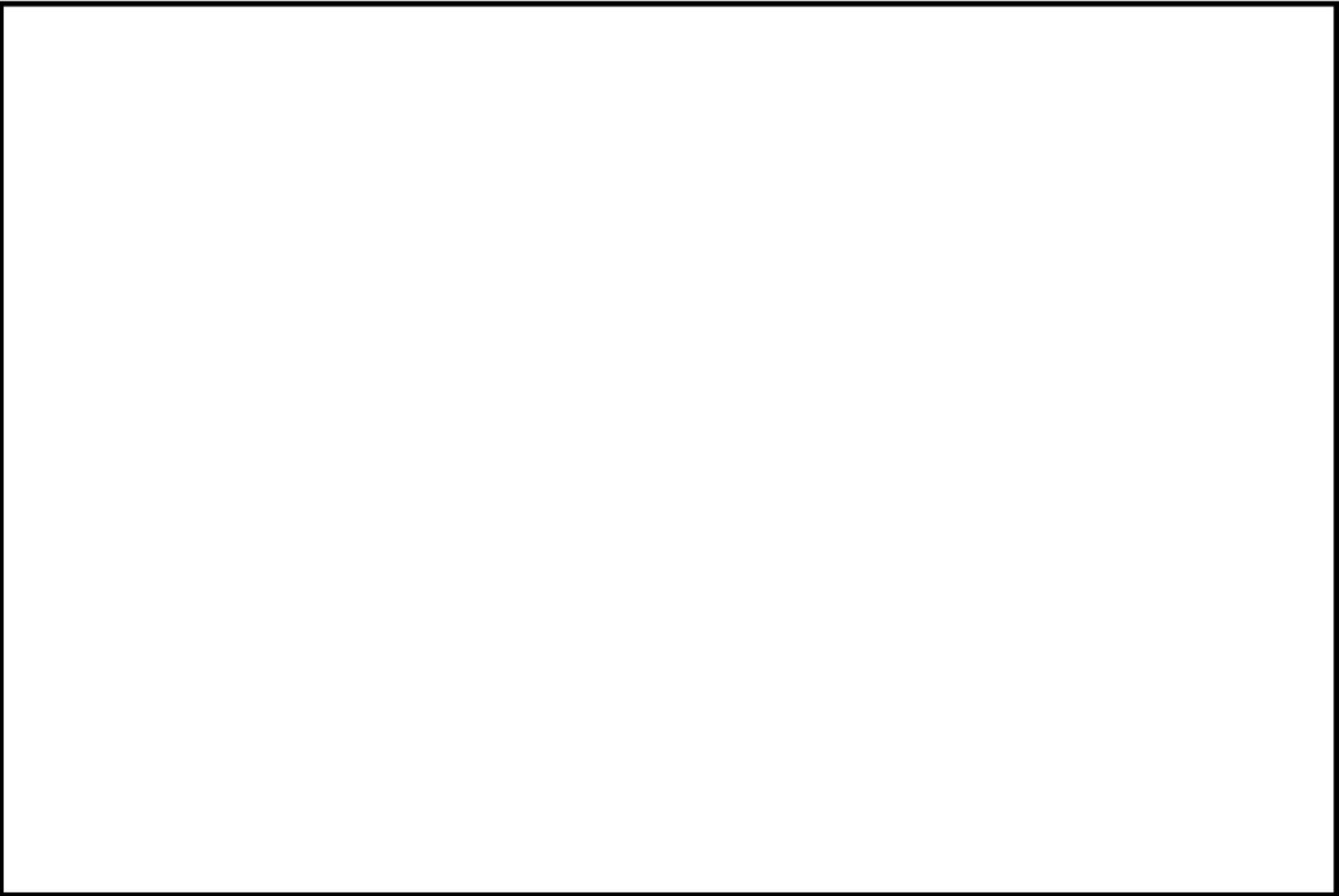
     : 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

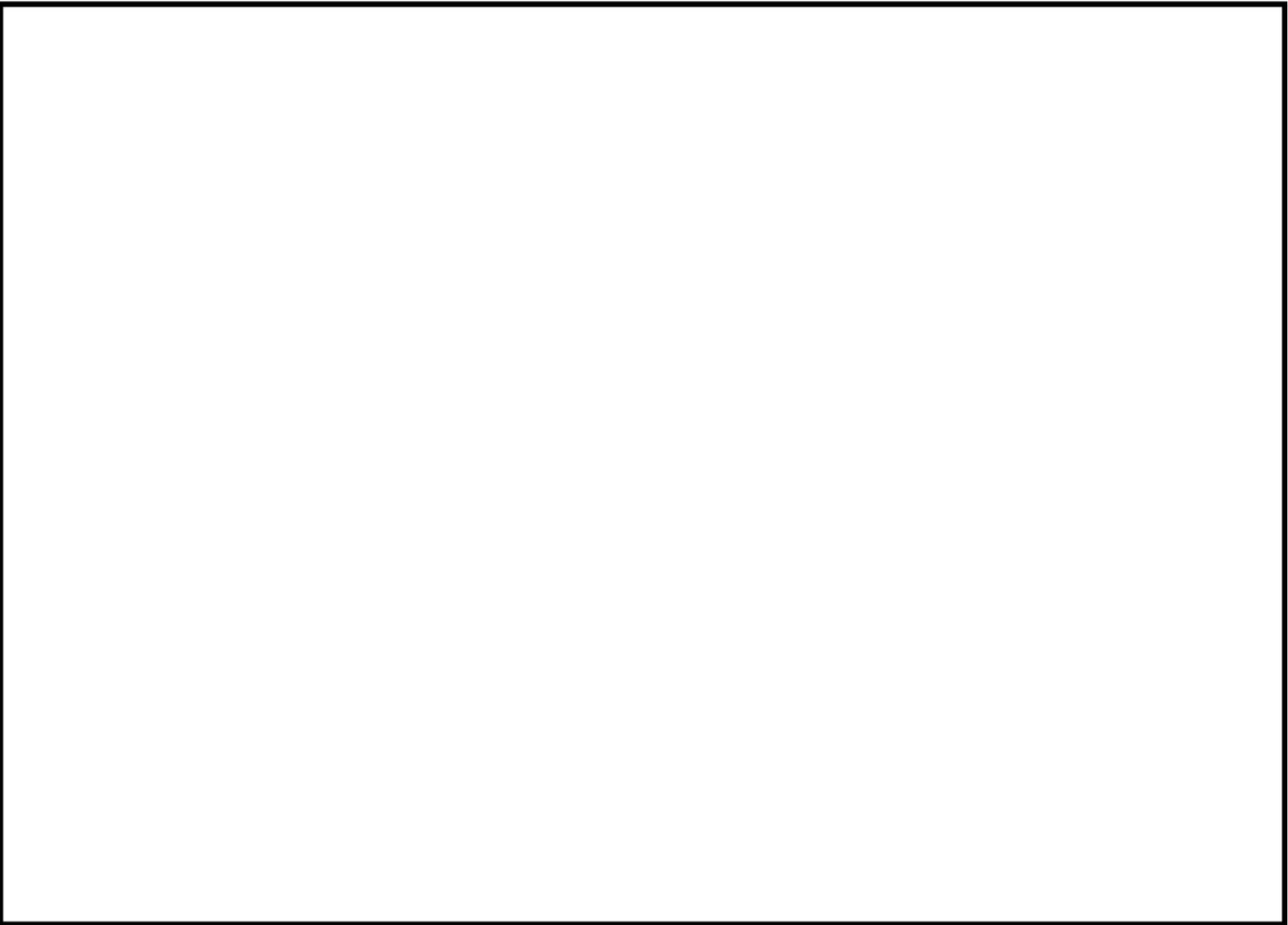
環境効果補正係数 (Fen) の算出根拠

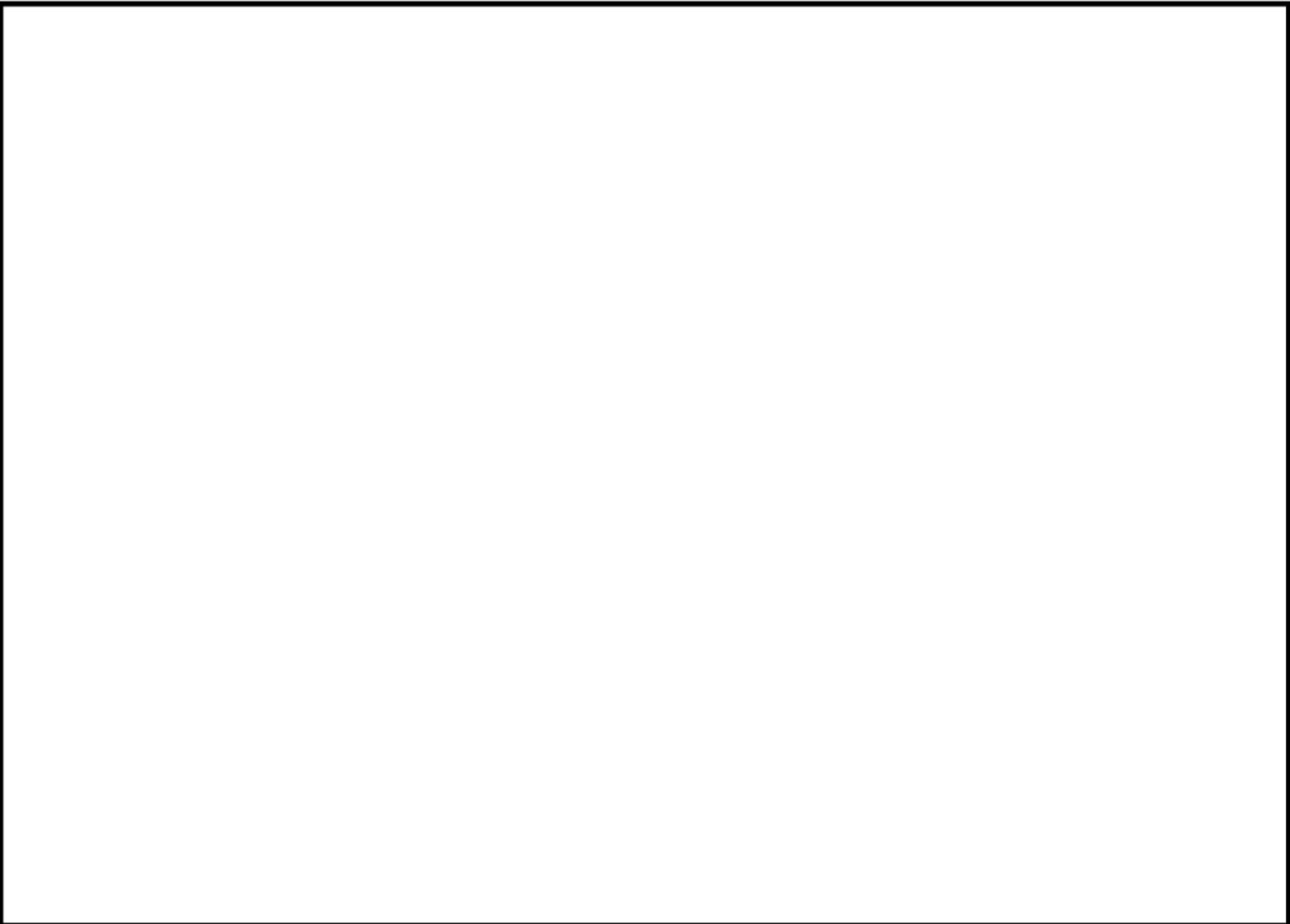
各過渡の温度、ひずみ履歴より値を読み取り、環境疲労評価手法に従って算出している。

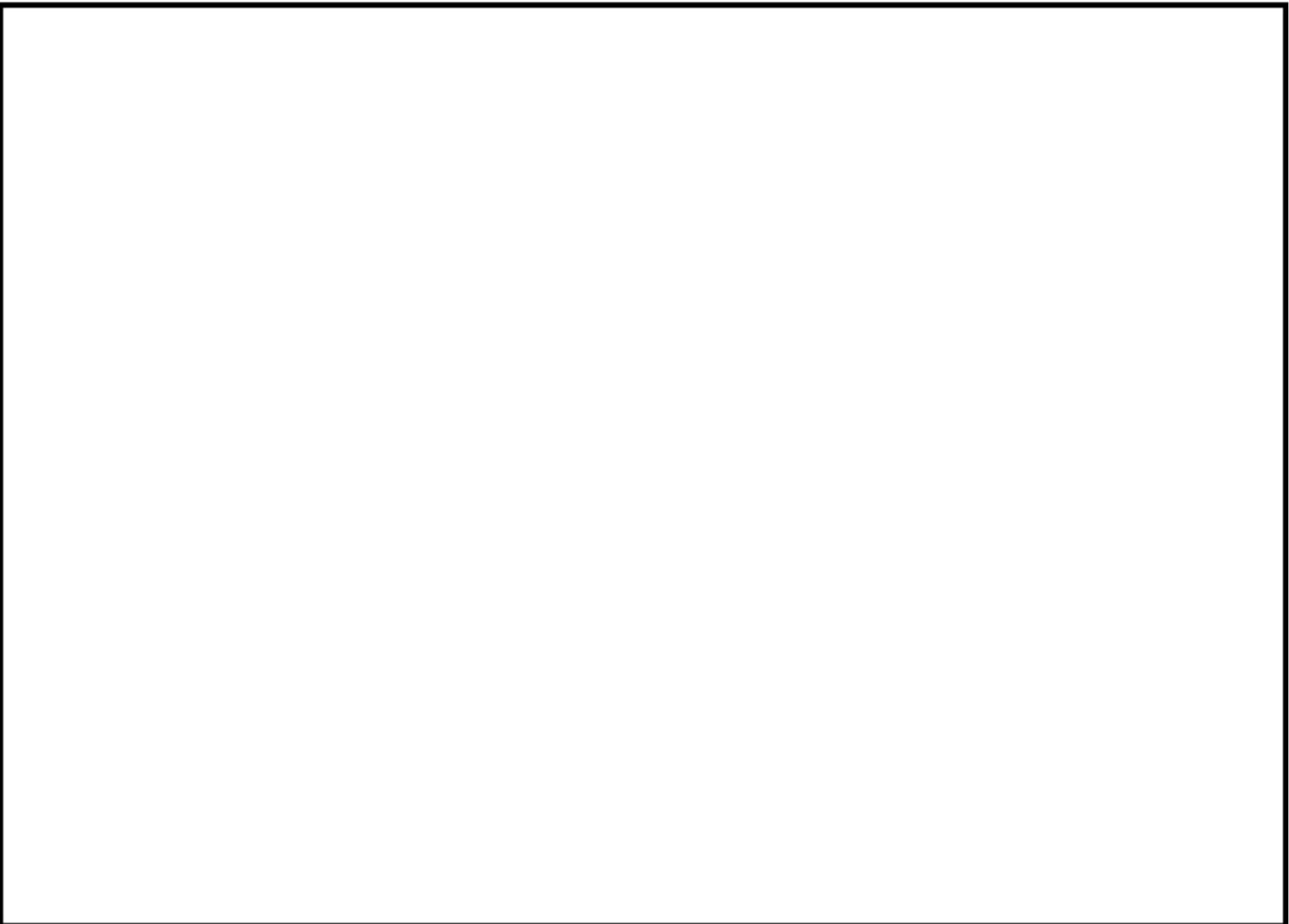


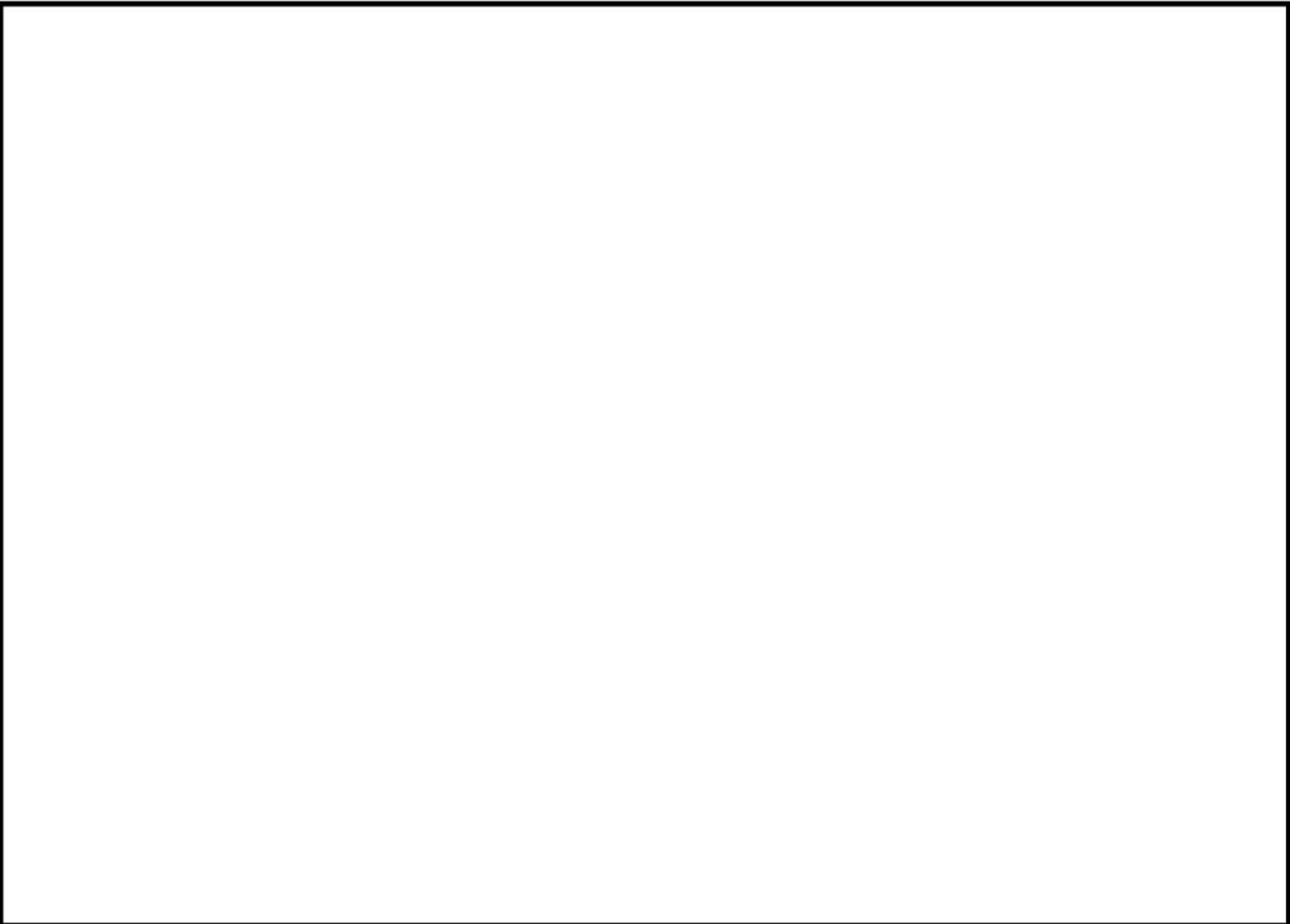




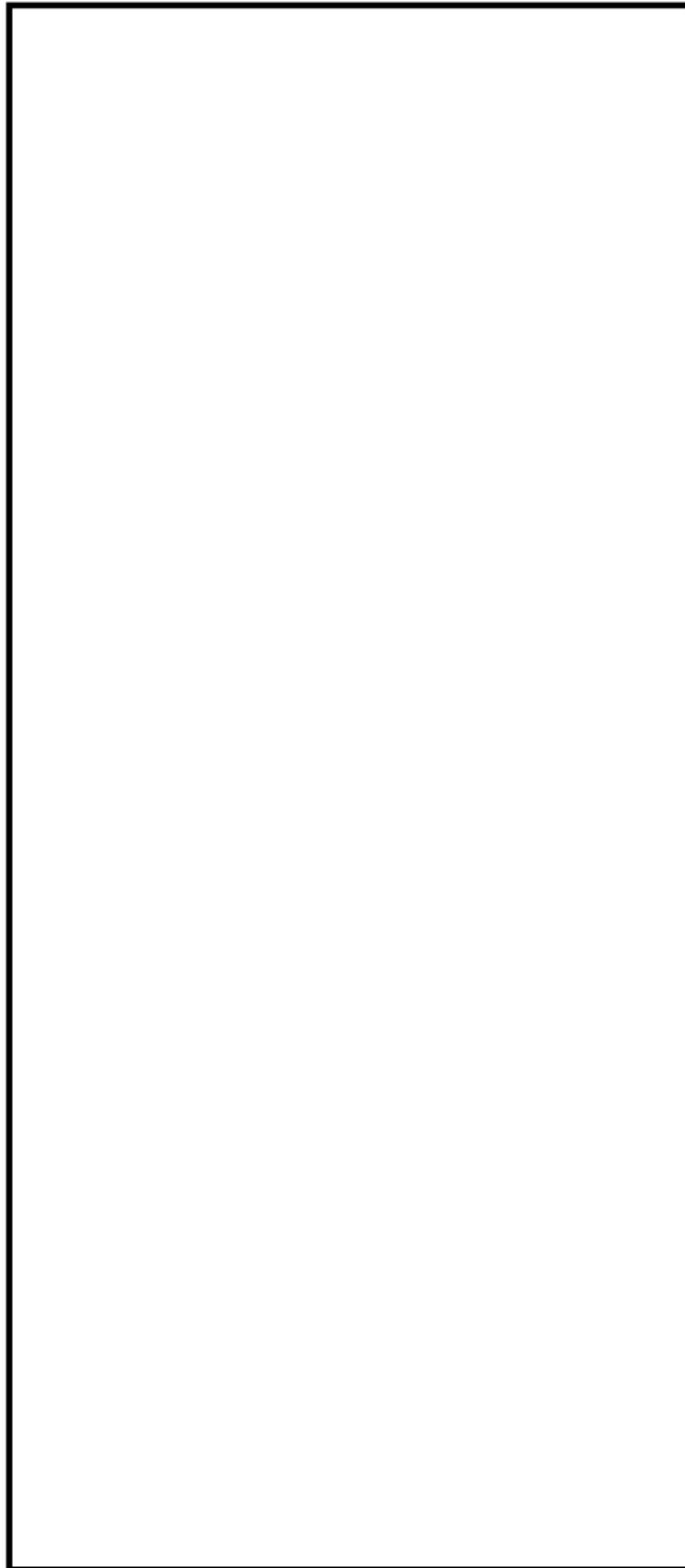












炉内計装筒形状寸法，評価点及び解析モデル

炉内計装筒 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.0	0.0
2	0.0	0.0	0.00000
3	0.0	0.0	0.0
4	0.0	0.0	0.0
5	0.0	0.0	0.00000
6	0.00000	0.0	0.00000
7	0.00000	0.0	0.0
8	0.00000	0.0	0.00000
9	0.00175	0.00023	0.00000
10	0.04328	0.00187	0.23450

許容値  $U_r=1.0$

10 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

炉内計装筒 疲労解析結果 (評価点 : 10)

評価点 - 10  
(S31)

応力強さ (単位 : MPa)		Ke	(単位 : MPa)		繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値		ALT	ALT'	N	N*	
1871.1	-241.0	1.0	1056.1	1040.1	2	471	0.00425
1611.7	-241.0	1.0	926.4	912.3	2	712	0.00281
1398.3	-241.0	1.0	819.7	807.3	5	1050	0.00476
1320.5	-241.0	1.0	780.8	768.9	7	1240	0.00565
1320.1	-241.0	1.0	780.6	768.8	2	1240	0.00161
1305.5	-241.0	1.0	773.3	761.6	45	1280	0.03516
1305.5	-208.4	1.0	756.9	745.5	18	1380	0.01304
1286.6	-208.4	1.0	747.5	736.1	5	1440	0.00347
1248.9	-208.4	1.0	728.6	717.6	51	1570	0.03248
1248.9	-164.1	1.0	706.5	695.8	74	1740	0.04253
1248.9	-148.2	1.0	698.5	688.0	70	1810	0.03867
1248.9	0.0	1.0	624.5	615.0	137	2740	0.05000
1248.9	635.1	1.0	306.9	302.3	2	67100	0.00003
1248.9	756.7	1.0	246.1	242.4	7	230000	0.00003
1248.9	929.2	1.0	159.8	157.4	3	1980000	0.00000
1248.9	946.2	1.0	151.4	149.1	2	2500000	0.00000
1248.9	959.3	1.0	144.8	142.6	2	3020000	0.00000
1248.9	962.8	1.0	143.0	140.9	2	3190000	0.00000
1248.9	981.7	1.0	133.6	131.6	8	4290000	0.00000
1248.9	997.5	1.0	125.7	123.8	2	5810000	0.00000
1248.9	1010.8	1.0	119.1	117.3	2	8020000	0.00000
1248.9	1022.7	1.0	113.1	111.4	5	11400000	0.00000
1248.9	1025.1	1.0	111.9	110.2	9	12600000	0.00000
1248.9	1092.7	1.0	78.1	76.9	527	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.23450

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(1/95000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

炉内計装筒 環境疲労評価結果（評価点：9）

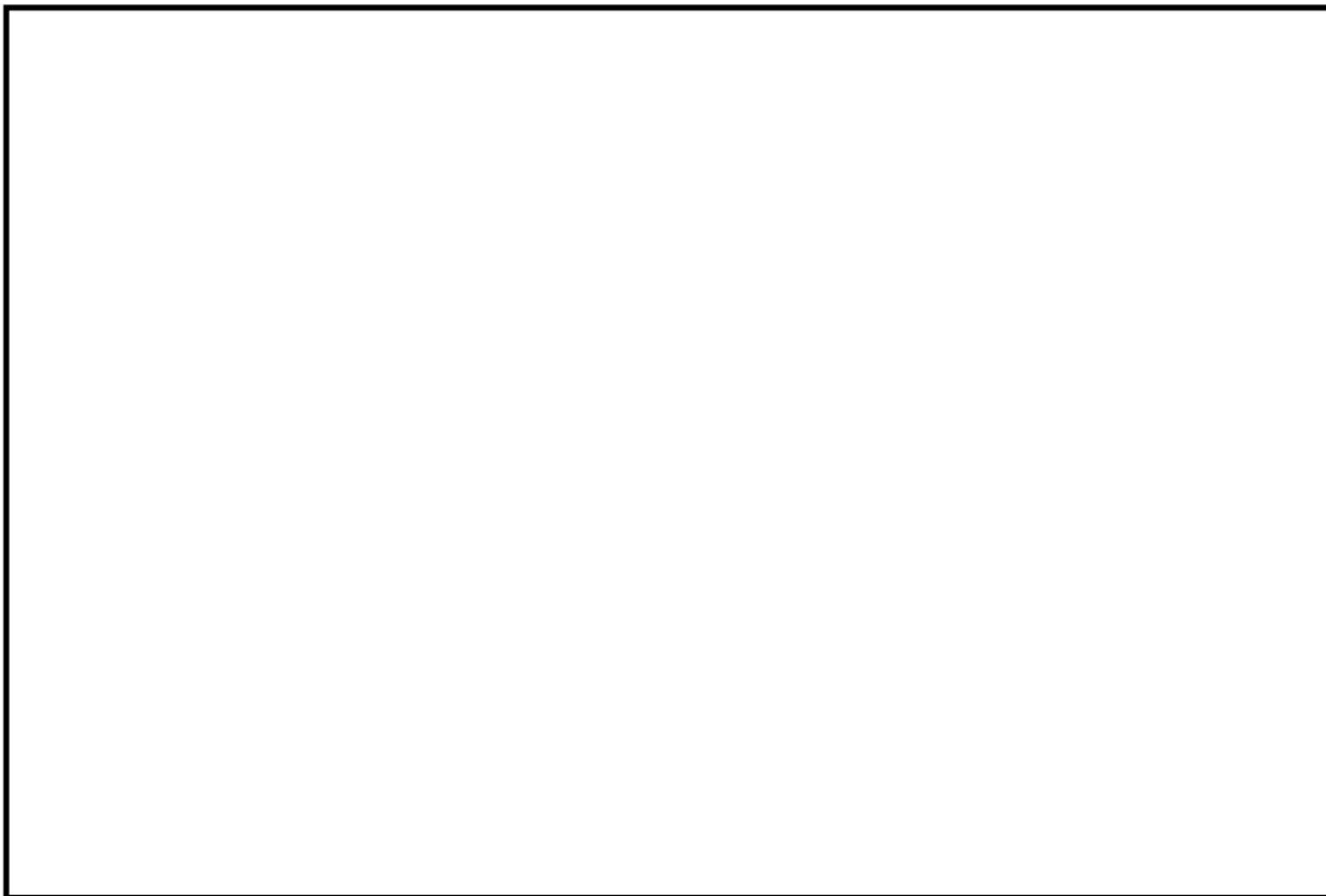
過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2J1	2D4	40.7	-882.0	1.00	351.3	346.0	2	33200	0.00003	2.705	0.00018
2J1	2G1	40.7	-580.7	1.00	310.7	306.0	2	62700	0.00003	2.753	0.00009
2J1	2I1	40.7	-509.8	1.00	275.0	270.8	5	122000	0.00004	2.324	0.00010
2J1	2A1	40.7	-497.8	1.00	269.3	265.2	7	137000	0.00005	2.071	0.00011
2J1	2J2	40.7	-485.2	1.00	263.0	259.0	47	157000	0.00030	1.581	0.00047
1A1	2J2	27.3	-485.2	1.00	256.3	252.4	16	181000	0.00009	1.541	0.00014
1A1	2E1	27.3	-480.0	1.00	253.6	249.8	2	192000	0.00001	1.957	0.00002
1A1	2B1	27.3	-470.2	1.00	253.2	249.4	5	193000	0.00003	2.342	0.00006
1A1	1C1	27.3	-464.1	1.00	245.7	242.0	51	232000	0.00022	2.049	0.00045
1B1	1C1	15.3	-464.1	1.00	239.7	236.1	74	271000	0.00027	1.504	0.00041
1I1	1C1	9.9	-464.1	1.00	237.0	233.4	70	291000	0.00024	3.431	0.00093
NSS	1C1	0.0	-464.1	1.00	232.1	229.5	137	332000	0.00041	3.431	0.00142
2E1	1C1	-244.9	-464.1	1.00	109.6	107.9	2	15400000	0.00000	1.000	0.00000
2A1	1C1	-295.9	-464.1	1.00	84.1	82.8	7	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00424

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

: 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

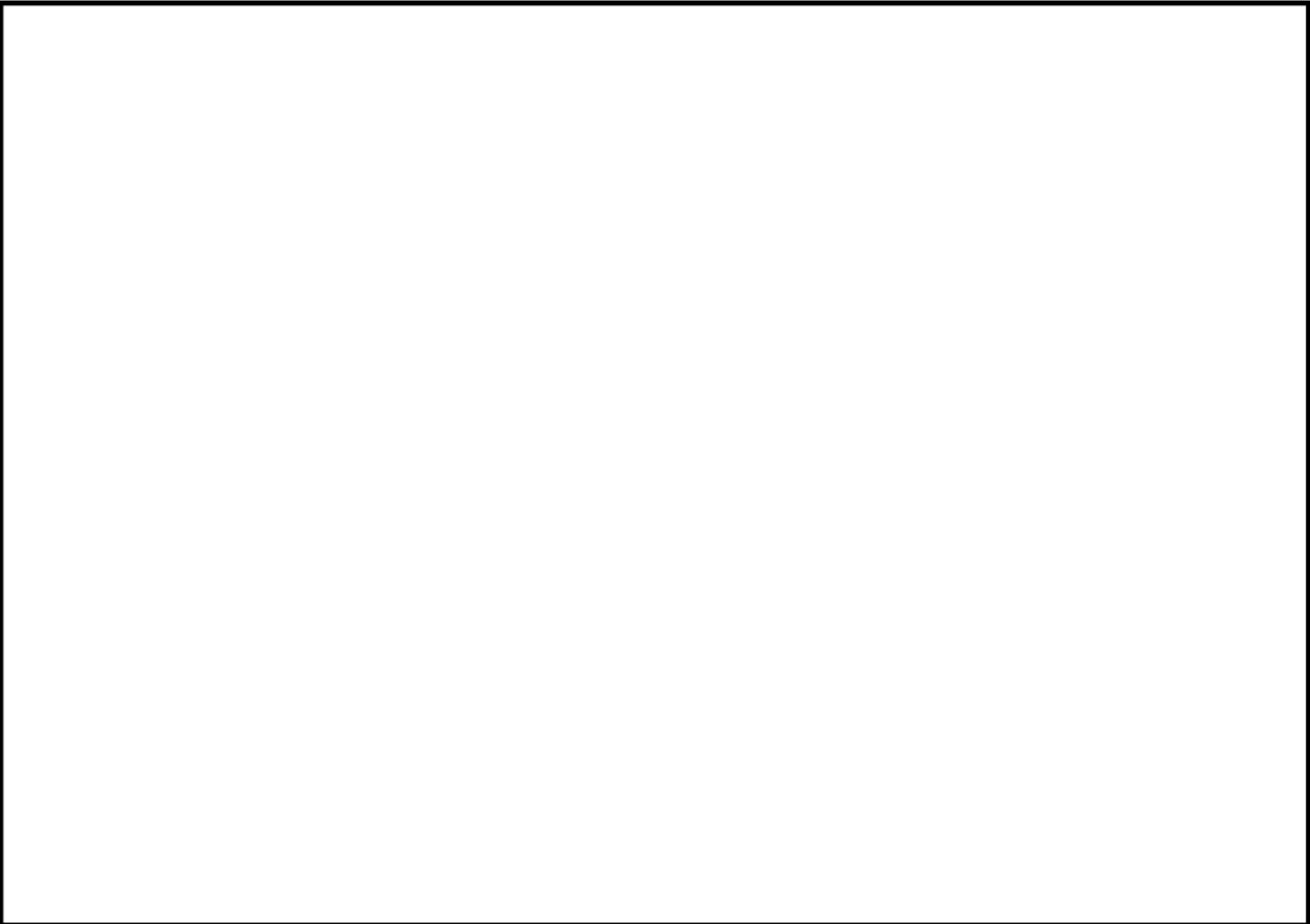
環境効果補正係数（Fen）の算出根拠

各過渡の温度，ひずみ履歴より値を読み取り，環境疲労評価手法に従って算出している。

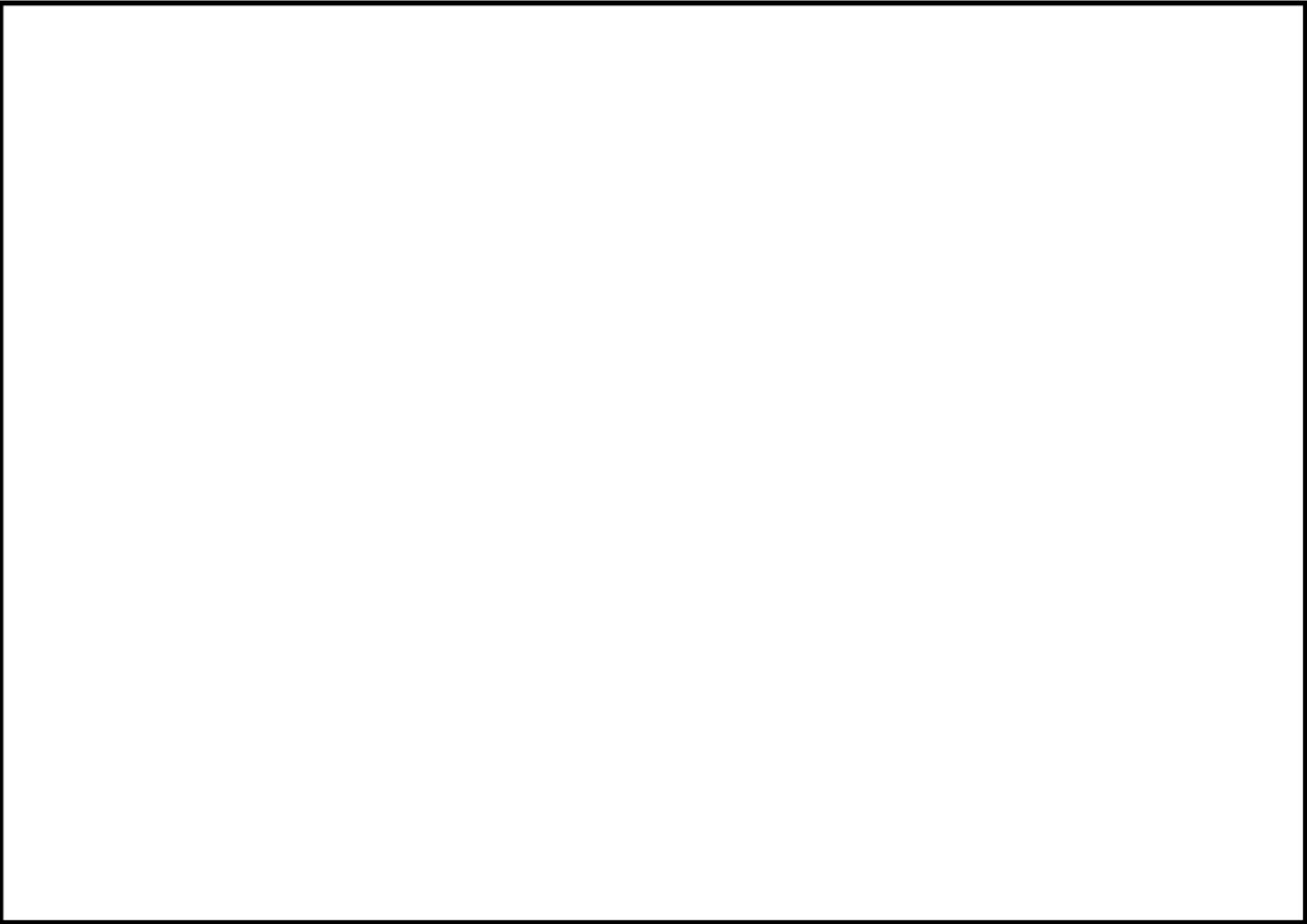


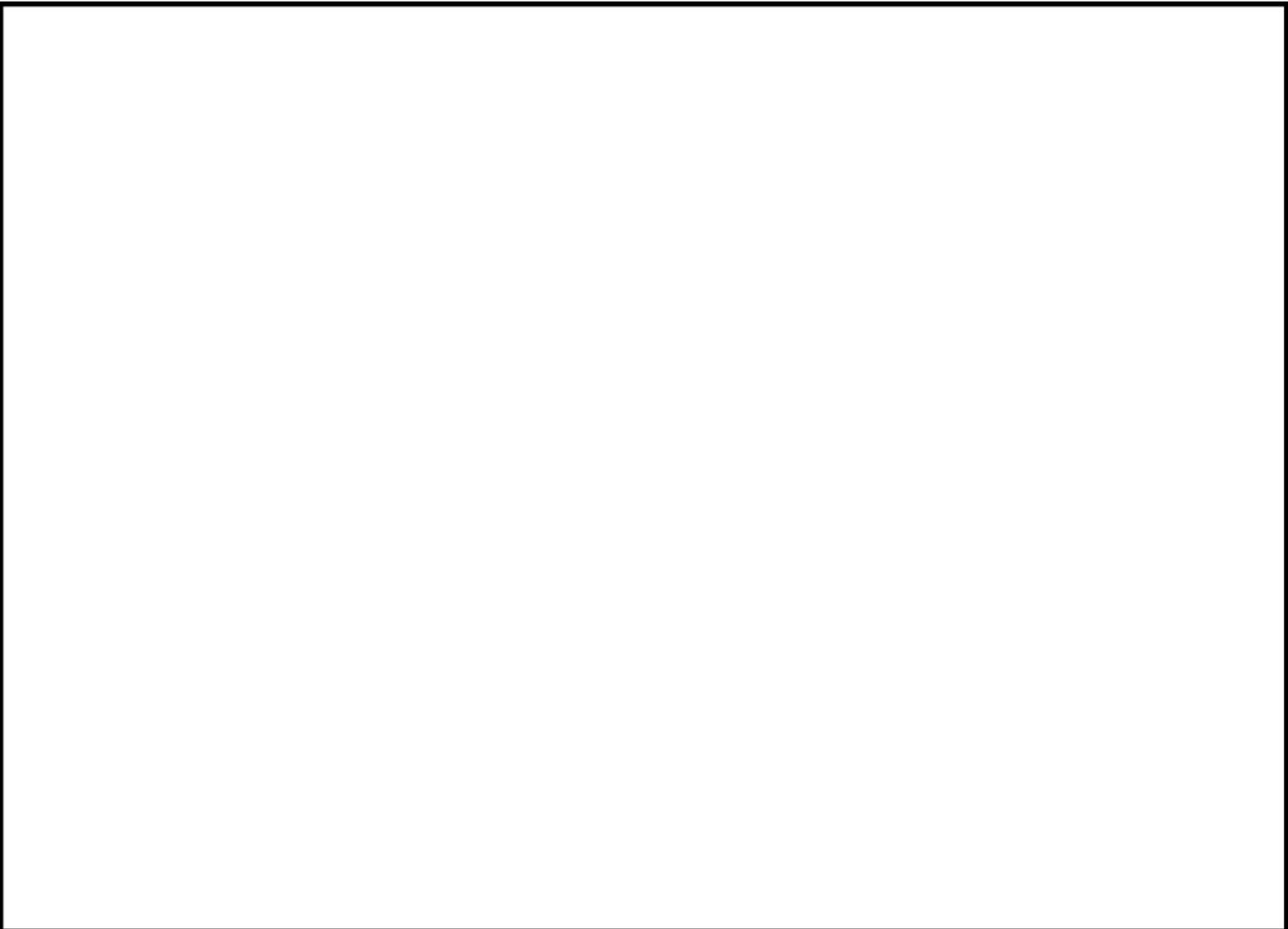


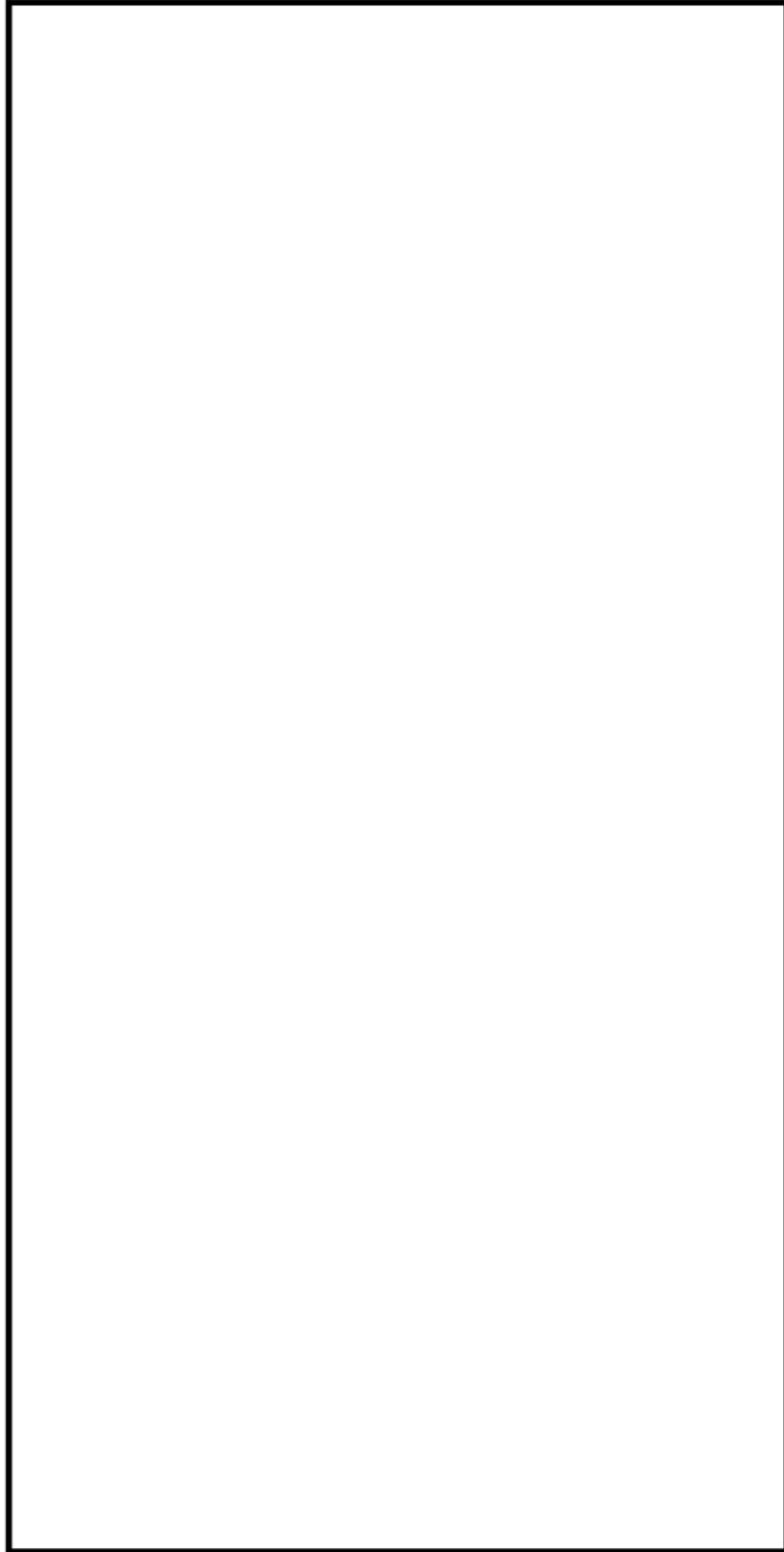












上部蓋, 上部胴フランジ及びスタッドボルト寸法, 評価点及び解析モデル

上部蓋, 上部胴フランジ及びスタッドボルト 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.00016	0.00214	0.00065
2	0.00053	0.00031	0.00638
3	0.00056	0.00244	0.00023
4	0.00013	0.00066	0.00268
5	0.00020	0.00436	0.00612
6	0.0	0.00205	0.00759
7	0.35690	0.0	0.35690
8	0.10721	0.0	0.10721
9	0.38928	0.0	0.38928
10	0.12885	0.0	0.12885

許容値  $U_r=1.0$

0.00759 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

上部蓋, 上部胴フランジ 疲労解析結果 (評価点 : 6)

評価点 - 6  
( S31 )

応力強さ (単位 : MPa)		繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)			
極大値	極小値	Ke	ALT		ALT'	N	N*
16.7	-375.2	1.0	196.0	230.5	74	15400	0.00481
0.0	-313.9	1.0	156.9	184.6	63	31500	0.00200
-25.8	-298.8	1.0	136.5	160.6	5	48400	0.00010
-25.8	-268.3	1.0	121.3	142.7	2	85000	0.00002
-25.8	-267.1	1.0	120.7	141.9	7	87100	0.00008
-25.8	-259.6	1.0	116.9	137.5	2	101000	0.00002
-25.8	-258.0	1.0	116.1	136.6	47	103000	0.00046
-104.1	-258.0	1.0	77.0	90.5	27	634000	0.00004
-104.1	-258.0	1.0	77.0	90.5	36	634000	0.00006
-143.4	-258.0	1.0	57.3	67.4	2	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.00759

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

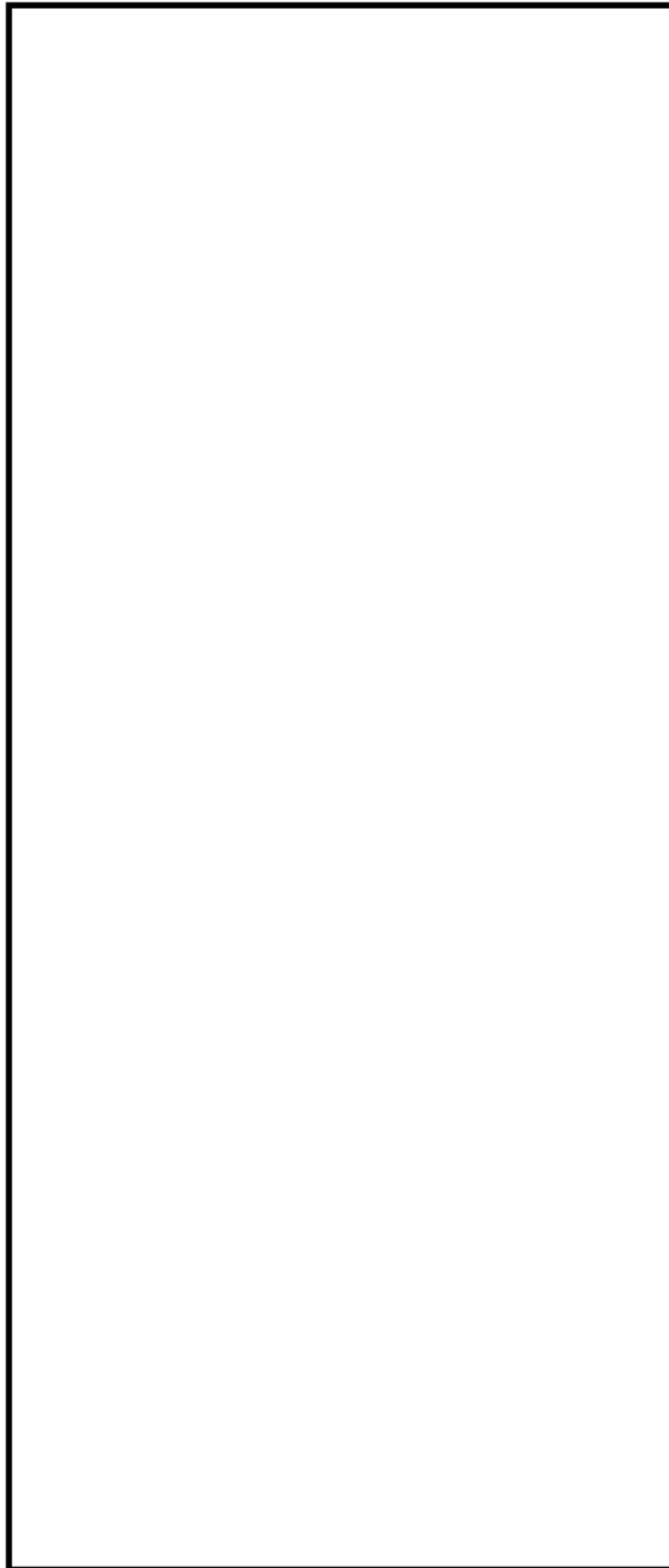
スタッドボルト 疲労解析結果 (評価点 : 9)

評価点 - 9  
( S12 )

応力強さ		( 単位 : MPa )			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
2329.6	0.0	1.0	1164.8	1393.7	69	248	0.27823
2329.6	1107.3	1.0	611.2	731.3	6	891	0.00673
2244.8	1107.3	1.0	568.8	680.5	7	1020	0.00686
2241.5	1107.3	1.0	567.1	678.5	0	1030	0.00000
2241.1	1107.3	1.0	566.9	678.3	5	1030	0.00485
2240.1	1107.3	1.0	566.4	677.7	9	1030	0.00874
2239.6	1107.3	1.0	566.2	677.4	2	1030	0.00194
2239.3	1107.3	1.0	566.0	677.2	4	1030	0.00388
2238.9	1107.3	1.0	565.8	677.0	0	1030	0.00000
2233.9	1107.3	1.0	563.3	674.0	0	1040	0.00000
2230.0	1107.3	1.0	561.3	671.6	4	1050	0.00381
2205.0	1107.3	1.0	548.9	656.7	4	1100	0.00364
2193.5	1107.3	1.0	543.1	649.8	2	1120	0.00179
2187.0	1107.3	1.0	539.8	645.9	7	1140	0.00614
2182.8	1107.3	1.0	537.8	643.5	3	1140	0.00263
2177.8	1107.3	1.0	535.3	640.5	2	1160	0.00172
2174.5	1107.3	1.0	533.6	638.5	8	1160	0.00690
2163.7	1107.3	1.0	528.2	632.0	2	1190	0.00168
2157.5	1107.3	1.0	525.1	628.3	2	1200	0.00167
2153.0	1107.3	1.0	522.8	625.6	2	1210	0.00165
2106.4	1107.3	1.0	499.5	597.7	6	1330	0.00451
2106.4	1393.9	1.0	356.2	426.3	69	2640	0.02614
2106.4	1593.4	1.0	256.5	306.9	69	5120	0.01348
2106.4	1767.6	1.0	169.4	202.7	2	15400	0.00013
2106.4	1875.8	1.0	115.3	137.9	2	78600	0.00003
2106.4	1895.0	1.0	105.7	126.5	75	124000	0.00060
2106.4	1896.8	1.0	104.8	125.4	79	130000	0.00061
2106.4	1897.0	1.0	104.7	125.3	5	131000	0.00004
2106.4	1917.4	1.0	94.5	113.0	68	256000	0.00027
2106.4	1946.8	1.0	79.8	95.5	519	836000	0.00062
2093.8	1946.8	1.0	73.5	87.9	69	—————	0.0
疲労累積係数 =							0.38928

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

: 割り増し係数 Ke を示す



下部胴・下部鏡接続部形状寸法，評価点及び解析モデル

下部胴・下部鏡接続部 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00115	0.00005
2	0.0	0.00043	0.0
3	0.0	0.00126	0.00451
4	0.0	0.00022	0.00022

許容値  $U_f=1.0$

0.00451 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

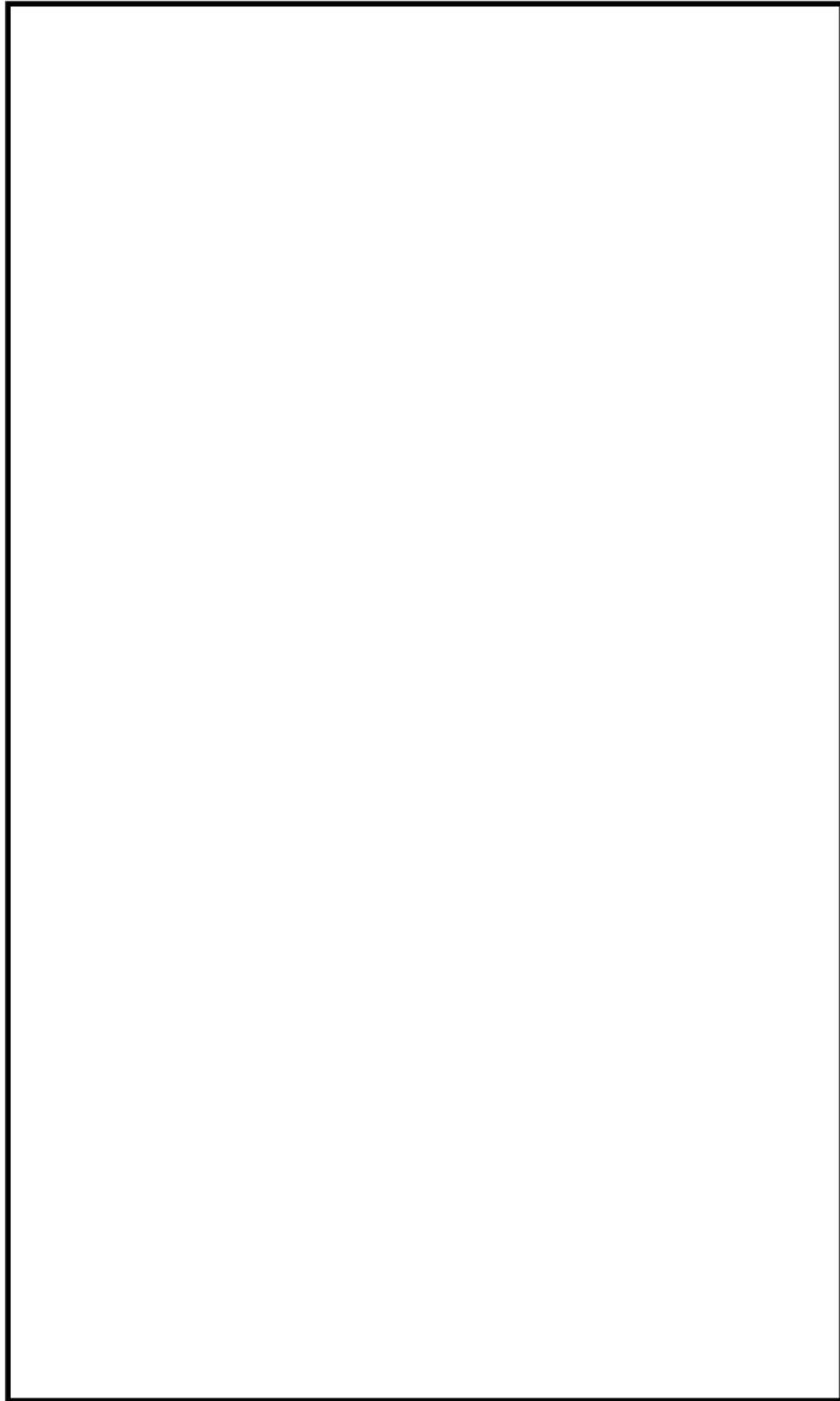
下部胴・下部鏡接続部 疲労解析結果 (評価点 : 3)

評価点 - 3  
( S31 )

応力強さ (単位 : MPa)		繰返し回数			疲労係数 (=N/N*)		
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'		N	N*
28.4	-349.3	1.0	188.9	222.1	2	17500	0.00011
28.4	-299.8	1.0	164.1	193.0	2	27400	0.00007
28.4	-275.2	1.0	151.8	178.5	5	34900	0.00014
28.4	-245.9	1.0	137.1	161.3	2	47800	0.00004
28.4	-241.3	1.0	134.8	158.6	7	50600	0.00014
28.4	-238.3	1.0	133.4	156.9	45	53400	0.00084
24.8	-238.3	1.0	131.6	154.7	18	57000	0.00032
24.8	-233.2	1.0	129.0	151.7	5	62800	0.00008
24.8	-232.7	1.0	128.8	151.4	51	63400	0.00080
0.0	-232.7	1.0	116.4	136.8	137	103000	0.00133
-4.9	-232.7	1.0	113.9	134.0	70	111000	0.00063
-135.4	-232.7	1.0	48.7	57.2	2	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.00451

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す



炉心支持金物及び炉心支持金物取付部形状寸法，評価点及び解析モデル

炉心支持金物及び炉心支持金物取付部 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00053	0.00054
2	0.0	0.00056	0.0
3	0.0	0.00449	0.00033
4	0.0	0.00040	0.0
5	0.0	0.00042	0.00269
6	0.0	0.00024	0.00001
7	0.0	0.00434	0.00033
8	0.0	0.00040	0.0
9	0.0	0.0	0.0
10	0.0	0.0	0.0
11	0.0	0.0	0.00000
12	0.0	0.00000	0.00000
13	0.0	0.0	0.0
14	0.0	0.0	0.0

許容値  $U_T=1.0$

0.00449 : 疲労累積係数が最大となる評価点及び最大値を示す

炉心支持金物及び炉心支持金物取付部 疲労解析結果 (評価点 : 3)

評価点 - 3  
( S23 )

応力強さ (単位 : MPa)			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)		
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'		N	N*
305.4	-39.2	1.0	172.3	202.7	2	23600	0.00008
272.8	-39.2	1.0	156.0	183.5	2	32100	0.00006
256.0	-39.2	1.0	147.6	173.6	5	38100	0.00013
241.8	-39.2	1.0	140.5	165.3	63	44300	0.00142
241.6	-39.2	1.0	140.4	165.2	2	44400	0.00005
241.6	-36.4	1.0	139.0	163.5	5	45800	0.00011
236.9	-36.4	1.0	136.7	160.7	2	48300	0.00004
232.5	-36.4	1.0	134.5	158.2	5	51200	0.00010
223.9	-36.4	1.0	130.1	153.1	51	60200	0.00085
223.9	0.0	1.0	111.9	131.6	137	118000	0.00116
223.9	11.4	1.0	106.2	124.9	70	143000	0.00049
223.9	109.8	1.0	57.0	67.1	2	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.00449

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

1.0 : 割り増し係数 Ke を示す

炉心支持金物及び炉心支持金物取付部 環境疲労評価結果（評価点：11）

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
NSS	2D4	0.0	-225.0	1.00	112.5	110.8	2	12000000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	2E1	0.0	-187.2	1.00	98.6	97.1	2	98500000	0.00000	1.000	0.00000
NSS	1I1	0.0	-168.3	1.00	84.2	82.9	70	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00000

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

: 割り増し係数 Ke, 環境効果補正係数 fen を示す

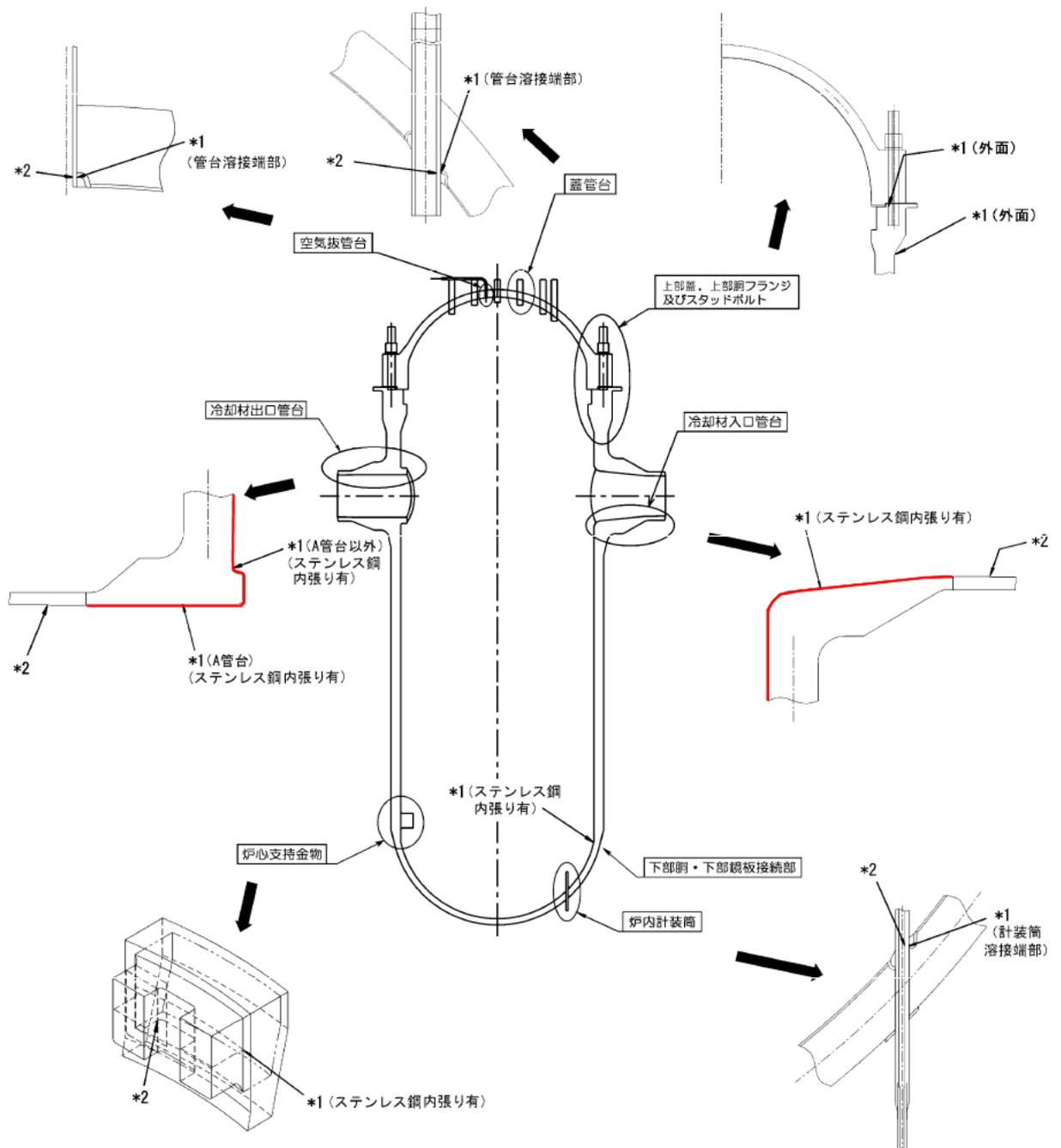
環境効果補正係数 (Fen) の算出根拠

各過渡の温度、ひずみ履歴より値を読み取り、環境疲労評価手法に従って算出している。





タイトル	クラッドにより環境疲労評価不要とする部位のクラッド確認について								
説明	<p>ステンレス鋼等クラッドにより接液していないとして環境疲労評価を行っていない部位がある機器としては、原子炉容器、加圧器、蒸気発生器がある。(添付-1)</p> <p>これらの機器のクラッド施工部については、定期的に目視確認等を行い、異常がないことを確認している。</p> <table border="1" data-bbox="592 602 1190 757"> <thead> <tr> <th></th> <th>点検方法</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>原子炉容器</td> <td>目視確認<sup>※1</sup></td> </tr> <tr> <td>加圧器</td> <td>目視確認<sup>※2</sup></td> </tr> <tr> <td>蒸気発生器</td> <td>目視確認</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1：維持規格においては、表面のき裂を検出するための目視試験（VT-1およびMVT-1）を定めているが、当該箇所を目視確認はこの条件を満たすものではない。ただし、供用期間中検査で実施している検査範囲に含まれるクラッド施工範囲については、変形、剥がれ、発錆などクラッド損傷に伴う異常がないことは確認できている。</p> <p>※2：加圧器のクラッド施工部のうち疲労の蓄積が考えられるスプレイライン用管台、サージ用管台の内面については、目視確認による確認が困難な場所である。しかし、供用期間中検査としてコーナー部や溶接継手部の超音波探傷検査を実施しており、この検査はクラッドを直接確認するための検査ではないがクラッド施工部に異常がないことを確認できると考えている。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>		点検方法	原子炉容器	目視確認 <sup>※1</sup>	加圧器	目視確認 <sup>※2</sup>	蒸気発生器	目視確認
	点検方法								
原子炉容器	目視確認 <sup>※1</sup>								
加圧器	目視確認 <sup>※2</sup>								
蒸気発生器	目視確認								

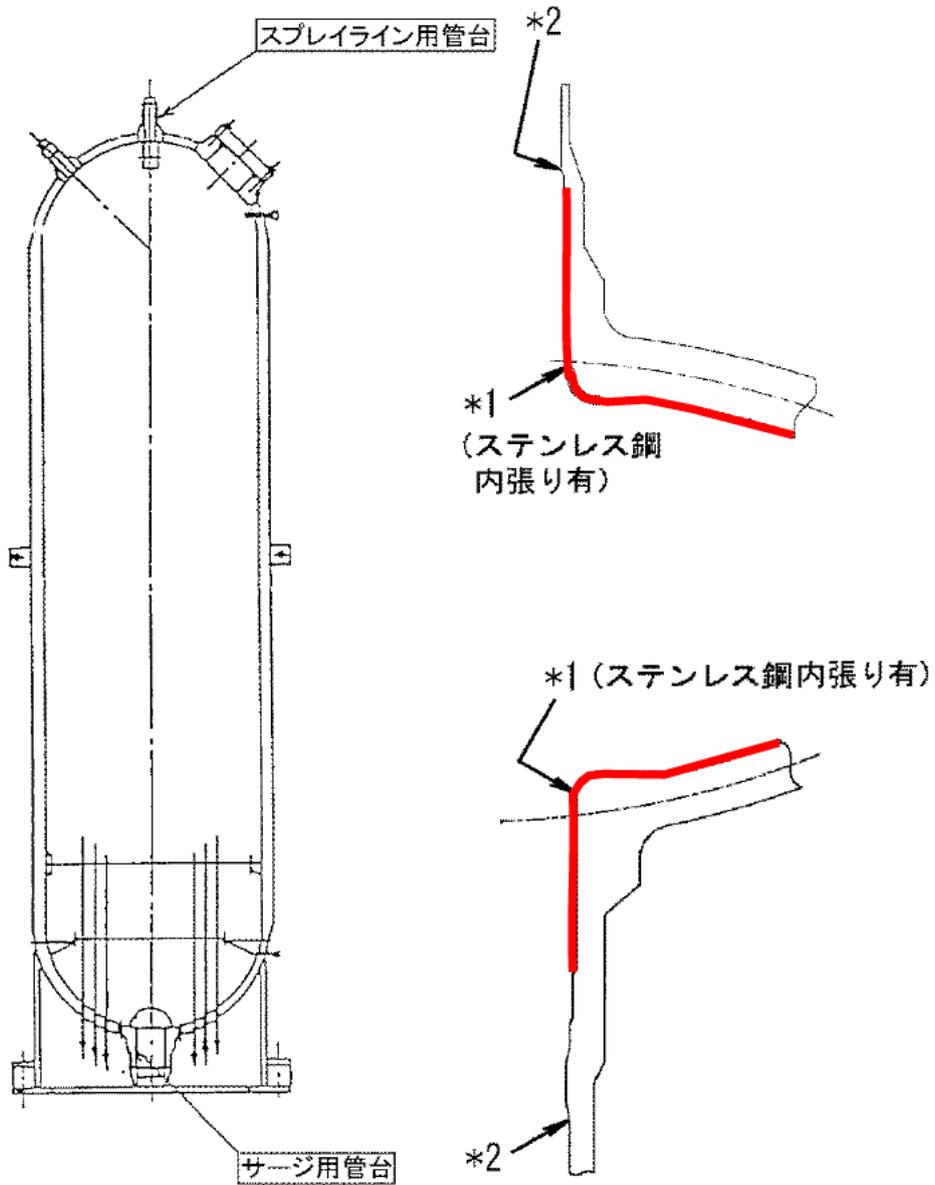


\* 1 : 「設計・建設規格」に基づく疲労評価対象部位(最大)  
(非接液部の場合は ( ) 内に理由を記載)

\* 2 : 「環境疲労評価手法」に基づく疲労評価対象部位(最大) (接液部が対象)

— クラッド施工部位 (なお原子炉容器内面は全面クラッド施工されている)

原子炉容器 疲労評価対象部位と管台クラッド施工部位

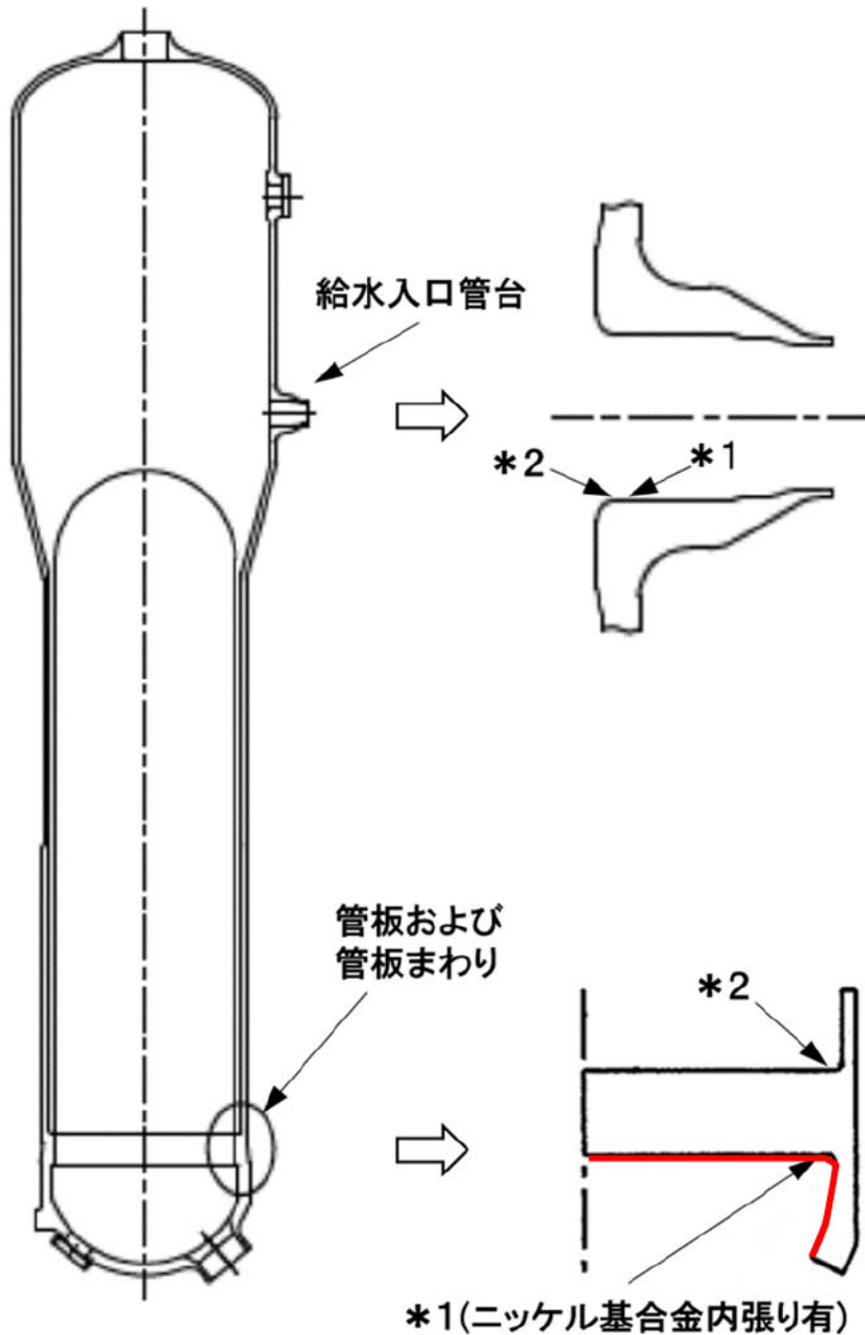


\* 1 : 「設計・建設規格」に基づく疲労評価対象部位(最大)  
 (非接液部の場合は ( ) 内に理由を記載)

\* 2 : 「環境疲労評価手法」に基づく疲労評価対象部位(最大) (接液部が対象)

— クラッド施工部位 (なお加圧器内面は全面クラッド施工されている)

加圧器 疲労評価対象部位とクラッド施工部位



\*1 : 「設計・建設規格」に基づく疲労評価対象部位(最大)

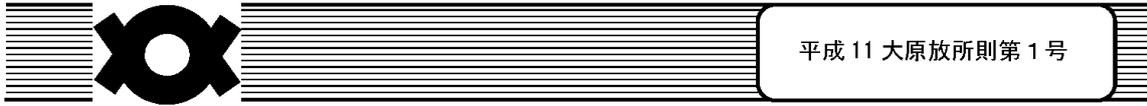
(非接液部の場合は ( ) 内に理由を記載)

\*2 : 「環境疲労評価手法」に基づく疲労評価対象部位(最大) (接液部が対象)

— クラッド施工部位

蒸気発生器 疲労評価対象部位とクラッド施工部位

タイトル	環境疲労評価で考慮している溶存酸素濃度について															
説明	<p>環境疲労評価は、「発電用原子力設備規格 環境疲労評価手法（2009 年版）」（以下環境疲労評価手法）に基づいて実施している。</p> <p>環境疲労評価手法では、環境疲労補正係数（Fen）に溶存酸素が影響する場合として炭素鋼・低合金鋼を定めている。</p> <p>大飯 3 号炉の高経年化技術評価書において、炭素鋼・低合金鋼の接液部位のうち溶存酸素を考慮して環境疲労評価を行った部位は以下に示す。</p> <p style="text-align: center;">溶存酸素が影響する炭素鋼・低合金鋼の評価対象部位</p> <table border="1" data-bbox="421 846 1361 1003"> <thead> <tr> <th>機器</th> <th>部位</th> <th>材質</th> <th>水質</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">蒸気発生器</td> <td>給水入口管台</td> <td>低合金鋼</td> <td>給水</td> </tr> <tr> <td>管板まわり</td> <td>低合金鋼</td> <td>給水</td> </tr> <tr> <td>炭素鋼配管</td> <td>主給水系統配管</td> <td>炭素鋼</td> <td>給水</td> </tr> </tbody> </table> <p>給水の溶存酸素濃度は 0.005ppm 以下 を標準値として監視・管理されていることから、当該部の環境疲労評価に対しては、溶存酸素濃度（DO）を 0.005ppm として溶存酸素濃度依存パラメータ（0*）を算出し、環境疲労補正係数の算出を行なった。</p> <p>[0*の算出式]</p> $0* = \ln(3.28) \quad (DO < 0.02\text{ppm})$ <p>なお、主給水系統配管の環境疲労評価は係数倍法を使用しており、Fen の計算に際して溶存酸素濃度を直接的には使用していないが、環境疲労評価手法の解説 EF-3121 において、PWR2 次系環境における炭素鋼・低合金鋼の Fen, sc は溶存酸素濃度を 0.005ppm とした場合の計算式であることが示されている。</p> <p>添付－1 に給水の水質管理基準を示す。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>	機器	部位	材質	水質	蒸気発生器	給水入口管台	低合金鋼	給水	管板まわり	低合金鋼	給水	炭素鋼配管	主給水系統配管	炭素鋼	給水
機器	部位	材質	水質													
蒸気発生器	給水入口管台	低合金鋼	給水													
	管板まわり	低合金鋼	給水													
炭素鋼配管	主給水系統配管	炭素鋼	給水													



# 大 飯 発 電 所 化 学 管 理 業 務 所 則

平 成 1 2 年 3 月 7 日 制 定

2 0 1 9 年 1 2 月 1 6 日 5 4 次改正

---

関西電力株式会社

3、4号機 出力運転時の水質管理値（2次系）

試料	送水		淡水				雑水				戻水				給水		蒸気発生器器内水				ドレン			D/D		スチームコンバータ			
	放水口	※1 海水系	ろ過器	第1段 出口	R/O出口	純水機 置入口	飲料水	M/B 出口	致密塔 出口	※2 2次系 補給水	純水 貯水	復水 ピット	復水ポンプ 出 口	復水高 濃度器 入 口	復水処理 装置出口	高圧ヒータ 出口	蒸気発生器器内水				他圧ヒータ	凝 分 離 器	高圧 ピ→	軸封冷却水	シリン 冷却水	燃料弁 冷却水	器内水	発生 蒸気	
項目	標準値	目標値	目標値	目標値	目標値	標準値	目標値	標準値	標準値	目標値	標準値	目標値	標準値	目標値	標準値	目標値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	標準値	
pH	-																												
電気伝導率	μS/cm																												
カチオン電気伝導率	μS/cm																												
ナトリウムイオン	ppb																												
硫酸イオン	ppb																												
硝酸イオン	ppb																												
カリウムイオン	ppb																												
当量比	-																												
酸性相当量比	-																												
シリカ	ppm																												
ヒドラジン 下段：アンモニア注入時	ppb																												
アンモニア	ppm																												
全有機炭素	ppm																												
溶存酸素	ppb																												
硬度	ppm																												
全鉄	ppb																												
全銅	ppb																												
亜硝酸	ppm																												
油分	ppm																												
化学的酸素要求量	ppm																												
残留塩素	ppm																												
全放射能	Bq/αl																												
備 考																													

タイトル	環境疲労評価手法における環境効果補正係数の算出方法について
説明	<p>環境疲労評価手法における環境効果補正係数の算出方法（「係数倍法」，「簡易評価法」または「詳細評価法」のいずれによるか）を添付－1に示す。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>

表 1 環境効果補正係数の算出方法 (1/3)

評価対象機器, 部位		環境効果補正係数の算出方法	
機種・機器名	部位		
ポンプ	余熱除去ポンプ	ケーシング	詳細評価
	1次冷却材ポンプ	ケーシング脚部	詳細評価
		ケーシング吐出ノズル	詳細評価
		ケーシング吸込ノズル	詳細評価
熱交換器	再生熱交換器	管板部	詳細評価
	余熱除去冷却器	管板部	詳細評価
	蒸気発生器	管板まわり	詳細評価※ <sup>1</sup>
		給水入口管台	詳細評価※ <sup>1</sup>
容器	原子炉容器	冷却材入口管台	詳細評価
		冷却材出口管台 (A冷却材出口管台)	詳細評価
		冷却材出口管台 (A冷却材出口管台以外)	詳細評価
		蓋管台	詳細評価
		空気抜管台	詳細評価
		炉内計装筒	詳細評価
		上部蓋および上部胴フランジ	—
		下部胴・下部鏡板接続部	—
		炉心支持金物	詳細評価
		スタッドボルト	—

表1 環境効果補正係数の算出方法 (2/3)

評価対象機器, 部位		環境効果補正係数の算出方法	
機種・機器名	部位		
容器	加圧器	スプレイライン用管台	詳細評価
		サージ用管台	詳細評価
	機械ペネトレーション	余熱除去冷却器出口配管貫通部端板	—
配管	ステンレス鋼配管	余熱除去系統出口配管 「1次冷却材管高温側出口管台～ 余熱除去ポンプ入口格納容器隔離弁」	係数倍法
		余熱除去系統出口配管 「余熱除去ポンプ入口格納容器隔離弁 ～原子炉格納容器貫通部」	係数倍法
		加圧器サージ配管	詳細評価
		加圧器スプレイ配管	詳細評価
	炭素鋼配管	主給水系統配管 「原子炉格納容器貫通部～ 蒸気発生器給水管台」	係数倍法 <sup>※2</sup>
	1次冷却材管	ホットレグ	詳細評価
		クロスオーバーレグ	詳細評価
		コールドレグ	詳細評価
		加圧器サージ管台	詳細評価
		蓄圧タンク注入管台	詳細評価
		充てん管台	詳細評価
	弁	仕切弁	余熱除去ポンプルーブ高温側 入口止め弁弁箱
玉形弁		抽出ライン止め弁弁箱	簡易評価
スイング逆止弁		蓄圧タンク注入ライン 第1逆止弁弁箱	簡易評価
リフト逆止弁		加圧器補助スプレイライン 逆止弁弁箱	簡易評価

表1 環境効果補正係数の算出方法 (3/3)

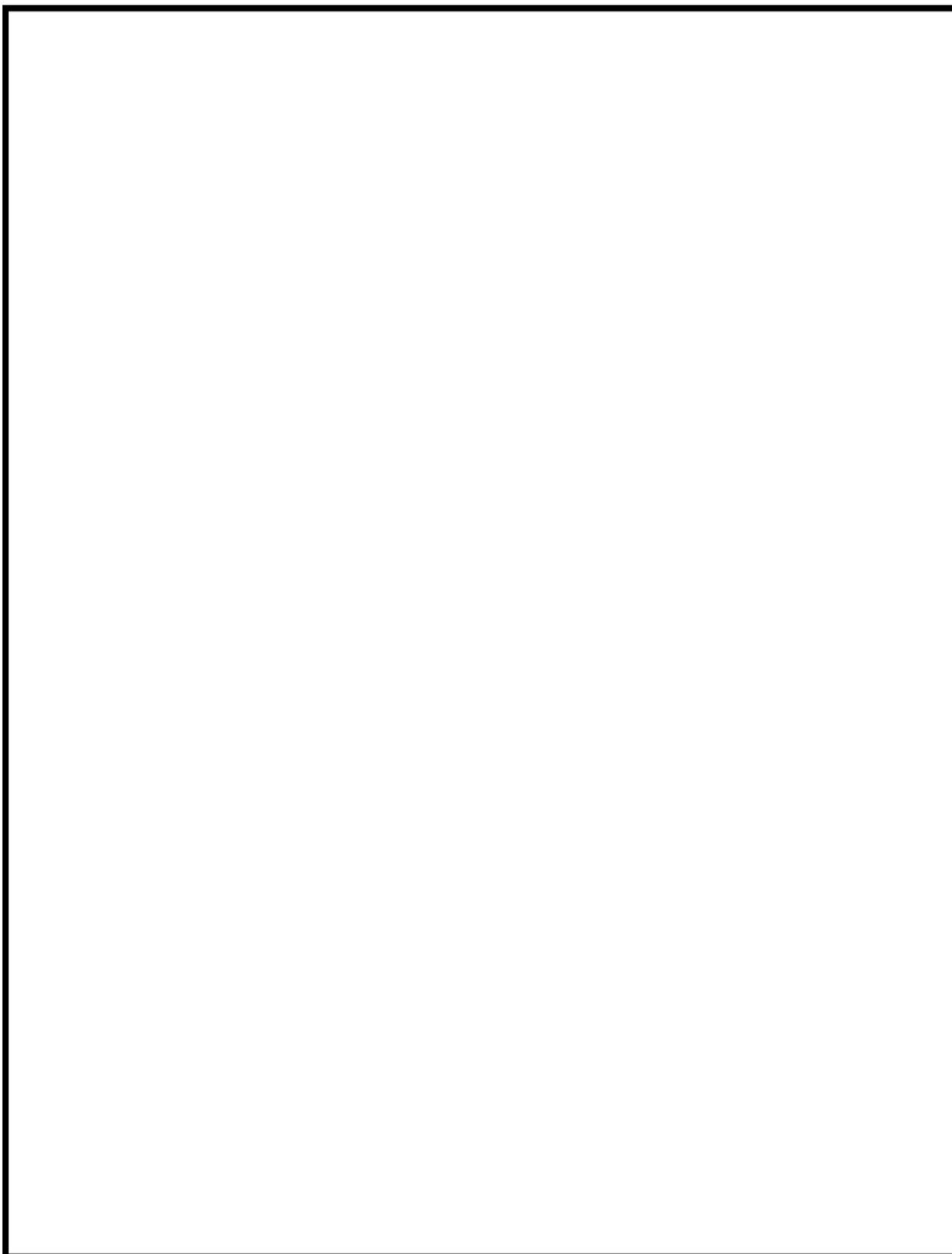
評価対象機器, 部位		環境効果補正係数の算出方法	
機種・機器名	部位		
炉内構造物	炉心支持構造物	上部炉心支持板	詳細評価
		上部炉心支持柱	詳細評価
		下部炉心支持板	詳細評価
		下部炉心支持柱	詳細評価
重機器サポート		加圧器スカート溶接部	—

※1：環境中評価に用いた溶存酸素量は運転管理値である 0.005ppm，材料中の硫黄含有量は材料規格における最大値である 0.025%とした。

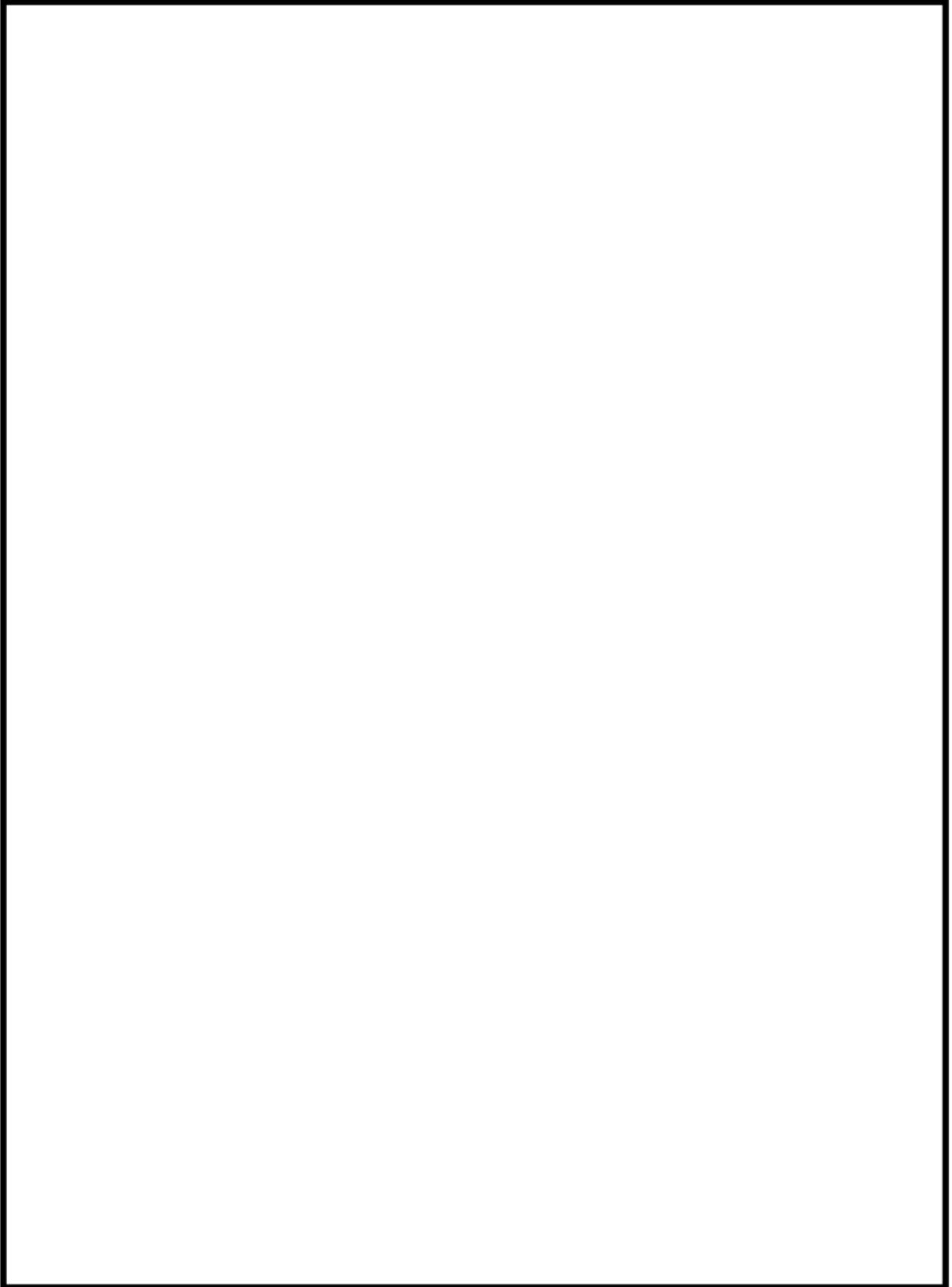
※2：環境中評価に用いた溶存酸素量は運転管理値である 0.005ppm，材料中の硫黄含有量は材料規格における最大値である 0.035%とした。

タイトル	代表機器以外の疲労累積係数の算出根拠について
説明	<p>以下の各機器の評価についての算出根拠を次ページ以降に示す。          なお、次ページ以降における「通常疲労評価」は設計・建設規格による疲労評価を表す。</p> <p>① 1次冷却材ポンプケーシングの疲労累積係数の算出根拠・・・7-2          ② 蒸気発生器の疲労累積係数の算出根拠・・・7-21          ③ 蒸気発生器給水管台の熱成層を考慮した評価の算出根拠・・・7-31          ④ 加圧器管台（スプレイ、サージ）の疲労累積係数の算出根拠・・・7-41          ⑤ 機械ペネトレーションの疲労累積係数の算出根拠・・・7-52          ⑥ 加圧器スプレイ配管およびサージ配管の疲労累積係数の算出根拠・7-55          ⑦ 1次冷却材管の疲労累積係数の算出根拠・・・7-73          ⑧ 仕切弁の疲労累積係数の算出根拠・・・7-92          ⑨ スイング逆止弁の疲労累積係数の算出根拠・・・7-96          ⑩ 炉内構造物の疲労累積係数の算出根拠・・・7-100          ⑪ 加圧器スカート溶接部の疲労累積係数の算出根拠・・・7-114</p>

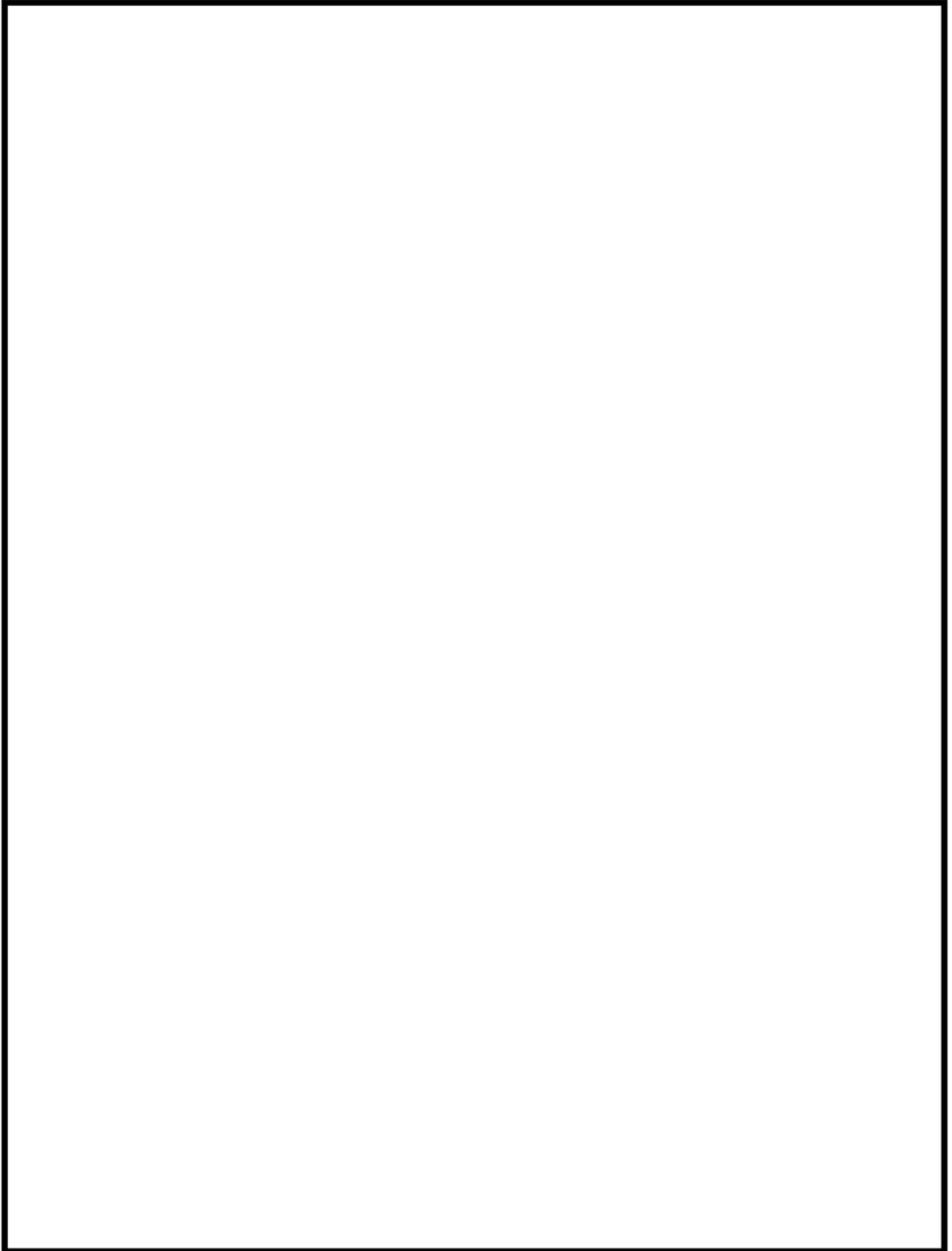
タイトル	1次冷却材ポンプケーシングの疲労累積係数の算出根拠について																					
説明	<p>1次冷却材ポンプケーシングの疲労累積係数の算出根拠を以下に示す。</p> <p>1. 解析モデル 疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="475 622 1310 824"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td colspan="2">ABAQUS Standard Ver. 6.8-1</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td colspan="2" rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> </tr> <tr> <td>要素数</td> </tr> <tr> <td>節点数</td> </tr> </table> <p>2. 材料物性 材料物性値を以下に示します。</p> <table border="1" data-bbox="462 943 1321 1144"> <thead> <tr> <th rowspan="2">材料</th> <th colspan="2">設計応力強さ</th> </tr> <tr> <th>Sm (MPa)</th> <th>温度 (°C)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>SA351 CF8 (SCS13A相当)</td> <td>116</td> <td>289.2</td> </tr> </tbody> </table> <p>3. 最大評価点の選定 解析モデル上の評価点は、各部位において全節点より応力が大きくなる部分を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。 解析モデル上の評価点および最大評価点の選定結果を添付1に示す。</p> <p>4. 応力分類 評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力評価のフローを添付2に示す。</p> <table border="1" data-bbox="422 1534 1358 1704"> <thead> <tr> <th>状態</th> <th>荷重の組み合わせ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>供用状態 A, B</td> <td>圧力+機械的荷重+自重+熱膨張荷重+熱過渡荷重</td> </tr> </tbody> </table> <p>5. Ke 係数 評価に用いたKe 係数を添付3に示す。</p> <p>6. 環境評価パラメータ 評価に用いた環境評価パラメータ（環境効果補正係数fen）を添付3に示す。</p>	解析プログラム	ABAQUS Standard Ver. 6.8-1		要素種類			要素次数	要素数	節点数	材料	設計応力強さ		Sm (MPa)	温度 (°C)	SA351 CF8 (SCS13A相当)	116	289.2	状態	荷重の組み合わせ	供用状態 A, B	圧力+機械的荷重+自重+熱膨張荷重+熱過渡荷重
解析プログラム	ABAQUS Standard Ver. 6.8-1																					
要素種類																						
要素次数																						
要素数																						
節点数																						
材料	設計応力強さ																					
	Sm (MPa)	温度 (°C)																				
SA351 CF8 (SCS13A相当)	116	289.2																				
状態	荷重の組み合わせ																					
供用状態 A, B	圧力+機械的荷重+自重+熱膨張荷重+熱過渡荷重																					

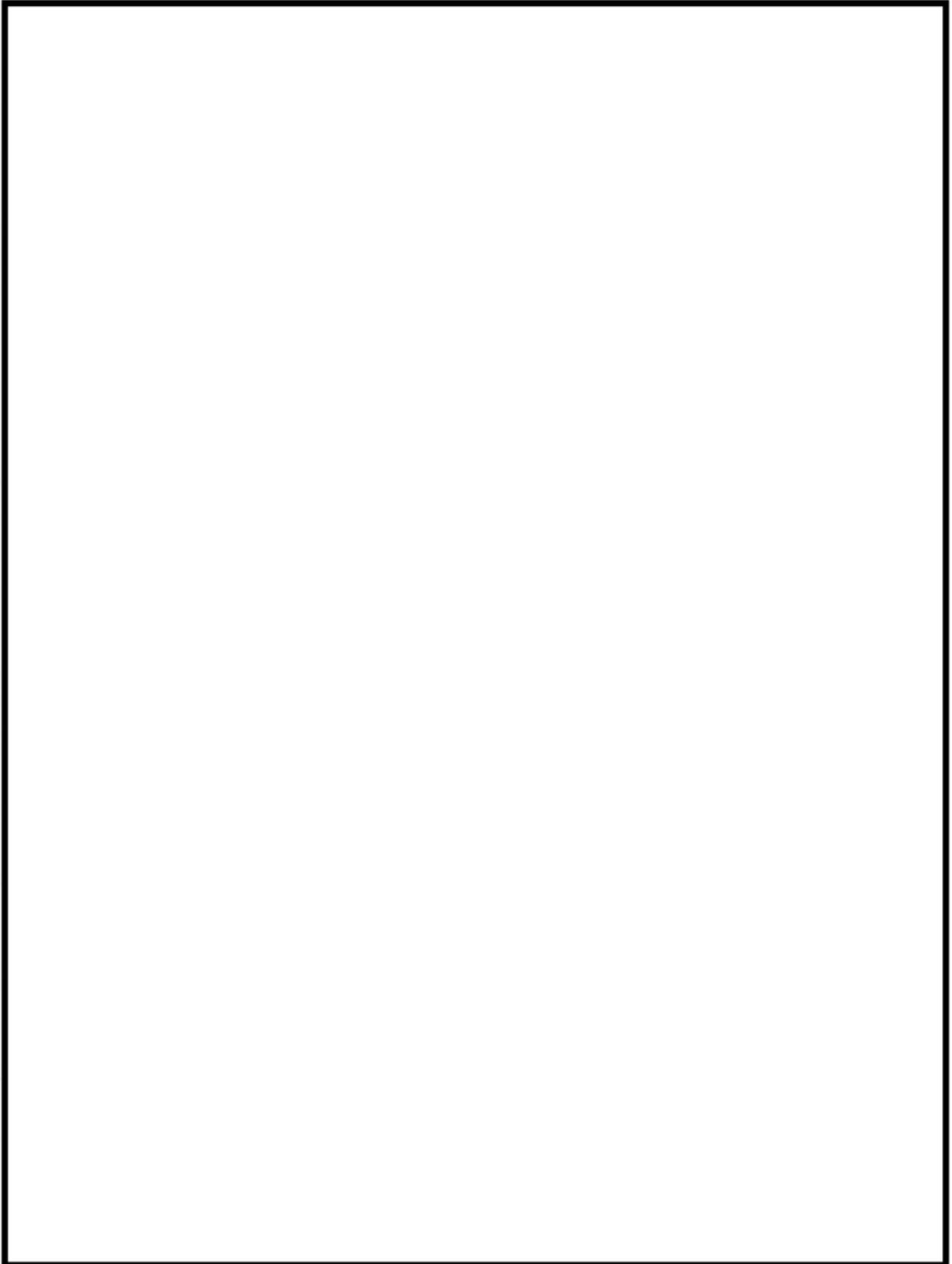


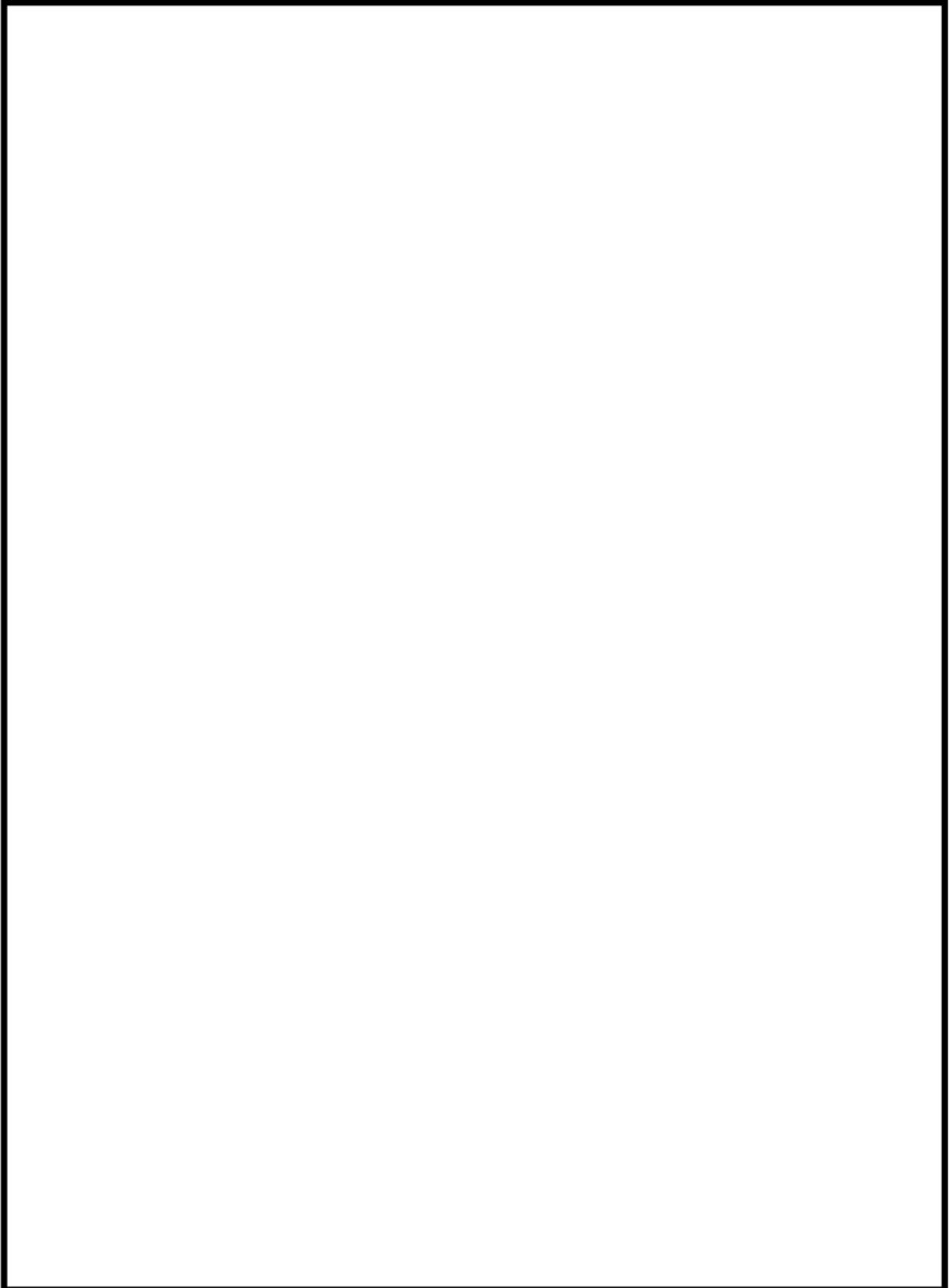
ケーシング吸込ノズル 評価点



ケージング吐出ノズル 評価点







## ケーシング脚部 評価点 (3 / 3)

## ケーシング吸込ノズル 最大疲労評価点の選定

Location	Usage Factor		
	S1-S2	S2-S3	S3-S1
SU01I	0.0	0.00000	0.00002
SU01O	0.0	0.00001	0.00002
SU02I	0.0	0.00000	0.00002
SU02O	0.0	0.00001	0.00001
SU03I	0.0	0.00000	0.00002
SU03O	0.0	0.00000	0.00000
SU04I	0.0	0.00000	0.00002
SU04O	0.0	0.00000	0.00001
SU05I	0.0	0.00000	0.0
SU05O	0.0	0.0	0.0
SU06I	0.0	0.00000	0.00002
SU06O	0.0	0.00001	0.00002
SU07I	0.0	0.00002	0.00002
SU07O	0.0	0.00000	0.0
SU08I	0.0	0.00002	0.00002
SU08O	0.0	0.00000	0.0
SU09I	0.00002	0.00000	0.0
SU09O	0.0	0.0	0.0
SU10I	0.0	0.00002	0.00003
SU10O	0.0	0.0	0.0
SU11I	0.0	0.00002	0.00002
SU11O	0.0	0.0	0.0
SU12I	0.00003	0.00000	0.0
SU12O	0.0	0.0	0.0
SU13I	0.0	0.00002	0.00002
SU13O	0.0	0.0	0.0

※Iは接液部、Oは大気中の評価点を表す

## 吸込ノズル疲労評価結果 (評価点: SU12I)

応力強さ			(単位: N/mm <sup>2</sup> )			繰返し回数		疲れ係数
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	(=N/N*)	
75.0	-274.8	1.0	174.9	193.3	2	1010000	0.00000	
75.0	-196.9	1.0	136.0	150.3	2	2410000	0.00000	
75.0	-177.4	1.0	126.2	139.5	2	3330000	0.00000	
75.0	-173.7	1.0	124.3	137.5	5	3550000	0.00000	
75.0	-172.7	1.0	123.9	136.9	52	3610000	0.00001	
72.6	-172.7	1.0	122.7	135.6	18	3760000	0.00000	
72.6	-138.1	1.0	105.3	116.5	2	8360000	0.00000	
72.6	-133.7	1.0	103.2	114.0	2	9460000	0.00000	
72.6	-126.9	1.0	99.7	110.3	3	12600000	0.00000	
72.6	-108.7	1.0	90.6	100.2	49	41400000	0.00000	
1.4	-108.7	1.0	55.0	60.8	25		0.0	
疲れ累積係数 =							0.00003	

→通常UF: 0.001

## ケーシング吐出ノズル 最大疲労評価点の選定

Location	Usage Factor		
	S1-S2	S2-S3	S3-S1
HA01I	0.0	0.00081	0.00112
HA01O	0.02725	0.03942	0.0
HA02I	0.0	0.00081	0.00112
HA02O	0.02889	0.03740	0.0
HA03I	0.00136	0.03544	0.00003
HA03O	0.00267	0.00056	0.0
HA04I	0.00538	0.04715	0.00000
HA04O	0.00096	0.00039	0.0
HA05I	0.00070	0.00020	0.00003
HA05O	0.0	0.00001	0.00001
HA06I	0.00085	0.00004	0.00017
HA06O	0.00001	0.00005	0.00000
HA07I	0.0	0.00009	0.00001
HA07O	0.05204	0.0	0.10735
HA08I	0.00002	0.00004	0.00029
HA08O	0.00122	0.0	0.01247
HA09I	0.00033	0.00089	0.0
HA09O	0.0	0.00000	0.0
HA10I	0.0	0.00009	0.00001
HA10O	0.04676	0.0	0.10612
HA11I	0.00001	0.00001	0.00015
HA11O	0.01329	0.0	0.04836

※Iは接液部、Oは大気中の評価点を表す

吐出ノズル疲労評価結果 (評価点: HA070)

応力強さ			(単位: N/mm <sup>2</sup> )		繰返し回数		疲れ係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
165.3	-639.8	1.89	762.2	842.6	74	917	0.08070
95.0	-553.7	1.63	527.5	583.1	5	3340	0.00150
95.0	-502.0	1.51	451.0	498.5	7	6100	0.00115
95.0	-497.6	1.47	434.5	480.3	51	7090	0.00719
-15.3	-472.3	1.89	432.6	478.2	74	7220	0.01025
53.6	-497.6	1.43	394.2	435.7	12	10600	0.00113
53.6	-448.9	1.48	371.0	410.1	7	14200	0.00049
53.6	-479.3	1.39	369.7	408.6	9	14500	0.00062
53.6	-480.8	1.38	368.1	406.9	42	14800	0.00284
-32.8	-480.8	1.16	260.1	287.5	37	88200	0.00042
-32.8	-474.9	1.15	254.9	281.8	2	98400	0.00002
-32.8	-474.7	1.15	254.8	281.7	24	98700	0.00024
0.0	-474.7	1.0	237.4	262.4	63	146000	0.00043
-14.9	-474.7	1.0	229.9	254.1	63	174000	0.00036
-289.8	-474.7	1.0	92.5	102.2	2	3030000	0.00000
-329.7	-474.7	1.0	72.5	80.1	2		0.0
疲れ累積係数 =							0.10735

→通常UF : 0.108

## ケーシング脚部 最大疲労評価点の選定 (1/3)

Location	Usage Factor		
	S1-S2	S2-S3	S3-S1
A101I	0.00007	0.03270	0.00017
A101O	0.00002	0.00088	0.0
A102I	0.00008	0.03024	0.00013
A102O	0.00005	0.00143	0.0
A103I	0.00009	0.02702	0.00015
A103O	0.00008	0.00182	0.0
A104I	0.00007	0.02087	0.00019
A104O	0.00013	0.00157	0.0
A105I	0.00000	0.00052	0.00095
A105O	0.00030	0.00057	0.0
A106I	0.00000	0.00416	0.00020
A106O	0.0	0.0	0.0
A107I	0.00000	0.00014	0.00093
A107O	0.00011	0.00000	0.01616
A108I	0.00000	0.00052	0.00095
A108O	0.00030	0.00058	0.0
A109I	0.00007	0.02092	0.00019
A109O	0.00013	0.00157	0.0
A110I	0.00009	0.02702	0.00015
A110O	0.00008	0.00181	0.0
A111I	0.00008	0.03033	0.00013
A111O	0.00005	0.00143	0.0
A112I	0.00007	0.03270	0.00016
A112O	0.00002	0.00088	0.0
A113I	0.00000	0.00017	0.00039
A113O	0.00023	0.0	0.01946
A114I	0.00000	0.00012	0.00080
A114O	0.00005	0.00001	0.00757
A115I	0.00000	0.00012	0.00079
A115O	0.00005	0.00001	0.00757
A116I	0.00000	0.00017	0.00041
A116O	0.00023	0.0	0.01951
A117I	0.00000	0.00014	0.00093
A117O	0.00011	0.00000	0.01617
A118I	0.0	0.00132	0.00019
A118O	0.0	0.0	0.00002
A119I	0.0	0.00084	0.00108
A119O	0.00030	0.00080	0.0

※Iは接液部、Oは大気中の評価点を表す

## ケーシング脚部 最大疲労評価点の選定 (2/3)

Location	Usage Factor		
	S1-S2	S2-S3	S3-S1
A201I	0.0	0.00009	0.00001
A201O	0.05479	0.0	0.11043
A202I	0.00001	0.00010	0.00000
A202O	0.00002	0.00287	0.00005
A203I	0.0	0.00048	0.00026
A203O	0.00007	0.0	0.00002
A204I	0.00535	0.04718	0.00000
A204O	0.00090	0.00042	0.0
A205I	0.00136	0.03528	0.00003
A205O	0.00261	0.00057	0.0
A206I	0.0	0.00081	0.00111
A206O	0.02735	0.03941	0.0
A207I	0.00008	0.02049	0.00019
A207O	0.00015	0.00165	0.0
A208I	0.00009	0.02167	0.00015
A208O	0.00008	0.00195	0.0
A209I	0.00008	0.02802	0.00012
A209O	0.00005	0.00158	0.0
A210I	0.00007	0.03193	0.00016
A210O	0.00003	0.00102	0.0
A211I	0.0	0.00011	0.00104
A211O	0.00031	0.00001	0.03615
A212I	0.0	0.00011	0.00077
A212O	0.00006	0.00001	0.01014
A213I	0.00006	0.01780	0.00022
A213O	0.00011	0.00153	0.0

※Iは接液部、Oは大気中の評価点を表す

※A204IおよびA309Iは同値であるため、両評価点について、環境効果を考慮した疲労累積係数を算出する。

## ケーシング脚部 最大疲労評価点の選定 (3/3)

Location	Usage Factor		
	S1-S2	S2-S3	S3-S1
A301I	0.0	0.00011	0.00104
A301O	0.00032	0.00001	0.03629
A302I	0.00007	0.03180	0.00016
A302O	0.00003	0.00101	0.0
A303I	0.00008	0.02792	0.00013
A303O	0.00005	0.00158	0.0
A304I	0.00009	0.02167	0.00015
A304O	0.00008	0.00194	0.0
A305I	0.00008	0.02050	0.00019
A305O	0.00015	0.00164	0.0
A306I	0.0	0.00009	0.00001
A306O	0.04879	0.0	0.10764
A307I	0.0	0.00081	0.00111
A307O	0.02735	0.03941	0.0
A308I	0.00136	0.03528	0.00003
A308O	0.00261	0.00057	0.0
A309I	0.00535	0.04718	0.00000
A309O	0.00090	0.00042	0.0
A310I	0.00001	0.00010	0.00000
A310O	0.00002	0.00281	0.00005
A311I	0.0	0.00054	0.00086
A311O	0.00032	0.00044	0.0
A312I	0.00000	0.00001	0.00013
A312O	0.04680	0.0	0.07498

※Iは接液部、Oは大気中の評価点を表す

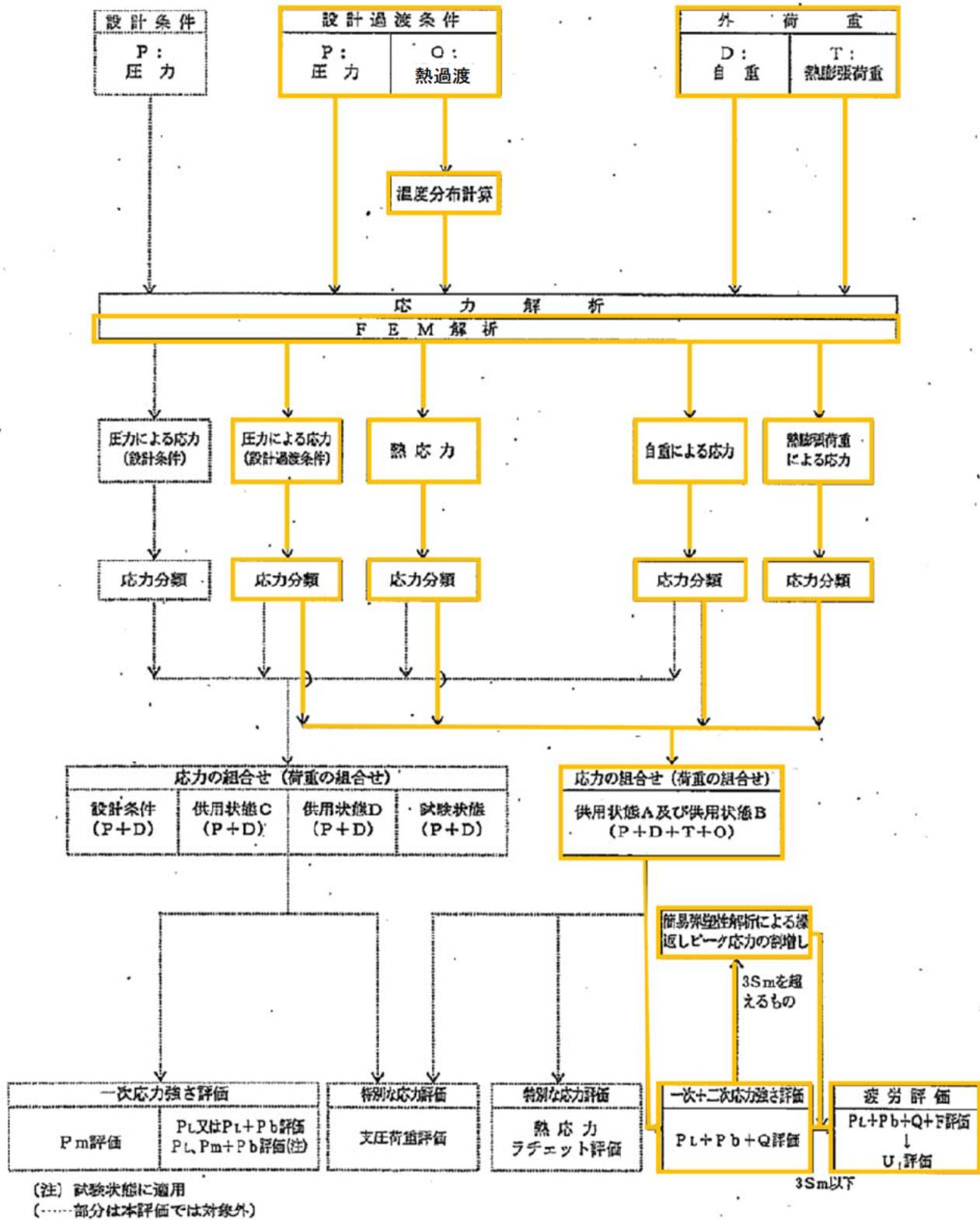
※A204IおよびA309Iは同値であるため、両評価点について、環境効果を考慮した疲労累積係数を算出する。

## 脚部 疲労評価結果 (評価点 : A2010)

応力強さ		( 単位 : N/mm <sup>2</sup> )			繰返し回数		疲れ係数
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	(=N/N*)
147.8	-658.3	1.89	763.6	844.1	74	912	0.08114
77.7	-572.1	1.63	530.0	585.9	5	3290	0.00152
77.7	-520.3	1.52	453.5	501.3	7	5970	0.00117
77.7	-516.0	1.47	437.1	483.2	51	6920	0.00737
-32.0	-490.7	1.89	434.5	480.3	74	7090	0.01044
38.7	-516.0	1.45	402.6	445.0	12	9640	0.00124
38.7	-467.3	1.50	378.7	418.6	7	12900	0.00054
38.7	-497.7	1.41	378.1	418.0	9	13000	0.00069
38.7	-499.2	1.40	376.6	416.3	42	13200	0.00318
0.0	-499.2	1.22	304.1	336.1	37	38400	0.00096
0.0	-493.1	1.21	298.1	329.5	26	42400	0.00061
-31.5	-493.1	1.17	271.1	299.7	63	70300	0.00090
-50.9	-493.3	1.16	256.4	283.5	2	95300	0.00002
-50.9	-493.1	1.16	256.3	283.3	61	95500	0.00064
-307.6	-493.1	1.03	95.5	105.6	2	18900000	0.00000
-348.2	-493.1	1.03	74.6	82.5	2		0.0
疲れ累積係数 =							0.11043

→通常UF : 0.111

応力評価フロー



## Ke係数と環境疲労パラメータ (吸込ノズル 評価点SU12I) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin	KE	補正前 sall	補正後 sall'	n	n*	u	fen	uen
2I1	2D3	75.0	-274.8	1.00	174.9	193.3	2	1010000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	2G1	75.0	-196.9	1.00	136.0	150.3	2	2410000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	2E1	75.0	-177.4	1.00	126.2	139.5	2	3330000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	2J1	75.0	-173.7	1.00	124.3	137.5	5	3550000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	1I1	75.0	-172.7	1.00	123.9	136.9	52	3610000	0.00001	1.000	0.00001
1A1	1I1	72.6	-172.7	1.00	122.7	135.6	18	3760000	0.00000	1.000	0.00000
1A1	2H1	72.6	-138.1	1.00	105.3	116.5	2	8360000	0.00000	1.000	0.00000
1A1	2D2	72.6	-133.7	1.00	103.2	114.0	2	9460000	0.00000	1.000	0.00000
1A1	2F1	72.6	-126.9	1.00	99.7	110.3	3	12600000	0.00000	1.000	0.00000
1A1	1B1	72.6	-108.7	1.00	90.6	100.2	49	41400000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1B1	1.4	-108.7	1.00	55.0	60.8	25	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.00003

→環境UF : 0.001

## K e 係数と環境疲労パラメータ (吐出ノズル 評価点HA04I) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前	補正後					
					salt	salt'					
1B1	1A1	348.2	-341.8	1.79	617.4	682.5	74	1860	0.03973	14.936	0.59424
2I2	2I1	263.4	-299.7	1.47	414.2	457.9	63	8590	0.00733	7.326	0.05373
1I1	2B1	197.1	-138.3	1.00	167.7	185.4	5	1160000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2A1	197.1	-129.3	1.00	163.2	180.4	7	1260000	0.00001	1.000	0.00001
1I1	2E1	197.1	-104.9	1.00	151.0	166.9	2	1630000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D2	197.1	-71.9	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D3	197.1	-71.9	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2C1	197.1	-67.2	1.00	132.1	146.1	2	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1G1	197.1	-54.0	1.00	125.5	138.8	9	3400000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1F1	197.1	-44.3	1.00	120.7	133.4	4	4040000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1J1	197.1	-43.9	1.00	120.5	133.2	37	4060000	0.00001	1.000	0.00001
2D3	1J1	182.2	-43.9	1.00	113.0	125.0	2	5500000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	1B1	55.5	-38.2	1.70	79.6	88.0	63	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.64800

→環境UF : 0.649

## Ke係数と環境疲労パラメータ (脚部 評価点A204I) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin	KE	補正前 salt	補正後 salt'	n	n*	u	fen	uen
1B1	1A1	345.3	-344.8	1.79	617.6	682.8	74	1860	0.03978	14.683	0.58415
2I2	2I1	260.5	-302.7	1.47	414.6	458.3	63	8560	0.00736	7.371	0.05425
1I1	2B1	194.1	-141.2	1.00	167.7	185.3	5	1160000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2A1	194.1	-132.3	1.00	163.2	180.4	7	1260000	0.00001	1.000	0.00001
1I1	2E1	194.1	-107.9	1.00	151.0	166.9	2	1630000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D2	194.1	-74.8	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D3	194.1	-74.8	1.00	134.5	148.6	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1G1	194.1	-71.0	1.00	132.6	146.6	9	2690000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D1	194.1	-70.1	1.00	132.1	146.1	8	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2C1	194.1	-70.1	1.00	132.1	146.1	2	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2G1	194.1	-69.3	1.00	131.7	145.6	2	2770000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1J1	194.1	-60.8	1.00	127.5	140.9	31	3190000	0.00001	1.000	0.00001
2D3	1J1	179.2	-60.8	1.00	120.0	132.6	2	4140000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	2I2	52.6	-58.6	1.47	81.9	90.5	63	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.63843

→環境UF : 0.639

## Ke係数と環境疲労パラメータ (脚部 評価点A309I) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin	KE	補正前 salt	補正後 salt'	n	n*	u	fen	uen
1B1	1A1	344.4	-345.6	1.79	617.7	682.8	74	1860	0.03978	14.682	0.58411
2I2	2I1	259.6	-303.6	1.47	414.6	458.3	63	8560	0.00736	7.371	0.05425
1I1	2B1	193.3	-142.1	1.00	167.7	185.3	5	1160000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2A1	193.3	-133.1	1.00	163.2	180.4	7	1260000	0.00001	1.000	0.00001
1I1	2E1	193.3	-108.7	1.00	151.0	166.9	2	1630000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D2	193.3	-75.7	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D3	193.3	-75.7	1.00	134.5	148.6	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1G1	193.3	-71.9	1.00	132.6	146.6	9	2690000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D1	193.3	-71.0	1.00	132.1	146.1	8	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2C1	193.3	-71.0	1.00	132.1	146.1	2	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2G1	193.3	-70.2	1.00	131.7	145.6	2	2760000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1J1	193.3	-61.6	1.00	127.5	140.9	31	3190000	0.00001	1.000	0.00001
2D3	1J1	178.3	-61.6	1.00	120.0	132.6	2	4140000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	2I2	51.8	-59.5	1.47	81.9	90.6	63	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.63839

→環境UF : 0.639

タイトル	蒸気発生器本体管板及び給水入口管台の疲労累積係数の算出根拠について																					
説明	<p>蒸気発生器本体管板及び給水入口管台の疲労累積係数の算出根拠は以下の通りである。</p> <p>1. 解析モデル 疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="475 815 1310 1095"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>ABAQUS Ver. 2018</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> </tr> <tr> <td>節点数</td> </tr> <tr> <td>要素数</td> </tr> </table> <p>2. 材料物性値 材料物性値を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="429 1211 1378 1476"> <thead> <tr> <th rowspan="2">使用箇所</th> <th rowspan="2">材料</th> <th colspan="2">設計応力強さ</th> </tr> <tr> <th>S<sub>m</sub> (MPa)</th> <th>温度 (°C)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>給水入口管台</td> <td>S F V Q 2 A</td> <td>1 8 4</td> <td>2 7 6 . 9</td> </tr> <tr> <td>管板及び管板まわり</td> <td>S F V Q 1 A</td> <td>1 8 4</td> <td>3 2 4 . 9</td> </tr> </tbody> </table> <p>3. 最大評価点の選定 解析モデル上の評価点は、構造不連続部等において応力が大きくなる評価断面を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。</p> <p>管板及び管板まわりについては、設計・建設規格による評価において疲労累積係数が最大となる評価点が、ニッケル基合金の内張りにより接液しないため、内張りを施していない接液部で疲労累積係数が最大となる評価点の疲労累積係数を用いて環境疲労評価を実施している。</p> <p>また、給水入口管台については、熱成層による影響を考慮して最大となる環境疲労評価を示している。</p> <p>解析モデル上の評価結果および最大評価点の選定結果を添付 1 に示す。</p>	解析プログラム	ABAQUS Ver. 2018	要素種類		要素次数	節点数	要素数	使用箇所	材料	設計応力強さ		S <sub>m</sub> (MPa)	温度 (°C)	給水入口管台	S F V Q 2 A	1 8 4	2 7 6 . 9	管板及び管板まわり	S F V Q 1 A	1 8 4	3 2 4 . 9
解析プログラム	ABAQUS Ver. 2018																					
要素種類																						
要素次数																						
節点数																						
要素数																						
使用箇所	材料	設計応力強さ																				
		S <sub>m</sub> (MPa)	温度 (°C)																			
給水入口管台	S F V Q 2 A	1 8 4	2 7 6 . 9																			
管板及び管板まわり	S F V Q 1 A	1 8 4	3 2 4 . 9																			

#### 4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力評価のフローを添付2に示す。

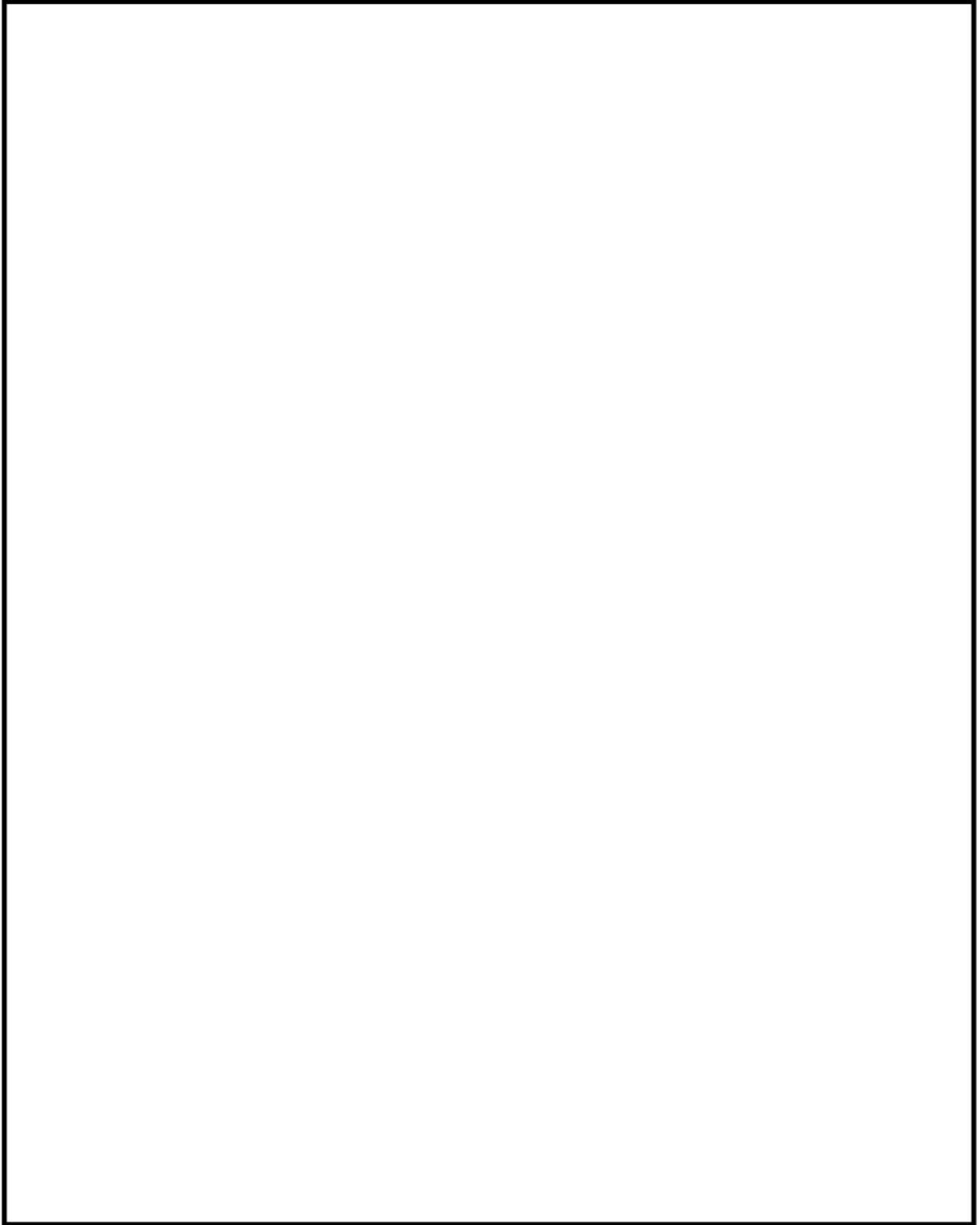
状態	荷重の組み合わせ
供用状態A, B	圧力、機械的荷重、自重、熱膨張荷重、熱過渡

#### 5. Ke係数および環境パラメータ

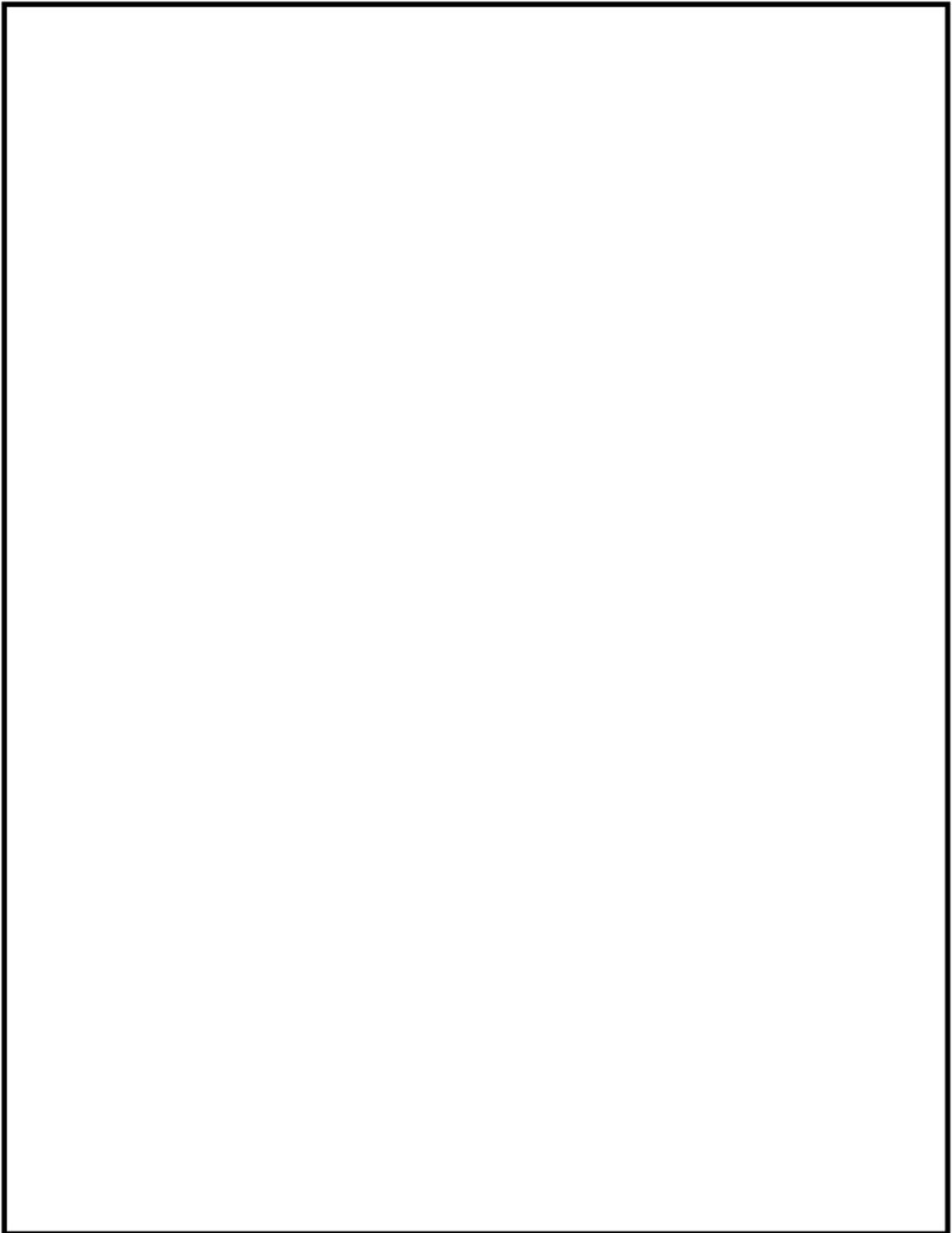
評価に用いたKe係数および環境評価パラメータ（環境効果補正係数fen）を添付3に示す。

なお、評価に用いた溶存酸素濃度は、主給水の管理基準より0.005ppmとした。

評価に用いた材料中の硫黄含有量は、材料規格における最大値である0.025%とした。



蒸気発生器本体 管板及び管板まわり 評価点



蒸気発生器本体 給水入口管台 評価点

蒸気発生器本体 最大疲労評価点の選定 (1/2)  
管板および管板まわり

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.04562	0.00103	0.05215
2	0.0	0.00269	0.00073
3	0.05337	0.00028	0.12035
4	0.0	0.00018	0.00026
P1 SIDE R/R* = 0.0		0.01675	
P1 SIDE R/R* = 1.0		0.16463	
P2 SIDE R/R* = 0.0		0.04188	
P2 SIDE R/R* = 1.0		0.03326	

疲労累積係数(最大)  
(ただし、非接液)

許容値  $U_f=1.0$

→通常 $U_f$  : 0.165

蒸気発生器本体 最大疲労評価点の選定 (2/2)  
給水入口管台

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.00000	0.00631	0.01361
2	0.0	0.00019	0.00074
3	0.00010	0.00646	0.03696
4	0.0	0.00027	0.00448
5	0.00394	0.07242	0.00864
6	0.0	0.00003	0.00002
7	0.02598	0.07917	0.00012
8	0.00366	0.0	0.00012
9L	0.12563	0.19412	0.00000
10L	0.0	0.00265	0.00125
9C	0.01465	0.01968	0.00226
10C	0.00014	0.04037	0.01978
11L	0.19164	0.12435	0.0
12L	0.0	0.00268	0.00127
11C	0.01715	0.01541	0.00236
12C	0.00000	0.04050	0.02007
13L	0.09324	0.04687	0.0
14L	0.00001	0.00274	0.00304
13C	0.00308	0.0	0.00174
14C	0.00003	0.04180	0.02842

疲労累積係数(最大)  
(接液する評価点)

許容値  $U_f=1.0$

→通常 $U_f$  : 0.195

## 蒸気発生器本体 疲労評価結果 管板及び管板まわり (評価点 : 1 次側 R/R\*=1.0)

評価点 - P1 SIDE R/R\* = 1.0

応力強さ		( 単位 : MPa )			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
847.4	-313.5	1.0	580.4	694.5	2	565	0.00354
832.9	-313.5	1.0	573.2	685.9	61	586	0.10410
832.9	0.0	1.0	416.4	498.3	2	1440	0.00139
806.4	0.0	1.0	403.2	482.5	2	1570	0.00127
786.5	0.0	1.0	393.3	470.5	2	1680	0.00119
729.7	0.0	1.0	364.9	436.6	3	2060	0.00146
728.8	0.0	1.0	364.4	436.0	2	2070	0.00097
684.8	0.0	1.0	342.4	409.7	2	2530	0.00079
665.8	0.0	1.0	332.9	398.3	8	2760	0.00290
661.2	0.0	1.0	330.6	395.6	2	2830	0.00071
620.2	0.0	1.0	310.1	371.1	5	3470	0.00144
545.8	0.0	1.0	272.9	326.5	172	5200	0.03308
545.8	26.7	1.0	259.5	310.5	70	6040	0.01159
545.8	175.7	1.0	185.0	221.4	2	17700	0.00011
545.8	319.3	1.0	113.2	135.5	2	106000	0.00002
545.8	319.7	1.0	113.0	135.2	7	107000	0.00007
545.8	375.4	1.0	85.2	101.9	5	330000	0.00002
545.8	409.2	1.0	68.3	81.7	636		0.0
疲労累積係数 =							0.16463

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

→通常UF : 0.165

## 蒸気発生器本体 疲労評価結果 給水入口管台 (評価点: 9L)

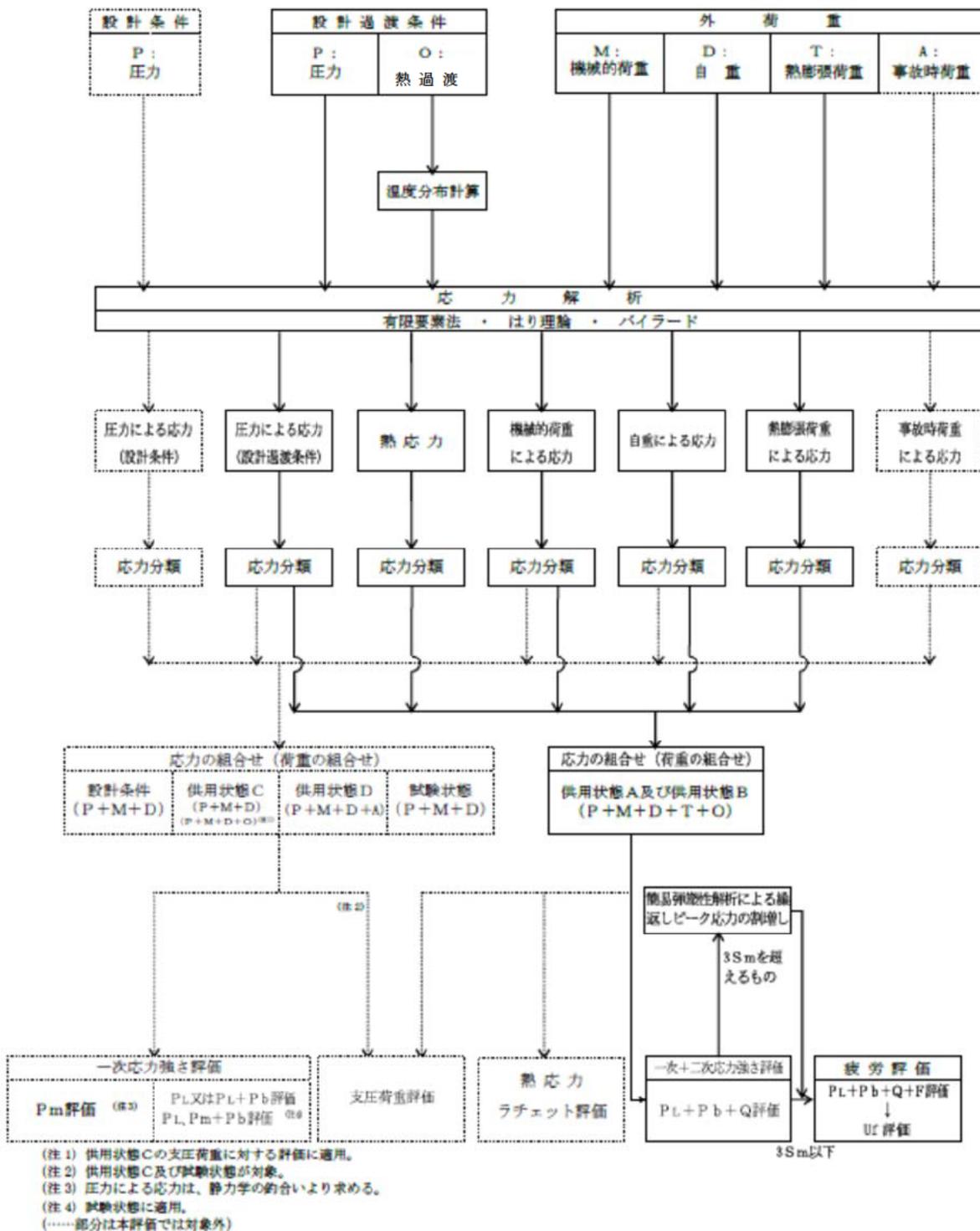
評価点 - 9L  
(S23)

応力強さ		(単位: MPa)			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
954.3	-12.6	1.0	483.5	565.4	5	1030	0.00485
845.2	-12.6	1.0	428.9	501.6	69	1410	0.04894
845.2	-11.5	1.0	428.3	500.9	21	1420	0.01479
810.0	-11.5	1.0	410.7	480.3	53	1590	0.03333
810.0	0.0	1.0	405.0	473.6	15	1650	0.00909
804.2	0.0	1.0	402.1	470.3	79	1680	0.04702
791.1	0.0	1.0	395.5	462.6	9	1760	0.00511
787.1	0.0	1.0	393.5	460.3	2	1780	0.00112
777.1	0.0	1.0	388.6	454.4	2	1840	0.00109
772.4	0.0	1.0	386.2	451.6	30	1870	0.01604
772.4	295.6	1.0	238.4	278.8	5	8310	0.00060
772.4	428.1	1.0	172.2	201.3	2	24100	0.00008
772.4	443.3	1.0	164.6	192.4	3	27700	0.00011
772.4	504.9	1.0	133.7	156.4	2	54100	0.00004
772.4	508.3	1.0	132.1	154.4	0	57600	0.00000
772.4	513.9	1.0	129.2	151.1	2	64100	0.00003
772.4	514.8	1.0	128.8	150.6	2	65100	0.00003
772.4	517.1	1.0	127.6	149.3	4	68100	0.00006
772.4	526.3	1.0	123.0	143.9	2	81500	0.00002
772.4	526.7	1.0	122.8	143.7	2	82100	0.00002
772.4	528.2	1.0	122.1	142.8	840	84600	0.00993
772.1	528.2	1.0	122.0	142.6	63	85000	0.00074
772.1	529.7	1.0	121.2	141.7	0	87700	0.00000
772.1	529.7	1.0	121.2	141.7	3	87700	0.00003
772.1	547.1	1.0	112.5	131.6	4	118000	0.00003
772.1	550.1	1.0	111.0	129.8	0	124000	0.00000
772.1	552.0	1.0	110.1	128.7	5	128000	0.00004
772.1	562.4	1.0	104.9	122.7	4	153000	0.00003
772.1	577.3	1.0	97.4	113.9	74	200000	0.00037
772.1	577.3	1.0	97.4	113.9	74	200000	0.00037
772.1	585.9	1.0	93.1	108.9	2	245000	0.00001
772.1	605.1	1.0	83.5	97.7	63	400000	0.00016
772.1	617.4	1.0	77.3	90.5	2	639000	0.00000
772.1	619.7	1.0	76.2	89.1	2	730000	0.00000
772.1	622.0	1.0	75.1	87.8	8	834000	0.00001
772.1	624.8	1.0	73.7	86.1	2	984000	0.00000
772.1	699.0	1.0	36.5	42.7	2	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.19412

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

→通常UF : 0.195

応力評価フロー



## K e 係数と環境疲労パラメータ (管板及び管板まわり 評価点①) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2J1	2E1	216.2	-484.5	1.00	350.3	419.2	2	2350	0.00085	3.930	0.00334
2J1	2K1	216.2	-444.7	1.00	330.5	395.4	61	2830	0.02155	1.000	0.02155
1A1	2K1	84.2	-444.7	1.00	264.5	316.4	2	5710	0.00035	4.699	0.00165
1A1	2D5	84.2	-398.0	1.00	241.1	288.5	2	7510	0.00027	4.164	0.00111
1A1	2F1	84.2	-346.8	1.00	215.5	257.8	3	10500	0.00029	3.944	0.00113
1A1	2D3	84.2	-329.4	1.00	206.8	247.4	2	12000	0.00017	4.116	0.00069
1A1	2C2	84.2	-316.8	1.00	200.5	239.9	2	13400	0.00015	4.133	0.00062
1A1	2G1	84.2	-315.7	1.00	199.9	239.2	2	13500	0.00015	4.173	0.00062
1A1	2D1	84.2	-300.1	1.00	192.1	229.9	8	15600	0.00051	4.121	0.00211
1A1	2A1	84.2	-290.4	1.00	187.3	224.1	7	17000	0.00041	4.338	0.00179
1A1	1G1	84.2	-287.0	1.00	185.6	222.1	9	17500	0.00051	4.861	0.00250
1A1	1L1	84.2	-267.0	1.00	175.6	210.1	2	21100	0.00009	4.211	0.00040
1A1	2H2	84.2	-258.4	1.00	171.3	205.0	2	22800	0.00009	4.085	0.00036
1A1	2B2	84.2	-255.5	1.00	169.8	203.2	5	23400	0.00021	4.896	0.00105
1A1	1D1	84.2	-251.2	1.00	167.7	200.7	28	24300	0.00115	4.886	0.00563
2H1	1D1	32.3	-251.2	1.00	141.8	169.6	2	40900	0.00005	4.351	0.00021
1C1	1D1	19.5	-251.2	1.00	135.4	162.0	864	47200	0.01831	5.132	0.09393
1C1	1B1	19.5	-251.1	1.00	135.3	161.9	39	47200	0.00083	5.057	0.00418
NSS	1B1	0.0	-251.1	1.00	125.6	150.3	35	65900	0.00053	5.369	0.00285
NSS	1K1	0.0	-244.0	1.00	122.0	146.0	68	75900	0.00090	5.369	0.00481
NSS	2I1	0.0	-242.1	1.00	121.1	144.9	5	78800	0.00006	5.290	0.00034
NSS	1A1	0.0	-237.6	1.00	118.8	142.1	74	86500	0.00086	4.699	0.00402
NSS	1J1	0.0	-231.8	1.00	115.9	138.7	18	97500	0.00018	1.000	0.00018
1H1	1J1	-15.9	-231.8	1.00	108.0	129.2	0	127000	0.00000	4.041	0.00000
1E1	1J1	-23.7	-231.8	1.00	104.1	124.5	4	145000	0.00003	4.910	0.00014
1I1	1J1	-24.8	-231.8	1.00	103.5	123.9	57	147000	0.00039	1.814	0.00070
1I1	1I1	-24.8	-219.7	1.00	97.5	116.6	13	184000	0.00007	1.814	0.00013
2C2	1I1	-26.0	-219.7	1.00	96.9	115.9	2	188000	0.00001	2.869	0.00003
1G1	1I1	-30.1	-219.7	1.00	94.8	113.5	9	204000	0.00004	3.732	0.00016
1D1	1I1	-31.6	-219.7	1.00	94.1	112.6	46	211000	0.00022	3.659	0.00080
1D1	1L3	-31.6	-215.4	1.00	91.9	110.0	2	235000	0.00001	5.156	0.00004
1D1	1C1	-31.6	-206.7	1.00	87.6	104.8	846	292000	0.00290	5.156	0.01494
1H1	1C1	-43.7	-206.7	1.00	81.5	97.5	0	404000	0.00000	1.991	0.00000
1E1	1C1	-48.4	-206.7	1.00	79.2	94.7	4	460000	0.00001	1.000	0.00001
1F1	1C1	-62.4	-206.7	1.00	72.2	86.3	4	964000	0.00000	1.000	0.00000
2J2	1C1	-90.0	-206.7	1.00	58.4	69.8	49	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.17202

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.042\%$  (salt' $\leq 86.9$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.173

## Ke係数と環境疲労パラメータ (給水入口管台 評価点11L) (詳細評価手法)

過渡条件 記号		一次十二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt					
1B1	2B2	21.1	-964.7	1.00	492.9	576.4	5	977	0.00512	4.035	0.02065
1B1	2T1	21.1	-892.5	1.00	456.8	534.2	69	1190	0.05798	4.161	0.24129
1A1	2T1	19.9	-892.5	1.00	456.2	533.5	21	1200	0.01750	2.928	0.05124
1A1	1K1	19.9	-820.9	1.00	420.4	491.6	53	1490	0.03557	2.152	0.07655
NSS	1K1	0.0	-820.9	1.00	410.4	480.0	15	1590	0.00943	2.340	0.02208
NSS	1J1	0.0	-815.4	1.00	407.7	476.8	79	1620	0.04877	1.000	0.04877
NSS	1G1	0.0	-796.1	1.00	398.1	465.5	9	1730	0.00520	3.044	0.01583
NSS	2D3	0.0	-795.2	1.00	397.6	465.0	2	1730	0.00116	2.504	0.00289
NSS	1L4	0.0	-788.0	1.00	394.0	460.8	2	1770	0.00113	2.396	0.00271
NSS	1C1	0.0	-783.3	1.00	391.6	458.0	30	1800	0.01667	1.000	0.01667
2I1	1C1	-301.0	-783.3	1.00	241.1	282.0	5	8040	0.00062	1.000	0.00062
2D4	1C1	-442.6	-783.3	1.00	170.3	199.2	2	24900	0.00008	2.108	0.00017
2F1	1C1	-450.4	-783.3	1.00	166.4	194.6	3	26700	0.00011	2.717	0.00031
2D2	1C1	-511.7	-783.3	1.00	135.8	158.8	2	50200	0.00004	2.291	0.00009
1H1	1C1	-519.5	-783.3	1.00	131.9	154.2	0	58000	0.00000	1.902	0.00000
2H1	1C1	-524.7	-783.3	1.00	129.3	151.2	2	63900	0.00003	3.005	0.00009
2E1	1C1	-525.4	-783.3	1.00	128.9	150.8	2	64800	0.00003	2.376	0.00007
1E1	1C1	-527.7	-783.3	1.00	127.8	149.4	4	67700	0.00006	3.760	0.00022
1L1	1C1	-537.1	-783.3	1.00	123.1	143.9	2	81400	0.00002	1.000	0.00002
2C2	1C1	-539.0	-783.3	1.00	122.1	142.8	2	84500	0.00002	2.756	0.00007
1F1	1C1	-541.0	-783.3	1.00	121.1	141.6	4	88000	0.00005	3.772	0.00017
2D1	1C1	-542.2	-783.3	1.00	120.5	141.0	8	90100	0.00009	2.934	0.00026
1E1	1C1	-560.9	-783.3	1.00	111.2	130.0	4	124000	0.00003	3.760	0.00012
1H1	1C1	-563.8	-783.3	1.00	109.7	128.3	0	130000	0.00000	1.602	0.00000
2I1	1C1	-572.0	-783.3	1.00	105.6	123.6	5	149000	0.00003	1.000	0.00003
1F1	1C1	-576.8	-783.3	1.00	103.2	120.7	4	162000	0.00002	3.610	0.00009
1L2	1C1	-598.1	-783.3	1.00	92.6	108.3	2	252000	0.00001	1.000	0.00001
1A1	1C1	-599.6	-783.3	1.00	91.8	107.4	74	261000	0.00028	5.284	0.00150
1B1	1C1	-599.6	-783.3	1.00	91.8	107.4	74	261000	0.00028	1.000	0.00028
2K1	1C1	-626.7	-783.3	1.00	78.3	91.5	63	575000	0.00011	1.000	0.00011
2C1	1C1	-636.4	-783.3	1.00	73.4	85.9	2	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.50291

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.042\%$  (salt'  $\leq 86.9$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.503

タイトル	蒸気発生器給水入口管台における、熱成層現象の想定と根拠、熱過渡・応力評価の方法および評価結果について
説明	<p>蒸気発生器給水入口管台では、プラント起動・停止時等における低温水の微小給水および停止により、熱成層の発生・消滅が繰返される可能性があることから、熱成層の発生を想定した環境疲労評価を行っている。</p> <p>環境疲労評価における熱成層現象の想定と根拠、熱過渡・応力評価の方法及び評価結果を添付 1 に示す。</p>

大飯3号炉 蒸気発生器給水入口管台の環境疲労評価(熱成層考慮)

## 1. 概要

本資料は、蒸気発生器給水入口管台の環境疲労評価の結果についてまとめたものである。  
その結果、環境疲労累積係数(以降 環境U. F. と記す)は $0.503 < 1.0$ であり、問題ないことを確認した。

## 2. 評価方針

## 2.1 適用規格・基準

- 1) 日本機械学会「発電用原子力設備規格 設計・建設規格」  
(JSME S NC1-2005/2007、以降「設計・建設規格」と記す。)
- 2) 日本機械学会「発電用原子力設備規格 環境疲労評価手法」  
(JSME S NF1-2009、以降「環境疲労評価手法」と記す。)

## 2.2 評価手法

## (1) 環境疲労評価手法

環境疲労評価は、環境疲労評価手法に従って評価を行うものとし、設計・建設規格に基づき算出したU. F. に環境効果補正係数(Fen)を掛け合わせるにより求める。

$$\text{環境U. F.} = \text{U. F.} \times \text{Fen}$$

## 3. 給水入口管台の疲労評価条件

## 3.1 解析モデル化の方法

給水入口管台の環境疲労評価対象部位を図1に示す。

熱成層応力の解析は3次元のFEM解析により行う。

## (1) 熱成層応力の解析モデル

熱成層応力の解析においては評価部位周辺を3次元モデルでモデル化した有限要素法解析により行う。

管台及び管台近傍の配管を3次元でモデル化し、その箇所からアンカーサポートまでをはり要素でモデル化する。

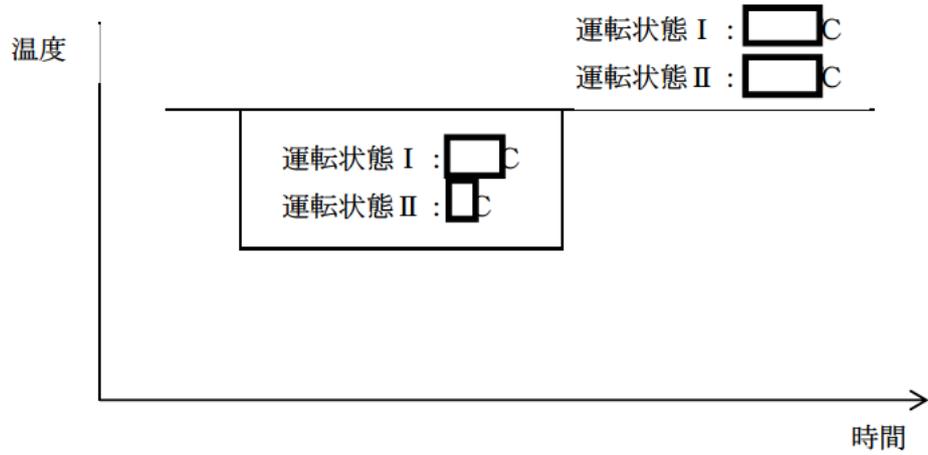
解析に使用したモデルを図2, 3, 4に示す。

## (2) 解析コード

解析コードはABAQUS Ver. 2018を使用する。

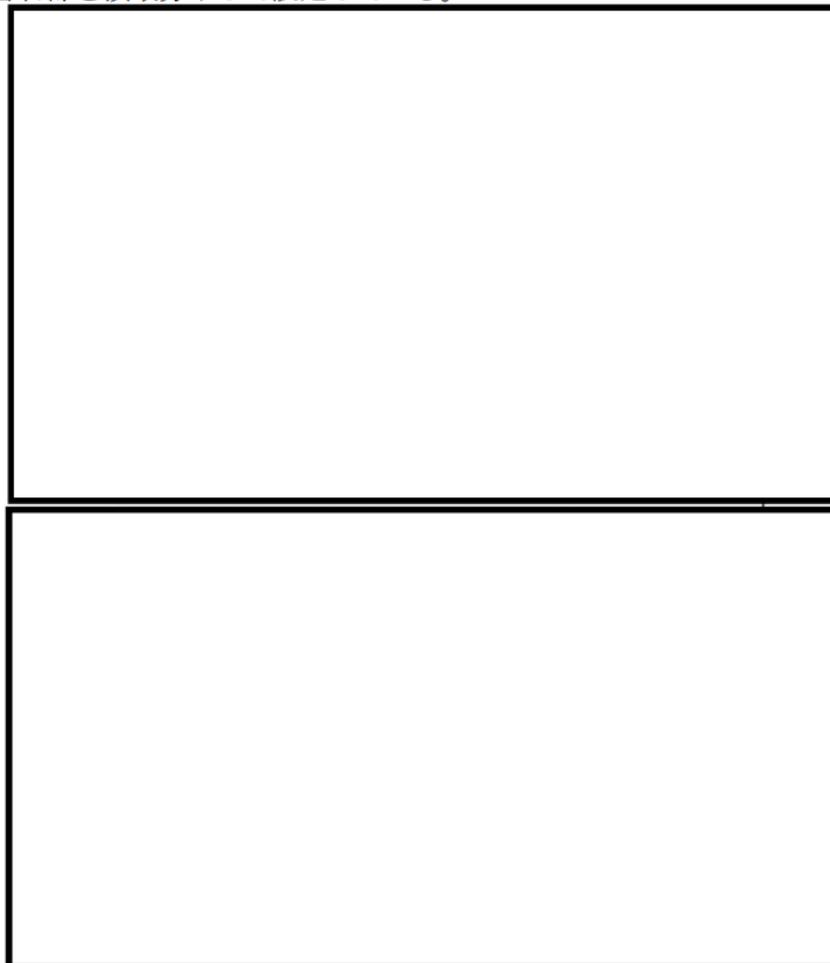
(3) 過渡条件

熱成層の発生・消滅過程を安全側に以下のように定める。



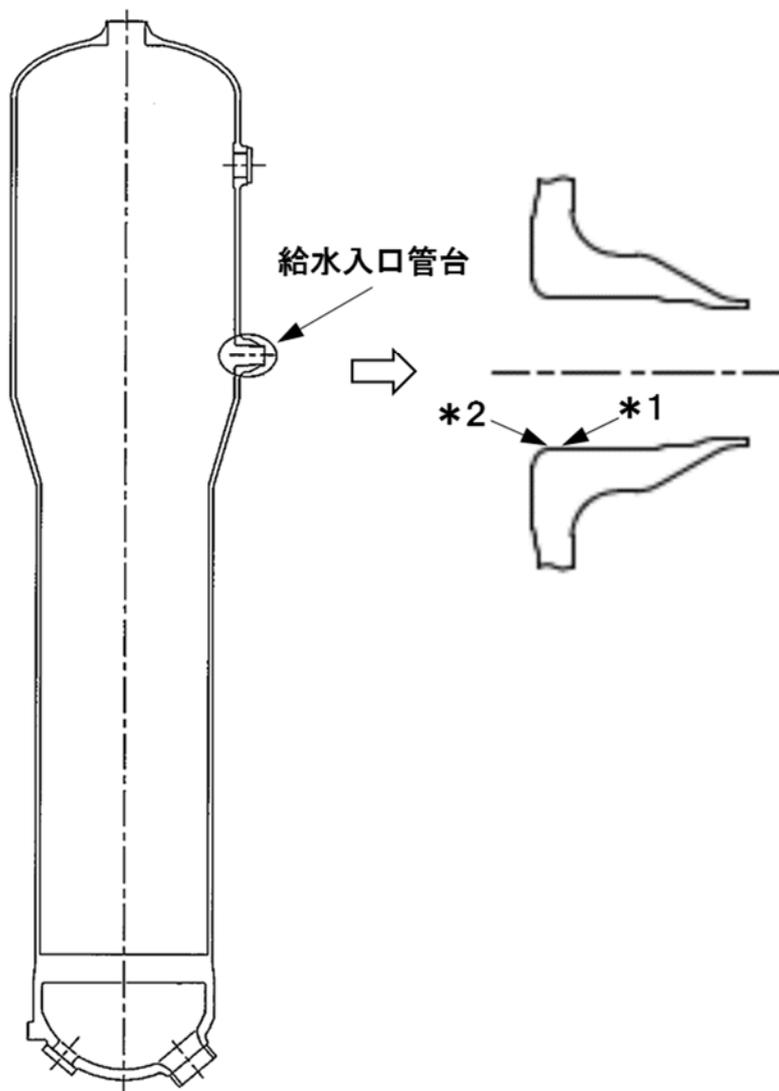
(4) 熱伝達率

熱成層による応力の解析に用いる熱伝達率は、以下に示すとおり流量及び温度から給水管台部を領域分けして設定している。



(5) 物性値

熱成層による応力の解析に用いる材料の物性値は表1に示すとおりである。



\* 1 : 「設計・建設規格」に基づく疲労評価対象部位(最大)

(非接液部の場合は ( ) 内に理由を記載)

\* 2 : 「環境疲労評価手法」に基づく疲労評価対象部位(最大) (接液部が対象)

図1 大飯3号炉 蒸気発生器給水入口管台の疲労割れ評価対象部位

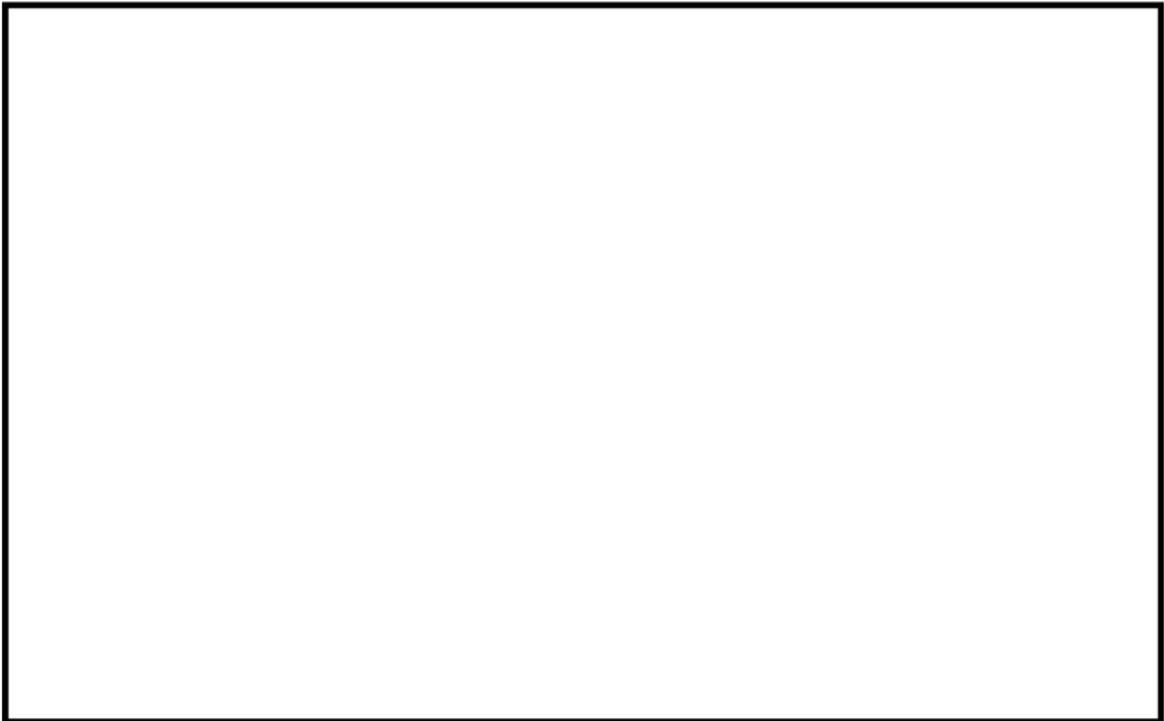


図2 解析モデル (全体図)

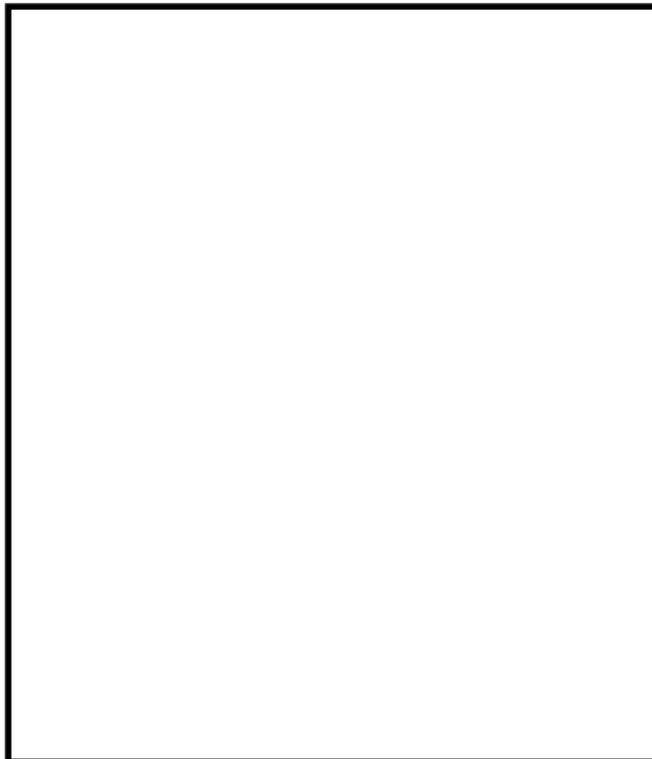
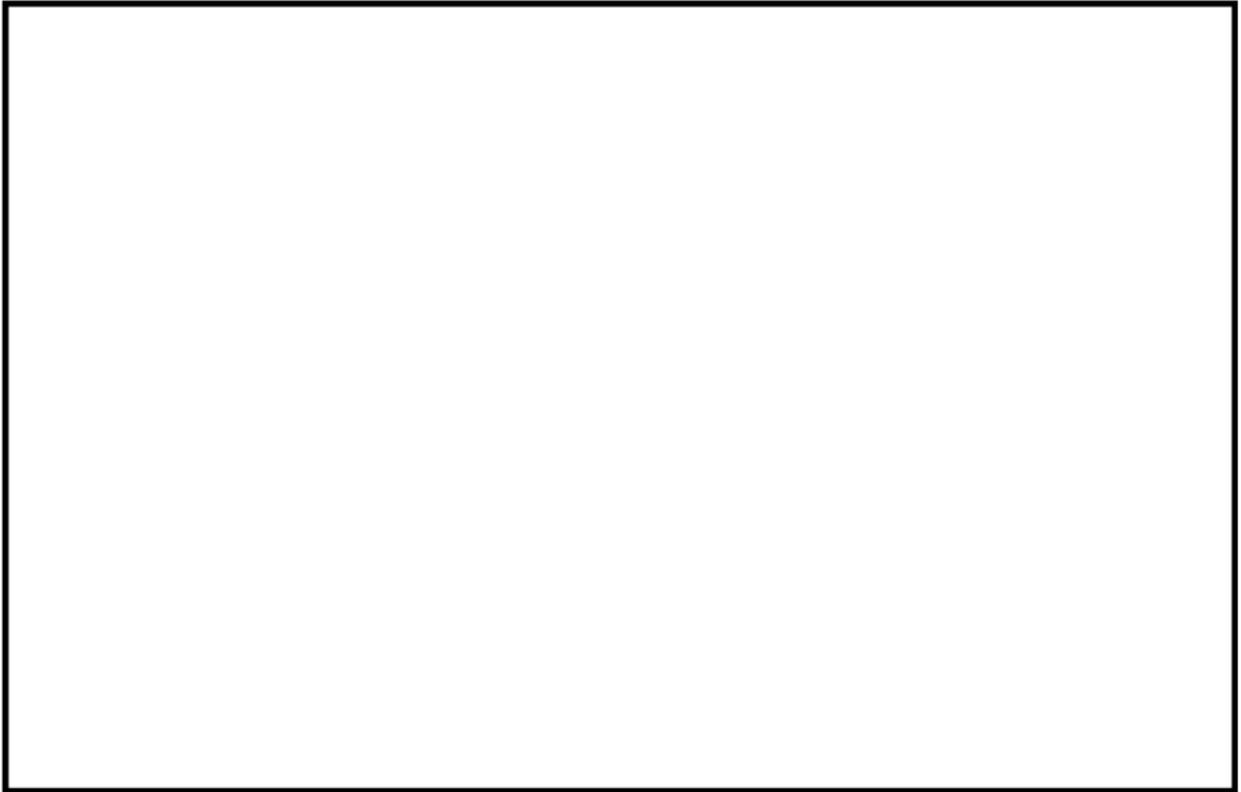


図3 解析モデル (断面図)



\* 1 : 接液部のうち熱成層による熱応力の影響が大きいと判断される箇所

図4 解析モデル (拡大図)

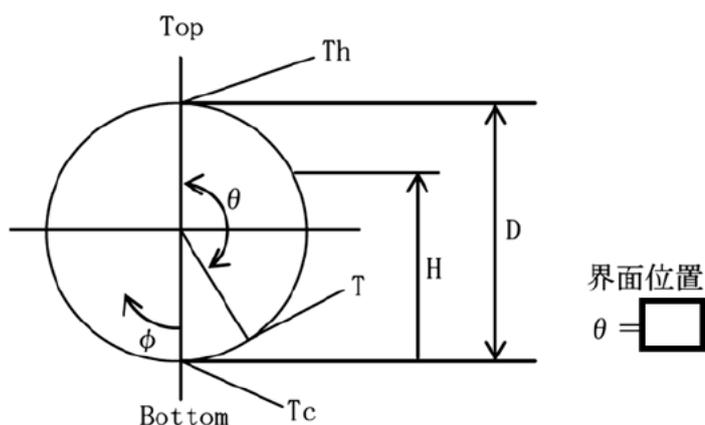
表1 材料物性値

部位	主給水管	給水入口管台	上部胴
材料	STS49	SFVQ2A	SQV2B
熱伝導率 (W/mK)	44.4	39.0	39.0
熱容量 ( $\times 10^3$ kJ/m <sup>3</sup> K)	4.39	4.32	4.32
熱膨脹率 ( $\times 10^{-6}$ mm/mm $^{\circ}$ C)	12.83	13.15	13.94
縦弾性係数 (MPa)	187,000	177,000	185,000
ポアソン比 (-)	0.3	0.3	0.3

(注) 上記物性値は蒸気発生器2次側の定格出力運転時の温度 (276.9 $^{\circ}$ C) における値であり、解析上は温度依存性を考慮してそれぞれの時刻の温度に基づく値を使用している。

#### (6) 温度プロファイル

過去に他実機プラントである大飯1号機での給水管内熱成層発生時の応力を計測しており、熱成層界面位置が水平頂部からの角度  $\theta = \square$  の場合に最大応力が確認されている。大飯1号機と大飯3号機では給水管台の形状 (口径) が同等であることから、大飯1号機にて最大応力が確認された水平配管頂部からの角度  $\theta = \square$  を界面位置に設定している。



### 3.2 過渡条件

#### (1) 過渡回数

これまでの運転実績に基づく運転開始後60年時点での推定過渡回数で評価を実施する。

#### (2) 温度条件

低温水の微小給水・給水停止の繰返しによる熱成層の発生・消滅を評価する。

### 4. 評価結果

熱成層を考慮した環境疲労評価結果を表2に、過渡記号を表3に示す。

以上

表2 給水入口管台環境疲労評価結果(環境U. F. が最大となる評価点)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin		KE	補正前 salt					
1B1	2B2	21.1	-964.7	1.00	492.9	576.4	5	977	0.00512	4.035	0.02065
1B1	2T1	21.1	-892.5	1.00	456.8	534.2	69	1190	0.05798	4.161	0.24129
1A1	2T1	19.9	-892.5	1.00	456.2	533.5	21	1200	0.01750	2.928	0.05124
1A1	1K1	19.9	-820.9	1.00	420.4	491.6	53	1490	0.03557	2.152	0.07655
NSS	1K1	0.0	-820.9	1.00	410.4	480.0	15	1590	0.00943	2.340	0.02208
NSS	1J1	0.0	-815.4	1.00	407.7	476.8	79	1620	0.04877	1.000	0.04877
NSS	1G1	0.0	-796.1	1.00	398.1	465.5	9	1730	0.00520	3.044	0.01583
NSS	2D3	0.0	-795.2	1.00	397.6	465.0	2	1730	0.00116	2.504	0.00289
NSS	1L4	0.0	-788.0	1.00	394.0	460.8	2	1770	0.00113	2.396	0.00271
NSS	1C1	0.0	-783.3	1.00	391.6	458.0	30	1800	0.01667	1.000	0.01667
2I1	1C1	-301.0	-783.3	1.00	241.1	282.0	5	8040	0.00062	1.000	0.00062
2D4	1C1	-442.6	-783.3	1.00	170.3	199.2	2	24900	0.00008	2.108	0.00017
2F1	1C1	-450.4	-783.3	1.00	166.4	194.6	3	26700	0.00011	2.717	0.00031
2D2	1C1	-511.7	-783.3	1.00	135.8	158.8	2	50200	0.00004	2.291	0.00009
1H1	1C1	-519.5	-783.3	1.00	131.9	154.2	0	58000	0.00000	1.902	0.00000
2H1	1C1	-524.7	-783.3	1.00	129.3	151.2	2	63900	0.00003	3.005	0.00009
2E1	1C1	-525.4	-783.3	1.00	128.9	150.8	2	64800	0.00003	2.376	0.00007
1E1	1C1	-527.7	-783.3	1.00	127.8	149.4	4	67700	0.00006	3.760	0.00022
1L1	1C1	-537.1	-783.3	1.00	123.1	143.9	2	81400	0.00002	1.000	0.00002
2G2	1C1	-539.0	-783.3	1.00	122.1	142.8	2	84500	0.00002	2.756	0.00007
1F1	1C1	-541.0	-783.3	1.00	121.1	141.6	4	88000	0.00005	3.772	0.00017
2D1	1C1	-542.2	-783.3	1.00	120.5	141.0	8	90100	0.00009	2.934	0.00026
1E1	1C1	-560.9	-783.3	1.00	111.2	130.0	4	124000	0.00003	3.760	0.00012
1H1	1C1	-563.8	-783.3	1.00	109.7	128.3	0	130000	0.00000	1.602	0.00000
2I1	1C1	-572.0	-783.3	1.00	105.6	123.6	5	149000	0.00003	1.000	0.00003
1F1	1C1	-576.8	-783.3	1.00	103.2	120.7	4	162000	0.00002	3.610	0.00009
1L2	1C1	-598.1	-783.3	1.00	92.6	108.3	2	252000	0.00001	1.000	0.00001
1A1	1C1	-599.6	-783.3	1.00	91.8	107.4	74	261000	0.00028	5.284	0.00150
1B1	1C1	-599.6	-783.3	1.00	91.8	107.4	74	261000	0.00028	1.000	0.00028
2K1	1C1	-626.7	-783.3	1.00	78.3	91.5	63	575000	0.00011	1.000	0.00011
2C1	1C1	-636.4	-783.3	1.00	73.4	85.9	2	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :											0.50291

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.042\%$  (salt'  $\leq 86.9$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.503

表 3 過渡記号

記号	過渡事象
1A1	起動
1B1	停止
1C1	負荷上昇(15%から100%出力)
1E1	90%から100%負荷へのステップ状負荷上昇
1F1	100%から90%負荷へのステップ状負荷減少
1G1	100%からの大きいステップ状負荷減少
1H1	定常負荷運転時の変動
1J1	0%→15%への負荷上昇
1K1	15%→0%への負荷減少
1L1	1ループ停止／1ループ起動(1ループ停止・停止ループ)
1L2	1ループ停止／1ループ起動(1ループ停止・運転ループ)
1L4	1ループ停止／1ループ起動(1ループ起動・運転ループ)
2B2	外部電源喪失(補助給水されないループ)
2C1	1次冷却材流量の部分喪失(健全側)
2C2	1次冷却材流量の部分喪失(故障側)
2D1	100%からの原子炉トリップ(不注意な冷却を伴わない)
2D2	100%からの原子炉トリップ(不注意な冷却を伴う・冷却ループ)
2D3	100%からの原子炉トリップ(不注意な冷却を伴う・正常ループ)
2D4	100%からの原子炉トリップ(不注意な冷却とS Iを伴う・冷却ループ)°
2E1	1次冷却系の異常な減圧
2F1	制御棒クラスタの落下
2H1	1次冷却系停止ループの誤起動(起動ループ)
2I1	タービン回転試験
2K1	2次系漏洩試験
2T1	運転状態Ⅱにおける低温給水
NSS	無応力状態

<p>タイトル</p>	<p>加圧器スプレイライン用管台等の疲労累積係数の算出根拠について</p>														
<p>説明</p>	<p>加圧器スプレイライン用管台およびサージ用管台の疲労累積係数の算出根拠を以下に示す。</p> <p>1. 解析モデル 疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <p><b>【通常疲労】</b></p> <table border="1" data-bbox="456 882 1310 1200"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3 (サージ用管台) ABAQUS Ver. 2018</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> </tr> <tr> <td>要素数</td> </tr> <tr> <td>節点数</td> </tr> </table> <p><b>【熟成層を考慮した環境疲労】</b></p> <table border="1" data-bbox="456 1276 1310 1478"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> </tr> <tr> <td>要素数</td> </tr> <tr> <td>節点数</td> </tr> </table>	解析プログラム	(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3 (サージ用管台) ABAQUS Ver. 2018	要素種類		要素次数	要素数	節点数	解析プログラム	(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3	要素種類		要素次数	要素数	節点数
解析プログラム	(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3 (サージ用管台) ABAQUS Ver. 2018														
要素種類															
要素次数															
要素数															
節点数															
解析プログラム	(スプレイライン用管台) ABAQUS Ver. 6.12-3														
要素種類															
要素次数															
要素数															
節点数															

## 2. 材料物性値

材料物性値を以下に示す。

評価部位	材料	設計応力 (MPa)
		345℃
スプレイライン用管台	SFVQ1A	184
上部鏡板	SQV1A	184
スプレイライン用管台 セーフエンド	SUSF316	114
サージ用管台	SFVQ1A	184
下部胴板、下部鏡板	SQV1A	184
サージ用管台セーフエンド	SUSF316	114

## 3. 最大評価点の選定

解析モデル上の評価点は、構造不連続部等において応力が大きくなる評価断面を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。

スプレイライン用管台については、熱成層による影響を考慮しており、接液部位で疲労累積係数が最大となる点について、環境疲労評価を実施している。

サージ用管台については、管台に作用する外荷重を配管解析で求めており、サージ配管で熱成層が発生した場合の応力を考慮せずに評価しているが、評価に用いる外荷重条件は熱成層を考慮した条件より厳しい評価条件となる。

解析モデル上の評価結果および最大評価点の選定結果を添付1に示す。

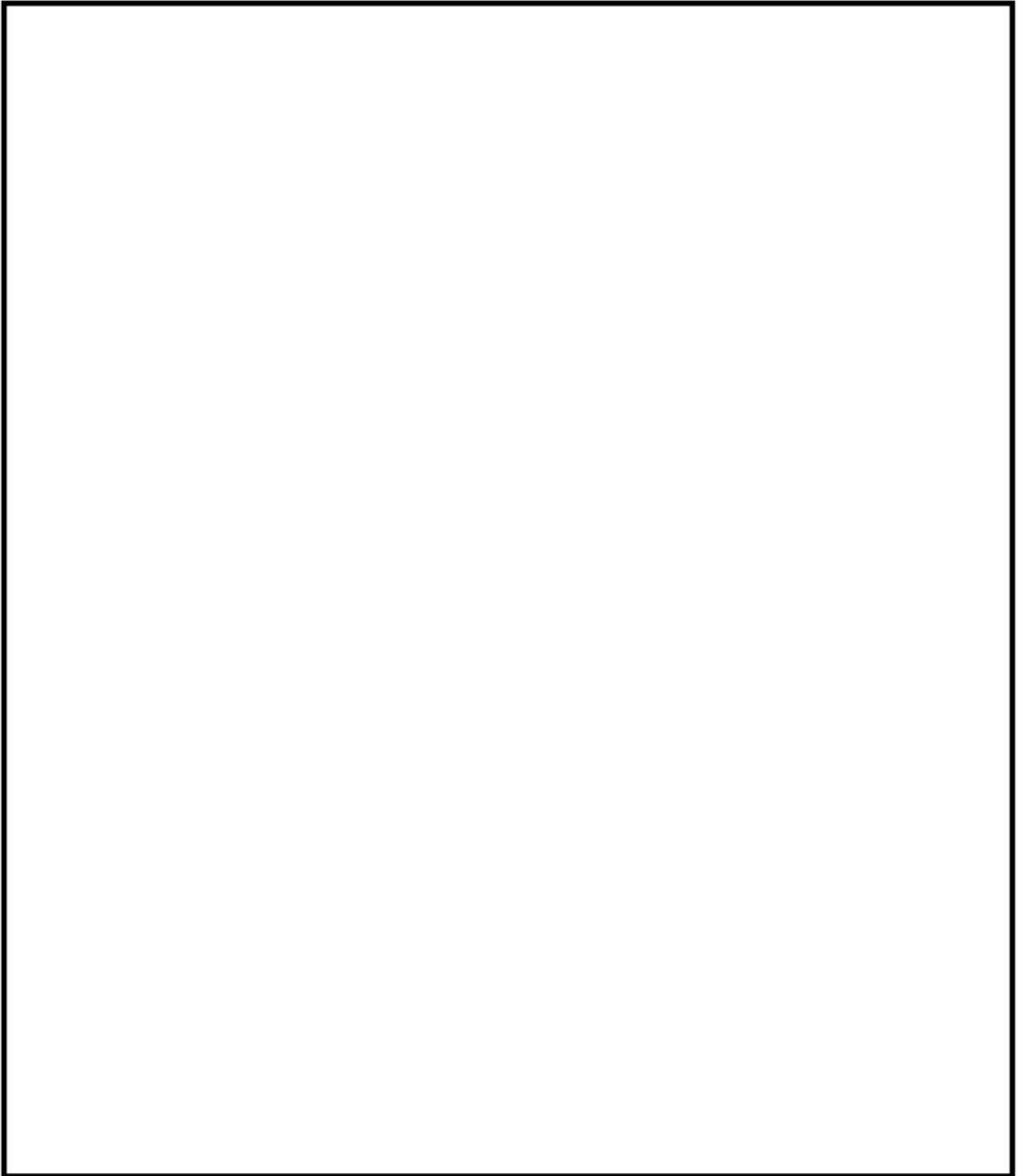
## 4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示します。また、応力フローを添付2に示す。

状態	荷重の組み合わせ
供用状態 A, B	圧力 + 自重 + 熱膨張荷重 + 熱過渡

## 5. K e 係数および環境評価パラメータ

評価に用いた K e 係数および環境評価パラメータ（環境効果補正係数  $f_{en}$ ）を添付3に示す。



加圧器 スプレイライン用管台 評価点

## スプレイライン用管台 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00578	0.00706
2	0.0	0.00001	0.00002
3	0.0	0.00644	0.01162
4	0.00000	0.00005	0.00046
5	0.00001	0.01254	0.00225
6	0.0	0.00000	0.00000
7	0.0	0.00772	0.00549
8	0.0	0.00000	0.0
9	0.00001	0.00003	0.00291
10	0.0	0.0	0.0
11	0.0	0.0	0.0
12	0.00002	0.0	0.00096
13	0.0	0.00515	0.00948
14	0.00351	0.0	0.00085
15	0.0	0.00090	0.00064
16	0.00016	0.00025	0.00452
17	0.00727	0.01692	0.0
18	0.0	0.0	0.0
19	0.05071	0.04757	0.0
20	0.0	0.0	0.0
21	0.0	0.00315	0.00048
22	0.0	0.00027	0.00412

許容値  $U_F=1.0$

## スプレイライン管台 疲労評価結果 (評価点: 19)

評価点 - 19  
(S12)

応力強さ		(単位: MPa)			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
3.1	-428.9	1.0	216.0	260.0	2	10200	0.00020
3.1	-423.7	1.0	213.4	256.8	72	10600	0.00679
0.0	-423.7	1.0	211.8	254.9	137	10900	0.01257
-68.2	-423.7	1.0	177.7	213.9	74	20000	0.00370
-71.7	-423.7	1.0	176.0	211.8	74	20600	0.00359
-77.9	-423.7	1.0	172.9	208.0	74	21800	0.00339
-78.6	-423.7	1.0	172.6	207.7	74	21900	0.00338
-87.0	-423.7	1.0	168.3	202.6	74	23600	0.00314
-95.0	-423.7	1.0	164.3	197.8	74	25500	0.00290
-106.2	-423.7	1.0	158.7	191.0	74	28300	0.00261
-106.4	-423.7	1.0	158.7	190.9	74	28400	0.00261
-112.9	-423.7	1.0	155.4	187.0	74	30300	0.00244
-147.6	-423.7	1.0	138.0	166.1	2	43600	0.00005
-154.4	-423.7	1.0	134.6	162.0	74	47100	0.00157
-188.3	-423.7	1.0	117.7	141.6	74	88000	0.00084
-213.4	-423.7	1.0	105.1	126.5	74	137000	0.00054
-249.8	-423.7	1.0	86.9	104.6	74	294000	0.00025
-258.1	-423.7	1.0	82.8	99.6	3	367000	0.00001
-265.6	-423.7	1.0	79.0	95.1	2	452000	0.00000
-272.2	-423.7	1.0	75.8	91.2	74	596000	0.00012
-278.6	-423.7	1.0	72.6	87.3	2	874000	0.00000
-291.4	-423.7	1.0	66.1	79.6	5	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.05071

→通常UF: 0.051

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数



加圧器サージ管台 評価点

## 加圧器サージ管台 最大評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00104	0.00320
2	0.0	0.00021	0.00031
3	0.0	0.00108	0.00157
4	0.0	0.00024	0.00056
5	0.00000	0.00208	0.00039
6	0.0	0.0	0.0
7	0.00000	0.00138	0.00182
8	0.0	0.0	0.0
9	0.00001	0.00012	0.00085
10	0.0	0.0	0.0
11	0.0	0.00004	0.00036
12	0.00003	0.0	0.00024
13	0.00374	0.0	0.00308
14	0.00327	0.0	0.00156
15	0.0	0.00066	0.00125
16	0.00060	0.0	0.00056
17	0.00565	0.01123	0.0
18	0.0	0.00032	0.0
19	0.01823	0.01532	0.0
20	0.0	0.00069	0.00087
21	0.0	0.00198	0.00002
22	0.0	0.00268	0.00576

許容値  $U_f=1.0$

## 加圧器サージ管台 疲労評価結果 (評価点 : 19)

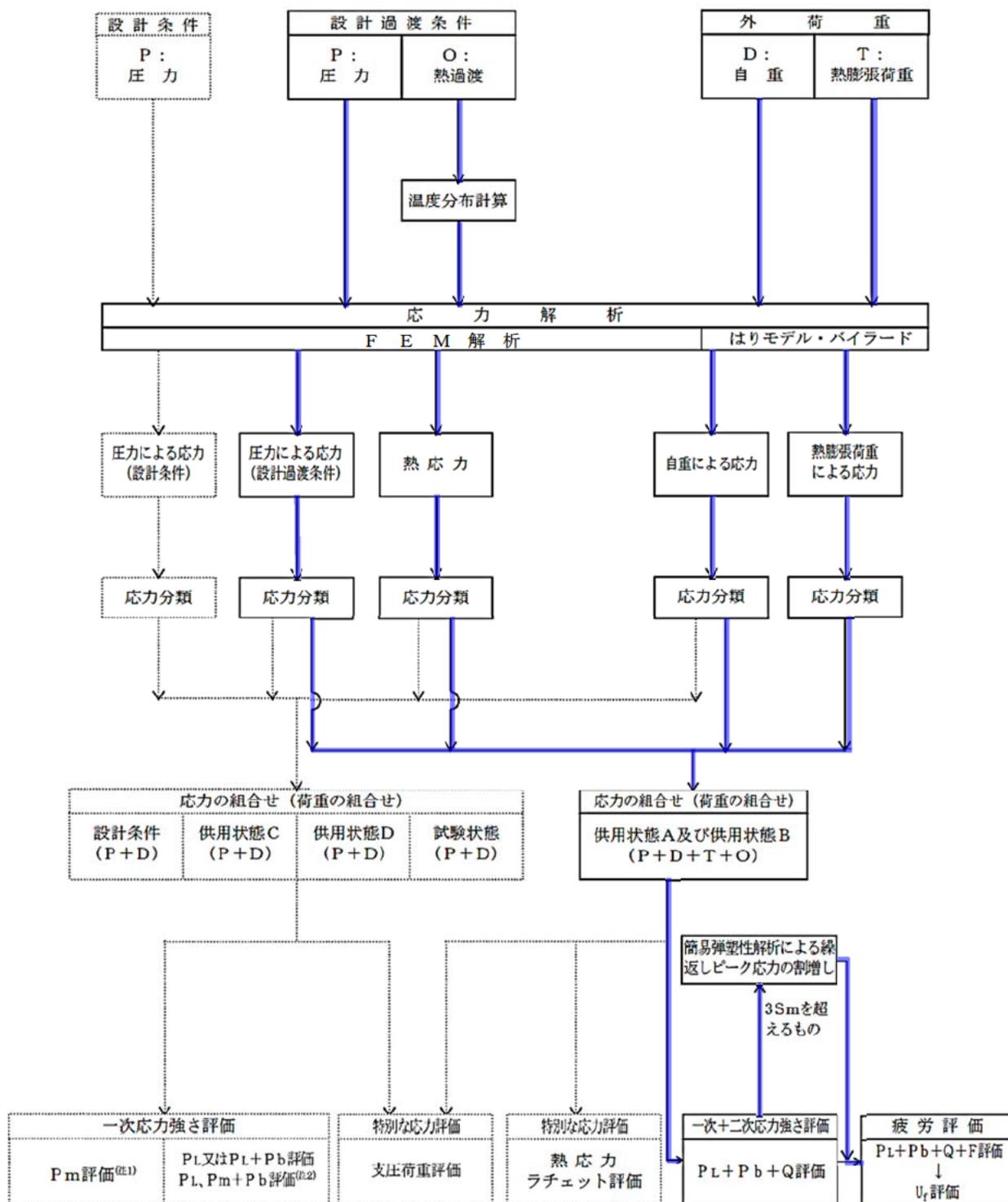
評価点 - 19  
( S12 )

応力強さ		( 単位 : MPa )			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	Ke	ALT	ALT'	N	N*	
22.0	-319.7	1.0	170.8	205.6	5	22600	0.00022
22.0	-290.3	1.0	156.1	187.9	69	29800	0.00232
19.1	-290.3	1.0	154.7	186.2	63	30700	0.00205
0.0	-290.3	1.0	145.2	174.7	137	37400	0.00366
-58.5	-290.3	1.0	115.9	139.5	634	94900	0.00668
-58.5	-289.8	1.0	115.6	139.2	2	95900	0.00002
-58.5	-289.3	1.0	115.4	138.9	7	96900	0.00007
-58.5	-283.5	1.0	112.5	135.4	245	107000	0.00229
-102.2	-283.5	1.0	90.6	109.1	2	243000	0.00001
-128.2	-283.5	1.0	77.6	93.4	444	489000	0.00091
-165.6	-283.5	1.0	58.9	70.9	3	—————	0.0
疲労累積係数 =							0.01823

Ke : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

→通常UF : 0.019

応力評価フロー



(注1) 圧力による応力は、静力学の釣合いより求める。  
 (注2) 試験状態に適用  
 (……部分は本評価では対象外)

## Ke係数と環境疲労パラメータ (詳細評価手法)

【スプレイライン管台 (評価点: 5)】

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2E2	2E2	477.5	-354.5	2.05	857.8	966.8	2	592	0.00338	8.187	0.02766
1B8	1B7	366.2	-136.9	1.23	308.7	347.9	74	32300	0.00229	3.510	0.00804
1A6	1B6	310.5	-135.3	1.18	262.0	295.4	74	76100	0.00097	6.878	0.00669
1B3	1B5	293.9	-131.2	1.14	242.3	273.1	74	117000	0.00063	7.029	0.00445
1B5	1A6	275.8	-103.0	1.13	213.4	240.6	74	241000	0.00031	12.311	0.00378
1B2	1B4	292.6	-112.3	1.00	202.5	228.2	74	335000	0.00022	9.548	0.00211
1A7	1B3	290.2	-99.2	1.00	194.7	219.5	74	427000	0.00017	7.710	0.00134
1A5	1A5	287.2	-87.9	1.00	187.5	211.4	74	545000	0.00014	1.000	0.00014
1B4	1A7	279.9	-87.6	1.00	183.8	207.1	74	629000	0.00012	1.000	0.00012
2A1	1M1	278.1	-83.8	1.00	181.0	204.0	7	701000	0.00001	1.000	0.00001
1B6	1B2	262.0	-83.6	1.07	180.1	203.0	74	725000	0.00010	1.000	0.00010
2H1	1M1	273.9	-83.8	1.00	178.9	201.6	2	761000	0.00000	1.000	0.00000
1L1	1M1	270.9	-83.8	1.00	177.3	199.9	2	809000	0.00000	1.000	0.00000
1F1	1M1	267.6	-83.8	1.00	175.7	198.1	4	862000	0.00000	1.000	0.00000
1G1	1M1	267.6	-83.8	1.00	175.7	198.1	9	863000	0.00001	1.000	0.00001
2C1	1M1	267.2	-83.8	1.00	175.5	197.9	2	870000	0.00000	1.000	0.00000
1L2	1M1	266.6	-83.8	1.00	175.2	197.5	2	881000	0.00000	1.000	0.00000
1D1	1M1	265.9	-83.8	1.00	174.9	197.1	894	893000	0.00100	1.000	0.00100
1C1	1M1	265.7	-83.8	1.00	174.8	197.0	903	897000	0.00101	1.000	0.00101
1M1	1M1	263.9	-83.8	1.00	173.9	196.0	1075	929000	0.00116	1.000	0.00116
1M1	1C1	263.9	-83.8	1.00	173.9	196.0	903	931000	0.00097	1.000	0.00097
1M1	1A4	263.9	-80.3	1.00	172.1	194.0	74	1000000	0.00007	1.000	0.00007
1M1	1A3	263.9	-80.1	1.00	172.0	193.9	74	1000000	0.00007	1.000	0.00007
1M1	1E1	263.9	-78.6	1.00	171.2	193.0	4	1010000	0.00000	1.000	0.00000
1M1	1D1	263.9	-55.8	1.00	159.9	180.2	770	1270000	0.00061	1.000	0.00061
1E1	1D1	263.2	-55.8	1.00	159.5	179.8	4	1280000	0.00000	1.000	0.00000
1B9	1D1	257.0	-55.8	1.00	156.4	176.3	74	1360000	0.00005	1.000	0.00005
1B7	1D1	249.0	-55.8	1.00	152.4	171.8	46	1480000	0.00003	1.000	0.00003
1B7	1G1	249.0	-48.2	1.00	148.6	167.5	9	1610000	0.00001	1.000	0.00001
1B7	1F1	249.0	-37.7	1.00	143.4	161.6	4	1810000	0.00000	1.000	0.00000
1B7	1L2	249.0	-36.2	1.00	142.6	160.7	2	1850000	0.00000	1.000	0.00000
1B7	1A2	249.0	-35.5	1.00	142.3	160.3	13	1860000	0.00001	1.000	0.00001
1A4	1A2	240.6	-35.5	1.00	138.1	155.6	61	2070000	0.00003	1.000	0.00003
1A4	1B8	240.6	-26.4	1.00	133.5	150.5	13	2400000	0.00001	1.000	0.00001
1A3	1B8	202.4	-26.4	1.00	114.4	128.9	61	4680000	0.00001	1.000	0.00001
1A3	2A1	202.4	-5.9	1.00	104.1	117.4	7	7980000	0.00000	1.000	0.00000
1A3	1L1	202.4	-5.0	1.00	103.7	116.9	2	8180000	0.00000	1.000	0.00000
1A3	1B9	202.4	-2.0	1.00	102.2	115.2	4	8920000	0.00000	1.000	0.00000
1BA	1B9	194.4	-2.0	1.00	98.2	110.7	70	12100000	0.00001	1.000	0.00001
1BA	1B1	194.4	0.0	1.00	97.2	109.6	4	13300000	0.00000	1.000	0.00000
1BB	1B1	163.2	0.0	1.00	81.6	92.0	74	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.05950

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt'  $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.060

## 【サージ用管台 (評価点:1)】

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin		KE	補正前 salt					
2E1	2H1	15.9	-490.9	1.00	253.4	285.7	2	91400	0.00002	6.052	0.00013
NSS	2E1	0.0	-439.1	1.00	219.6	247.5	2	202000	0.00001	4.829	0.00005
NSS	1B2	0.0	-414.0	1.00	207.0	233.3	135	292000	0.00046	3.484	0.00161
2G1	1B2	-10.9	-414.0	1.00	201.6	227.2	2	344000	0.00001	6.679	0.00004
1C1	1B2	-22.8	-414.0	1.00	195.6	220.5	751	415000	0.00181	8.373	0.01515
1C1	1A2	-22.8	-406.2	1.00	191.7	216.1	152	470000	0.00032	8.379	0.00271
2D3	1A2	-33.4	-406.2	1.00	186.4	210.1	2	569000	0.00000	1.000	0.00000
2B1	1A2	-37.1	-406.2	1.00	184.5	208.0	5	611000	0.00001	1.000	0.00001
1A2	1A2	-54.7	-406.2	1.00	175.7	198.1	285	863000	0.00033	1.000	0.00033
1A2	2D3	-54.7	-344.8	1.00	145.0	163.5	2	1750000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	1L1	-54.7	-340.2	1.00	142.7	160.9	2	1840000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	1L2	-54.7	-332.1	1.00	138.7	156.3	2	2030000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	1G1	-54.7	-321.4	1.00	133.3	150.3	9	2410000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2B1	-54.7	-314.0	1.00	129.6	146.1	5	2720000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2A1	-54.7	-308.0	1.00	126.7	142.8	7	3010000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2G1	-54.7	-278.2	1.00	111.7	125.9	2	5250000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	1C1	-54.7	-275.5	1.00	110.4	124.4	130	5640000	0.00002	1.000	0.00002
1D1	1C1	-67.1	-275.5	1.00	104.2	117.4	773	7950000	0.00010	1.000	0.00010
1D1	1D1	-67.1	-271.4	1.00	102.1	115.1	121	8940000	0.00001	1.000	0.00001
1B2	1D1	-69.6	-271.4	1.00	100.9	113.7	773	9620000	0.00008	1.000	0.00008
1B2	1F1	-69.6	-254.1	1.00	92.3	104.0	4	23200000	0.00000	1.000	0.00000
1B2	1H1	-69.6	-242.8	1.00	86.6	97.6	0	80100000	0.00000	1.000	0.00000
1B2	1E1	-69.6	-228.2	1.00	79.3	89.4	4	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.02026

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.021

タイトル	機械ペネトレーション（余熱除去冷却器出口配管貫通部）の疲労累積係数の算出根拠について
説明	<p>余熱除去冷却器出口配管貫通部の疲労累積係数は、配管解析から当該部位に加わる負荷を算出し、材料力学公式（参考文献：Formulas for Stress and Strain, Raymond J. Roark他著）と、PVE-3100に準じてPVB-3130の応力集中係数にかかわる規定を用いた疲労評価により算出している。</p> <p>余熱除去冷却器出口配管貫通部の仕様、荷重および疲労評価結果を添付1に示す。</p>

余熱除去冷却器出口配管貫通部の基本寸法箇所を図1に示す。また、仕様（形状、材料）を表1に示す。

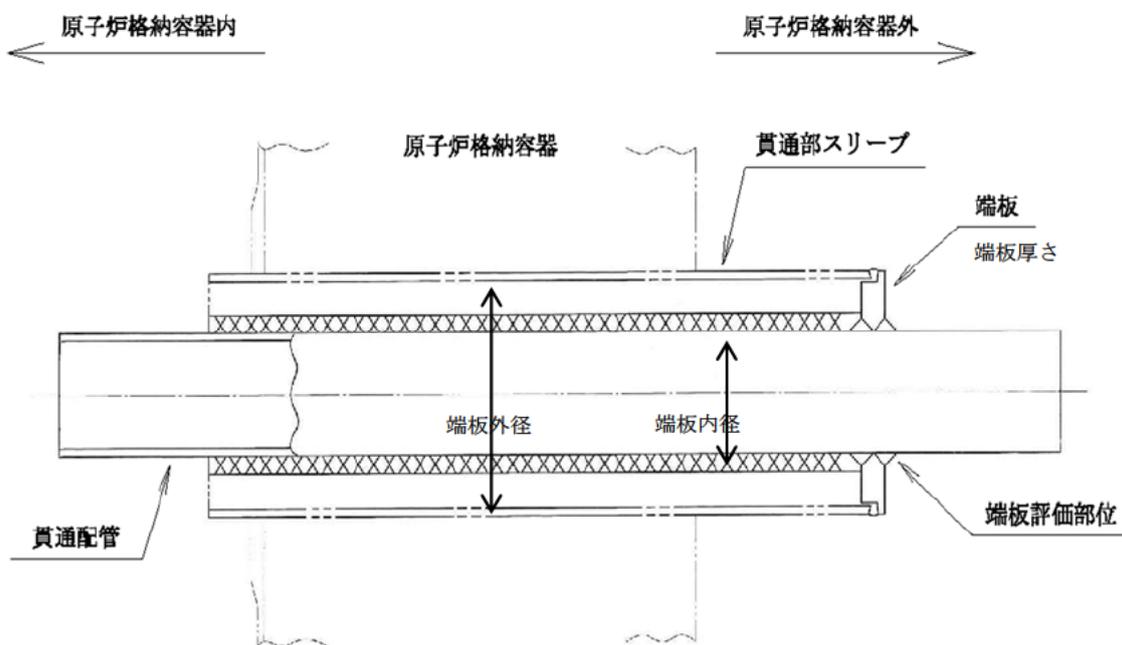


図1 余熱除去冷却器出口配管貫通部の基本寸法箇所

表1 余熱除去冷却器出口配管貫通部の仕様

格納容器貫通部	格納容器 最高使用 圧力 (MPa)	最高使用 温度 (°C)	端板 外径 (mm) D <sub>1</sub>	端板 内径 (mm) D <sub>2</sub>	端板 板厚 (mm) t	端板材料	材料の最高使用 温度における 縦弾性係数 (MPa)
B余熱除去冷却器 出口配管	0.392	200				SUS304HP	183,000

配管解析からの荷重と貫通部の仕様を用いて材料力学公式によって評価部位の最大発生応力が求まる。配管解析から得られる荷重の評価結果を表2に示す。

その応力に対応する許容回数を疲労線図(JSME S NC1-2005/2007)から疲労累積係数(Uf)が算出される。端板の疲労評価結果を表3に示す。

表2 端板に作用する荷重

格納容器貫通部	軸力[kN]			モーメント[kN・m]		
	Fx	Fy	Fz	Mx	My	Mz
B余熱除去冷却器 出口配管	33	-1	42	24	-38	-25

x : 管軸方向 y : 管軸直 (水平) z : 管軸直 (鉛直)

表3 端板の疲労評価結果

格納容器貫通部	繰返し ピーク応力 強さ (MPa)	過渡による 負荷回数 (n)	許容繰返し 回数 (N)	疲労累積 係数 (Uf)
B余熱除去冷却器 出口配管	117	274	8,328,690	0.001

タイトル	加圧器スプレイ配管およびサージ配管の疲労累積係数の算出根拠について													
説明	<p>加圧器スプレイ配管およびサージ配管の疲労累積係数の算出根拠を以下に示す。</p> <p>1. 解析モデル 疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <p><b>【通常疲労】</b></p> <table border="1" data-bbox="472 898 1310 1290"> <tr> <td data-bbox="472 898 735 976">解析プログラム</td> <td data-bbox="735 898 1310 976">(加圧器サージ配管) MSAP(配管)PC1.0 (加圧器スプレイ配管) MSAP(配管)PC1.0</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 976 735 1133">要素種類</td> <td data-bbox="735 976 1310 1290" rowspan="3"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1133 735 1211">要素数</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1211 735 1290">節点数</td> </tr> </table> <p><b>【熱成層を考慮した環境疲労】</b></p> <table border="1" data-bbox="472 1368 1310 1805"> <tr> <td data-bbox="472 1368 735 1447">解析プログラム</td> <td data-bbox="735 1368 1310 1447">(加圧器サージ配管) ANSYS 2019 (加圧器スプレイ配管) ANSYS Ver. 15.0</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1447 735 1603">要素種類</td> <td data-bbox="735 1447 1310 1805" rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1603 735 1648">要素次数</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1648 735 1727">要素数</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1727 735 1805">節点数</td> </tr> </table> <p>解析モデルを添付 1 に示す。</p>	解析プログラム	(加圧器サージ配管) MSAP(配管)PC1.0 (加圧器スプレイ配管) MSAP(配管)PC1.0	要素種類		要素数	節点数	解析プログラム	(加圧器サージ配管) ANSYS 2019 (加圧器スプレイ配管) ANSYS Ver. 15.0	要素種類		要素次数	要素数	節点数
解析プログラム	(加圧器サージ配管) MSAP(配管)PC1.0 (加圧器スプレイ配管) MSAP(配管)PC1.0													
要素種類														
要素数														
節点数														
解析プログラム	(加圧器サージ配管) ANSYS 2019 (加圧器スプレイ配管) ANSYS Ver. 15.0													
要素種類														
要素次数														
要素数														
節点数														

## 2. 材料物性

材料物性を以下に示す。

使用箇所	温度 (°C)	S <sub>m</sub> (MPa)	使用材料
加圧器サージ配管	360	113	SUS316TP
加圧器スプレイ配管	343	114	SUS316TP

## 3. 最大評価点の選定

通常疲労における解析モデル上の評価点は、構造不連続部等の応力が大きくなる点を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。解析モデル上の評価結果及び最大評価点の選定結果を、添付2に示す。

また、加圧器サージ配管およびスプレイ配管は、熱成層による影響を考慮しており、接液部位で、加圧器サージ配管および加圧器スプレイ配管ともに1次+2次+ピーク応力が最大となる点について、環境疲労評価を実施している。

解析モデル上の評価結果及び最大評価点の選定結果を、添付4に示す。

## 4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力評価フローを添付3に示します。

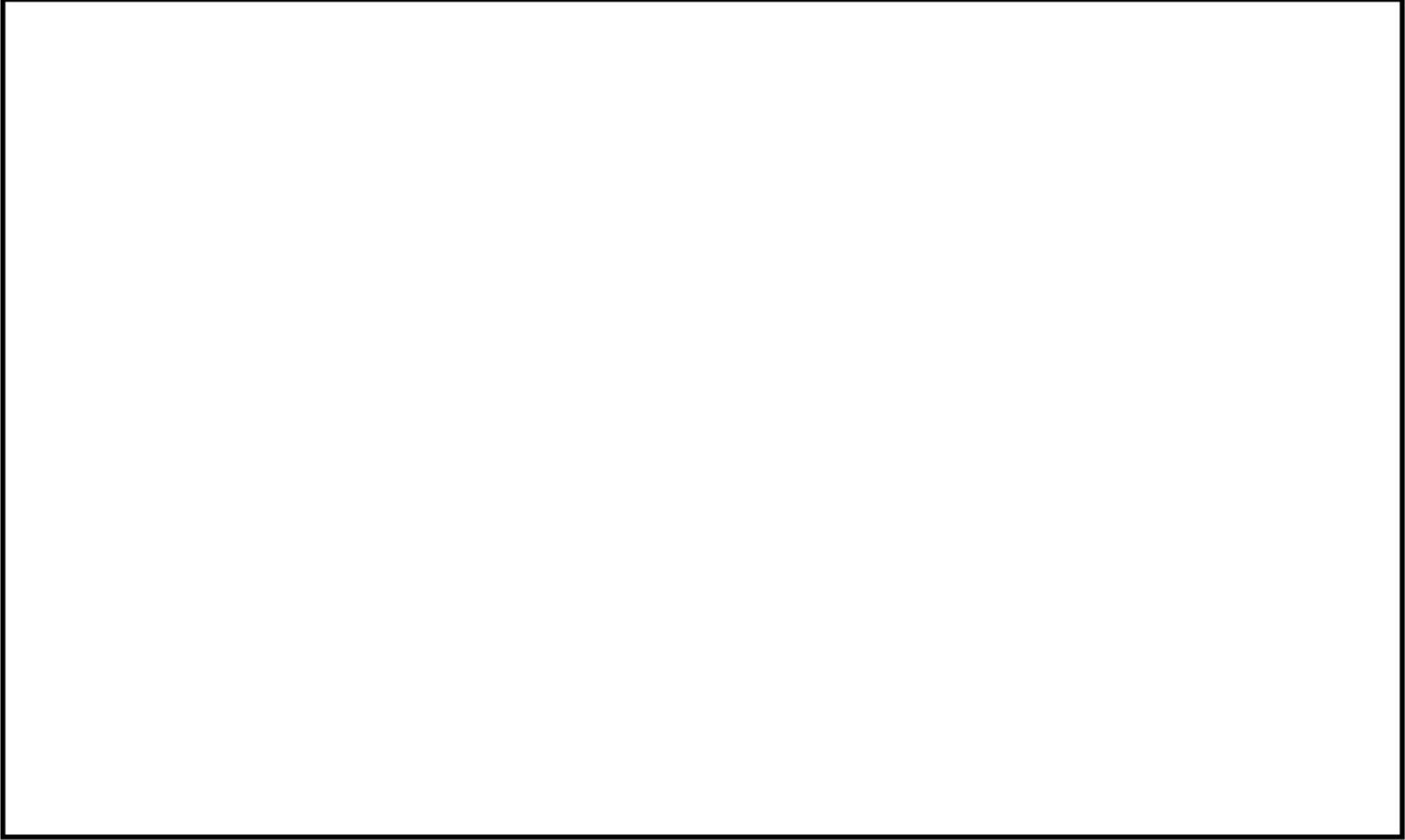
状態	荷重の組み合わせ
供用状態A, B	圧力+機械的荷重+熱膨張荷重+熱過渡

## 5. K<sub>e</sub>係数

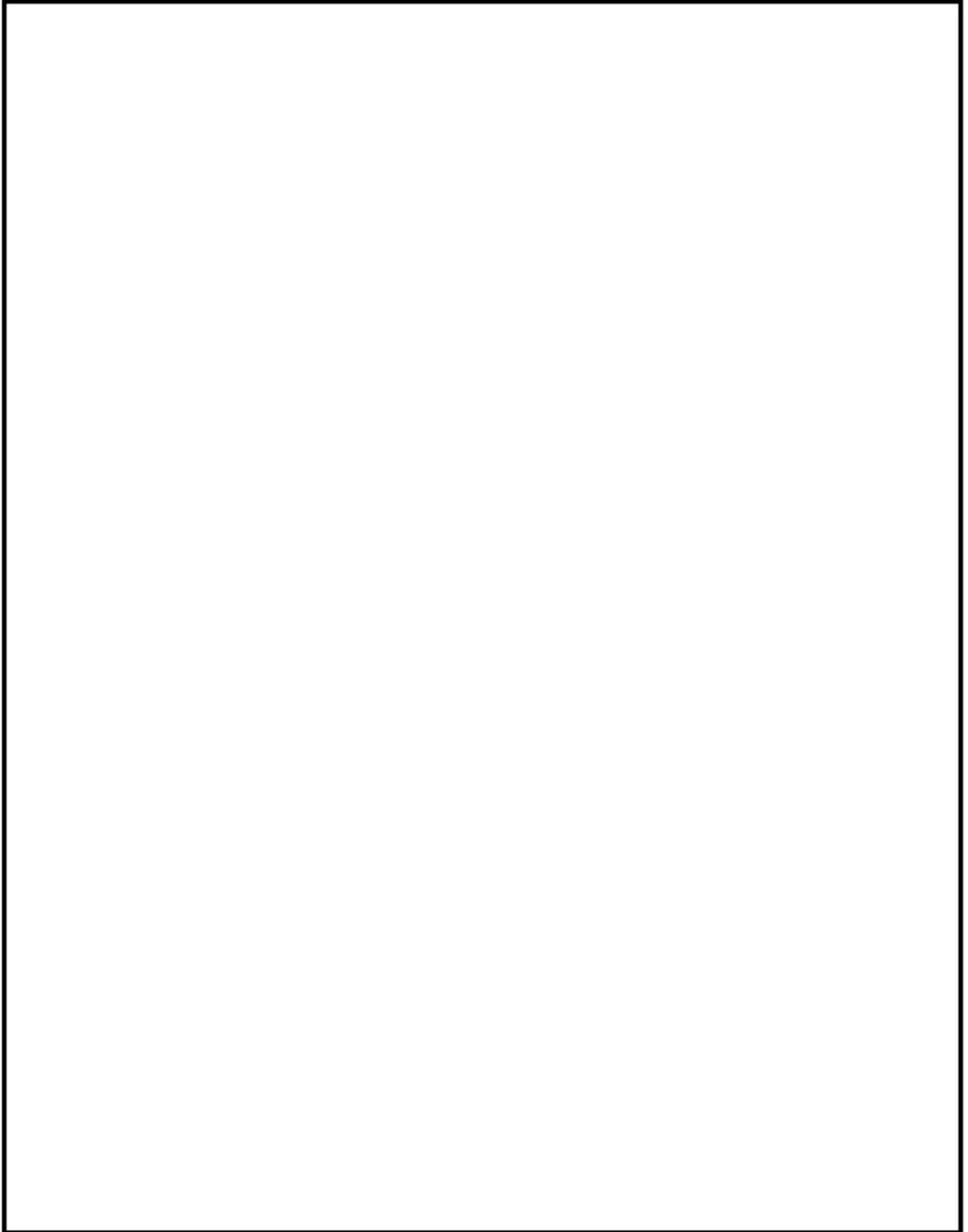
環境疲労評価において用いたK<sub>e</sub>係数を添付4に示す。

## 6. 環境評価パラメータ

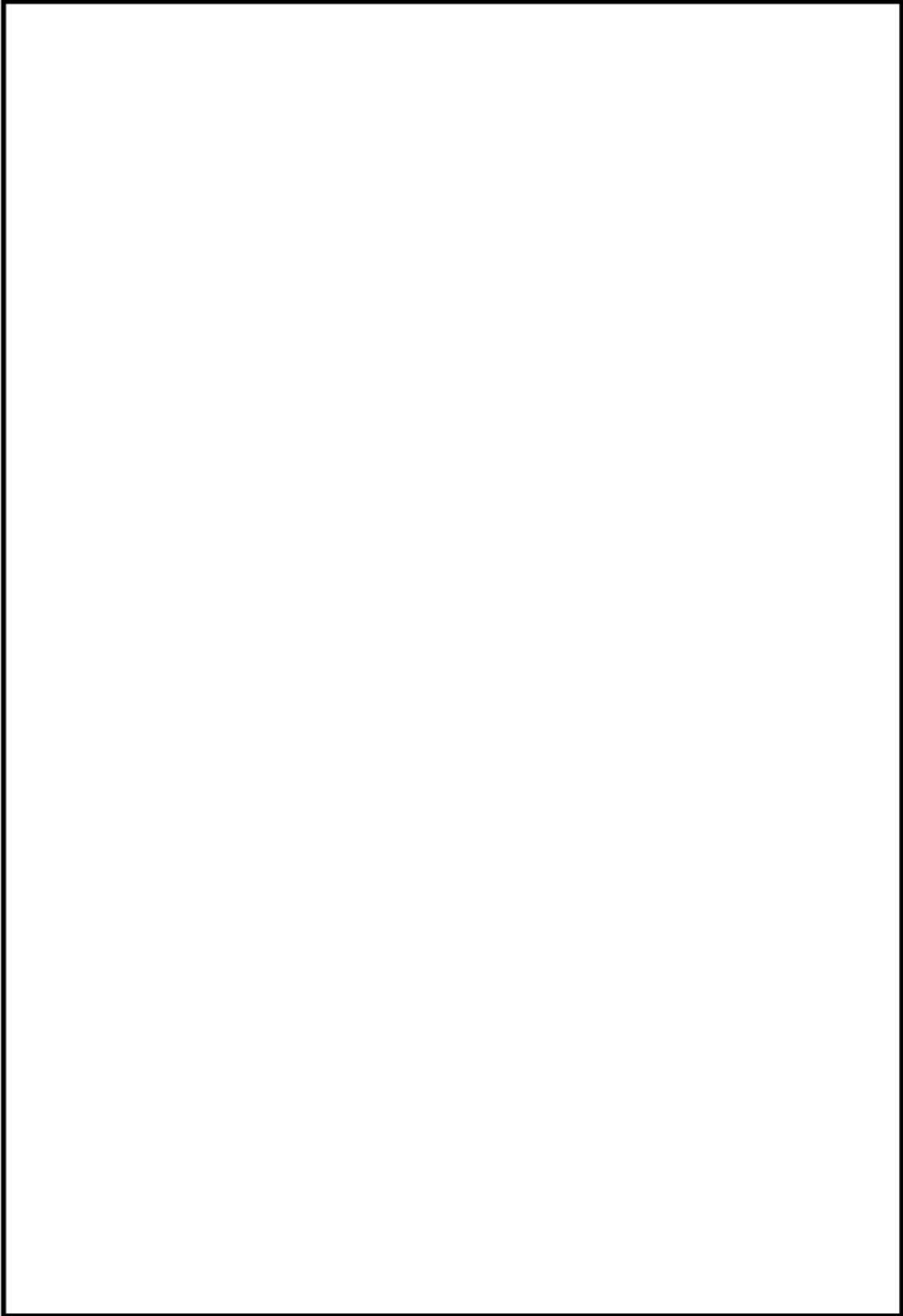
評価に用いた環境評価パラメータ（環境効果補正係数f<sub>en</sub>）を、添付4に示す。



加圧器サージ配管 解析モデル (1 / 2)



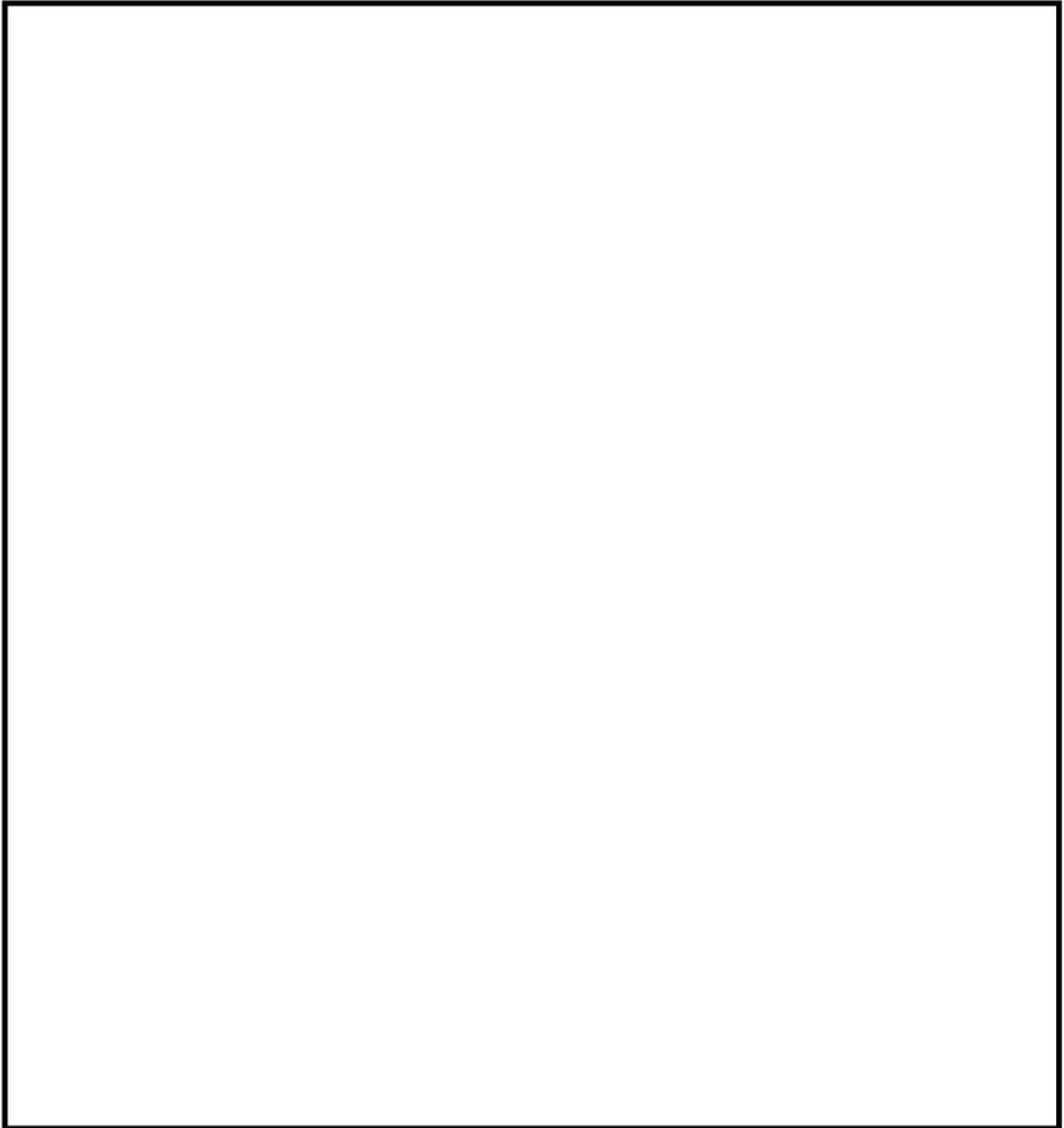
加圧器サージ配管 解析モデル (2/2)



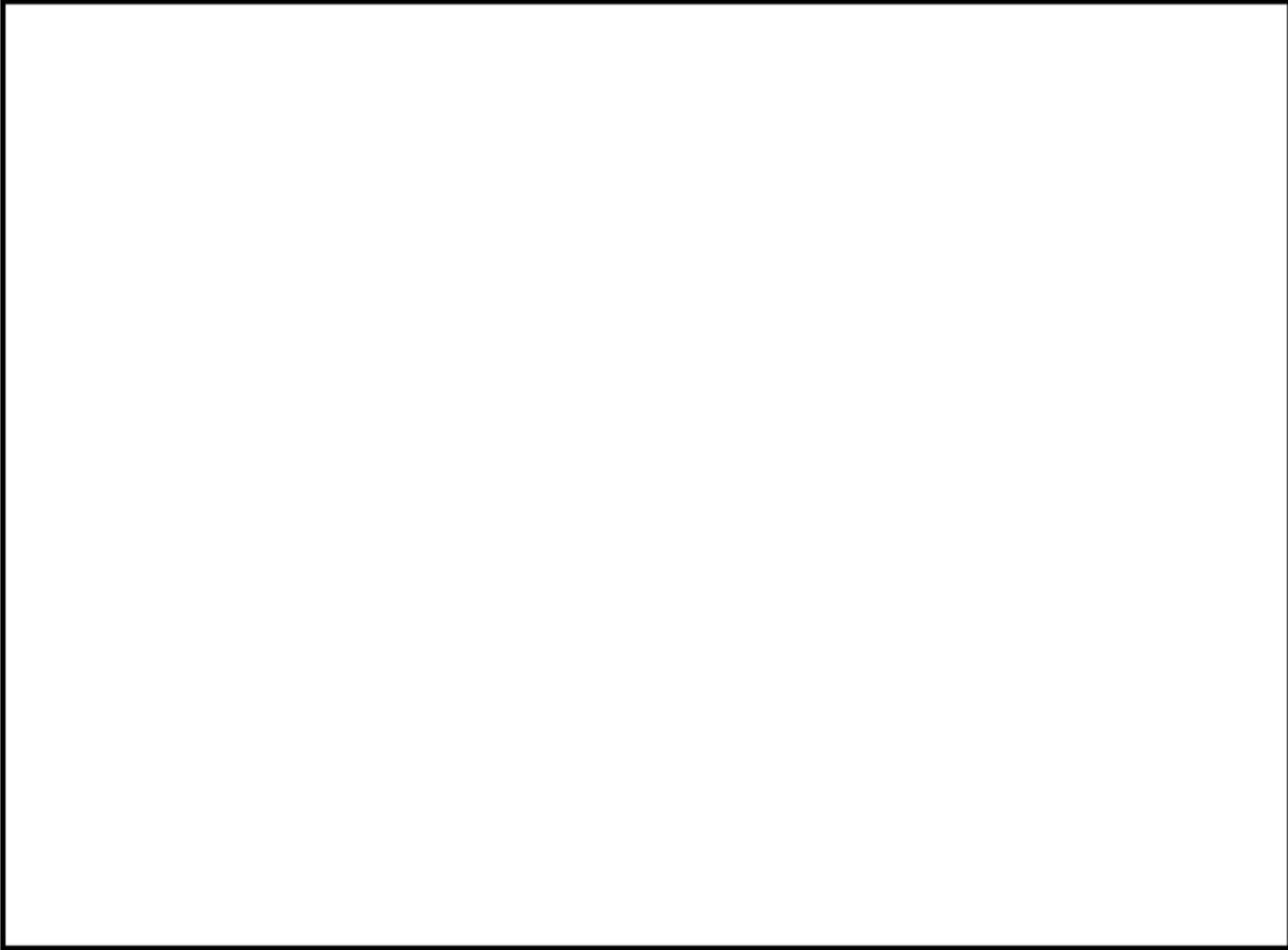
加圧器スプレイ配管 解析モデル (1 / 7)



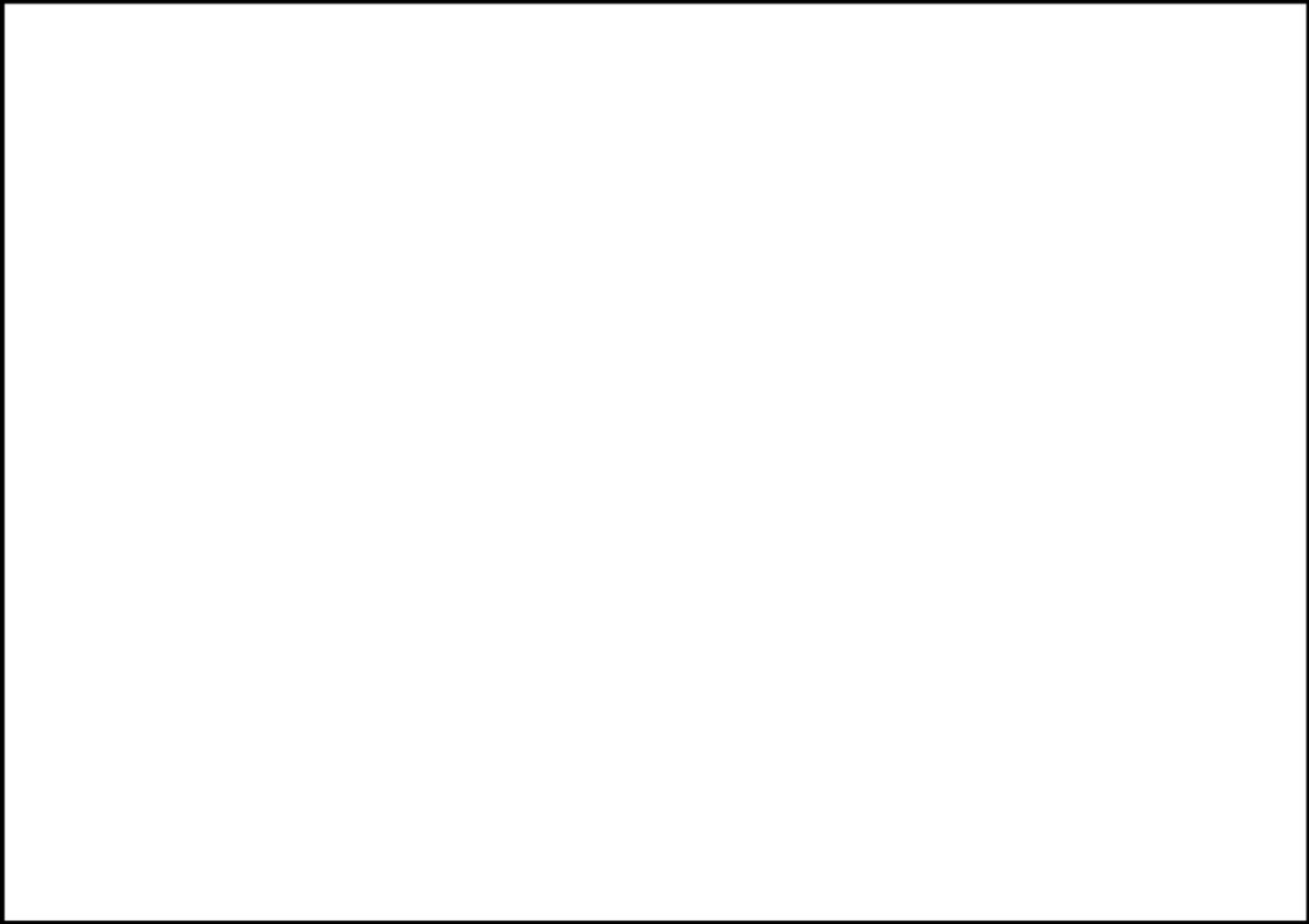
加圧器スプレイ配管 解析モデル (2 / 7)



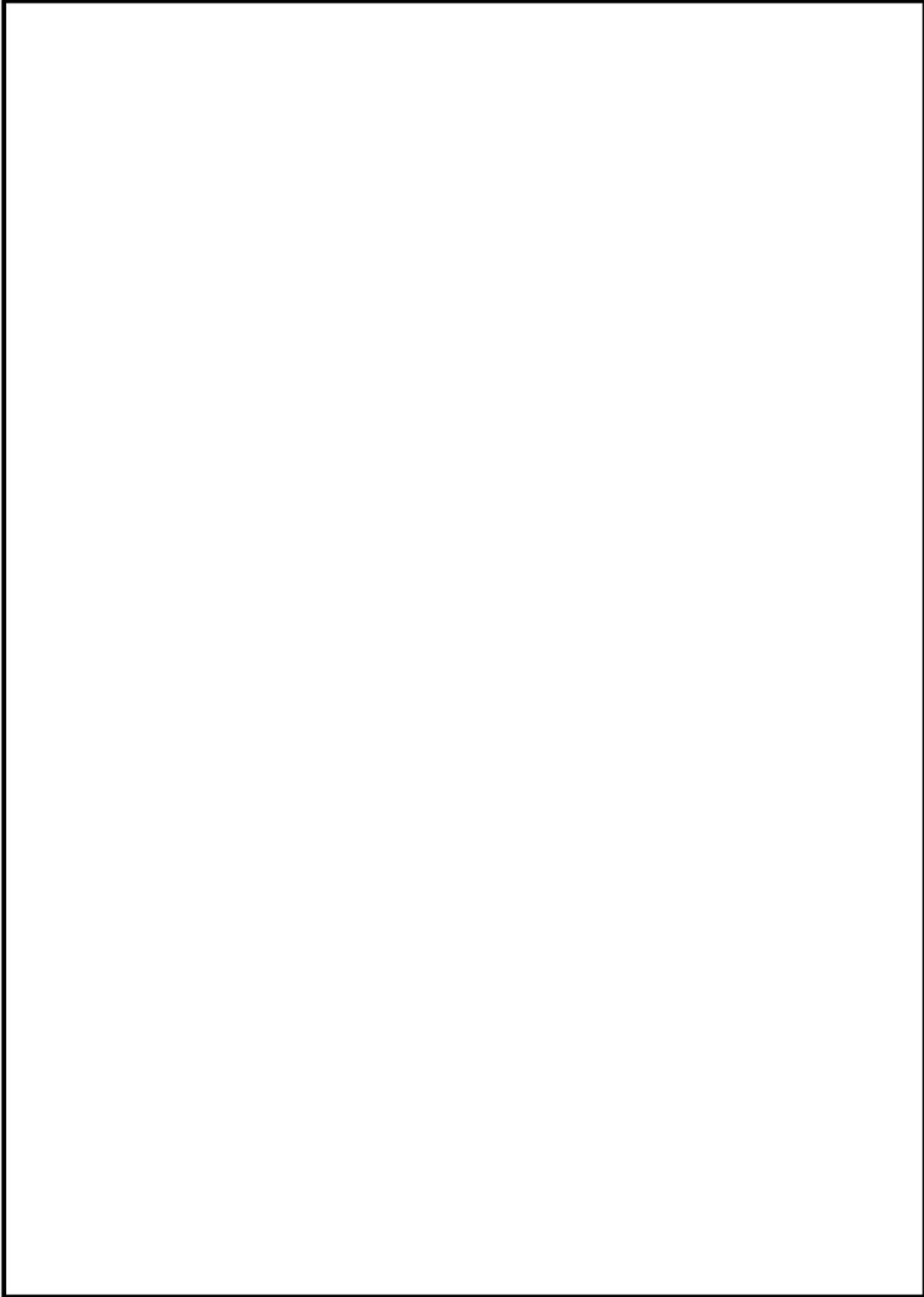
加圧器スプレイ配管 解析モデル (3 / 7)



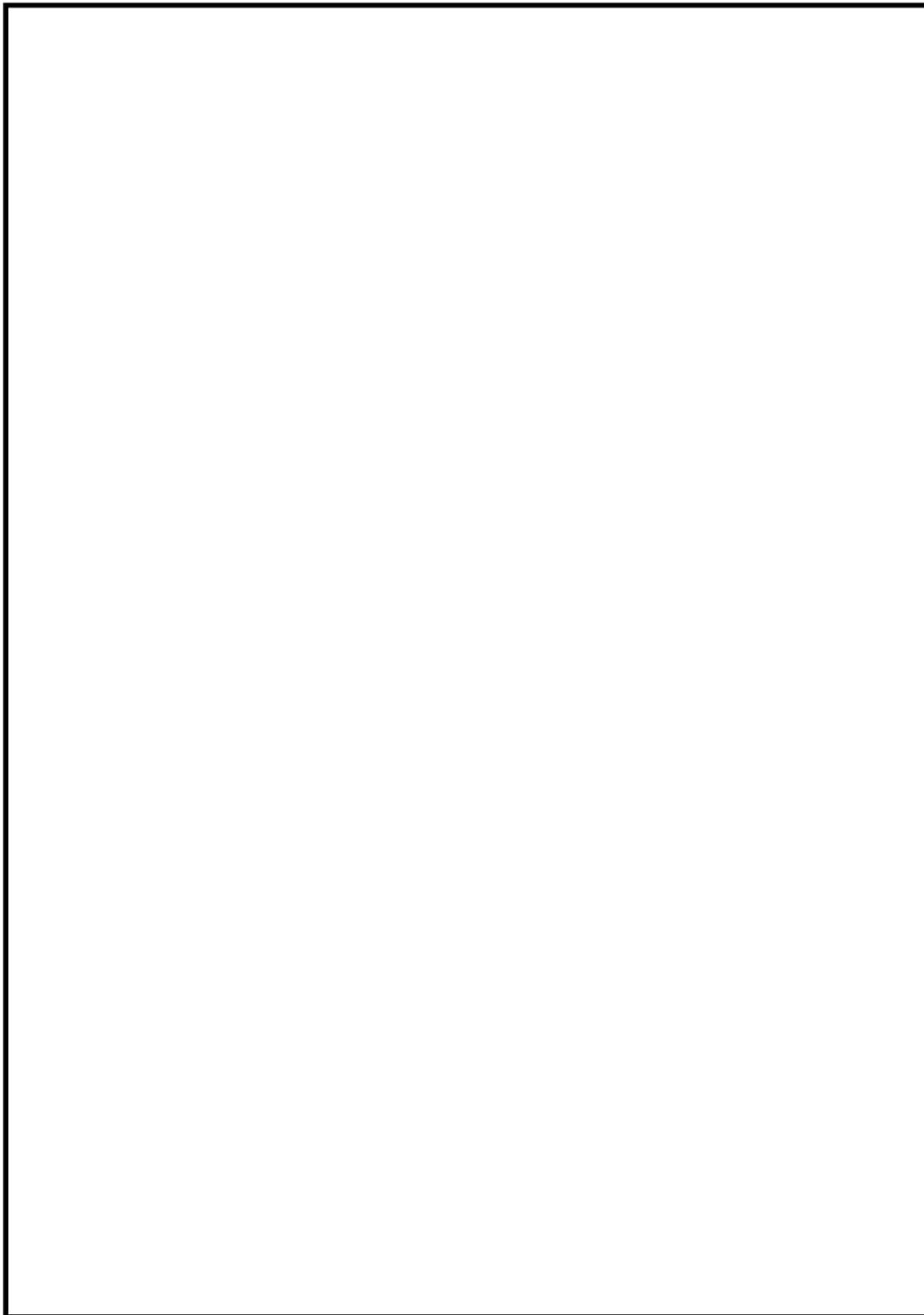
加圧器スプレイ配管 解析モデル ( 4 / 7 )



加圧器スプレイ配管 解析モデル (5 / 7)



加圧器スプレイ配管 解析モデル (6 / 7)



加圧器スプレイ配管 解析モデル (7 / 7)

加圧器サージ配管 最大疲労評価点の選定

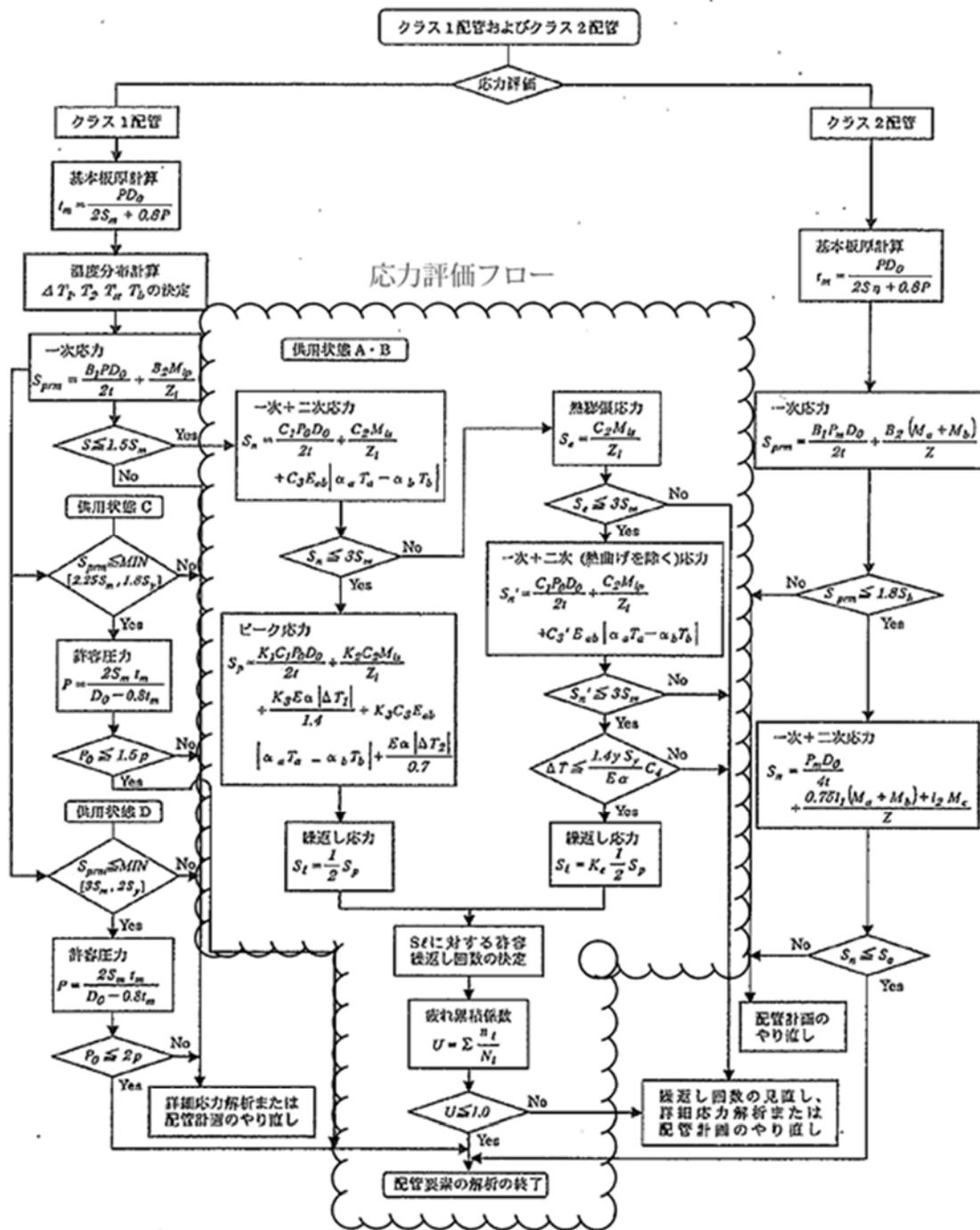
節点番号	圧力による 応力 (MPa)	外荷重による 応力 (MPa)	板厚方向線形温 度差による応力 (MPa)	構造上の不連続 による熱応力 (MPa)	板厚方向非線形 温度差による応力 (MPa)	ピーク 応力 (MPa)	繰返しピーク 応力強さ (MPa) (注)	疲労累積 係 数	許容値
1101	22.5	33.5	242.8	0.0	210.4	510	287	0.00201	1.0
102	23.2	44.0	220.7	0.0	210.4	499	281	0.00209	
600	23.2	39.0	220.7	0.0	210.4	494	279	0.00184	
104	23.2	36.6	220.7	0.0	210.4	491	277	0.00173	
105	23.2	31.5	220.7	0.0	210.4	486	274	0.00152	
108	23.2	60.9	220.7	0.0	210.4	516	291	0.00314	
603	23.2	67.5	220.7	0.0	210.4	522	295	0.00365	
110	23.2	64.3	220.7	0.0	210.4	519	293	0.00334	
803	20.5	32.9	220.7	0.0	210.4	485	274	0.00137	
804	20.5	24.7	220.7	0.0	210.4	477	269	0.00112	
608	22.2	34.4	220.7	0.0	210.4	488	275	0.00152	
119	22.2	39.7	220.7	0.0	210.4	493	278	0.00166	
120	22.2	42.5	220.7	0.0	210.4	496	280	0.00176	
122	22.2	52.8	220.7	0.0	210.4	507	286	0.00221	
1102	22.5	40.4	242.8	0.0	210.4	517	291	0.00216	

→通常UF : 0.004

加圧器スプレイ配管 最大評価点の選定

節点番号	圧力による 応力 (MPa)	外荷重による 応力 (MPa)	板厚方向線形温 度差による応力 (MPa)	構造上の不連続 による熱応力 (MPa)	板厚方向非線形 温度差による応力 (MPa)	ピーク 応力 (MPa)	繰返しピーク 応力強さ (MPa) (注)	疲労累積 係 数	許容値
169	457.2	40.5	10.2	0.0	4.0	512	286	0.00131	1.0
247	292.6	69.1	269.3	0.0	117.6	749	381	0.00566	
260	41.0	17.5	369.8	0.0	160.8	589	320	0.00846	
617	16.5	3.2	378.3	0.0	164.0	562	317	0.00773	
264	60.8	150.9	355.3	0.0	155.3	723	362	0.01448	
266	60.8	169.9	355.3	0.0	155.3	742	371	0.01604	
1203	41.3	26.6	406.8	0.0	160.8	636	345	0.01191	
1202	91.3	208.5	7.5	0.0	2.9	311	174	0.00009	
350	320.0	19.0	77.1	0.0	45.0	462	231	0.00110	
325	16.2	32.2	420.1	106.9	196.1	772	428	0.00037	
354	14.9	22.7	420.1	0.0	196.1	654	363	0.00019	
355	240.3	48.3	359.8	0.0	187.3	836	425	0.00468	
356	14.9	23.2	420.1	0.0	196.1	655	363	0.00020	
328	32.7	69.8	360.6	0.0	187.6	651	365	0.00042	
329	44.6	11.5	274.1	0.0	119.6	450	251	0.00009	

→通常UF : 0.017



(備考) クラス 2 配管の解析手順には管の機械的荷重により生じるモーメント  $M_b$  を含む場合の式のみを記載した

解説図 PPB-3511-1 配管要素の解析手順

応力評価フローチャート

## K e 係数と環境疲労パラメータ (詳細評価手法)

## 【加圧器サージ配管】

過渡 記号 A	過渡 記号 B	応力強さ 強さ (MPa)		割増 係数 ke	ピーク応力 強さ (MPa) salt'	実過渡 回数 n	許容繰 返し回数 n*	疲労損 傷係数 u	環境効 果係数 fen	環境中疲労 損傷係数 uen
		smax	stain							
2d3	2d3	274.7	-345.2	1.30	459.3	2	8490	0.00024	12.736	0.00300
2g1	2g1	243.7	-306.3	1.00	310.0	2	58400	0.00003	11.660	0.00040
1x1	2h1	210.6	-238.3	1.00	253.0	2	179000	0.00001	9.936	0.00011
1x1	2e1	210.6	-206.7	1.00	232.5	4	298000	0.00001	8.389	0.00011
1x1	2c1	210.6	-190.4	1.00	226.0	2	356000	0.00001	10.793	0.00006
1x1	2d2	210.6	-182.4	1.00	220.2	2	418000	0.00000	11.316	0.00005
1x1	1j1	210.6	-171.2	1.00	215.2	2	482000	0.00000	10.745	0.00004
1x1	2d1	210.6	-155.2	1.00	205.0	8	677000	0.00001	1.000	0.00001
1x1	2f1	210.6	-149.0	1.00	200.3	3	797000	0.00000	1.000	0.00000
1x1	1g1	210.6	-135.6	1.00	195.2	9	957000	0.00001	1.000	0.00001
1x1	2j1	210.6	-129.4	1.00	190.5	5	1060000	0.00000	1.000	0.00000
2h1	1y2	201.7	-134.5	1.00	189.5	2	1070000	0.00000	1.000	0.00000
2j1	1y2	203.2	-134.5	1.00	189.2	5	1080000	0.00000	1.000	0.00000
1x1	1y2	210.6	-134.5	1.00	189.1	37	1080000	0.00003	1.000	0.00003
1x2	1y2	210.6	-134.5	1.00	189.1	30	1080000	0.00003	1.000	0.00003
1x2	1d1	210.6	-85.3	1.00	166.8	44	1640000	0.00003	1.000	0.00003
1x3	1d1	208.2	-85.3	1.00	165.4	74	1680000	0.00004	1.000	0.00004
1x4	1d1	208.2	-85.3	1.00	165.4	74	1680000	0.00004	1.000	0.00004
1j1	1y4	192.0	-93.3	1.00	160.8	2	1840000	0.00000	1.000	0.00000
1x5	1d1	198.2	-85.3	1.00	159.7	74	1890000	0.00004	1.000	0.00004
1x6	1d1	198.2	-85.3	1.00	159.7	74	1890000	0.00004	1.000	0.00004
1w6	1y4	178.7	-93.3	1.00	150.6	72	2390000	0.00003	1.000	0.00003
1w6	1d1	178.7	-85.3	1.00	148.7	2	2520000	0.00000	1.000	0.00000
1w6	1d1	178.7	-85.3	1.00	148.7	74	2520000	0.00003	1.000	0.00003
1j2	1d1	171.0	-85.3	1.00	144.4	4	2870000	0.00000	1.000	0.00000
2e1	1d1	170.7	-85.3	1.00	144.2	4	2880000	0.00000	1.000	0.00000
1v3	1d1	168.6	-85.3	1.00	143.1	74	2980000	0.00002	1.000	0.00002
1v4	1d1	168.6	-85.3	1.00	143.1	74	2980000	0.00002	1.000	0.00002
1y1	1d1	164.2	-85.3	1.00	140.6	74	3220000	0.00002	1.000	0.00002
1y2	1d1	164.2	-85.3	1.00	140.6	74	3220000	0.00002	1.000	0.00002
2d2	1d1	160.8	-85.3	1.00	138.7	2	3410000	0.00000	1.000	0.00000
2c1	1d1	160.5	-85.3	1.00	138.5	2	3430000	0.00000	1.000	0.00000
1w3	1d1	157.6	-85.3	1.00	136.9	74	3610000	0.00002	1.000	0.00002
1w4	1d1	157.6	-85.3	1.00	136.9	74	3610000	0.00002	1.000	0.00002
1v1	1d1	157.5	-85.3	1.00	136.8	74	3620000	0.00002	1.000	0.00002
1v2	1d1	157.5	-85.3	1.00	136.8	74	3620000	0.00002	1.000	0.00002
2f1	1d1	140.6	-85.3	1.00	127.3	3	4940000	0.00000	1.000	0.00000
1g1	1d1	140.6	-85.3	1.00	127.3	9	4940000	0.00000	1.000	0.00000
2d1	1d1	140.5	-85.3	1.00	127.2	8	4960000	0.00000	1.000	0.00000
1c1	1d1	140.0	-85.3	1.00	126.9	748	5020000	0.00015	1.000	0.00015
1c1	1x2	140.0	-78.8	1.00	123.3	74	5950000	0.00001	1.000	0.00001
1c1	2a1	140.0	-75.2	1.00	121.3	7	6580000	0.00000	1.000	0.00000
1c1	1x4	140.0	-74.7	1.00	121.0	74	6660000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1v4	139.9	-74.4	1.00	120.8	74	6720000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	2b1	139.9	-72.6	1.00	119.7	20	7100000	0.00000	1.000	0.00000
1d1	1y6	139.9	-68.3	1.00	117.3	74	8010000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1w6	139.9	-67.1	1.00	116.7	74	8250000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1x6	139.9	-67.0	1.00	116.6	74	8300000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1w4	139.9	-63.1	1.00	114.4	74	9290000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1v6	139.9	-62.1	1.00	113.8	74	9580000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1w2	139.9	-62.1	1.00	113.8	74	9580000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1e1	139.9	-61.6	1.00	113.6	903	9690000	0.00009	1.000	0.00009
1d1	1v2	139.9	-60.5	1.00	112.9	74	10000000	0.00001	1.000	0.00001
1d1	1z2	139.9	-60.4	1.00	107.3	74	16300000	0.00000	1.000	0.00000
1d1	1e1	139.9	-40.3	1.00	101.6	4	33300000	0.00000	1.000	0.00000
1d1	1i1	139.9	-39.6	1.00	101.1	195	36000000	0.00001	1.000	0.00001
1u6	1i1	139.8	-39.6	1.00	101.1	74	36000000	0.00000	1.000	0.00000
1u5	1i1	139.8	-39.6	1.00	101.1	74	36000000	0.00000	1.000	0.00000
1v5	1i1	137.2	-39.6	1.00	99.6	74	45500000	0.00000	1.000	0.00000
1v6	1i1	137.2	-39.6	1.00	99.6	74	45500000	0.00000	1.000	0.00000
1w1	1i1	137.2	-39.6	1.00	99.6	74	45500000	0.00000	1.000	0.00000
1w2	1i1	137.2	-39.6	1.00	99.6	74	45500000	0.00000	1.000	0.00000
1u3	1i1	130.4	-39.6	1.00	95.8	74	125000000	0.00000	1.000	0.00000

lu4	li1	130.4	-39.6	1.00	95.8	74	1250000000	0.00000	1.000	0.00000
ly3	li1	113.9	-39.6	1.00	86.5	74	_____	0.00000	1.000	0.00000
total								0.00121		0.00468

→環境UF : 0.005

## 【加圧器スプレイ配管 (評価点A)】

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ	実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin	KE	salt'	n	n*	u	fen	uen
2E2	2E2	424.7	-610.8	2.20	1263.2	2	263	0.00760	7.777	0.05914
1B8	1B8	238.4	-543.1	1.50	629.6	74	2510	0.02948	3.920	0.11556
1B9	1A7	172.8	-426.4	1.30	448.8	74	9310	0.00795	3.550	0.02822
1BA	1A6	133.1	-396.1	1.00	296.5	74	74500	0.00099	3.164	0.00314
1BB	1B2	103.7	-383.8	1.00	274.8	74	113000	0.00065	3.088	0.00202
1BC	1B9	82.2	-408.6	1.00	260.1	74	153000	0.00048	2.000	0.00097
1BD	1B3	70.1	-353.9	1.00	237.6	74	261000	0.00028	2.758	0.00078
1B6	2A1	52.2	-345.9	1.00	224.3	7	373000	0.00002	4.153	0.00008
1B6	2C1	52.2	-345.6	1.00	224.2	2	374000	0.00001	3.973	0.00002
1B6	2H1	52.2	-340.2	1.00	221.1	2	408000	0.00000	4.187	0.00002
1B6	1G1	52.2	-337.6	1.00	219.7	9	424000	0.00002	4.200	0.00009
1B6	1J1	52.2	-336.0	1.00	218.8	2	435000	0.00000	4.211	0.00002
1B6	1F1	52.2	-335.8	1.00	218.6	4	438000	0.00001	4.214	0.00004
1B6	1D1	52.2	-335.5	1.00	218.5	48	439000	0.00011	4.215	0.00046
1B7	1D1	52.0	-335.5	1.00	218.4	74	440000	0.00017	4.126	0.00069
1B5	1D1	45.5	-335.5	1.00	214.7	74	489000	0.00015	4.821	0.00073
1A3	1D1	43.3	-335.5	1.00	213.5	74	508000	0.00015	1.000	0.00015
1B4	1D1	31.5	-335.5	1.00	206.8	74	636000	0.00012	1.000	0.00012
1A4	1D1	27.1	-335.5	1.00	204.4	74	691000	0.00011	1.000	0.00011
1I1	1D1	25.4	-335.5	1.00	203.4	476	715000	0.00067	1.000	0.00067
1I1	1E1	25.4	-335.5	1.00	203.4	4	715000	0.00001	1.000	0.00001
1I1	1I1	25.4	-335.4	1.00	203.3	2420	718000	0.00337	1.000	0.00337
1C1	1I1	25.1	-335.4	1.00	203.1	480	723000	0.00066	1.000	0.00066
1C1	1C1	25.1	-335.3	1.00	203.1	423	723000	0.00059	1.000	0.00059
1E1	1C1	25.0	-335.3	1.00	203.1	4	723000	0.00001	1.000	0.00001
1D1	1C1	18.8	-335.3	1.00	199.6	476	817000	0.00058	1.000	0.00058
1D1	1A5	18.8	-335.2	1.00	199.5	74	820000	0.00009	1.000	0.00009
1D1	1J2	18.8	-335.2	1.00	199.5	2	820000	0.00000	1.000	0.00000
1D1	1BA	18.8	-325.4	1.00	194.0	74	1000000	0.00007	1.000	0.00007
1D1	1B4	18.8	-313.4	1.00	187.2	74	1120000	0.00007	1.000	0.00007
1D1	1B5	18.8	-270.5	1.00	163.1	74	1760000	0.00004	1.000	0.00004
1D1	1BB	18.8	-265.7	1.00	160.3	74	1860000	0.00004	1.000	0.00004
1D1	1A4	18.8	-221.5	1.00	135.4	46	3790000	0.00001	1.000	0.00001
1B3	1A4	18.3	-221.5	1.00	134.4	28	3910000	0.00001	1.000	0.00001

1B3	1B6	18.3	-219.5	1.00	133.2	46	4060000	0.00001	1.000	0.00001
1G1	1B6	15.6	-219.5	1.00	132.5	9	4160000	0.00000	1.000	0.00000
1A5	1B6	16.6	-219.5	1.00	131.5	19	4300000	0.00000	1.000	0.00000
1A5	1A1	16.6	-216.1	1.00	131.2	55	4340000	0.00001	1.000	0.00001
1A2	1A1	15.0	-216.1	1.00	130.2	19	4490000	0.00000	1.000	0.00000
1A6	1B6	12.5	-217.2	1.00	128.7	74	4720000	0.00002	1.000	0.00002
1A7	1B7	11.0	-203.5	1.00	120.9	74	6690000	0.00001	1.000	0.00001
1A2	2J1	15.0	-195.7	1.00	118.7	5	7460000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2J1	15.0	-194.4	1.00	118.0	5	7730000	0.00000	1.000	0.00000
1B2	1B6	8.1	-195.8	1.00	114.9	74	9050000	0.00001	1.000	0.00001
1A2	2B1	15.0	-178.6	1.00	109.1	5	13900000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2G1	15.0	-170.3	1.00	104.4	2	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D3	15.0	-170.3	1.00	104.4	2	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2F1	15.0	-170.3	1.00	104.4	3	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D1	15.0	-170.3	1.00	104.4	8	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D2	15.0	-170.3	1.00	104.4	2	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2E1	15.0	-170.3	1.00	104.4	2	21800000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2B1	15.0	-165.1	1.00	101.5	5	33900000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2G1	15.0	-161.3	1.00	99.3	2	47600000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D1	15.0	-160.3	1.00	98.8	8	53500000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D2	15.0	-154.9	1.00	95.7	2	140000000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2D3	15.0	-152.3	1.00	94.2	2	792000000	0.00000	1.000	0.00000
1A2	2F1	15.0	-149.7	1.00	92.8	2	—————	0.00000	1.000	0.00000
合計 :										0.21865

→環境UF : 0.219

タイトル	1次冷却材管の疲労累積係数の算出根拠について																						
説明	<p>一次冷却材管の疲労累積係数の算出根拠は以下の通りである。</p> <p><b>【ホットレグ、クロスオーバレグ、コールドレグ】</b></p> <p>1. 解析モデル</p> <p>疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <p>&lt;配管荷重の算出&gt;</p> <table border="1" data-bbox="475 857 1310 936"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>MSAP</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td></td> </tr> </table> <p>&lt;温度分布の算出※&gt;</p> <table border="1" data-bbox="475 978 1310 1335"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>ABAQUS Ver. 6.12-3</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> </tr> <tr> <td>要素数</td> </tr> <tr> <td>節点数</td> </tr> </table> <p>※ホットレグ、クロスオーバレグ、コールドレグの評価点には一次冷却材ポンプの取合部やエルボの外側テーパ部等の構造不連続部が多数あるため、2次元FEM解析にて温度分布を計算している。算出した温度分布は、ピーク応力のうち、板厚内の温度分布による応力のパラメータに用いられる。なお、梁モデルは外荷重による応力算出に用いられる。</p> <p>2. 材料物性</p> <p>材料物性値を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="416 1682 1362 1973"> <thead> <tr> <th>材 料</th> <th>温度 (°C)</th> <th>Sm (MPa)</th> <th>使用箇所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">SCS14A</td> <td>324.9</td> <td>117</td> <td>ホットレグ</td> </tr> <tr> <td>289.2</td> <td>121</td> <td>クロスオーバレグ コールドレグ</td> </tr> </tbody> </table>	解析プログラム	MSAP	要素種類		解析プログラム	ABAQUS Ver. 6.12-3	要素種類		要素次数	要素数	節点数	材 料	温度 (°C)	Sm (MPa)	使用箇所	SCS14A	324.9	117	ホットレグ	289.2	121	クロスオーバレグ コールドレグ
解析プログラム	MSAP																						
要素種類																							
解析プログラム	ABAQUS Ver. 6.12-3																						
要素種類																							
要素次数																							
要素数																							
節点数																							
材 料	温度 (°C)	Sm (MPa)	使用箇所																				
SCS14A	324.9	117	ホットレグ																				
	289.2	121	クロスオーバレグ コールドレグ																				

3. 最大評価点の選定

解析モデル上の評価点は構造不連続部等において応力が大きくなる点を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。  
解析モデル上の評価点および最大評価点の選定結果を添付 1 に示す。

4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力評価のフローを添付 2 に示す。

状態	荷重の組み合わせ
供用状態 A、B	圧力+機械的荷重+配管の熱膨張荷重+熱過渡

5. Ke 係数

評価に用いた Ke 係数を添付 3 に示す。

6. 環境評価パラメータ

評価に用いた環境評価パラメータ（環境効果補正係数  $f_{en}$ ）を、添付 3 に示す。

【管台】

1. 解析モデル

疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。

<配管荷重の算出>

解析プログラム	MSAP (配管) PC1.0
要素種類	

<応力の算出>

解析プログラム	ABAQUS Ver. 2018
要素種類	
要素次数	
要素数	
節点数	

## 2. 材料物性

材料物性値を以下に示す。

材 料	温度 (°C)	Sm (MPa)	使用箇所
SUSF316	324.9	117	加圧器サージ管台
	289.2	120	蓄圧タンク注入管台 充てん管台

## 3. 最大評価点の選定

解析モデル上の評価点は、構造不連続部において応力が大きくなる評価断面を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。

解析モデル上の評価点および最大評価点の選定結果を添付4に示す。

## 4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力評価のフローを添付5に示す。

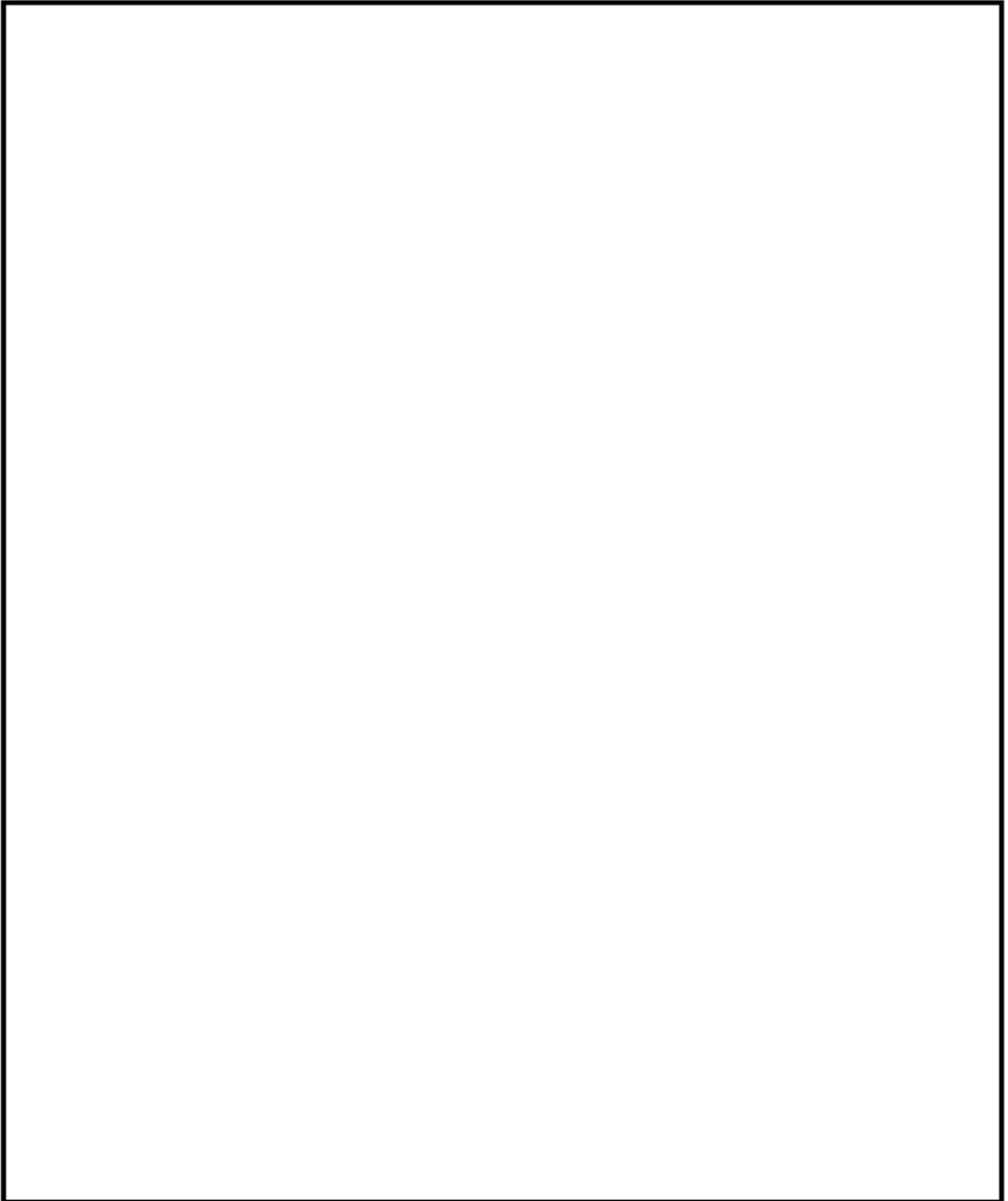
状態	荷重の組み合わせ
供用状態A、B	圧力+機械的荷重+自重+熱膨張荷重+熱過渡

## 5. Ke係数

評価に用いたKe係数を添付6に示す。

## 6. 環境評価パラメータ

評価に用いた環境評価パラメータ（環境効果補正係数 $f_{en}$ ）を、添付6に示す。



一次冷却材管 形状及び評価点

一次冷却材管 最大疲労評価点の選定 (1/2)

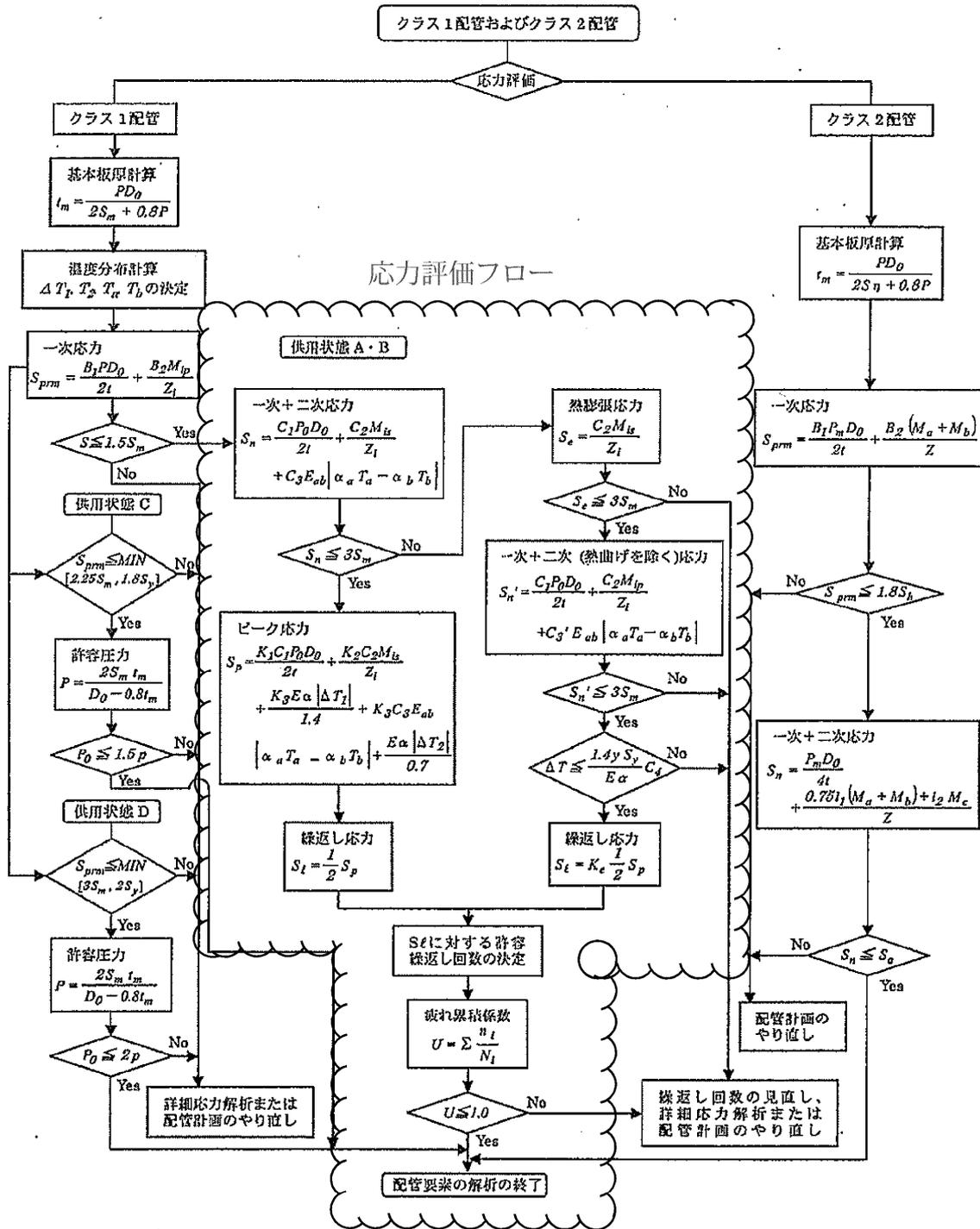
評価部位	節点番号	圧力による 応力 (MPa)	外荷重による 応力 (MPa)	板厚方向線形 温度差による 応力 (MPa)	構造上の 不連続による 熱応力 (MPa)	板厚方向 非線形温度差 による応力 (MPa)	ピーク応力 Sp (MPa)	繰返しピーク 応力強さ ALT (MPa)	繰返しピーク 応力強さ ALT' (MPa)	疲労累積係数	許容値
ホットレグ	107	111.3	95.4	134.0	0.0	128.6	469.4	234.7	263.0	0.00016	1.0
	109	76.7	8.1	169.6	0.0	128.6	382.9	191.5	214.6	0.00004	
	111	84.3	8.2	186.5	0.0	128.6	407.6	203.8	228.4	0.00006	
	112	126.6	96.0	123.9	31.9	130.6	509.1	254.5	285.2	0.00031	
	113	120.0	101.7	124.5	0.0	142.5	488.6	244.3	273.8	0.00029	
	115	129.3	143.5	124.1	30.3	132.7	559.8	279.9	313.7	0.00067	
	117	111.2	54.1	134.5	0.0	129.1	428.9	214.5	240.3	0.00010	
クロスオーバーレグ	141	120.0	17.6	105.5	0.0	44.2	287.2	143.6	159.1	0.00003	
	142	141.4	48.4	98.8	29.5	45.3	363.4	181.7	201.3	0.00013	
	143	133.6	35.5	104.6	0.0	51.6	325.3	162.7	180.2	0.00010	
	145	141.4	39.6	98.8	29.5	45.3	354.6	177.3	196.4	0.00012	
	147	120.0	13.3	105.5	0.0	44.2	282.9	141.5	156.7	0.00002	
	149	109.1	11.4	95.9	0.0	44.2	260.6	130.3	144.4	0.00001	
	151	120.0	14.4	105.5	0.0	44.2	284.0	142.0	157.4	0.00002	
	152	136.3	40.3	98.8	29.5	45.3	350.1	175.0	193.9	0.00011	
153	128.4	36.3	104.6	0.0	51.6	320.9	160.4	177.8	0.00009		

→ ホットレグ通常UF : 0.001

一次冷却材管 最大疲労評価点の選定 (2/2)

評価部位	節点番号	圧力による 応力 (MPa)	外荷重による 応力 (MPa)	板厚方向線形 温度差による 応力 (MPa)	構造上の 不連続による 熱応力 (MPa)	板厚方向 非線形温度差 による応力 (MPa)	ピーク応力 Sp (MPa)	繰返しピーク 応力強さ ALT (MPa)	繰返しピーク 応力強さ ALT' (MPa)	疲労累積係数	許容値
クロスオーバーバレッジ	155	136.3	36.9	98.8	29.5	45.3	346.7	173.4	192.1	0.00011	1.0
	157	120.0	13.0	105.5	0.0	44.2	282.6	141.3	156.6	0.00002	
	159	109.1	10.1	95.9	0.0	44.2	259.3	129.6	143.6	0.00001	
	160	120.0	10.7	105.5	0.0	44.2	280.3	140.2	155.3	0.00002	
	161	136.3	29.3	98.8	29.5	45.3	339.1	169.6	187.9	0.00010	
	163	128.4	26.9	104.6	0.0	51.6	311.6	155.8	172.6	0.00008	
	165	136.3	33.5	98.8	29.5	45.3	343.3	171.6	190.2	0.00010	
	167	149.4	12.6	102.3	208.8	12.6	485.7	242.9	269.1	0.00114	
コールドレグ	181	151.2	93.9	110.8	104.6	18.0	478.5	239.3	265.1	0.00087	1.0
	183	109.4	9.8	96.7	0.0	41.9	257.9	128.9	142.9	0.00001	
	185	120.4	34.2	106.4	0.0	41.9	302.9	151.5	167.8	0.00003	
	186	134.6	95.5	99.6	32.0	43.3	404.9	202.5	224.3	0.00018	
	189	124.6	83.1	106.4	0.0	49.7	363.8	181.9	201.5	0.00012	
	191	124.5	97.9	101.8	23.2	44.9	392.4	196.2	217.4	0.00016	
	194	111.1	42.4	109.4	0.0	44.3	307.2	153.6	170.2	0.00003	

→クロスオーバーバレッジ 通常UF : 0.002  
コールドレグ 通常UF : 0.001



(備考) クラス 2 配管の解析手順には管の機械的荷重により生じるモーメント  $M_b$  を含む場合の式のみを記載した

解説図 PPB-3511-1 配管要素の解析手順

応力評価フローチャート

Ke係数と環境評価パラメータ (ホットレグ) (詳細評価手法: 評価点115)

過渡条件番号		一次+二次+ ピーク応力 sp	割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B			補正前 salt	補正後 salt'					
43 (2H1)	16 (1I1)	559.8	1.0	279.9	313.7	2	54800	0.00004	24.579	0.00090
39 (2F1)	16 (1I1)	480.1	1.0	240.0	269.0	3	127000	0.00002	24.579	0.00058
29 (2C1)	16 (1I1)	463.5	1.0	231.7	259.7	2	154000	0.00001	24.579	0.00032
21 (1L1)	16 (1I1)	461.8	1.0	230.9	258.8	2	158000	0.00001	24.579	0.00031
37 (2E1)	16 (1I1)	457.7	1.0	228.9	256.5	2	165000	0.00001	24.579	0.00030
25 (2A1)	16 (1I1)	456.8	1.0	228.4	256.0	7	167000	0.00004	24.579	0.00103
35 (2D4)	16 (1I1)	454.2	1.0	227.1	254.5	2	173000	0.00001	24.579	0.00028
31 (2D1)	16 (1I1)	453.7	1.0	226.9	254.2	8	174000	0.00005	24.579	0.00113
33 (2D2)	16 (1I1)	453.6	1.0	226.8	254.2	2	174000	0.00001	24.579	0.00028
41 (2G1)	16 (1I1)	450.7	1.0	225.3	252.5	2	180000	0.00001	24.579	0.00027
3 (1C1)	16 (1I1)	428.6	1.0	214.3	240.1	38	244000	0.00016	24.579	0.00383
15 (1I1)	36 (2D5)	396.3	1.0	198.2	222.1	2	397000	0.00001	11.729	0.00006
3 (1C1)	2 (1B1)	377.0	1.0	188.5	211.3	74	547000	0.00014	1.000	0.00014
3 (1C1)	48 (2J2)	368.1	1.0	184.1	206.3	63	648000	0.00010	1.000	0.00010
42 (2G1)	15 (1I1)	364.6	1.0	182.3	204.3	2	694000	0.00000	1.000	0.00000
3 (1C1)	38 (2E1)	363.4	1.0	181.7	203.6	2	709000	0.00000	1.000	0.00000
22 (1L2)	15 (1I1)	338.7	1.0	169.3	189.8	2	1070000	0.00000	1.000	0.00000
34 (2D3)	15 (1I1)	328.5	1.0	164.2	184.1	2	1180000	0.00000	1.000	0.00000
40 (2F1)	15 (1I1)	326.5	1.0	163.2	182.9	3	1210000	0.00000	1.000	0.00000
30 (2C2)	15 (1I1)	318.1	1.0	159.0	178.2	2	1320000	0.00000	1.000	0.00000
32 (2D1)	15 (1I1)	318.0	1.0	159.0	178.2	8	1320000	0.00001	1.000	0.00001
3 (1C1)	15 (1I1)	308.6	1.0	154.3	172.9	49	1450000	0.00003	1.000	0.00003
47 (2J1)	26 (2A1)	195.8	1.0	97.9	109.7	7	13200000	0.00000	1.000	0.00000
47 (2J1)	44 (2H2)	190.8	1.0	95.4	106.9	2	16800000	0.00000	1.000	0.00000
3 (1C1)	46 (2I1)	179.8	1.0	89.9	100.7	5	38100000	0.00000	1.000	0.00000
47 (2J1)	12 (1G1)	178.2	1.0	89.1	99.9	9	43700000	0.00000	1.000	0.00000
47 (2J1)	6 (1D1)	171.3	1.0	85.7	96.0	45	101000000	0.00000	1.000	0.00000
3 (1C1)	6 (1D1)	127.5	1.0	63.8	71.4	672	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:										0.00958

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.010

Ke係数と環境評価パラメータ (クロスオーバーレグ) (詳細評価手法: 評価点167)

過渡条件番号		一次+二次+ ピーク応力 sp	割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B			補正前 salt	補正後 salt'					
47 (2J1)	2 (1B1)	485.7	1.0	242.9	269.1	63	127000	0.00050	10.843	0.00538
1 (1A1)	2 (1B1)	485.4	1.0	242.7	268.9	11	127000	0.00009	10.787	0.00093
1 (1A1)	16 (1I1)	478.8	1.0	239.4	265.2	63	137000	0.00046	3.607	0.00166
27 (2B1)	16 (1I1)	435.7	1.0	217.9	241.4	5	236000	0.00002	5.944	0.00013
25 (2A1)	16 (1I1)	412.9	1.0	206.5	228.7	2	330000	0.00001	4.564	0.00003
25 (2A1)	48 (2J2)	401.7	1.0	200.8	222.5	5	392000	0.00001	7.899	0.00010
15 (1I1)	36 (2D5)	354.0	1.0	177.0	196.1	2	926000	0.00000	1.000	0.00000
43 (2H1)	48 (2J2)	352.3	1.0	176.2	195.2	2	958000	0.00000	1.000	0.00000
35 (2D4)	48 (2J2)	350.2	1.0	175.1	194.0	2	999000	0.00000	1.000	0.00000
11 (1G1)	48 (2J2)	343.1	1.0	171.5	190.1	9	1060000	0.00001	1.000	0.00001
33 (2D2)	48 (2J2)	342.6	1.0	171.3	189.8	2	1070000	0.00000	1.000	0.00000
39 (2F1)	48 (2J2)	342.3	1.0	171.1	189.6	3	1070000	0.00000	1.000	0.00000
37 (2E1)	48 (2J2)	338.8	1.0	169.4	187.7	2	1110000	0.00000	1.000	0.00000
41 (2G1)	48 (2J2)	329.4	1.0	164.7	182.5	2	1220000	0.00000	1.000	0.00000
13 (1H1)	48 (2J2)	322.9	1.0	161.5	178.9	0	1300000	0.00000	1.000	0.00000
29 (2C1)	48 (2J2)	319.7	1.0	159.9	177.1	2	1340000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	48 (2J2)	318.8	1.0	159.4	176.6	34	1360000	0.00002	1.000	0.00002
15 (1I1)	42 (2G1)	280.5	1.0	140.2	155.4	2	2090000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	38 (2E1)	268.2	1.0	134.1	148.6	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
15 (1I1)	46 (2I1)	267.5	1.0	133.7	148.2	5	2560000	0.00000	1.000	0.00000
4 (1C1)	15 (1I1)	192.8	1.0	96.4	106.8	61	17000000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	40 (2F1)	103.7	1.0	51.9	57.4	3	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計 :										0.00828

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt'  $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

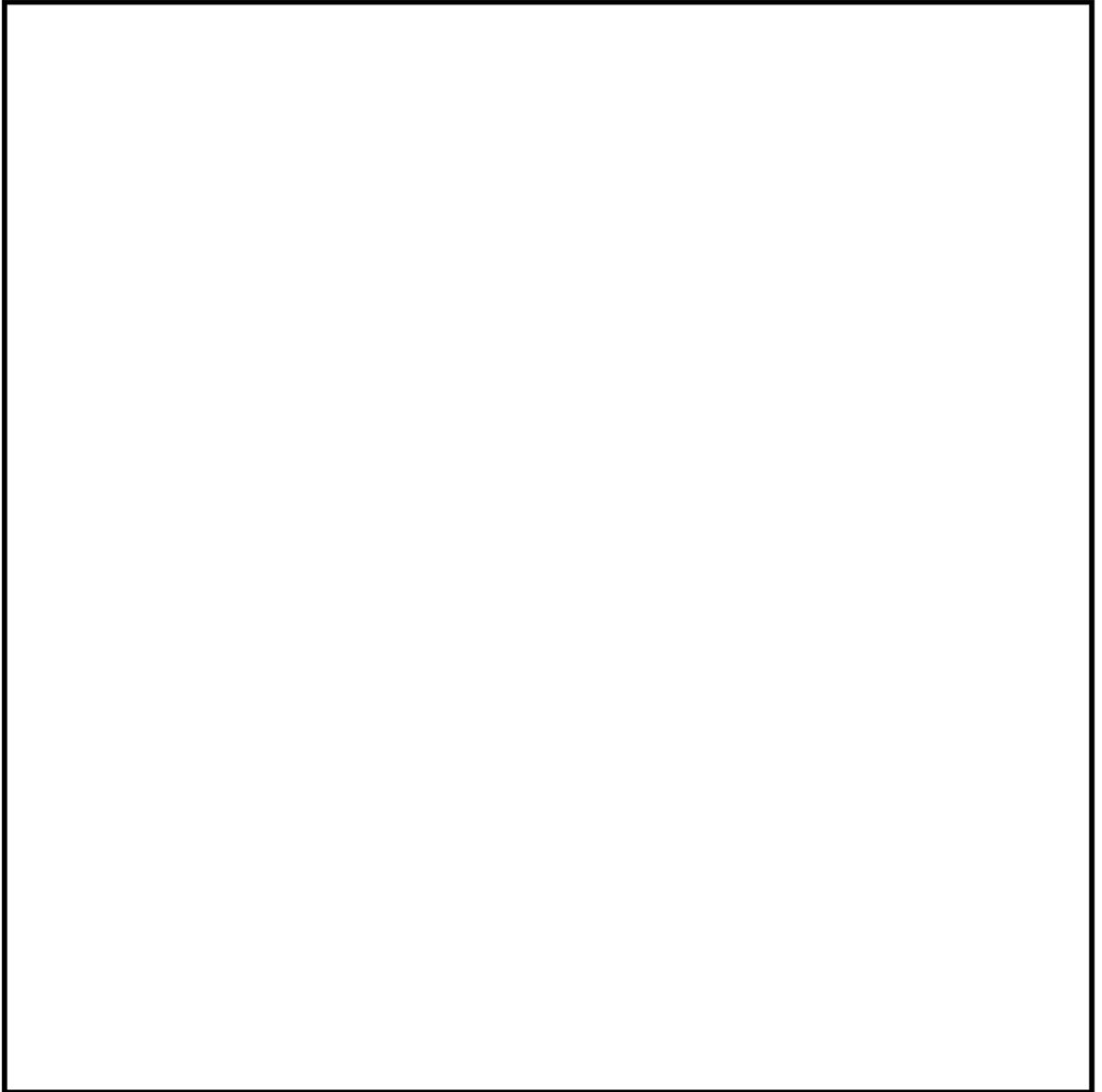
→環境UF : 0.009

## Ke 係数と環境評価パラメータ (コールドログ) (詳細評価手法: 評価点181)

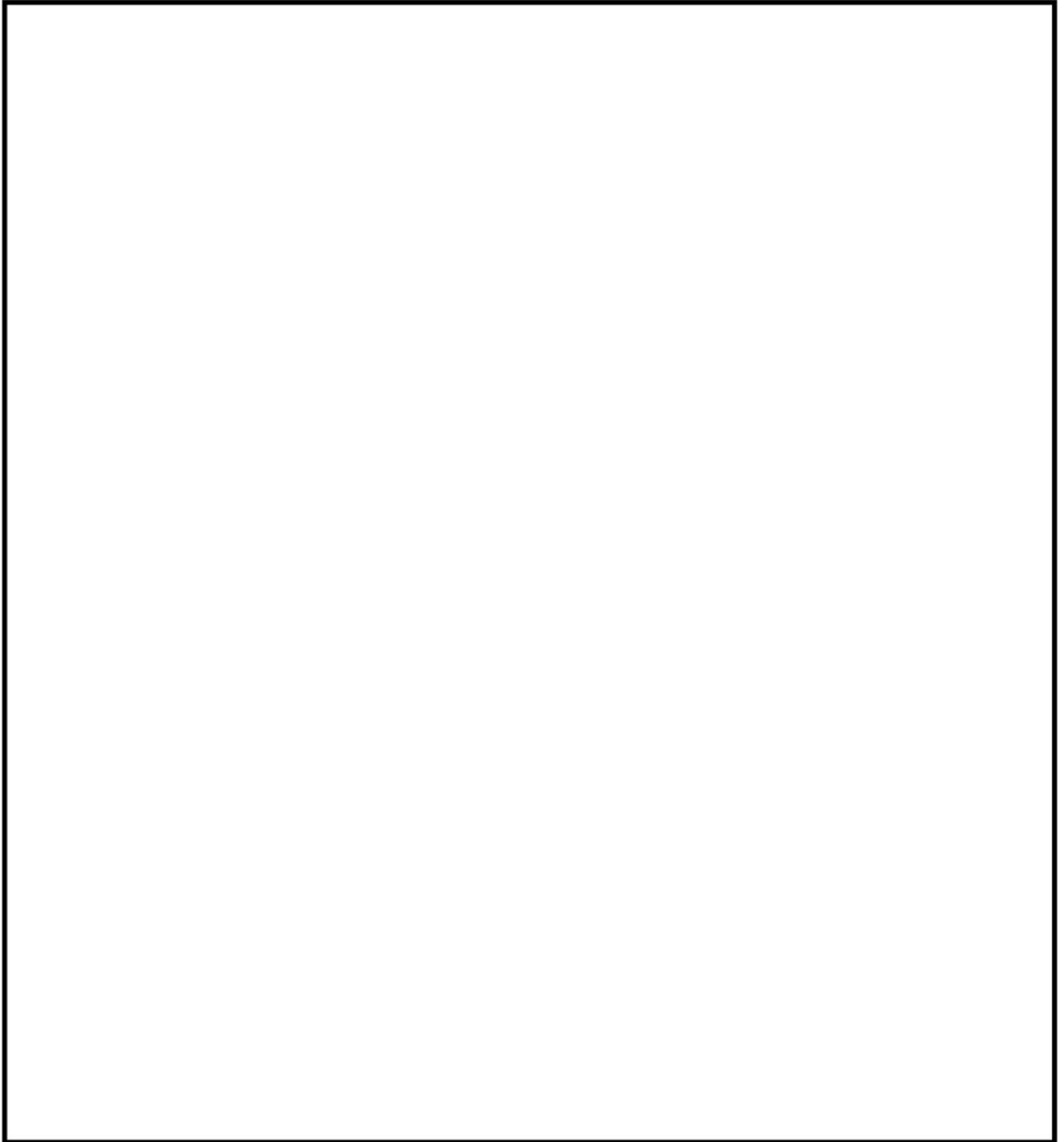
過渡条件番号		一次+二次+ ピーク応力 sp	割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B			補正前 salt	補正後 salt'					
27 (2B1)	16 (1I1)	478.5	1.0	239.3	265.1	5	138000	0.00004	5.669	0.00021
1 (1A1)	16 (1I1)	477.9	1.0	239.0	264.8	65	139000	0.00047	2.865	0.00134
1 (1A1)	2 (1B1)	437.1	1.0	218.6	242.2	9	231000	0.00004	10.933	0.00043
25 (2A1)	2 (1B1)	430.2	1.0	215.1	238.3	7	256000	0.00003	24.579	0.00067
47 (2J1)	2 (1B1)	424.1	1.0	212.0	234.9	58	279000	0.00021	11.198	0.00233
47 (2J1)	48 (2J2)	411.1	1.0	205.6	227.7	5	339000	0.00001	5.780	0.00009
15 (1I1)	36 (2D5)	365.8	1.0	182.9	202.6	2	735000	0.00000	1.000	0.00000
43 (2H1)	48 (2J2)	362.5	1.0	181.3	200.8	2	783000	0.00000	1.000	0.00000
11 (1G1)	48 (2J2)	354.3	1.0	177.2	196.3	9	920000	0.00001	1.000	0.00001
35 (2D4)	48 (2J2)	352.0	1.0	176.0	195.0	2	963000	0.00000	1.000	0.00000
33 (2D2)	48 (2J2)	351.0	1.0	175.5	194.5	2	983000	0.00000	1.000	0.00000
39 (2F1)	48 (2J2)	350.2	1.0	175.1	194.0	3	999000	0.00000	1.000	0.00000
37 (2E1)	48 (2J2)	341.4	1.0	170.7	189.1	2	1080000	0.00000	1.000	0.00000
41 (2G1)	48 (2J2)	334.7	1.0	167.3	185.4	2	1160000	0.00000	1.000	0.00000
13 (1H1)	48 (2J2)	334.6	1.0	167.3	185.3	0	1160000	0.00000	1.000	0.00000
29 (2C1)	48 (2J2)	331.3	1.0	165.6	183.5	2	1190000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	48 (2J2)	328.8	1.0	164.4	182.1	34	1220000	0.00003	1.000	0.00003
42 (2G1)	15 (1I1)	308.4	1.0	154.2	170.9	2	1510000	0.00000	1.000	0.00000
46 (2I1)	15 (1I1)	287.4	1.0	143.7	159.2	5	1900000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	38 (2E1)	270.9	1.0	135.4	150.0	2	2430000	0.00000	1.000	0.00000
5 (1D1)	15 (1I1)	238.3	1.0	119.2	132.0	61	4220000	0.00001	1.000	0.00001
5 (1D1)	40 (2F1)	108.3	1.0	54.1	60.0	3	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:										0.00513

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

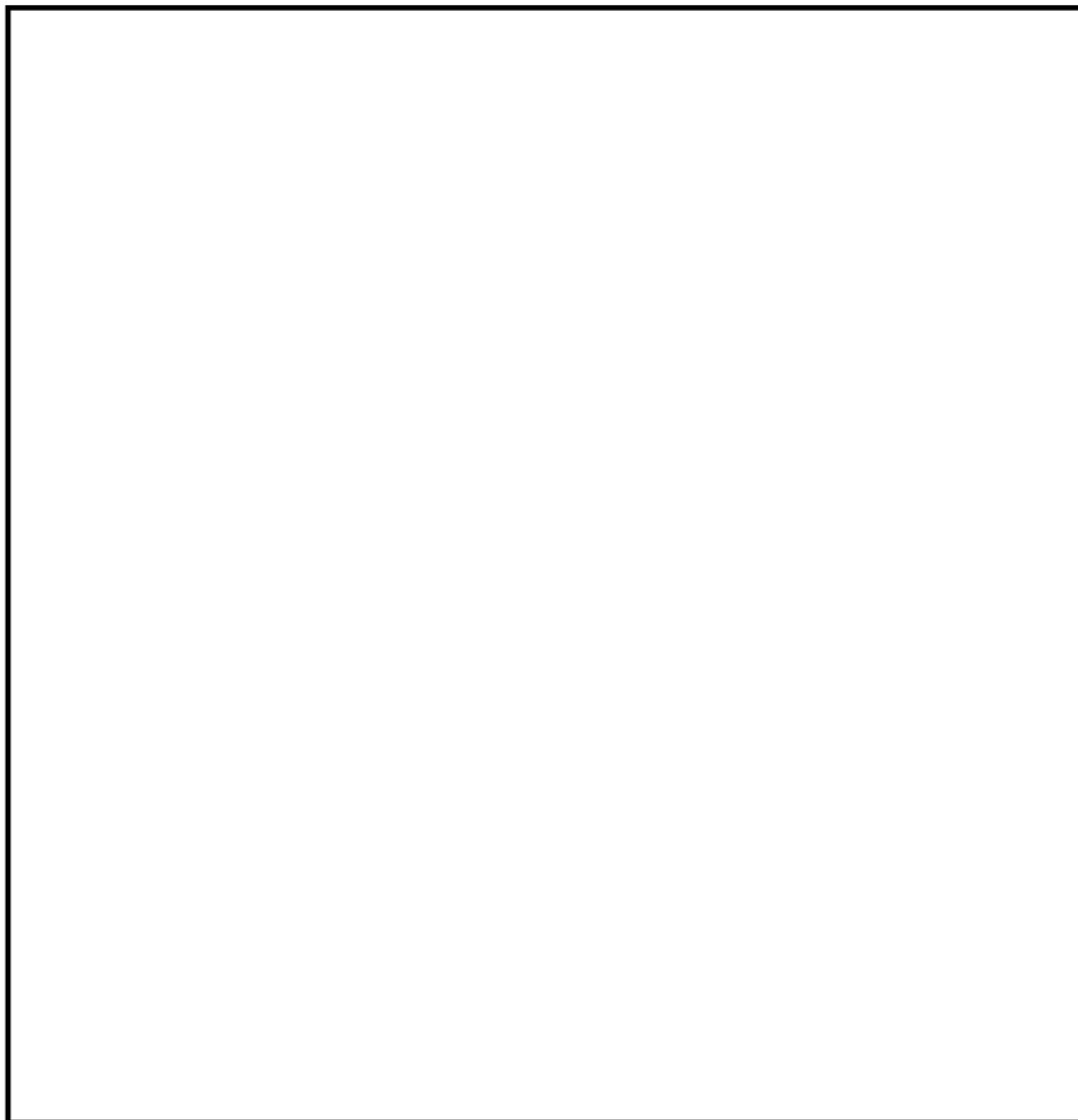
→環境UF: 0.006



(1) 一次冷却材管 (加圧器サージ管台) 評価点



(2) 一次冷却材管 (蓄圧タンク注入管台) 評価点



(3) 一次冷却材管 (充てん管台) 評価点

## (1) 一次冷却材管 (加圧器サージ管台) 最大疲労評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00778	0.00282
2	0.0	0.00000	0.00004
3	0.0	0.00072	0.00205
4	0.0	0.0	0.00002
5	0.0	0.00201	0.00066
6	0.0	0.0	0.0
7	0.00007	0.00683	0.00057
8	0.0	0.0	0.0
9	0.00333	0.01072	0.0
10	0.0	0.0	0.00000
11	0.0	0.00010	0.00001
12	0.0	0.0	0.00007

許容値  $U_f = 1.0$ 

→通常UF : 0.011

## (2) 一次冷却材管 (蓄圧タンク注入管台) 最大疲労評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00879	0.00445
2	0.0	0.00014	0.00016
3	0.0	0.00009	0.00026
4	0.0	0.00001	0.00000
5	0.0	0.00000	0.00001
6	0.0	0.00000	0.00000
7	0.00013	0.0	0.00006
8	0.0	0.00000	0.0
9	0.00144	0.00186	0.0
10	0.0	0.0	0.0
11	0.00002	0.00006	0.00000
12	0.0	0.0	0.0
13	0.0	0.00000	0.00001
14	0.0	0.00000	0.00009

許容値  $U_f = 1.0$ 

→通常UF : 0.009

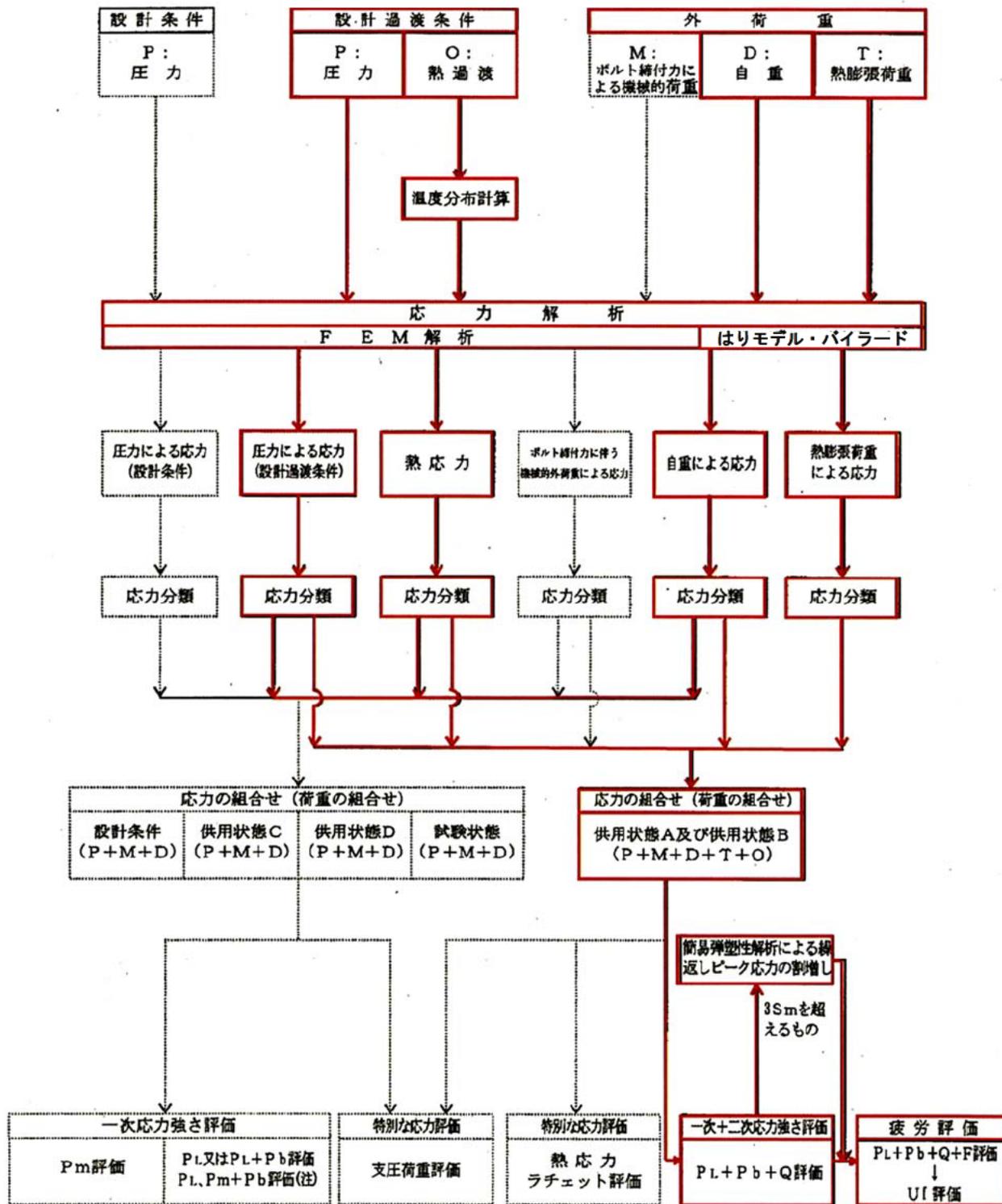
## (3) 一次冷却材管 (充てん管台) 最大疲労評価点の選定

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00096	0.00088
2	0.0	0.00001	0.00001
3	0.0	0.00000	0.00000
4	0.0	0.00000	0.0
5	0.0	0.00000	0.00000
6	0.0	0.0	0.0
7	0.0	0.00001	0.00000
8	0.0	0.0	0.0
9L	0.00042	0.00142	0.00001
10L	0.0	0.00000	0.00000
9C	0.00000	0.00002	0.00001
10C	0.0	0.00011	0.00004
11L	0.00296	0.00168	0.00000
12L	0.0	0.00000	0.0
11C	0.00007	0.00004	0.00000
12C	0.0	0.00012	0.00006
13L	0.00025	0.00025	0.00000
14L	0.00000	0.00000	0.00001
13C	0.0	0.00000	0.00000
14C	0.00000	0.00013	0.00012

許容値  $U_f = 1.0$ 

→通常UF : 0.003

応力評価フロー



(注) 試験状態に適用  
 (……部分は本評価では対象外)

(1) Ke係数と環境疲労パラメータ (加圧器サージライン用管台) (詳細評価手法: 評価点9)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2D4	1B2	384.2	-173.4	1.00	278.8	312.5	2	55900	0.00004	5.835	0.00021
2G1	1B2	366.8	-173.4	1.00	270.1	302.7	2	66500	0.00003	6.505	0.00020
1D1	1B2	316.0	-173.4	1.00	244.7	274.3	884	114000	0.00775	5.410	0.04195
1D1	1A2	316.0	-173.4	1.00	244.7	274.3	10	114000	0.00009	5.410	0.00047
2A1	1A2	311.2	-173.4	1.00	242.3	271.6	7	120000	0.00006	3.778	0.00022
2B1	1A2	305.3	-173.4	1.00	239.4	268.2	5	129000	0.00004	4.605	0.00018
1G1	1A2	304.5	-173.4	1.00	238.9	267.8	9	130000	0.00007	5.483	0.00038
2J2	1A2	298.8	-173.4	1.00	236.1	264.6	63	139000	0.00045	1.903	0.00086
2H2	1A2	287.3	-173.4	1.00	230.4	258.2	2	160000	0.00001	3.020	0.00004
2I1	1A2	282.3	-173.4	1.00	227.9	255.4	5	169000	0.00003	2.466	0.00007
1M1	1A2	279.8	-173.4	1.00	226.6	254.0	343	175000	0.00196	4.867	0.00954
1M1	2E1	279.8	-44.7	1.00	162.3	181.8	2	1230000	0.00000	1.000	0.00000
1M1	2J1	279.8	-13.5	1.00	146.7	164.4	63	1720000	0.00004	1.000	0.00004
1M1	1I1	279.8	-8.8	1.00	144.3	161.7	70	1810000	0.00004	1.000	0.00004
1M1	1B1	279.8	-8.6	1.00	144.2	161.6	74	1810000	0.00004	1.000	0.00004
1M1	NSS	279.8	0.0	1.00	139.9	156.8	137	2010000	0.00007	1.000	0.00007
1M1	2D4	279.8	75.5	1.00	102.2	114.5	2	9240000	0.00000	1.000	0.00000
1M1	2H1	279.8	82.6	1.00	98.6	110.5	2	12300000	0.00000	1.000	0.00000
1M1	2G1	279.8	133.3	1.00	73.3	82.1	2	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.05431

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.055

(2) Ke係数と環境疲労パラメータ (蓄圧タンク注入管台) (詳細評価手法: 評価点1)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数	環境効果 補正係数	環境効果を考慮した 疲労累積係数
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2L1	2E1	657.4	-287.5	1.88	889.0	985.0	2	558	0.00358	3.427	0.01228
2E1	2L1	531.8	-244.0	1.88	729.9	808.7	2	1040	0.00192	4.367	0.00840
2G1	2G1	553.3	-258.3	1.70	691.7	766.4	2	1250	0.00160	5.168	0.00827
2D4	1B2	541.5	-189.6	1.65	601.5	666.4	2	2020	0.00099	3.963	0.00392
1B2	2D5	285.2	-195.0	1.65	395.1	437.8	2	10300	0.00019	4.254	0.00083
1B2	1B2	285.2	-189.6	1.00	237.4	263.0	72	144000	0.00050	3.092	0.00155
1I1	2J1	146.2	-2.4	1.00	74.3	82.3	63	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.03525

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.036

(3) Ke係数と環境疲労パラメータ (充てん管台) (詳細評価手法: 評価点11L)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
2J1	201	6.3	-675.8	1.42	484.1	536.3	2	4580	0.00044	8.052	0.00352
2J1	205	6.3	-633.3	1.33	425.4	471.3	2	7650	0.00026	5.626	0.00147
2J1	2N2	6.3	-591.3	1.30	389.4	431.4	2	11100	0.00018	8.060	0.00145
2J1	2N5	6.3	-559.2	1.26	357.0	395.5	3	17000	0.00018	7.922	0.00140
2J1	202	6.3	-608.6	1.00	307.5	340.7	2	35900	0.00006	5.473	0.00030
2J1	2N4	6.3	-605.4	1.00	305.8	338.8	2	36900	0.00005	7.917	0.00043
2J1	204	6.3	-505.4	1.00	255.8	283.4	2	95300	0.00002	5.650	0.00012
2J1	2Q6	6.3	-504.3	1.00	255.3	282.9	5	96400	0.00005	14.052	0.00073
2J1	2Q2	6.3	-451.1	1.00	228.7	253.4	4	177000	0.00002	12.069	0.00027
2J1	2R1	6.3	-450.3	1.00	228.3	252.9	39	179000	0.00022	13.953	0.00304
1B1	2R1	6.3	-450.3	1.00	228.3	252.9	35	179000	0.00020	7.616	0.00149
1B1	2S1	6.3	-450.3	1.00	228.3	252.9	39	179000	0.00022	7.689	0.00168
NSS	2S1	0.0	-450.3	1.00	225.1	249.4	137	193000	0.00071	13.829	0.00982
1I1	2S1	-5.6	-450.3	1.00	222.3	246.3	70	208000	0.00034	7.457	0.00251
204	2S1	-54.0	-450.3	1.00	198.1	219.5	2	426000	0.00000	13.829	0.00006
2QE	2S1	-57.6	-450.3	1.00	196.3	217.5	2	451000	0.00000	13.829	0.00006
2E1	2S1	-139.4	-450.3	1.00	155.4	172.2	2	1470000	0.00000	1.000	0.00000
202	2S1	-167.9	-450.3	1.00	141.2	156.4	2	2030000	0.00000	1.000	0.00000
2N3	2S1	-174.5	-450.3	1.00	137.9	152.8	2	2250000	0.00000	1.000	0.00000
2QC	2S1	-176.2	-450.3	1.00	137.1	151.8	2	2310000	0.00000	1.000	0.00000
2A1	2S1	-225.8	-450.3	1.00	112.2	124.3	7	5670000	0.00000	1.000	0.00000
2N5	2S1	-244.6	-450.3	1.06	109.1	120.9	3	6710000	0.00000	1.000	0.00000
201	2S1	-294.3	-450.3	1.40	108.8	120.6	2	6800000	0.00000	1.000	0.00000
2F1	2S1	-237.3	-450.3	1.00	106.5	118.0	3	7730000	0.00000	1.000	0.00000
205	2S1	-269.0	-450.3	1.14	103.6	114.8	2	9120000	0.00000	1.000	0.00000
2D3	2S1	-244.3	-450.3	1.00	103.0	114.1	2	9440000	0.00000	1.000	0.00000
2QF	2S1	-245.4	-450.3	1.00	102.4	113.5	3	9740000	0.00000	1.000	0.00000
2D5	2S1	-245.5	-450.3	1.00	102.4	113.5	2	9760000	0.00000	1.000	0.00000
2N1	2S1	-279.0	-450.3	1.17	100.0	110.8	2	12000000	0.00000	1.000	0.00000
2C1	2S1	-251.3	-450.3	1.00	99.5	110.2	2	12600000	0.00000	1.000	0.00000
2D1	2S1	-254.6	-450.3	1.00	97.8	108.4	8	14800000	0.00000	1.000	0.00000
2G1	2S1	258.7	450.3	1.00	95.8	106.1	2	16100000	0.00000	1.000	0.00000
2H2	2S1	-262.1	-450.3	1.00	94.1	104.2	2	22400000	0.00000	1.000	0.00000
2QG	2S1	-269.2	-450.3	1.00	90.5	100.3	2	40700000	0.00000	1.000	0.00000
1G1	2S1	-269.4	-450.3	1.00	90.4	100.2	9	41400000	0.00000	1.000	0.00000
2B1	2S1	-273.1	-450.3	1.00	88.6	98.1	5	67300000	0.00000	1.000	0.00000
2QA	2S1	-279.6	-450.3	1.00	85.3	94.5	2	541000000	0.00000	1.000	0.00000
1C1	2S1	-283.2	-450.3	1.00	83.5	92.5	587	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.02836

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt'  $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF: 0.029

タイトル	仕切弁（余熱除去ポンプループ高温側入口止め弁 弁箱）の疲労累積係数の算出根拠について
説明	<p>余熱除去ポンプ入口弁の疲労累積係数の算出根拠は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 解析モデル <p>JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300による評価を実施しており、解析モデルに該当するものはない。</p> <p>設計・建設規格のVVB-3300（弁の応力評価）に従った応力解析結果を添付1に示す。</p> <p>また、設計・建設規格のVVB-3300（弁の応力評価）に従った疲労累積係数と、環境疲労評価手法による環境疲労累積係数の算出結果を添付2に示す。</p> </li> <li>2. 材料物性 <p>材質：SCS14A</p> <p>ヤング率：<math>1.78 \times 10^5</math> (MPa)</p> <p>熱膨張係数：<math>1.844 \times 10^{-5}</math> (mm/mm・℃)</p> </li> <li>3. 最大評価点の選定 <p>JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300の規格計算をしているため該当するものはない。</p> </li> <li>4. 応力分類 <p>荷重の組合せ：圧力、配管反力、熱による応力 (JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300によって規定されている)</p> </li> <li>5. Ke係数 <p>簡易弾塑性解析を実施していないため該当なし。</p> </li> <li>6. 環境評価パラメータ <p>環境補正係数 (Fen) の算出根拠を添付3に示す。</p> </li> </ol>

応力解析結果

弁番号 PCV-420/430							呼び径 12B		弁箱の材料 SCS14A		接続管の材料 SUS316TP		計算書番号 クラス1弁	
弁箱の応力解析 (1/2)														
(1) 設計条件及び諸元														
最高使用圧力 P (MPa)	最高使用温度 (°C)	260 °Cにおける 換算圧力 P <sub>s</sub> (MPa)	260 °Cにおける 設計応力強さ S <sub>m</sub> (MPa)	接続管の260 °Cに おける設計降伏点 S <sub>y</sub> (MPa)	260 °Cにおける 縦弾性係数 E (MPa)	260 °Cにおける 熱膨張係数 α (×10 <sup>-6</sup> mm/mm・°C)	A-A断面における 金属部の厚さ t <sub>0</sub> (mm)	交さ部壁面とその 二等分線とに接す る円の直径 T <sub>0.1</sub> (mm)	交さ部壁面に接する 円の直径 T <sub>0.2</sub> (mm)					
17.16	343	18.5	125	137	178000	18.44								
A-A断面における 平均半径 r (mm)	A-A断面における 内半径 r <sub>1</sub> (mm)	流体部面積 A <sub>f</sub> (mm <sup>2</sup> )	金属部面積 A <sub>m</sub> (mm <sup>2</sup> )	接続管の断面積の 2分の1 A <sub>1</sub> (mm <sup>2</sup> )	A-A断面における 金属部の断面積 A <sub>2</sub> (mm <sup>2</sup> )	接続管の断面係数 Z <sub>1</sub> (mm <sup>3</sup> )	A-A断面における 断面係数 Z <sub>2</sub> (mm <sup>3</sup> )	A-A断面における 極断面係数 Z <sub>p</sub> (mm <sup>3</sup> )	厚さ方向の温度勾配 による最大熱応力 Q T (MPa)					
圧力の段階的な変 化の最大値と最小 値との差 ΔP <sub>lim</sub> (MPa)	厚板部分と薄板部 分の平均温度の差 の最大値 ΔT (°C)	流体温度の段階的 な温度変化の最大 値と最小値との差 ΔT <sub>lim</sub> (°C)	応力係数 C <sub>b</sub> C <sub>2</sub> C <sub>3</sub> C <sub>4</sub> C <sub>5</sub>					ネック部の角 度による係数 K	繰返しピーク 応力強さの割 増し係数 K <sub>s</sub> <sup>(注1)</sup>	材料の種類に応じた値 q A <sub>0</sub> B <sub>0</sub>				
								-	-	-	-	(注1) K <sub>s</sub> e 適用判定の S <sub>n</sub> は VVB-3370 による。 (注2) S <sub>n</sub> は VVB-3340 による。		
(2) 弁箱の応力														
項 目	一次応力 S					一次+二次応力 S <sub>n</sub> <sup>(注)</sup>								
	内圧による一次応力	一次局部応力	配管反力による応力			起動時及び停止時 (式VVB-10.1)	起動時及び停止時以外 (式VVB-10.2)							
P <sub>d</sub>			P <sub>b</sub>	P <sub>t</sub>										
計算応力 (MPa)	63	149	36	70	70	206	146							
許容応力 (MPa)	S <sub>m</sub> = 125	2.25 S <sub>m</sub> = 283	1.5 S <sub>m</sub> = 188			3 S <sub>m</sub> = 377								
評 価	弁箱に生ずる応力はすべて許容応力以下であるので、強度は十分である。													

疲労累積係数・環境疲労評価結果

運転状態	過渡の組合せ		S <sub>p1</sub> (MPa)	S <sub>11</sub> (MPa)	S <sub>12</sub> (MPa)	N (回)	N* (回)	N/N*	Δt1 (sec)	Δt2 (sec)	Δt (sec)	E (MPa)	ε̇ (%/sec)	鋼種:1 以外:2	ε̇* (-)	T1 (°C)	T2 (°C)	T (°C)	T* (°C)	Fen (-)	Fen×N/N*	
	加熱過程	冷却過程																				
起動時及び停止時	H1	C1	318.6	159.3	179.6	74	1288218	0.000				178000		1							24.579	0.001
1次系漏えい試験(注1)	H24	C28	318.6	159.3	179.6	63	1288218	0.000				178000		1							9.105	0.000
起動時及び停止時 以外	H22	C21	790.2	395.1	445.3	2	9613	0.000				178000		1							19.669	0.004
	H2	C23	645.8	322.9	364.0	2	25820	0.000				178000		1							26.226	0.002
	H2	C25	593.2	296.6	334.3	2	39518	0.000				178000		1							27.272	0.001
	H2	C7	529.3	264.7	298.3	70	72123	0.001				178000		1							27.071	0.026
	H2	C24	502.6	251.3	283.3	3	95696	0.000				178000		1							26.290	0.001
	H2	C19	483.2	241.6	272.3	2	118994	0.000				178000		1							26.855	0.000
	H2	C29	471.1	235.5	265.5	5	137028	0.000				178000		1							30.456	0.001
	H2	C9	467.0	233.5	263.2	2	143743	0.000				178000		1							27.946	0.000
	H2	C16	465.0	232.5	262.1	2	147246	0.000				178000		1							26.499	0.000
	H2	C13	442.4	221.2	249.3	7	194256	0.000				178000		1							26.837	0.001
	H2	C18	440.7	220.4	248.4	8	198246	0.000				178000		1							27.182	0.001
	H2	C27	440.7	220.4	248.4	2	198246	0.000				178000		1							26.863	0.000
	H2	C6	430.6	215.3	242.7	9	228762	0.000				178000		1							31.827	0.001
	H2	C3	407.6	203.8	229.7	789	322019	0.002				178000		1							32.273	0.079
	H12	C3	333.6	166.8	188.0	7	1108655	0.000				178000		1							28.831	0.000
	H9	C3	318.6	159.3	179.6	2	1288539	0.000				178000		1							30.796	0.000
	H10	C3	315.8	157.9	178.0	2	1326772	0.000				178000		1							30.866	0.000
	H7	C3	308.9	154.4	174.1	79	1425991	0.000				178000		1							35.350	0.002
	H13	C3	307.3	153.6	173.2	5	1450733	0.000				178000		1							35.350	0.000
	H4	C3	306.5	153.2	172.7	4	1463314	0.000				178000		1							30.793	0.000
H6	C3	305.2	152.6	172.0	6	1482455	0.000				178000		1							34.734	0.000	
							ΣN/N* (注3)	0.005													ΣFen×N/N*	0.125

→通常UF : 0.005

→環境UF : 0.125

注) Spi:ピーク応力強さの変動幅(MPa)、 N:繰り返し回数(回)、 N\*:許容繰り返し回数(回)、  
 N/N\*:疲労累積係数、 Δt:過渡継続時間(s)、 E:縦弾性係数(MPa)、  
 ε̇:ひずみ速度(%/s)、 ε̇\*:ひずみ速度依存パラメータ、 T:温度(°C)、  
 T\*:温度依存パラメータ、 Fen:環境効果補正係数、 Fen×N/N\*:環境疲労累積係数  
 を示す。

環境効果補正係数 ( $F_{en}$ ) の算出根拠

環境疲労補正係数については、環境疲労評価手法の簡易評価手法によって算出している。

例として起動時及び停止時の過渡の組み合わせ  $F_{en}=24.579$  の導出の過程を説明する。

環境疲労評価手法 EF-2320 (オーステナイト系ステンレス鋼及びこれらの溶接部) より、PWRプラント環境 (鋳鋼) では、下記のように定まる。

$$\ln(F_{en}) = (C - \dot{\epsilon}^*) \times T^*$$

$$C = 3.910$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(49.9): [\dot{\epsilon} > 49.9](\%/s)$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(\dot{\epsilon}): [0.00004 \leq \dot{\epsilon} \leq 49.9](\%/s)$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(0.00004): [\dot{\epsilon} < 0.00004](\%/s)$$

$$T^* = 0.000782 \times T: [T \leq 325](^{\circ}\text{C})$$

$$T^* = 0.254: [T > 325](^{\circ}\text{C})$$

ここで、

$$\dot{\epsilon} = 100 \times S_{pi} / (E \times \Delta t) = 100 \times 318.6 / (178000 \times \boxed{\phantom{000}}) = \boxed{\phantom{000}}(\%/s)$$

$$\dot{\epsilon} < (0.00004)(\%/s)$$

であるから、 $\dot{\epsilon}^* = \ln(0.00004) = -10.126631$

$$T = \boxed{\phantom{000}}(^{\circ}\text{C})$$

であるので、 $T^* = \boxed{\phantom{0000000000}}$

したがって、

$$F_{en} = e^{(3.91 + 10.126631) \times \boxed{\phantom{000}}} = 24.579$$

タイトル	スイング逆止弁（蓄圧タンク注入ライン第1逆止弁 弁箱）の疲労累積係数の算出根拠について
説明	<p>蓄圧タンク注入ライン逆止弁の疲労累積係数の算出根拠は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 解析モデル <p>JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300による評価を実施しており、解析モデルに該当するものはない。 設計・建設規格のVVB-3300（弁の応力評価）に従った応力解析結果を添付1に示す。 また、設計・建設規格のVVB-3300（弁の応力評価）に従った疲労累積係数と、環境疲労評価手法による環境疲労累積係数の算出結果を添付2に示す。</p> </li> <li>2. 材料物性 <p>材質：SCS14A ヤング率：<math>1.78 \times 10^5</math> (MPa) 熱膨張係数：<math>1.844 \times 10^{-5}</math> (mm/mm・℃)</p> </li> <li>3. 最大評価点の選定 <p>JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300の規格計算をしているため該当するものはない。</p> </li> <li>4. 応力分類 <p>荷重の組合せ：圧力, 配管反力, 熱による応力 (JSME S NC-1 2005/2007 VVB-3300によって規定されている)</p> </li> <li>5. Ke係数 <p>簡易弾塑性解析を実施していないため該当なし。</p> </li> <li>6. 環境評価パラメータ <p>環境補正係数 (Fen) の算出根拠を添付3に示す。</p> </li> </ol>

## 応力解析結果

釜番号 Y-SJ-136A~D      呼び径 12R      弁箱の材料 SCS14A      接続管の材料 SUS316TP						計算書番号 クラスII釜				
弁箱のばね解析 (1/2) (1) 設計条件及び諸元										
最高使用圧力 P (MPa)	最高使用温度 (°C)	260 °Cにおける 換算圧力 P <sub>e</sub> (MPa)	260 °Cにおける 設計応力強さ S <sub>m</sub> (MPa)	接続管の260 °Cに おける設計降伏点 S <sub>y</sub> (MPa)	260 °Cにおける 縦弾性係数 E (MPa)	260 °Cにおける 熱膨張係数 α (×10 <sup>-6</sup> mm/mm・°C)	AA断面における 金属部の厚さ t <sub>a</sub> (mm)	交さ部壁面とその 二等分線とに接す る円の直径 T <sub>a1</sub> (mm)	交さ部壁面に接する 円の直径 T <sub>a2</sub> (mm)	
17.16	348	18.5	125	187	178000	18.44				
AA断面における 平均半径 r (mm)	AA断面における 内半径 r <sub>i</sub> (mm)	流体部面積 A <sub>f</sub> (mm <sup>2</sup> )	金属部面積 A <sub>m</sub> (mm <sup>2</sup> )	接続管の断面積の 2分の1 A <sub>1</sub> (mm <sup>2</sup> )	AA断面における 金属部の断面積 A <sub>2</sub> (mm <sup>2</sup> )	接続管の断面係数 Z <sub>1</sub> (mm <sup>3</sup> )	AA断面における 断面係数 Z <sub>2</sub> (mm <sup>3</sup> )	AA断面における 極断面係数 Z <sub>p</sub> (mm <sup>3</sup> )	厚さ方向の温度勾配 による最大熱応力 Q T (MPa)	
圧力の段階的な変 化の最大値と最小 値との差 ΔP <sub>f_m</sub> (MPa)	厚板部分と薄板部 分の平均温度の差 の最大値 ΔT (°C)	流体温度の段階的 な温度変化の最大 値と最小値との差 ΔT <sub>f_m</sub> (°C)	応力係数					ネック部の角 度による係数 K	繰返しピーク 応力強さの割 増し係数 K <sub>e</sub> (注)	材料の種類に応じた値
			C <sub>b</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	C <sub>5</sub>		K <sub>e</sub> (注)	q    A <sub>0</sub> B <sub>0</sub>
									-	-    -    -
(2) 弁箱の応力							(注1) K <sub>e</sub> 適用判定のS <sub>m</sub> はVVB-3370による。 (注2) S <sub>m</sub> はVVB-3340による。			
項 目	一次応力 S					一次+二次応力 S <sub>m</sub> <sup>(注2)</sup>				
	内圧による一次応力	一次局部応力	配管反力による応力			起動時及び停止時 (式VVB-10.1)	起動時及び停止時以外 (式VVB-10.2)			
			P <sub>a</sub>	P <sub>b</sub>	P <sub>t</sub>					
計算応力 (MPa)	93	188	99	78	78	239	289			
許容応力 (MPa)	S <sub>m</sub> = 125	2.25 S <sub>m</sub> = 283	1.5 S <sub>m</sub> = 188			3 S <sub>m</sub> = 377				
評 価	弁箱に生ずる応力はすべて許容応力以下であるので、強度は十分である。									

疲労累積係数・環境疲労評価結果

運転状態	過渡の組合せ		S <sub>pi</sub> (MPa)	N (回)	N*	N/N*	Δt (sec)	E (MPa)	ε̇ (%/sec)	ε̇* (-)	T (℃)	T*	Fen (-)	Fen×N/N*	
	加熱過程	冷却過程													
起動時及び停止時	H1	C1	364.0	74	821581	0.000		178000						24.679	0.002
1次系漏えい試験(注1)	H26	C28	364.0	63	821581	0.000		178000						9.427	0.001
起動時及び停止時 以外	H31	C31	2423.3	2	203	0.010		178000						11.066	0.106
	H28	C33	2369.7	2	223	0.009		178000						11.006	0.099
	H30	C34	2310.8	2	240	0.008		178000						11.344	0.096
	H27	C30	2046.9	2	346	0.006		178000						9.470	0.055
	H32	C35	1444.9	74	1024	0.072		178000						4.655	0.329
	H14	C36	708.5	5	16300	0.000		178000						35.350	0.011
	H12	C36	630.5	7	29113	0.000		178000						29.621	0.007
	H24	C36	612.0	2	33814	0.000		178000						23.704	0.001
	H6	C36	583.5	9	42925	0.000		178000						26.137	0.005
	H18	C36	582.3	2	43384	0.000		178000						24.741	0.001
	H20	C36	572.4	2	47276	0.000		178000						24.823	0.001
	H2	C36	569.9	47	48313	0.001		178000						24.498	0.024
	H2	C21	529.5	2	71988	0.000		178000						20.167	0.001
	H2	C7	466.8	70	144093	0.000		178000						19.843	0.010
	H2	C37	466.8	70	144093	0.000		178000						19.843	0.010
	H2	C23	434.3	2	217153	0.000		178000						20.515	0.000
	H2	C29	407.5	5	322621	0.000		178000						22.223	0.000
	H2	C25	388.1	2	436724	0.000		178000						21.381	0.000
	H2	C19	304.0	2	1503095	0.000		178000						21.479	0.000
	H2	C24	291.2	3	1730228	0.000		178000						21.270	0.000
H2	C26	275.1	2	2111691	0.000		178000						21.320	0.000	
H2	C13	261.5	7	2629205	0.000		178000						25.882	0.000	
				ΣN/N* (注3)		0.109								ΣFen×N/N*	0.758

→0.109

→0.758

注) Spi: ピーク応力強さの変動幅(MPa)、

N/N\*: 疲労累積係数、

ε̇: ひずみ速度(%/s)、

T\*: 温度依存パラメータ、

を示す。

N: 繰り返し回数(回)、

Δt: 過渡継続時間(s)、

ε̇\*: ひずみ速度依存パラメータ、

Fen: 環境効果補正係数、

N\*: 許容繰り返し回数(回)、

E: 縦弾性係数(MPa)、

T: 温度(℃)、

Fen×N/N\*: 環境疲労累積係数

環境効果補正係数 ( $F_{en}$ ) の算出根拠

環境疲労補正係数については、環境疲労評価手法の簡易評価手法によって算出している。

例として起動時及び停止時の過渡の組み合わせ  $F_{en}=24.579$ の導出の過程を説明する。

環境疲労評価手法 EF-2320 (オーステナイト系ステンレス鋼及びこれらの溶接部) より、PWRプラント環境 (鋳鋼) では、下記のように定まる。

$$\ln(F_{en}) = (C - \dot{\epsilon}^*) \times T^*$$

$$C = 3.910$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(49.9): [\dot{\epsilon} > 49.9](\%/s)$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(\dot{\epsilon}): [0.00004 \leq \dot{\epsilon} \leq 49.9](\%/s)$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(0.00004): [\dot{\epsilon} < 0.00004](\%/s)$$

$$T^* = 0.000782 \times T: [T \leq 325](^{\circ}\text{C})$$

$$T^* = 0.254: [T > 325](^{\circ}\text{C})$$

ここで、

$$\dot{\epsilon} = 100 \times S_{pi} / (E \times \Delta t) = 100 \times 318.6 / (178000 \times \boxed{\phantom{000}}) = \boxed{\phantom{000}}(\%/s)$$

$$\dot{\epsilon} < (0.00004)(\%/s)$$

であるから、 $\dot{\epsilon}^* = \ln(0.00004) = -10.126631$

$$T = \boxed{\phantom{000}}(^{\circ}\text{C})$$

$$\text{であるので、} T^* = \boxed{\phantom{000000}}$$

したがって、

$$F_{en} = e^{(3.91 + 10.126631) \times \boxed{\phantom{000}}} = 24.579$$

タイトル	炉心支持構造物の疲労累積係数の算出根拠について								
説明	<p>炉心支持構造物の疲労累積係数の算出根拠は以下のとおりである。</p> <p>1. 解析モデル          疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="475 779 1364 1429"> <tr> <td data-bbox="475 779 703 898">解析プログラム</td> <td data-bbox="703 779 1364 898">(上部炉心支持板) ABAQUS Ver. 2018 (上部及び下部炉心支持柱、下部炉心支持板) NASTRAN Ver. 2011. 1. 0</td> </tr> <tr> <td data-bbox="475 898 703 1016">要素種類</td> <td data-bbox="703 898 1364 1429" rowspan="4"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="475 1016 703 1135">要素次数</td> </tr> <tr> <td data-bbox="475 1135 703 1254">要素数</td> </tr> <tr> <td data-bbox="475 1254 703 1429">節点数</td> </tr> </table> <table border="1" data-bbox="435 1451 1364 1597"> <tr> <td data-bbox="435 1451 1364 1597"></td> </tr> </table>	解析プログラム	(上部炉心支持板) ABAQUS Ver. 2018 (上部及び下部炉心支持柱、下部炉心支持板) NASTRAN Ver. 2011. 1. 0	要素種類		要素次数	要素数	節点数	
解析プログラム	(上部炉心支持板) ABAQUS Ver. 2018 (上部及び下部炉心支持柱、下部炉心支持板) NASTRAN Ver. 2011. 1. 0								
要素種類									
要素次数									
要素数									
節点数									

2. 材料物性値

各部位の設計応力強さを以下に示す。

使用箇所	材料	設計応力強さ	
		Sm(MPa)	温度(°C)
上部炉心支持板	SUSF304 SUS304	113	324.9
上部炉心支持柱	SUS304TKA	113	324.9
下部炉心支持板	SUSF304	116	289.2
下部炉心支持柱	SUS304	116	289.2

3. 最大評価点の選定

解析モデル上の評価点は、構造不連続部等において応力が大きくなる評価断面を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。

解析モデル上の評価点および最大評価点の選定結果を、添付1に示す。

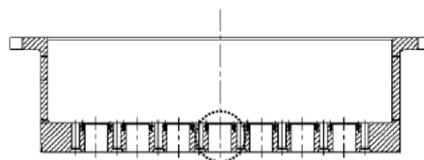
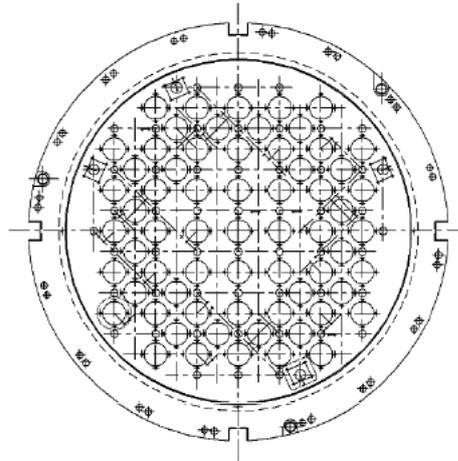
4. 応力分類

評価における荷重の組み合わせを以下に示す。また、応力フローを添付2に示す。

状態	荷重の組み合わせ
供用状態A, B	自重+機械的荷重+圧力+熱過渡荷重

5. Ke係数および環境パラメータ

評価に用いたKe係数および環境評価パラメータ（環境効果補正係数fen）を添付3に示す。



評価部位 (中央部下面)



上部炉心支持板 評価点

## 上部炉心支持板 疲労評価結果 (評価点：中央部下面)

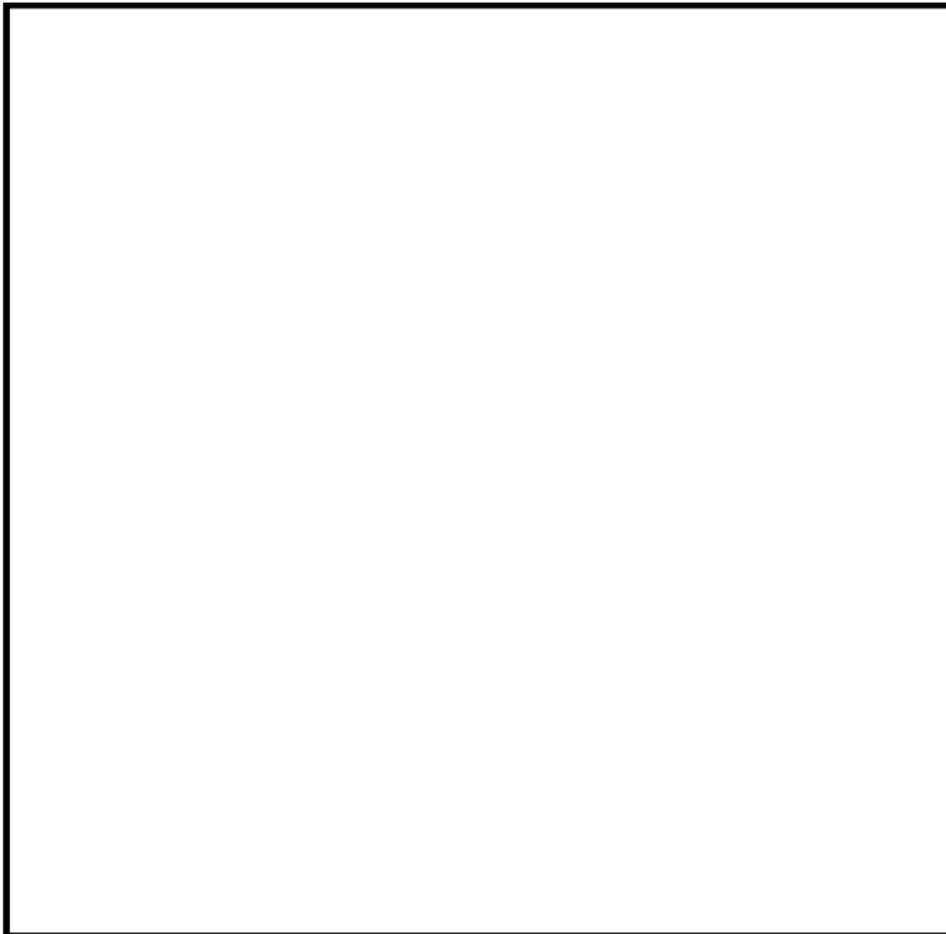
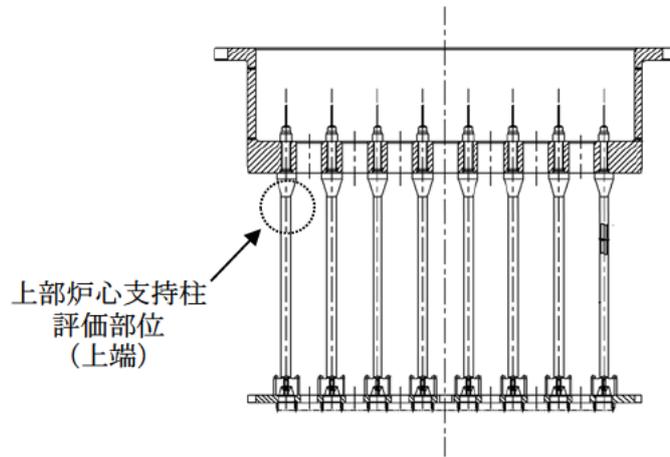
中央部下面

応力強さ (単位：MPa)				繰返し回数		疲労係数 $(=\frac{N}{N^*})$
最大値	最小値	Ke	繰返しピーク応力強さ(注)	実際の繰返し回数N	許容繰返し回数N*	
536.4	-278.1	1.0	407.3 (456.4)	6	8710	0.00069
273.3	-278.1	1.0	275.7 (309.0)	75	59500	0.00126
257.3	-278.1	1.0	267.7 (300.0)	17	69900	0.00024
178.2	-278.1	1.0	228.2 (255.7)	39	168000	0.00023
178.2	-243.3	1.0	210.7 (236.2)	4	270000	0.00001
178.2	-203.0	1.0	190.6 (213.6)	94	506000	0.00019
131.0	-203.0	1.0	167.0 (187.2)	21	1120000	0.00002
106.5	-203.0	1.0	154.8 (173.4)	871	1440000	0.00060
106.5	-98.8	1.0	102.7 (115.1)	21	8980000	0.00000
106.5	-48.7	1.0	77.6 (87.0)	74	—	0.0

疲労累積係数 = 0.00325

(注) 括弧内の数字は、 $\frac{1.95 \times 10^5}{\text{材料の使用温度における縦弾性係数}}$  を乗じて得た値である。

→通常UF : 0.004



上部炉心支持柱 評価点

## 上部炉心支持柱 疲労評価結果 (評価点：上端)

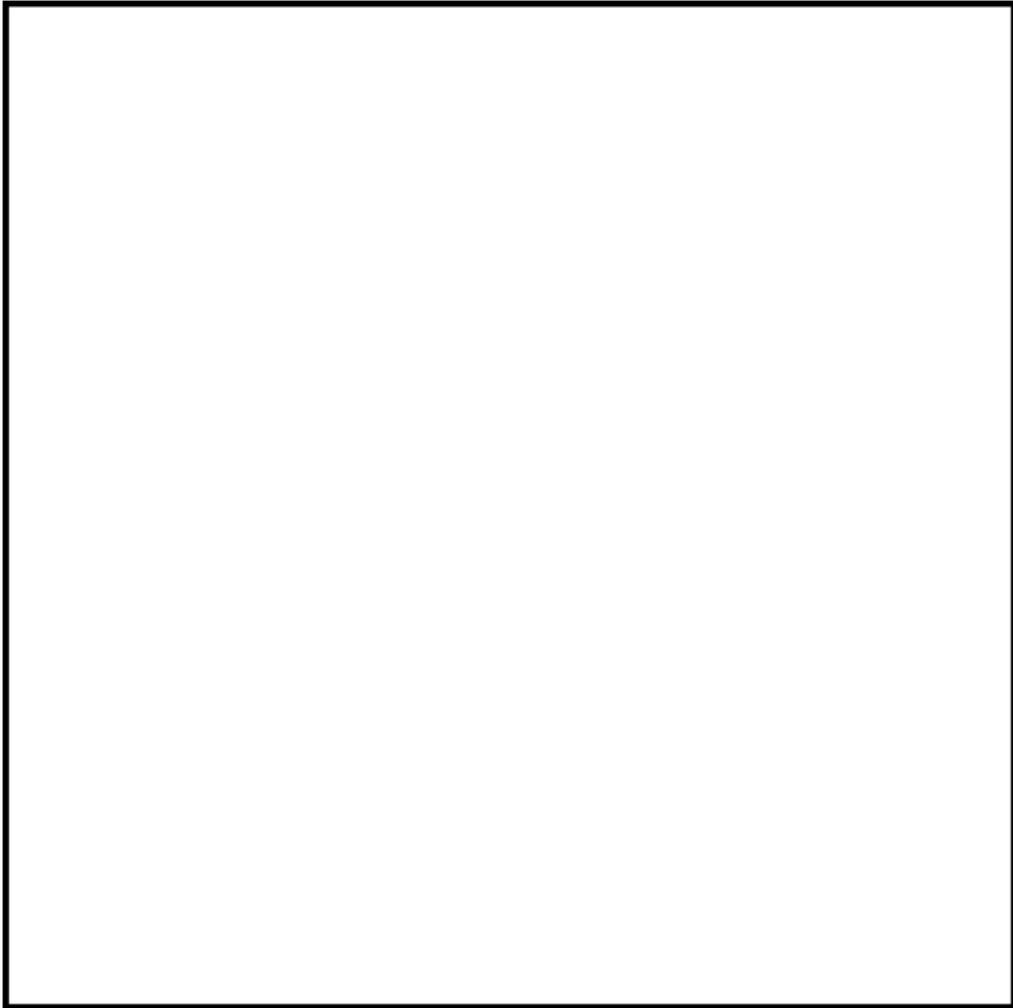
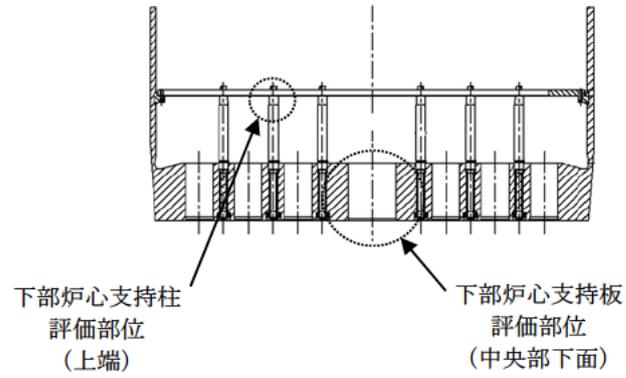
上端

最大値	最小値	応力強さ (単位: MPa)		繰返し回数		疲労係数 ( $\frac{N}{N^*}$ )
		Ke	繰返しピーク応力強さ(注)	実際の繰返し回数N	許容繰返し回数N*	
0.0	-496.0	1.0	248.0 ( 277.9)	4	106000	0.00004
0.0	-366.3	1.0	183.2 ( 205.3)	133	670000	0.00020
-38.9	-366.3	1.0	163.7 ( 183.5)	4	1200000	0.00000
-38.9	-359.3	1.0	160.2 ( 179.6)	2	1280000	0.00000
-92.1	-359.3	1.0	133.6 ( 149.7)	17	2450000	0.00001
-153.9	-359.3	1.0	102.7 ( 115.1)	75	8950000	0.00001
-205.6	-359.3	1.0	76.8 ( 86.1)	21	—————	0.0

疲労累積係数 = 0.00026

(注) 括弧内の数字は、 $\frac{1.95 \times 10^5}{\text{材料の使用温度における縦弾性係数}}$  を乗じて得た値である。

→通常UF : 0.001



下部炉心構造物組立体 評価点

## 下部炉心支持板 疲労評価結果 (評価点：中央部下面)

中央部下面

応力強さ (単位：MPa)		繰返し回数		疲労係数 $\left(\frac{N}{N^*}\right)$		
最大値	最小値	繰返しピーク応力強さ <sup>(注)</sup>	実際の繰返し回数N		許容繰返し回数N*	
501.3	-197.5	1.0	349.4 (387.1)	6	18900	0.00032
401.3	-197.5	1.0	299.4 (331.7)	15	41100	0.00036
401.3	0.0	1.0	200.6 (222.3)	60	394000	0.00015
311.9	0.0	1.0	156.0 (172.8)	17	1460000	0.00001
269.0	0.0	1.0	134.5 (149.0)	4	2500000	0.00000
247.5	0.0	1.0	123.8 (137.1)	56	3580000	0.00002
247.5	163.1	1.0	42.2 (46.8)	81	—	0.0

疲労累積係数 = 0.00086

(注) 括弧内の数字は、 $\frac{1.95 \times 10^5}{\text{材料の使用温度における縦弾性係数}}$  を乗じて得た値である。

→通常UF : 0.001

## 下部炉心支持柱 疲労評価結果 (評価点: 上端)

上端

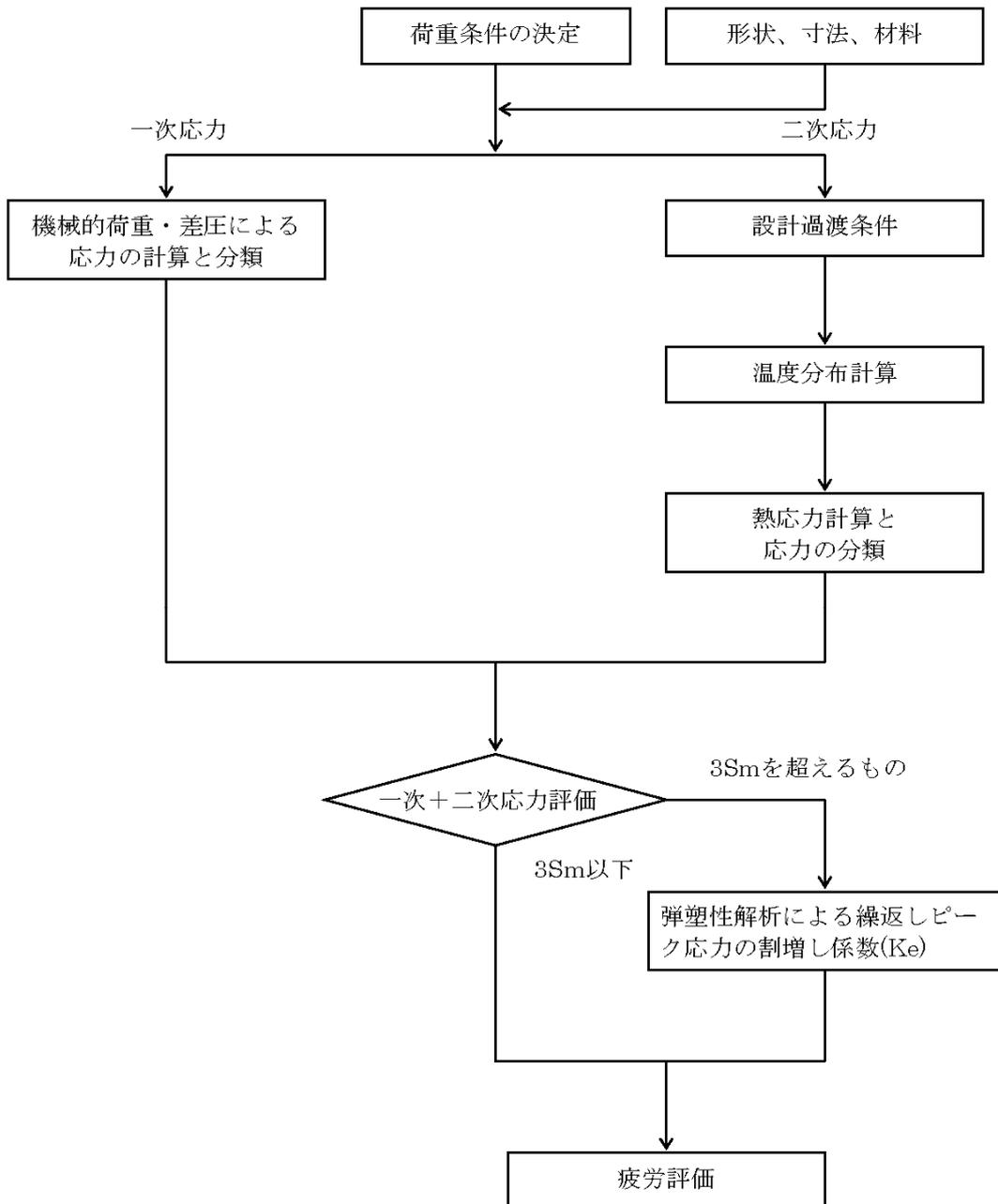
応力強さ (単位:MPa)			繰返し回数		疲労係数 ( $\frac{N}{N^*}$ )	
最大値	最小値	Ke	繰返しピーク応力強さ <sup>(注)</sup>	実際の繰返し回数N		許容繰返し回数N*
0.0	-618.6	1.0	309.3 ( 342.7)	21	34900	0.00060
0.0	-542.9	1.0	271.5 ( 300.8)	116	68900	0.00168
-120.3	-542.9	1.0	211.3 ( 234.1)	6	286000	0.00002
-202.0	-542.9	1.0	170.5 ( 188.9)	75	1090000	0.00007
-314.4	-542.9	1.0	114.2 ( 126.6)	17	5100000	0.00000
-381.4	-542.9	1.0	80.8 ( 89.5)	772	—	0.0

疲労累積係数 = 0.00238

(注) 括弧内の数字は、 $\frac{1.95 \times 10^6}{\text{材料の使用温度における縦弾性係数}}$  を乗じて得た値である。

→通常UF : 0.003

## 応力評価フロー



## Ke係数と環境疲労パラメータ (詳細評価手法)

## 上部炉心支持板 疲労評価結果 (評価点: 中央部下面)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
F	1A1	538.4	-278.1	1.00	407.3	458.4	0	8710	0.00089	10.833	0.00748
C	1A1	273.3	-278.1	1.00	275.7	308.0	75	58500	0.00126	12.788	0.01812
E	1A1	257.3	-278.1	1.00	287.7	300.0	17	88800	0.00024	10.377	0.00252
A-2	1A1	178.2	-278.1	1.00	228.2	255.7	38	188000	0.00023	13.218	0.00307
A-2	D-1	178.2	-243.3	1.00	210.7	238.2	4	270000	0.00001	10.811	0.00018
A-2	B-1	178.2	-203.0	1.00	180.6	213.8	84	506000	0.00018	1.000	0.00018
D-2	B-1	131.0	-203.0	1.00	187.0	187.2	21	1120000	0.00002	1.000	0.00002
B-2	B-1	108.5	-203.0	1.00	154.8	173.4	871	1440000	0.00080	1.000	0.00080
B-2	D-2	108.5	-88.8	1.00	102.7	115.1	21	8880000	0.00000	1.000	0.00000
B-2	A-2	108.5	-48.7	1.00	77.8	87.0	74	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.03015

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.031

## 上部炉心支持柱 疲労評価結果 (評価点: 中央部下面)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		修正前 salt	修正後 salt'					
NSS	D-1	0.0	-486.0	1.00	248.0	277.9	4	106000	0.00004	7.356	0.00028
NSS	1A1	0.0	-366.3	1.00	183.2	205.3	133	670000	0.00020	1.000	0.00020
F	1A1	-38.9	-366.3	1.00	183.7	183.5	4	1200000	0.00000	1.000	0.00000
F	B-1	-38.9	-366.3	1.00	180.2	179.6	2	1280000	0.00000	1.000	0.00000
E	B-1	-92.1	-366.3	1.00	183.8	149.7	17	2450000	0.00001	1.000	0.00001
C	B-1	-153.9	-366.3	1.00	102.7	116.1	75	8950000	0.00001	1.000	0.00001
D-2	B-1	-205.8	-366.3	1.00	78.8	88.1	21	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.00050

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.001

: 割り増し係数Ke, 環境効果補正係数fenを示す

## 下部炉心支持板 疲労評価結果 (評価点：中央部下面)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数 n	許容繰返し 回数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smin		修正前 salt	修正後 salt'					
F	D-2	501.3	-197.5	1.00	349.4	387.1	8	18900	0.00032	8.102	0.00257
C	D-2	401.3	-197.6	1.00	299.4	331.7	15	41100	0.00036	8.712	0.00318
C	NSS	401.3	0.0	1.00	200.6	222.3	60	394000	0.00015	12.308	0.00187
E	NSS	311.9	0.0	1.00	155.9	172.8	17	1480000	0.00001	1.000	0.00001
D-1	NSS	299.0	0.0	1.00	134.5	149.0	4	2500000	0.00000	1.000	0.00000
A-2	NSS	247.5	0.0	1.00	123.8	137.1	58	3580000	0.00002	1.000	0.00002
A-2	B-2	247.5	183.1	1.00	42.2	46.8	81	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.00785

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.008

 : 割り増し係数Ke, 環境効果補正係数fenを示す

## 下部炉心支持柱 疲労評価結果 (評価点: 中央部下面)

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数 KE	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回 数 n	許容繰返し 回 数 n*	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果も考慮した 疲労累積係数 ueo
A	B	smax	smin		補正前 salt	補正後 salt'					
NSS	D-2	0.0	-818.8	1.00	308.3	342.7	21	34800	0.00080	12.127	0.00730
NSS	B-1	0.0	-542.9	1.00	271.5	300.8	118	88800	0.00188	14.488	0.02441
F	B-1	-120.3	-542.9	1.00	211.3	234.1	8	286000	0.00002	8.484	0.00020
C	B-1	-202.0	-542.9	1.00	170.5	188.8	75	1080000	0.00007	1.000	0.00007
E	B-1	-314.4	-542.9	1.00	114.2	128.8	17	5100000	0.00000	1.000	0.00000
B-1	B-1	-381.4	-542.9	1.00	80.8	89.5	772	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計:											0.03187

(注) ひずみ振幅 $\leq 0.110\%$  (salt' $\leq 214.5$ ) の場合、fen=1.0

→環境UF : 0.032

     : 割り増し係数Ke, 環境効果補正係数fenを示す

タイトル	加圧器スカート溶接部の疲労累積係数の算出根拠について																					
説明	<p>加圧器スカート溶接部の疲労累積係数の算出根拠を以下に示す。</p> <p>1. 解析モデル 疲労累積係数の算出に用いた解析情報を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="475 779 1310 981"> <tr> <td>解析プログラム</td> <td>ABAQUS Ver. 2018</td> </tr> <tr> <td>要素種類</td> <td></td> </tr> <tr> <td>要素次数</td> <td></td> </tr> <tr> <td>節点数</td> <td></td> </tr> <tr> <td>要素数</td> <td></td> </tr> </table> <p>2. 材料物性値 材料物性値（設計応力強さ）を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="475 1099 1321 1229"> <thead> <tr> <th rowspan="2">評価部位</th> <th rowspan="2">材料</th> <th>設計応力 (MPa)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>345℃</td> </tr> <tr> <td>下部胴板、下部鏡板</td> <td>SQV1A</td> <td>184</td> </tr> </tbody> </table> <p>3. 最大評価点の選定 解析モデル上の評価点は、構造不連続部等において応力が大きくなる評価断面を抽出しており、その中から疲労累積係数が最大となる点を選定している。 解析モデル上の評価点及び最大評価点の選定結果を添付 1 に示す。</p> <p>4. 応力分類 評価における荷重の組み合わせを以下に示す。 また、応力フローチャートを添付 2 に示す。</p> <table border="1" data-bbox="486 1621 1305 1736"> <thead> <tr> <th>状態</th> <th>荷重の組み合わせ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>供用状態 A, B</td> <td>圧力 + 自重 + 熱膨張荷重 + 熱過渡</td> </tr> </tbody> </table> <p>5. Ke 係数 評価に用いた Ke 係数を添付 1 に示す。</p>	解析プログラム	ABAQUS Ver. 2018	要素種類		要素次数		節点数		要素数		評価部位	材料	設計応力 (MPa)	345℃	下部胴板、下部鏡板	SQV1A	184	状態	荷重の組み合わせ	供用状態 A, B	圧力 + 自重 + 熱膨張荷重 + 熱過渡
解析プログラム	ABAQUS Ver. 2018																					
要素種類																						
要素次数																						
節点数																						
要素数																						
評価部位	材料	設計応力 (MPa)																				
		345℃																				
下部胴板、下部鏡板	SQV1A	184																				
状態	荷重の組み合わせ																					
供用状態 A, B	圧力 + 自重 + 熱膨張荷重 + 熱過渡																					



形状複雑部に対しては、応力集中によるピーク応力増加分が得られるように、FEMのメッシュを細かく分割して解析を行っている。FEMのメッシュ分割は、過去の解析結果や各種文献の知見を反映するなどして決定している。

加圧器スカート溶接部形状寸法、評価点および解析モデル

## 疲労累積係数 (加圧器スカート溶接部)

評価点	U(S12)	U(S23)	U(S31)
1	0.0	0.00008	0.00000
2	0.0	0.0	0.0
3	0.0	0.00001	0.00015
4	0.00017	0.00000	0.00328
5	0.00293	0.00000	0.00665
6	0.00115	0.0	0.00307
7	0.20019	0.00000	0.15940
8	0.00054	0.00329	0.01793

許容値  $U_f=1.0$ 

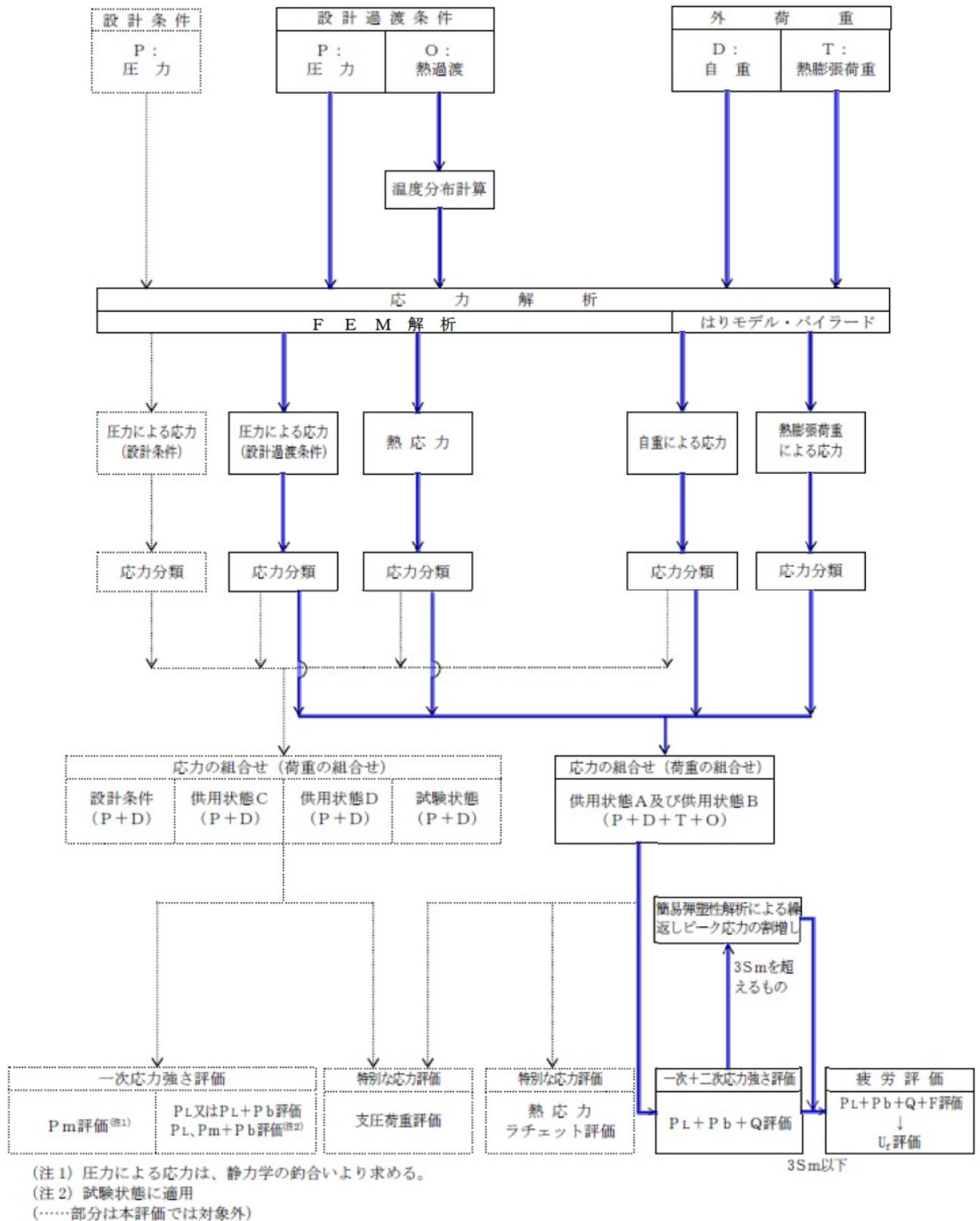
## 疲労解析結果 (加圧器スカート溶接部)

評価点 - 7  
(S12)

応力強さ		(単位: MPa)			繰返し回数		疲労係数 (=N/N*)
極大値	極小値	$K_e$	ALT	ALT'	N	N*	
199.7	-708.9	1.39	632.8	735.9	74	481	0.15385
82.5	-602.8	1.0	342.7	398.5	5	2760	0.00181
82.5	-582.4	1.0	332.5	386.6	7	3040	0.00230
82.5	-570.3	1.0	326.4	379.5	2	3220	0.00062
82.5	-566.1	1.0	324.3	377.1	9	3290	0.00274
82.5	-564.3	1.0	323.4	376.1	40	3320	0.01205
0.0	-564.3	1.0	282.1	328.1	137	5130	0.02671
-176.5	-564.3	1.0	193.9	225.5	2	16600	0.00012
-435.8	-564.3	1.0	64.2	74.7	63	-----	0.0
疲労累積係数 =							0.20019

$K_e$  : 割増し係数  
 ALT : 繰返しピーク応力強さ  
 ALT' : ALTに(207000)/(材料の使用温度における縦弾性係数)を乗じて得た値  
 N : 設計繰返し回数  
 N\* : 許容繰返し回数

→通常UF : 0.201



応力評価フローチャート

タイトル	詳細評価法による環境効果補正係数の算出手順について
説明	<p>1次冷却材ポンプ吐出ノズルを例に、環境疲労評価における、詳細評価法による環境効果補正係数 <math>F_{en}</math> の算出手順を添付-1に示す。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>

詳細評価法による環境効果補正係数  $F_{en}$  の算出手順について

1. はじめに

本資料は、環境疲労評価手法のうち、詳細評価手法について纏めたものである。また、本資料では、1次冷却材ポンプの吐出ノズル（材料：SCS13A）の値を用いて説明を行う。

2. 適用規格

日本機械学会「発電用原子力設備規格 環境疲労評価手法」  
(JSME S NF1-2009、以降「環境疲労評価手法」と記載する。)

3. 評価手順

(1) 評価手法

環境疲労評価は、環境疲労評価手法に従い評価を行うものとする。設計建設規格に基づき算出した疲労累積係数 ( $U$ ) に環境効果補正係数 ( $F_{en}$ ) を掛け合わせるにより求める。

$$U_{en} = U \times F_{en}$$

(2) 環境効果補正係数 ( $F_{en}$ )

環境疲労評価手法のオーステナイト系ステンレス鋼 (PWR プラント 1次系環境) の  $F_{en}$  の算出過程を示す。

$$\ln(F_{en}) = (C - \dot{\epsilon}) \times T^*$$

ここで、

$$C = 3.910$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(49.9) \quad (\dot{\epsilon} > 49.9\%/s)$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(\dot{\epsilon}) \quad (0.0004\%/s \leq \dot{\epsilon} \leq 49.9\%/s) \quad (\text{鋳鋼以外})$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(\dot{\epsilon}) \quad (0.00004\%/s \leq \dot{\epsilon} \leq 49.9\%/s) \quad (\text{鋳鋼})$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(0.0004) \quad (\dot{\epsilon} < 0.0004\%/s) \quad (\text{鋳鋼以外})$$

$$\dot{\epsilon}^* = \ln(0.00004) \quad (\dot{\epsilon} < 0.00004\%/s) \quad (\text{鋳鋼})$$

$$T^* = 0.000782 \times T \quad (T \leq 325 \text{ } ^\circ\text{C})$$

$$T^* = 0.254 \quad (T > 325 \text{ } ^\circ\text{C})$$

$C$  : 環境効果補正係数の算出のための定数

$\dot{\epsilon}$  : ひずみ上昇過程でのひずみ速度

$\dot{\epsilon}^*$  : ひずみ速度依存パラメータ

$T$  : 温度

$T^*$  : 温度依存パラメータ

(3) 環境効果補正係数 ( $F_{en}$ ) の算出方法 (詳細評価手法)

ひずみの時刻歴変動が得られる場合で、ひずみの時刻歴を用いて以下の方法によって時刻毎に  $F_{en}$  を算出し合計することで環境効果補正係数を求める。また、環境効果はひずみの増加時のひずみ速度に強く依存することから、環境疲労評価は過渡中のひずみが連続増加する範囲において実施する。

$$F_{en} = \sum_{k=1}^n F_{en,k} \frac{\Delta \varepsilon_k}{\Delta \varepsilon}$$

応力サイクルの  $F_{en, det}$  は次式で求める。

$$F_{en, det} = \frac{F_{en, det, A} \times (\varepsilon_{max, A} - \varepsilon_{min, A}) + F_{en, det, B} \times (\varepsilon_{max, B} - \varepsilon_{min, B})}{(\varepsilon_{max, A} - \varepsilon_{min, A}) + (\varepsilon_{max, B} - \varepsilon_{min, B})}$$

疲労累積係数は次式で求める。

$$U_{en} = \sum_{i=1}^n U_i \times F_{en, det, i}$$

ある区間  $k$  におけるひずみ速度

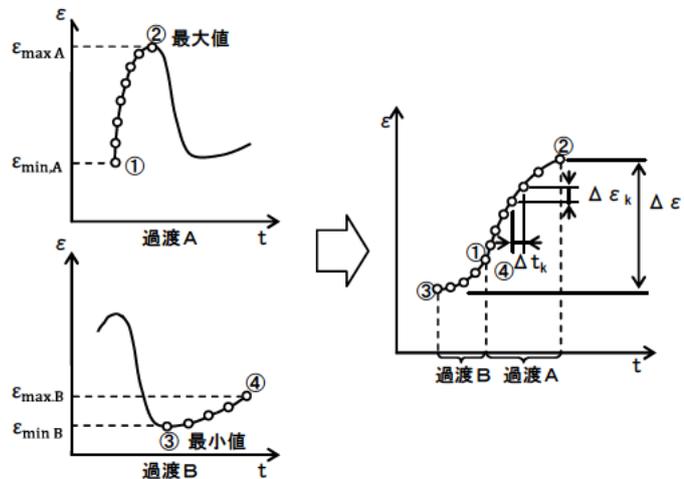
$$\dot{\varepsilon} = \frac{\Delta \varepsilon_k}{\Delta t_k}$$

過渡 A の環境効果補正係数

$$F_{en, det, A} = \sum_{k=1}^m F_{en, k} \frac{\Delta \varepsilon_k}{(\varepsilon_{max, A} - \varepsilon_{min, A})}$$

過渡 B の環境効果補正係数

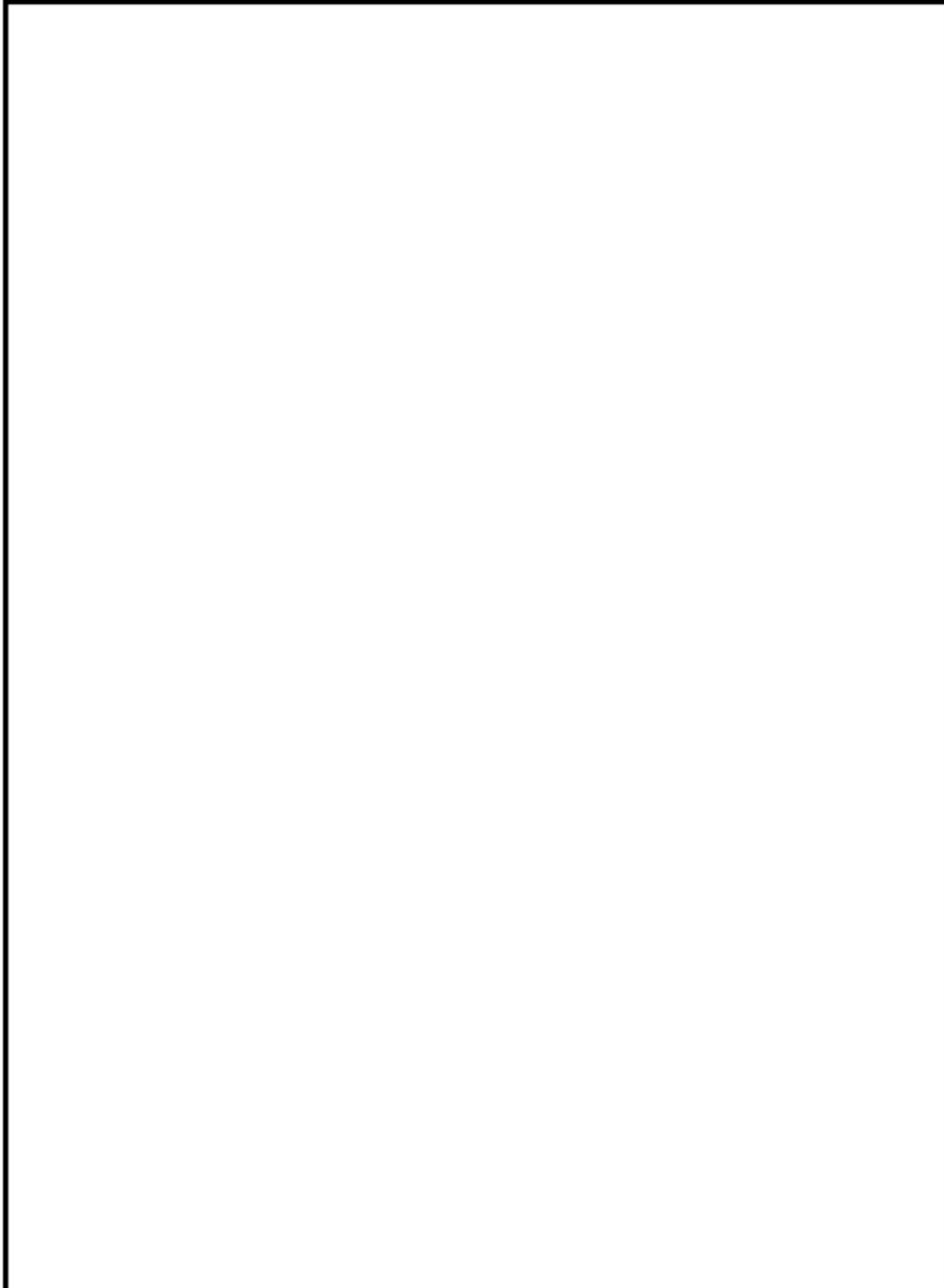
$$F_{en, det, B} = \sum_{k=1}^m F_{en, k} \frac{\Delta \varepsilon_k}{(\varepsilon_{max, B} - \varepsilon_{min, B})}$$



(4) 1次系冷却材ポンプの算出例

① ひずみと温度履歴

ひずみと温度履歴の解析結果を図1に示す。図1よりひずみの上昇過程において微小区間毎の  $F_{en,k}$  を算出し、ひずみ量による重み付け積分により、応力サイクルに対する  $F_{en}$  を求める。



② 微小区間 k

図1より微小区間毎に読み取ったデジタル値を表1に示す。表1より(2)で示した方法を用いて  $F_{en}$  を算出する。

表1 ひずみ及び温度履歴のデジタル値

詳細評価手法による評価

過渡 A

l A	lB1	SI	Temp	E	ε	Time
22		-30.8		179288.		
23		3.7		179608.		
23		3.7		179608.		
24		5.8		179976.		
24		5.8		179976.		
25		10.1		180888.		
25		10.1		180888.		
26		34.5		182184.		
26		34.5		182184.		
27		67.6		183348.		
27		67.6		183348.		
28		113.4		184552.		
28		113.4		184552.		
29		168.6		187016.		
29		168.6		187016.		
30		243.9		190364.		
30		243.9		190364.		
31		348.2		194933.		

区間 1

l B	lA1	SI	Temp	E	ε	Time
6		-341.8		176332.		
7		-333.6		176332.		
7		-333.6		176332.		
8		-317.9		176332.		
8		-317.9		176332.		
9		-293.7		176332.		
9		-293.7		176332.		
10		-267.8		176332.		
10		-267.8		176332.		
11		-235.3		176332.		
11		-235.3		176332.		
12		-205.5		176332.		
12		-205.5		176332.		
13		-176.3		176332.		
13		-176.3		176332.		
14		-144.5		176332.		
14		-144.5		176332.		
15		-114.2		176332.		
15		-114.2		176332.		
16		-87.6		176332.		
16		-87.6		176332.		
17		-70.0		176332.		
17		-70.0		176332.		
18		-40.3		176332.		

③ 環境効果補正係数(Fen)

ここでは、過渡 A を用いて Fen を算出過程を説明する。まず、過渡 A について区間 1 について(2)で示したパラメータより算出した結果を以下に示す。

$$C = 3.910$$

$$\dot{\epsilon}_1 = 0.752344 \times 10^{-4}$$

$$\dot{\epsilon}_1^* = -9.494902317$$

$$T_1 = \boxed{\phantom{0000}}$$

$$T_1^* = \boxed{\phantom{0000}}$$

$$F_{en,1} = e^{(C-\dot{\epsilon}^*) \times T^*} = e^{(3.910 - (-9.494902317)) \times \boxed{\phantom{0000}}} = 11.610$$

区間 1 のひずみ変化量は、

$$\Delta \epsilon_1 = \boxed{\phantom{0000}} - \boxed{\phantom{0000}} = 0.01926$$

区間 1 での Fen,det,A,1 について求めると、

$$F_{en,det,A,1} = F_{en,1} \frac{\Delta \epsilon_1}{(\epsilon_{max,A} - \epsilon_{min,A})} = 11.610 \times \frac{0.01926}{\boxed{\phantom{0000}} - \boxed{\phantom{0000}}} = 1.142$$

以上の算出過程をすべての区間で実施し、足し合わせることで Fen, det, A を算出する。

また、過渡 B についても同様に算出し、Fen, det, A、Fen, det, B の算出結果を以下に示す。

詳細評価手法による評価

1 A	1B1	SI	Temp	E	ε	Time	ε *	Temp	Fen, k	∠Fen
	22	-30.8		179288.			0.753E-04		11.610	1.142
	23	3.7		179608.						
	23	3.7		179608.			0.388E-05		12.473	0.074
	24	5.8		179976.						
	24	5.8		179976.			0.471E-05		11.858	0.143
	25	10.1		180888.						
	25	10.1		180888.			0.190E-04		10.897	0.741
	26	34.5		182184.						
	26	34.5		182184.			0.180E-04		9.679	0.888
	27	67.6		183348.						
	27	67.6		183348.			0.164E-04		8.165	1.024
	28	113.4		184552.						
	28	113.4		184552.			0.144E-04		6.329	0.928
	29	168.6		187016.						
	29	168.6		187016.			0.127E-04		4.514	0.875
	30	243.9		190364.						
	30	243.9		190364.			0.112E-04		2.712	0.700
	31	348.2		194933.						
									total	6.515

1 B	1A1	SI	Temp	E	ε	Time	ε *	Temp	Fen, k	∠Fen
	6	-341.8		176332.			0.208E-04		24.579	0.067
	7	-333.6		176332.						
	7	-333.6		176332.			0.198E-04		24.579	1.283
	8	-317.9		176332.						
	8	-317.9		176332.			0.172E-04		24.579	1.973
	9	-293.7		176332.						
	9	-293.7		176332.			0.147E-04		24.579	2.108
	10	-267.8		176332.						
	10	-267.8		176332.			0.115E-04		24.579	2.656
	11	-235.3		176332.						
	11	-235.3		176332.			0.889E-05		24.579	2.428
	12	-205.5		176332.						
	12	-205.5		176332.			0.661E-05		24.579	2.375
	13	-176.3		176332.						
	13	-176.3		176332.			0.451E-05		24.579	2.591
	14	-144.5		176332.						
	14	-144.5		176332.			0.286E-05		24.579	2.470
	15	-114.2		176332.						
	15	-114.2		176332.			0.168E-05		24.579	2.171
	16	-87.6		176332.						
	16	-87.6		176332.			0.998E-06		24.579	1.434
	17	-70.0		176332.						
	17	-70.0		176332.			0.172E-05		24.579	2.423
	18	-40.3		176332.						
									total	24.579

以上より、過渡 A 及び過渡 B について、Fen, det, A、Fen, det, B と各過渡の最大ひずみと最小ひずみを以下の式を用いて Fen, det を算出する。

$$\begin{aligned}
 F_{en, det} &= \frac{F_{en, det, A} \times (\epsilon_{max, A} - \epsilon_{min, A}) + F_{en, det, B} \times (\epsilon_{max, B} - \epsilon_{min, B})}{(\epsilon_{max, A} - \epsilon_{min, A}) + (\epsilon_{max, B} - \epsilon_{min, B})} \\
 &= \frac{6.515 \times ( \quad - \quad ) + 24.579 \times ( ( \quad ) - ( \quad ) )}{\quad - ( \quad ) + ( ( \quad ) - \quad )} \\
 &= 14.936
 \end{aligned}$$

過渡条件の組み合わせにより環境 U.F.=U×Fen を算出し、足し合わせる。結果を表2に示す。

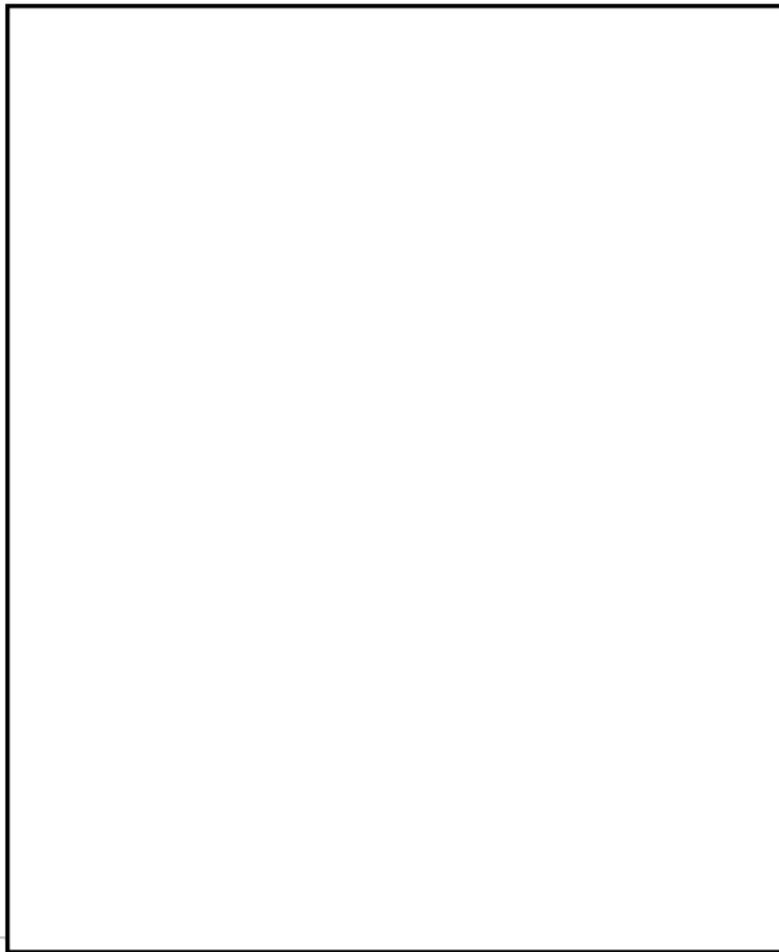
表2 環境効果を考慮した疲労累積係数算出結果

過渡条件 記号		一次+二次+ ピーク応力強さ		割り増し 係数	繰返しピーク 応力強さ		実過渡 回数	許容繰返し 回数	疲労累積係数 u	環境効果 補正係数 fen	環境効果を考慮した 疲労累積係数 uen
A	B	smax	smn		補正前 salt	補正後 salt'					
1B1	1A1	348.2	-341.8	1.79	617.4	682.5	74	1860	0.03978	14.936	0.59424
2I2	2I1	263.4	-299.7	1.47	414.2	457.9	63	8590	0.00733	7.326	0.05373
1I1	2B1	197.1	-138.3	1.00	167.7	185.4	5	1160000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2A1	197.1	-129.3	1.00	163.2	180.4	7	1260000	0.00001	1.000	0.00001
1I1	2E1	197.1	-104.9	1.00	151.0	166.9	2	1630000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D2	197.1	-71.9	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2D3	197.1	-71.9	1.00	134.5	148.7	2	2530000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	2C1	197.1	-67.2	1.00	132.1	146.1	2	2730000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1G1	197.1	-54.0	1.00	125.5	138.8	9	3400000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1F1	197.1	-44.3	1.00	120.7	133.4	4	4040000	0.00000	1.000	0.00000
1I1	1J1	197.1	-43.9	1.00	120.5	133.2	37	4060000	0.00001	1.000	0.00001
2D3	1J1	182.2	-43.9	1.00	113.0	125.0	2	5500000	0.00000	1.000	0.00000
2I1	1B1	55.5	-38.2	1.70	79.6	88.0	63	-----	0.00000	1.000	0.00000
合計：											0.64800

(注) ひずみ振幅≤0.110% (salt' ≤214.5) の場合、fen=1.0

→環境 UF: 0.649

タイトル	有限要素法解析における応力分類について
説明	<p>1. 応力分類の方法 評価断面において、FEM 解析値を JSME GNR-2130 の考え方に 基づき、膜応力、曲げ応力、ピーク応力に分類する。 図 1 に加圧器スプレイ配管の 3 次元解析の例を示す。</p> <p>2. 評価断面の設定方法 評価候補断面（曲げ部、構造不連続部等）の中で、全節点の全時刻 における最大ピーク応力強さを特定し、その最大ピーク応力強さを含 む断面を、評価断面としている。</p> <p>3. ピーク応力強さの設定方法 ピーク応力強さは、各過渡事象の過渡条件に基づき、外荷重を考慮 して応力履歴を算出し、時刻歴での最大応力をその過渡でのピーク応 力強さとしている。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>



FEM 解析値

- $\sigma_{\theta 1}$  周方向応力
- $\sigma_{r1}$  板厚方向応力
- $\sigma_{t1}$  軸方向応力

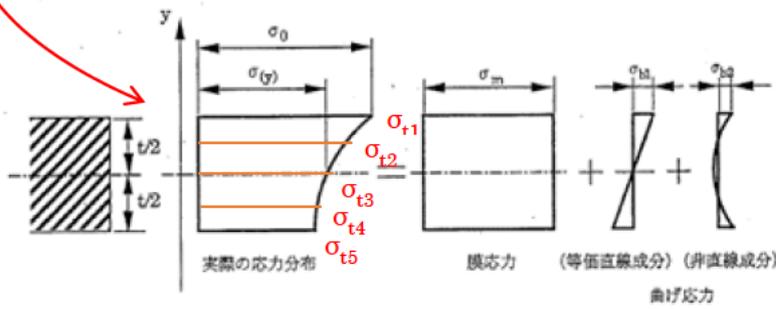


軸方向応力の抽出例

- $\sigma_{t1}$
- $\sigma_{t2}$
- $\sigma_{t3}$
- $\sigma_{t4}$
- $\sigma_{t5}$

- $\sigma_{\theta 2}$
- $\sigma_{r2}$
- $\sigma_{t2}$
- 
- 
- 
- $\sigma_{\theta 5}$
- $\sigma_{r5}$
- $\sigma_{t5}$

2005 設計・建設規格 第1編 解説 第1章 GNR



解説図 GNR-2130-1 膜応力と曲げ応力の考え方

図1 加圧器スプレイ配管の3次元解析の応力分類概略図